

---

# 真・恋姫†無双 ご都合主義で萌将伝！

AUOジョンソン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真・恋姫†無双 ご都合主義で萌将伝！

### 【コード】

N8345W

### 【作者名】

AUOジョンソン

### 【あらすじ】

聖杯戦争が終わり、三国の大戦も終わった後の、いわゆる萌将伝とかhollow ataraxiaといった番外編のようなものです。

前作よりもさらにご都合主義を加速させた作品となっておりますので、ご都合主義、オリ主に嫌悪感を感じる方は戻るをクリックしてください。

## 第一話 聖杯戦争が終わった後に（前書き）

番外編を作ってみました。三国統一の後の北郷一刀の扱いの難しさに悩み、執筆が難航していました。

お待ちしていただいた方も、そうでない方も、拙作で楽しんでいただければ幸いです。

それでは、どうぞ。

## 第一話 聖杯戦争が終わった後に

街には桜が咲き誇る。平行世界が融合し、サーヴァント六体が復活を果たした。

五胡への対応も終わり、少しは落ち着いたなあ、と少し感慨深くなってくる。

ちなみに、同じ四日間を繰り返すんじゃないか、という心配はもう無い。すでに一ヶ月以上が経っているが、ループする気配が無いからだ。

後、さらっと言われたためにスルーしかけていたが、シャオのところにいったバーサーカーも違和感無く受け入れられていた。

どうやら、シャオがバーサーカーを妙に気に入ったらしく、肩に乗って突撃ロースしているのをたまに見る。・・・あれ、イリヤ？

やはりロリっ娘には往々にしてバーサーカーが割り当てられる運命なのだろうか。

ちなみに、俺もサーヴァントであり、シャオの婿（予定）であるらしいので、呉の人たちから信頼されて真名を預けてもらっている。

「・・・お、ここだ。」

目的地に到着すると同時に思考をいったん切り替える。

今日のはじめての三国会議。考え事をしながら臨むわけにはいかなからな。

「あ、ギルさん。おはようございます」

「おはよう、朱里」

部屋に入り、一番近かった朱里の隣に並ぶ。いつ見てもうちの軍師

たちは可愛いなあ。

そんな風に和んでいると、一刀が入ってくる。

天の御使いである一刀は、三国の平和の象徴として天下三分の要となっている。

まあ、原作と同じく彼は形だけのトップではあるが、それでも彼の存在は重要だ。

最初は俺が一刀の立場に着くという案も出たらしいが、受肉したとはいえサーヴァントなので、いろいろと不都合も出てくる。

そのために天の御使いとはいえただの人間である一刀に白羽の矢が立ったのだ。

それに、俺は目立つより裏方のほうが似合っている。ま、本音を言えばそんな面倒くさそうな立場には就きたくないという願望も混ざっているのだが。

「遅いわよ、一刀。・・・さて、これで全員そろったわね。はじめましょう」

こうして、初めての三国会議が始まった。

・・・

会議の後、月も詠も侍女の仕事のため暇をもてあました俺は、市場へと足を伸ばした。

うんうん、貨幣の統一はうまく言っているようだ。

こんななりでも中身は現代人ということで、それを知っている一刀から相談されたこの貨幣統一の案。

纏め上げるのは面倒だったが、こうして成果が出てくれるのは嬉しいものである。

「それにしても、活気が良いなあ・・・ん？」

なんだろう。見なかったことにしたいものが二つ落ちてる……。

「あ、ギル様。良いところに」

「……これ、どうしたんだ？」

俺に気づいて声をかけてきた警備隊の人間に聞いてみる。

「その……俺もさつき見つけたばかりなのですが……どう見てもその……あの人なので、どうしようかと」

「だよなあ……。下手に連れて行って、雪連あたりに会わせたら

……」

「やめてください。胃が痛くなってきました。」

「分かった。俺が面倒見ておくよ」

「本当ですか!?!」

本当に嬉しそうにそういった彼は、それではよろしくお願いします、と言って去っていった。

近づいてみると、ぐう、と腹が鳴ったのが聞こえたので、取り合えずどこか食事のとれるところに行こうと二人を抱えた。  
うわ、軽いな……。

……

「がっがっがっ!」

「はむはむはむ！」

おーおー、良い食べっぷりだ。

「店主、まだ食べそうなんでいくつか追加」

「おうよ！任せなあ！」

俺が厨房へ声をかけると、店主の親父が元気な返事を返してくれる。拾った二人の横には大量の皿が積み重ねられており、かなりの量を食べたことをあらわしている。周りの客はその食べっぷりに興味津々のようだ。良い食べっぷりだもんな。

「はふはふはふ」

「もぐもぐもぐ」

「あいよ、追加お待ち！」

新しく追加された料理に手を伸ばす二人。ふむ、そろそろ満足してきたころかな？

「はふー、おなかいっぱいなのじゃー！」

「そうですねー。おいしかったですよー」

「それは良かった。・・・で、そろそろ話を聞いても良いか？」

皿を片付けてもらいながら、二人・・・袁術と張勳から話を聞く。なんでも、領土を追い出された後に傭兵団を組織し、賞金稼ぎをしながら放浪していたらしい。だけど、だんだんと金が無くなり、しばらく食事を取れないままほとんど迷子のように荒野を歩いていて、何とか街には着いたものの、ものを買う金が無く、流石に倒れた、とのこと。・・・ふむ、なるほど

「じゃあ、二人とも。」

「なにかの?」

「なんでしょー」

「俺が保護してやるよ。袁術・・・はともかく、張勳。少しは兵も動かせるだろ?ちょっと手伝ってくれば、衣食住は保障するし、働き次第では給与も出す」

「うーん、魅力的ですねー」

「また倒れたくは無いだろ?安全も保障できるしな。」

「・・・むー、そうですね、分かりました。お世話になります。美羽さまも、それで良いですか?」

「むっ、うむ、くるしゅうないのだ!」

「というわけなので、これからよろしくお願いしますね。・・・えーと」



「ああ、俺はギル。蜀の将だ」

「ぎる？・・・ギルってあの・・・金色の将の・・・？」

「・・・なんだその二つ名。」

「袁紹さんと同じような金色鎧の癖に、その能力は桁違い。噂では、三国全ての将を相手にして大立ち回りをこなしたとか・・・」

「・・・ちよつと誇張されてるけど、おおむねそんな感じだ。」

三国全ての将って・・・無理だろ、あれは。

「うーん、これは結構なところにお世話になることになっちゃいましたねえ」

「はは。ま、諦めてくれ。・・・さて、そろそろ城に案内したいんだけど」

「あ、分かりましたー」

「店主、お金はここに」

「へい！・・・ん？ちよつとギル様！こんなにいただけませんか！」

「迷惑料込みだよ。それじゃ、お邪魔したねー」

「ほわー、自然にこういうことできる人っているんですねえ」

「七乃？」

「はい。なんでしょうかー？」

「何をぶつぶついつておるのじゃ？」

「あははー、ちょっと感動してただけですよー」

その後、城に行けば雪連がいることを伝えようと、二人ともガクブルしていた。

・・・小動物つぼくて和むなあ。もうちょっといじめたくなる。

・・・

「ここを使ってくれ」

「おおー！ふかふかなのじゃー！」

「喜んでいただけ何よりだ。」

「うむ！お主には世話になりっぱなしじゃのう。何かお礼をしたいのじゃが・・・」

「いいよ、そんなこと」

「そうじゃ！お主を妾の夫にしてやるうかの」

話を聞かない娘だなあ・・・。

でも、ちよつと嬉しいかな。あれだな、娘に「わたしねー、おおきくなったらぱとけっこんするのー」といわれた気分かな。まだ娘いないけど。

「ありがとう、嬉しいよ」

「うむうむ。よきにはからうのじゃ。それでは、おぬしのことはいれから主様と呼んでやるのじゃ。ありがたく思うのじゃ。」

「おー、いいね」

「うむ！主様も妾のことは真名の美羽と呼んで良いのじゃ！」

「美羽、か。うん、そう呼ばせてもらおう。あと、張勳」

「あら、美羽様の旦那様なのですから、七乃で結構ですわ、ご主人様っ」

「そう？じゃあ、七乃。みんなに紹介したいし、軍師たちのところに行こうか。」

「分かりましたー」

こうして、美羽と七乃を拾った。後でそのことを詠に相談すると、頭を抱えられたのは言うまでも無いことだろう。

・・・

「主様！おきてたも！」

「・・・ん？美羽？」

真夜中。俺は美羽にたたき起こされた。

「なんだよ、こんな真夜中に。」

「あ、私が説明しますね」

「頼む」

七乃の説明によると、何でも六つ巴で実戦形式の大規模演習を行うらしい。その中の一つの勢力になったのだが、どう考えても勝てないため助力を求めに来たらしい。

「妾の夫は強いと聞いている。……だめかの？」

「……いや、別にそれは良いんだけど。みんなから許可は取っている?」

「えーっと、美羽さまが蜀の王に許可を取りに行ったらいいですよ?」

「……一人で?」

「お一人で。」

「すごいな、この子。……あ、月にも許可取った?」

「む?そやつは誰なのじゃ?」

「俺の主なんだけどさ、その子は蜀に属してるんだ。だから、他の陣営に行くならそっちにも許可とってほしいんだけど……」

「あ、それなら大丈夫ですよ」

「ほんとか？」

「ええ。美羽さまが劉備さんのところに行ってる間に場内の兵士たちに話を聞いていたら、あなたの主の話が聞けまして。ついでなんです許可とおきました。」

「すごいな、七乃」

「美羽さまのおもしろ・・・雄姿を見るためならば、頑張りますよ？」

「・・・うん、まあいいや。取り合えず、明け四つから戦闘開始なんだろ？なら、いろいろと準備しないとな。」

「あ、兵たちは表に並ばせてあるので。」

「へえ、じゃあすぐに出立しようか。」

「はいっ。ほら、美羽さまいきますよ」

「うむっ。苦しゅうないのだ！」

こうして、俺は袁術陣営として美羽の陣営で動くこととなった。

・・・

取り合えず、本陣に美羽、その補佐に七乃、そして将が俺だけという最悪な状況下で蜀魏呉の三国に勝つには、やはり漁夫の利しかあ

りえないだろう。

まず俺は美羽を説き伏せ、山の中で残り一国になるまで待機することにした。

山に隠れる前にはきちんと各国の間諜を撒いておいた。

俺がいることすら露見してはいないだろう。それほどまでに徹底した。

後は美羽と七乃を何とかなだめながら、山の中で待機することに。

・・・暇だし、放った間諜からの報告でも見てるかな。

えーっと、蜀は先鋒に恋と鈴々、翠の三人か。右翼には愛紗と蒲公英で左翼は星と焰耶が担当。

中軍には桔梗と紫苑の二人を配置し、詠とねねは騎馬隊を率いての遊撃担当。そして本陣にはやっぱり桃香が配置され、朱里がその補佐についている。

そして戦闘狂の雪連率いる呉は先鋒に思春と明命が。そして祭が魏を警戒するような動きを見せており、さらに亞沙が武官として参戦するらしい。

冥琳と穩の軍師二大巨頭は雪連が突き進む道を切り開く役割になったらしい。そして、連華は本陣の守備についたとのこと。

で、優勝候補筆頭の魏。

当然といふかなんというか、夏侯惇が先鋒につき、さらに霞まで先鋒になったらしい。

右翼は夏侯淵と郭嘉が。左翼は許緒と典韋が担当している。

楽進たち魏の三羽烏は遊撃隊に。その補佐は程？になったとのこと。本陣には華琳と一刀が陣取っている。

「・・・ふうむ」

そんな風に状況を分析していると、伝令から蜀が魏呉にはさまれたと報告を受けた。

「へえ、そうだったのか」

なら、蜀が最初に落ちて、次に呉がおちるな。で、最後まで残った魏を損害なしの袁術軍で蹂躪すればいいかな。

・・・とりあえず、最低限の警戒だけして、後の兵士たちは休憩させることにした。変に緊張させていざというとき動けなかったら困るしな。

「交代で最低限の警戒だけして、後は休憩してていい。そう伝えてくれるか」

「はっ。」

伝令がわき目も振らずに走っていく。

よし、後は美羽に少しだけはちみつを与え、七乃を上手にいなしてすこせばいいな。

・・・

戦いが始まる少し前。詠ちゃんから、気になることを聞いた。

「え?」

「・・・だから、今日の演習を見学してもらおうとギルの部屋にいったんだけど・・・もぬけの殻だったの」

そこで、詠ちゃんと月ちゃんはお城の人間にお兄さんを見なかったか聞いて回ったらしい。

すると、ある兵士さんから、詠ちゃんが部屋を訪ねる少し前にお兄さんがどこかへ言ったという話が聞けた。

「もしかしたら、他の陣営にいるのかも」

「えー……さすがに、宝具使うのは自重するよね？」

「……宝具を自重したって、元々の能力が高いんだから意味ないわよ。」

た、確かに。

恋ちゃんと宝具を使わずに素で勝てるお兄さんが、この戦いで現れたりしたら……

「それにしても……どこについてるんだらうね、お兄さん」

「さあ？……でもま、魏の北郷に頼まれたりとか、呉の小連に引つ張られたか、袁紹か袁術に無理やり連れて行かれたか、白連になきつかれたか……。」

「あ、あははー。全部鮮明に想像できちゃうところが怖いよね……」

怒りのこもった詠ちゃんの言葉に、私は苦笑いを返すしかなかった。……って、あれ？怒りがこもって……？

「もしかして、詠ちゃん……。蜀以外にお兄さんがついちゃったから嫉妬してるの？」

私がそういうと、詠ちゃんは一瞬きよとんとした後、耳まで真っ赤にしてあたふたし始めた。



「ち、ちがつ、あ、あのねえつ、ボクは別にギルがどうとかそいうことをいつてるんじゃないなくて、他の所についたら勝率が下がっちゃうって話を……!」

「うんうん、わかってるよ、詠ちゃん」

「わ、わかってないわよね!？」

・・・それにしても、どこにいったんだろ、お兄さん。  
できたら、私の隣にいてほしかったんだけどなあ。

・・・

蜀が脱落した後、魏は呉へと食らいついた。

しばらくすると呉の左翼は魏の勢いに負け、壊滅した。

右翼と合流した本陣も、新たに投入された夏侯惇によって壊滅させられ、呉の牙門旗が倒れた。

「呉が落ちた!袁術軍、戦闘準備!」

テキパキと戦闘準備を終わらせ、整列する袁術軍の兵士たちに、赤ゲイボルグの原典  
い槍を掲げながら声を上げる。

「行くぞ、みんな!魏は勝利したものと思い込んでおり、油断している!その隙を突き、俺たちは奇襲をかける!」

「応!」

「俺たちが目指すのは魏の牙門旗のみ!それ以外は無視していい!最低限の隊列を維持していれば、後は勢いに任せてしまってもかまわ

ん！」

練度が低い袁術軍の兵士たちに多くを抱えさせては、もしかすると魏に逆襲されて負けるかもしれないと考えた俺は、簡単な指示だけを与えることにした。

「ただし、油断して死なないように！それだけは注意しろ！」

「応！！！」

「行くぞ！突撃いー！」

「おーっ！」

突撃の銅鑼を鳴らしながら、袁術軍は山から駆け下りる。

「うはははーっ、行くのじゃー！蹴散らすのじゃー！」

馬に乗った七乃と、七乃の前に相乗りしている美羽の前を駆けつつ、  
ガイホルグの原典  
赤い槍で魏の兵士たちをなぎ払う。

「貴様はっ！！！」

「セイヤッ」

野性の勘なのか、魏の誰よりも早く立ち直った夏侯惇が華琳と俺の間に立ちふさがる。

だが、戦いの後でさすがに疲れているのか、俺の一撃でその大剣を弾き飛ばされてしまう。

その後すぐに腕に巻かれた布を回収し、戦闘不能扱いにする。

「すまん」

「なんだとっ……！」

夏侯淵の横をすり抜け、いまだ若干の硬直を見せる夏侯淵に向かう。彼女の弓の腕は確かだからな。ここでつぶしておかなければ、馬上の二人が危ない。

「うはははーっ！妾の強さを見せ付けるのじゃー！」

「きゃーんっ、お嬢様さいごーっ！」

背後でコントを繰り広げている美羽たちをスルーしつつ、夏侯淵へと駆けていく。

「くっ……！」

「二人目っ！」

ろくな反撃もできずに夏侯淵の布も回収し、兵士を蹴散らしながら華琳の元まで向かう。

「……そういえば、どっちの牙門旗をとればいいんだろっか。華琳？一刀？」

「……両方倒せばいいか。」

「く、まさかそっちについていたとはね」

「マジかよっ！」

「マジだよ、すまんね！」

華琳が絶を薙いでくるが、赤い槍で簡単に弾いてしまった。ゲイボルグの原典

やっぱり華琳も疲れてるんだなあ。俺がサーヴァントであることを差し引いても、流石に二つの大軍を相手にした後の疲れは響いているらしい。

「うははははーっ！やっぱり妾は最強なのじゃーっ！」

「よっ、流石お嬢様！自分の手柄でもないのにそんなにえらそうにできるなんてっ！そこに痺れる憧れるっっ」

「もつと褒めてたもー！」

一刀は・・・まあ、対応できないよな。

夏侯惇と華琳は特別だろう。あんなに早く立ち直るのは流石としか言いようがない。

「よし、魏の牙門旗は奪ったぞ。袁術軍の勝利だ！」

「うははははははっ！」

「よっ、流石ご主人様ですねっ」

ふー、終わったかー。

「お疲れ、華琳、一刀」

「・・・まさか、そっちについてたなんてね」

「え？聞いてなかったのか？」

「袁術が桃香に『妾の夫も参戦させてよいかの？』とかいつてきたから、どんなのが出てくるかと思って面白半分に許可したのだけど・・・」

「あー、夫云々は無視していいぞ」

「でしようね。」

はあ、とため息をつく華琳から目をそらし、一刀に視線を向ける。

「一刀も、お疲れ様。」

「あー、なんていうか、気が抜けた。」

「はは」

「ギルならともかく・・・袁術に負けたっていうのは認めたくないなあ・・・。」

「ま、シヨックだろうなあ。」

俺に気づいた蜀や呉の面々がこちらに近づいてくるのが見える。

あ、愛紗とか詠とか完璧に怒ってるなあ・・・。

「あなたも大変ね。・・・ま、一応同情しておくわ」

「ありがとうさん。」

・・・

「そういえばお兄さん」

「なんだ、桃香」

ある日の政務で、唐突に桃香が話しかけてきた。

「七人の英霊さんの中で、一番強いのは誰なの？やっぱりお兄さん？」

「・・・ふーむ」

そうだなあ、桃香にはいろいろと説明しておいたほうがいいのかもなあ。

俺はいったん筆をおく。

「ちょっと休憩しようか。ゆっくり話したいし」

「うん、お願い」

えーと、まずは何から説明するべきか。

「まず、七つのクラス・・・役割の事は説明してたよね？」

「うんっ。剣士さんとか、それぞれの特徴があるんだよね？」

「そのとおり。剣士は最優、槍兵は最速、狂戦士は最強、なんて風にそれぞれ秀でるところがあるんだ。」

他は知らないけど。何だろう、アーチャーは……最善？ライダーは最多、キャスターは最賢、アサシンは最悪……かなあ。

「後は、地理とか相性とかマスターからの魔力供給とか英霊本人の人格で強弱は変わってくるから、単純に誰が強いとかははつきりできないなあ」

まあ、英霊の中で、という縛りならばネイキッド英雄王が一番強いんだけど。

そういうことじゃないよなあ。

「うーん、いろいろ難しいんだねえ。……じゃあ、何もない荒野で、みんなが全力をだせるってなったら、七人の中で一番なのは？」

「それだつたらやっぱり俺かなあ。ゲイトオブパピロン 王の財宝と乖離剣エアの天地乖エヌ離マ・エリシュす開闢の星があるから、本気で全力なら、すべての英霊に打ち勝てると思うな」

「へー！へー！お兄さんってやっぱり強いんだー！」

「まあ、仮にも英雄王だしな。で、次に狂戦士の武蔵坊弁慶、三番はやっぱり最優の英霊、剣士の劉備だな。」

「はうほう、私とは大違いだね、正刃さん……」

「うーん、まあ、英霊と人間は比べられないからなあ」

うんうんと頷きながら話を続ける。

「三国の将の人たちが天下一品武闘会をやるみたいだけど、ギルさんだったら出場者全員に勝てそうだよねー」

「んー、そういう公式な仕合とかだと宝具を自重しないとイケないから、恋あたりに負けると思うなあ。」

「あ、そっか。・・・うーん、むつかしいなあ」

「難しいって・・・桃香は俺に武闘会に出てほしいのか？」

「え、えへへー。お兄さんが闘ってるころ、最近見ないから・・・」

「いいじゃないか、平和ってことだし。」

「えー。お兄さんのかっこいいところ見たいのにー」

ぶーぶー、とこちらにブーイングを飛ばす桃香に苦笑しつつ

「俺の闘ってるところを見たいならたまにセイバーたちと模擬戦してるからそれを見にくれれば？」

と言ってみたが、いつやってるかわからないじゃない、と返されてしまった。

・・・そりゃそうか。いちいち桃香に報告なんてしてないし、始まるのはいつも唐突にだしな。

「・・・じゃ、諦めるしかないな」

「ううー・・・」



「ほら、そろそろ休憩終わり。俺たち二人しかいないだし、さっさと終わらせちゃおうぜ」

「……うん」

・・・若干元気がないように見える桃香が気になったが、ま、すぐに戻るだろうと思い直し、政務に意識を戻した。

・・・

「へう、す、すごいね、詠ちゃん」

「う、こんなにおっきいの・・・？」

「その本に書いてある中では、腕ほどの太さのもあるとか・・・」

「あわわ・・・は、入るのかな・・・」

今日は珍しく侍女のお仕事がお休みのため、同じくお休みだった詠ちゃんと朱里ちゃん、雛里ちゃんと私の四人で、朱里ちゃんたちの持ってきた艶本を見ています。

四人で読んだ感想を話し合ったりしていると、突然扉が叩かれました。

「月、いるかー？」

「ぎ、ギルさんっ・・・!？」

「はわわ、本を隠さないと・・・!」

「あわわ、とりあえず寝台の下に・・・！」

少しばたばたした後、扉の向こうにいるギルさんにどうぞ、と声をかけました。

「入るぞー。お、詠。朱里に雛里もいるのか。」

「あ、はい。今日は軍師の皆さんで討論をしていました。私は聞いているだけなんですけど」

「そっか。・・・あ、そうそう。これ」

そういつてギルさんが渡してくれたのは、磨かれた宝石に紐を通したものでした。

「それ、一応持っておいてくれ。持ち主に危機が訪れたときに一瞬で防御結界を展開するっていうものなんだけど」

「は、はい。・・・あの、何でそんなものを？」

「月にもしものことがあったら嫌だからな。・・・それじゃ、邪魔したな」

そういつて、私の頭をくしゃっと撫でてから部屋を出て行くギルさん。

へう、顔が熱いです・・・。

「ふー・・・ギルさんがきちんとつくしてくれる方で助かりました・・・」

「そうね。他のやつらだったらもっと大変なことになってただろうし。」

「あわわ・・・気を取り直して、読み直しましょう」

寝台の下から艶本を取り出し、再び読み始めるみんな。

「やっぱり、最初って痛いのかしら」

詠ちゃんがつぶやく。

・・・それは、その。

「えっと、そうみたいですよ。」

「あわわ・・・」

「・・・痛いけど、そのうち慣れるよ?」

あ。

・・・と、思ったときには遅かった。

あわてて自分の口を押さえたけど、三人の目はこちらに向いている。

「ゆ、ゆゆゆ月っ!?!ど、どづいづことっ!?!」

「はわわ・・・月ちゃんは、その、した、んですか?」

「あわわ・・・や、やっぱり、ギルさんと・・・?」

「へう、あの、えっと・・・」

じりじりと詰め寄ってくる三人から逃げようと後ずさっていると、壁際まで追い詰められてしまいました。ど、どうしよう……。別に内緒にしているわけではないけど、やっぱりこつこつことを話すのは恥ずかしいです……。

「ゆーえー！あーそーぼー！」

「……はあ、部屋に入る前にはまずノックを……おや？」

そんなことを考えていると、大声とともに扉が開かれました。入ってきたのは響ちゃんと孔雀ちゃん。助かった……。

「……おやおや、真昼間から艶本か。」

「艶本……うわ、しかも結構過激なもの……。」

ニヤニヤしながら艶本を見る孔雀ちゃんと、恥ずかしそうにしながらもぺらぺらと中身を読む響ちゃん。

「はわわっ！あの、それは……！」

「あわわっ……ええっと……！」

「ふふ、大丈夫。言いふらすつもりはないよ。……そだな、ボクもその読書会に参加させてもらおうかな。」

「孔雀ちゃん、大胆だねえ。でも、私も興味あるからちよつどいい

かな。私も読むー！」

「ど、どうしよう、雛里ちゃん・・・」

「と、とりあえず・・・月ちゃんから話を聞きたいな」

・・・ぜんぜん助かってなかった・・・!?

どうということだい？と二人から事情を聞いた孔雀ちゃんと響ちゃんも興味深そうにこちらへ近づいてきます。

「ボクもそういっつのはやったことなくてね。経験者の話を是非聞いてみたい」

「月ちゃん、一足お先に大人の女になってたんだねー。どんな感じなの？」

二人増えて、計五人に詰め寄られてしまいました。

「へう・・・わ、わかりました・・・お、お話します・・・!」

だから、座ってくださいいっつ。と言って、五人を落ち着かせました。

興味津々と言った表情で椅子に座った五人にお話するため、緊張しつつ私も椅子に座りました。

「えと、初めての時のお話なのですが・・・」

・・・

## 第一話 聖杯戦争が終わった後に（後書き）

一刀くんの扱いに悩み、魏のキャラを主人公のハーレムに突っ込むかどうかで悩んでおります。

魏で主人公のハーレムに入れてほしいキャラなどいましたら感想に書いていただければ何とかします。

誤字脱字、ご感想お待ちしております。

## 第二話 水着の素材のために（前書き）

萌将伝の話は時系列が分かりづらいので話の展開に困ります。  
それでも、完結目指してがんばるので、よろしくお願いします。

それでは、どうぞ

## 第二話 水着の素材のために

「はつくしよん！」

「どうした、ギル。風邪か？」

「……いや、違うと思う。誰か、噂でもしてるのかなあ」

俺は、一刀に誘われて昼飯を食べに街まで出てきた。

一刀はこっちに来てからというもの、男の友達がいなかったらしい。なので、俺が暇しているとこっししてよく昼食なんか誘われる。

「そりゃ、ギルは大人気なんだから噂くらいされるだろ」

冗談交じりにそういった一刀は、ずずず、とラーメンを啜る。

「あまりほめるなよ。照れるだろ」

「少しは照れてる顔をしてからそう言ってくれ」

こちらを恨めしそうに見てくる一刀に、すまん、と言ってから、俺もラーメンを啜る。

「……それにしても、暑いな……」

「そうか？」

「……英霊って暑いのか感じにくいんだっけ？」



「そうみたいだな。・・・でもま、最近暑すぎて政務とか大変みたいだし・・・」

「あ・・・それについてはギルに感謝してる。ギルがいなかったら、いろいろと仕事がとまってたと思う。」

「どういたしまして。・・・どっかにレジャー施設でもあればいいんだけどな。時代が時代だし・・・」

「レジャー施設ねえ。川なら近くにあるけど。というかまず、水着っていう概念がないらしいし」

「みたいだな。服を着たままか、全裸か。・・・すげえ二択だよな」

「同意するよ。」

「・・・水着、作ってみるか。」

話をしているうちに、俺は月と詠の水着姿を見てみたくなったのだ。

「えっ!?!」

「素材はわからんが・・・代用品が無いか服屋の人に聞いてみようぜ」

「そうだなあ・・・やるだけやってみるか!」

「その意気だ。」

代金を払い（一刀の分は俺が払った。何でも、魏の三羽烏の食費で

大変らしい。南無）、服屋へと向かう。

「はあ、強くてしなやかで、水に濡れてもすぐ乾き、普通の布のよ  
うに肌に張り付いて邪魔になつたりもしない素材……ですか？」

「やっぱり、心当たりとかは無いか」

「申し訳ありません、ギル様」

「いや、興味本位だったから、気にしないでくれ」

「一刀がいろんな服を注文し、その注文どおりに仕立て上げたという  
職人の腕をもつてしても、あの素材は再現できないか。」

「うん、と頭を抱えていると、服屋の息子の暑気あたりを見に来た  
という華佗に出会った。」

「貂蝉つながりで知り合った彼は五斗米道ゴッドウエイドを極めるために旅をしてい  
る医者で、何でも鍼治療で治す名医だ。」

「一刀か。それにギルも。どうしたんだ？涼しい服の相談か？」

「実は……これこれしかじかの」

「かくかくうまうまか。なるほど……」

「……通じるんだ、あれで。」

「確かに難しい問題だな……」

「華佗でも心当たりは無いか……。いろいろなところを旅してき  
たって聞くから、もしかしたらと思っただけ……」

「いや、無いことはないぞ」

「本当か!？」

「ああ。だが、厳しい道のりになる。・・・それでもやるか？」

・・・

華佗から聞いた素材のありか。

貂蝉と卑弥呼、そして華佗の三人でようやく倒したという龍の皮が水着の素材となりえるらしい。

「とりあえず、龍の元へは黄金と宝石ウイマーナの飛行船で向かおう」

「・・・いきなり宝具かよ」

「当たり前じゃないか。幻想種の龍と戦うんだぞ。消耗は避けたい。」

「ギルにそういわれると、倒せるかどうか不安になってくるんだけど。」

「安心しろって。・・・最悪、お前だけでも帰すから」

「安心できねえよ!むしろ不安が増すじゃねえか!」

「まったく、わがままだなあ。」

「そういう問題か!？」

「まあまあ。後は・・・人手だな。一刀の知り合いで、秘密が守れる奴に心当たりは？」

「・・・何人か」

「よし、そいつらのところへ行こう」

・・・

この時間ならあそこにいるな、とつぶやく一刀についていくと、兵士の宿舎にたどり着いた。  
宿舎に入ると、いたのは一般の兵士たちだった。

「お、大将！」

「どうしたんスか？」

「ああ、ちよつとな・・・。」

「って、ギルさままでいるじゃないですか！？何事ですか!?!」

「頼みごとがあるんだが・・・一刀、こいつらってお前が以前話してた・・・。」

「ああ・・・仲間だ」

「なるほど、信用できるな。いいか・・・。」

兵士たちに簡単に内容を説明する。

水着という下着のようなかたちをした水遊び用の服を作りたい。しかし、そのためには龍の皮を手に入れる必要がある、そのための人手を集めている。

それから一刀にバトンタッチ。彼らの魂を揺さぶる説得ができるのは一刀だけだ。

水着を着ているときに起こるうれしはずかしハプニングの話やらを聞いているうちに兵士たちは興奮してきたらしい。

「それで北郷さま。その水着に使うのが・・・」

「そう。さつきも言ったが・・・龍の皮だ。」

伸縮性に飛んでいて、濡れても丈夫。華佗から聞いた話では、龍の皮が最適だと聞いていた。

その話を出したとたん、彼らの顔は曇った。

・・・流石に、龍に挑むというのは尻込みするか・・・。

「厳しくはあるが・・・ギルも協力してくれる！みんなで協力すれば、絶対にできるはずだ！」

「分かったツス！俺、水着のために頑張るツス！」

だが、そういつて立ち上がったのは魏の兵士のみだった。

・・・流石に、俺が一緒だからと言って尻込みしてしまつか。

サーヴァントのことを知らない一般の兵士たちの俺への認識は、「飛將軍呂布と張り合える将」といったものだろう。

宝具の存在を知らないのならば、そんなものだ。

「やっぱり、厳しいか？」

「龍……ですよ？いくらなんでも、相手が悪すぎるといっか・  
」

「みんな、情け無いツスよ！水着姿の女のこのために、頑張りまし  
ようよ！」

「……」

「……」

「……みんな」

一人というのはまずいな。

龍の皮を剥いだり、肉を切ったりする人員は多いほうがいい。

「大丈夫だ。」

「え？」

「ぎ、ギル様……？」

「俺には、龍に勝つ秘策がある。みんなには、その手伝いをしても  
らいたいんだ」

「秘策……本当ですか？」

「ああ……ただ、ここでそれを説明することはできない。きて  
くれた者だけに、俺の秘密とともに教えよう」

「……みんな、無理は言わない。挑めると思った人だけ、門のと

「ここに集合してくれ」

俺と一刀はそういった後、宿舎を出た。

・・・

「みんな・・・！」

「大将。二人だけに良い思いはさせませんよ」

「そういうことですね。ギル様の秘策、私も信じようと思います」

「お供しますよ、地の果てまで」

「袁紹さまのおっぱいのために！」

「顔良さまのおっぱいのために！」

「よし・・・なら、みんなで龍を倒し・・・龍の皮を手に入れるぞ  
ーっ！ー！」

「おおおーーっ！ー！」

そういつて腕を突き上げる兵士たちとともに、林の中へと入っ  
ていく。

「これは・・・！」

「黄金の船・・・！？」

黄金と宝石の飛行船を見た兵士たちの驚きの声が聞こえる。

「でも、何で森の中に船が・・・？」

「そつツスよね。川も近くにありませんし・・・」

「ちゅちゅち。違うんだよ」

「どういふことですか、北郷さま」

「これは、空を飛ぶんだ」

一刀がそういつたと同時に、兵士たちが絶叫する。

以前一刀もそんな感じの反応をしていたのを思い出す。

「龍は空を飛ぶからな。こちらと同じ土俵に立たなければならぬだろう。」

「す、すげーっ！」

「どこで手に入れたんですか、こんなもの！」

「実はな・・・」

兵士たちに他言無用だと前置きして、俺の秘密を話す。

英霊という人間を超えた存在であること、その英霊を英霊たらしめるものが『宝具』と呼ばれるもので、俺の宝具である蔵から取り出したものであることを話した。

「・・・す、すげえ・・・。」



「そんな人と、一緒に戦ってたんですね・・・」

「ま、それ以外は人間と同じだから、気にしすぎるなよ?」

「了解ッス!」

「よし、じゃあ乗り込め!龍のいる山まで、一直線だ!」

「おーっ!」

・・・

高速で飛ぶ飛行船。

雲が渦巻き、雷が轟いている山まで一直線に飛ぶ船の中で、最終確認をしていた。

「いいか、この飛行船には戦闘能力は無い」

「じゃあ、どうやって・・・」

「おいおい、あせるなよ。・・・無いなら、付け足せばいいんだ」

「おおっ!」

「なんと・・・」

そう思いついた俺は、雷を操る宝具やら砲弾を発射する宝具やらを組み込み、この飛行船を戦闘船に仕立て上げた。

「だから、みんなには砲撃を担当してほしい」

「分かったッス！」

「ここに全員の担当を書いておいた。それぞれの場所に説明書は置いておいたから、到着までに見ておいてほしい」

と言っても、引き金を引く、とか簡単なものなんだけど。後は少し注意事項を書いておいただけだ。

・・・

「ギル！見えたぞ！龍だ！」

外の様子を見ていた一刀が、操縦している俺に向かって叫ぶ。

「分かった。総員、戦闘準備！龍が見えた！」

悠々と空を飛ぶ龍へと接近すると、龍もこちらに気づき、この船に匹敵する速度で迫ってくる。

「ちっ、流星に早いな・・・！」

だが、幻想種の龍とは少し違うようだ。

やはり、世界が違うからか、一般の人間でも数十人集まれば倒せる。

「とりあえず様子見だ！呉の！砲弾を発射してくれ！」

「応！」

魔術によってそれぞれの部屋と会話ができるようになっており、俺の目の前にはそれぞれの国の兵士たちと通信するための宝石がある。そのうちの赤い宝石から呉の兵士の元気な応答が帰ってくると同時に、龍に向かってミサイルのような砲弾が放たれる。

これは宝具ゆえの威力であり、砲弾も魔力で構成されているため、龍の体でも効果はあるだろう。

「ギャオオオオオオオオオッ！」

龍はその弾丸をいとも簡単によけた。

「やっぱり一筋縄ではいかないか……」

皮に傷をつけない様にしつつ、きちんとダメージを与えないといけないとは……。

龍は黄金の船の隣をすれ違うように通り過ぎると、すぐに転進し、船の後ろについた。

「ギル様っ！龍が後ろにつきました！」

「ああ、見えてる！蜀の！目くらましを！」

船の後部に取り付けたのは目くらましよしの閃光弾のようなものだ。急激に発光する火薬やらを配合した弾を、いくつか背後で爆裂させる。

背後で爆裂するので、自分たちにはあまり影響が無い、というのが利点だ。

「やりました！」

目くらましを食らった龍は、雄たけびを上げながら暴れます。

「よし、袁紹の兄弟は龍に向けて電撃を発射しろ！」

「了解だ！兄者！」

「分かっている、弟者！」

金色の宝石から聞こえてくる会話の後、龍へ向けて雷が発射される。袁紹の兄弟が担当しているのは、雷を起こす宝具を利用した雷発射装置だ。

一人が標準を定め、もう一人が鎚のようなものでスイッチを刺激する。

すると、宝具から発生した雷が金具に先導され、標準の方向へと電撃を発射できるのだ。

龍の皮に傷をつけないようにと取り付けたものだったが、何とか機能しているようだ。よかったよかった。

「兄者、当たったぞ！」

「ああ、弟者、直撃だな」

さらに混乱し、高度を下げた龍へと追撃をかける。

「魏の！網を落とせ！」

「了解ッス！」

船の下部に取り付けたのは、網である。

ただの網ではない。ゲートオブバビロン王の財宝に入っていた貪り食グレイブニールつものを、漁師に

頼んで網にしてもらったものである。

人間以外、特に四足歩行の存在に対してかなりの捕縛力を誇る縄だが、龍には効果が薄いようだ。

もがきながら高度を落とすものの、拘束には至らない。

だが、これだけ行動を妨害すれば、安全に倒せるだろう。

「董卓の！光線を！」

「おつともさ！」

ヴィマーナには、元々太陽光をエネルギーに転換する装置がついていた。

それを攻撃用に転用したのがこのレーザー発射装置だ。

「よし、あたったぞ！」

光線は見事に龍を直撃した。

顔を焼かれた龍は地面へと墜落し、しばらくじたばたとした後、動かなくなった。

「よ、よっしやああー！」

俺の隣で支援をしていた一刀が歓声を上げる。

宝石からも、兵士たちの喜びの音が聞こえる。

「よし、船を下ろして龍から素材を剥ぎ取るぞ」

水着に必要な皮と、華佗に頼まれた龍の肉。頼まれてはいないが、華佗に対する感謝の気持ちとして龍の内臓も持って帰ろう。雷で焼け焦げてないと良いんだけど。

そんなことを考えながら、船を地面ぎりぎりに下ろす。そこからはしごを下ろし、全員で龍の元へと向かう。

みんなの手には、龍を解体するための道具が握られている。

「皮は丁寧に剥ぐんだぞー」

「部位ごとに分けてくれよ。そうすれば、蔵に入れられるから」

「・・・ギルがいてくれてよかったなあ。」

「どうしたいきなり」

「一刀が遠い目をしながら泣き始めたので、あわてて理由を聞く。」

「いや、ギルがいなかったらたぶん道中で三人はいなくなってただろうし、龍と戦ってる途中で暴露大会が開かれただろうし・・・」

「・・・頭でも打ったのか？」

「失礼な。まあ、とにかく感謝してるってことだよ。」

「ありがとうございます。・・・お、皮はその風呂敷にまとめて・・・そうそう。天の鎖！」  
エルキドゥ

ゲイトオブパレロン  
王の財宝から伸びた鎖が、皮の入った風呂敷を宝物庫へと収納した肉も台車に載せ、宝物庫へ。・・・そろそろ、天の鎖も怒るころだと思う。でも、便利なのでやめられないとまらない。

内臓は部位ごとに分けて箱の中へ。一つ一つが大きいので、箱もそれなりに大きくなる。

・・・まあ、宝物庫はかなりの容量を誇るから、問題は無いだろう。

「よし、全部乗せたな。帰ろうか」

「おう！」

「……日帰りで籠を倒すことの恐ろしさにはまさら気づいたんですが、どうしたら良いでしょうか」

「？何ぶつぶつ言ってるんスか？」

「いえ、何でもありません。」

そういつて黄金の船へと戻る途中で、真横からタックルされた。

恐ろしくすばやい上にありえないほど気を抜いていたので、ずいぶん、と面白いぐらいに地面を横滑りした。恥ずかしい。

「兄なのじゃ！どうしたのじゃ？」

「……それは俺のせりふなんだが……なんで俺に突撃してきた。」

「兄をみつけたからなのじゃー！」

よく見てみると、ミケトラシヤムの三人も俺に引っ付いていた。

「そうか、よく考えたらここ、南蛮の近くだ。」

美以たちは帰省しているはずだったしな。ここにおいても不思議じゃない。

「ま、ついでだ。美以、これから蜀に帰るけど、ついてくるか？」

「にゃ！当然なのにな」

何が当然なのかは分からないが、いつまでも倒れているわけにも行かない。

四人娘を引っ付けたまま、立ち上がる。歩きづらいがしょうがない。この子達と接する上で大切なのは、あきらめることだ。

「・・・大将。あの人、四人の女の子を引っ付けたまま立ちあがったんだが・・・」

「ギルについては、話を聞いただろ？・・・超人なんだって」

後ろから諦めがたぶんに含まれたため息が聞こえたが、そっちに反応するより美以たちをかまうほうが大変なので、無視した。

「・・・みんな、帰るぞー」

帰りの船の中では、はやいのになー！とはしゃぐ美以たちをなだめるのに気をとられ、何度か山に船をぶつけた。

・・・



## 第二話 水着の素材のために（後書き）

ヴィマーナ大活躍。

グレイプニールで作られた網・・・宝具の無駄遣いとはこのことですね。

改造ヴィマーナは魔力の消費が激しいので、主人公は帰った後戦闘があつたと勘違いした月に少し怒られました。

誤字脱字のご報告、ご感想お待ちしております。

### 第三話 サーヴァントたちの日常を知るために（前書き）

今回はちょっと長いです。

区切ると少し短くなってしまったため、長いままで投稿させていただきます。

それでは、どうぞ。

### 第三話 サークヴァントたちの日常を知るために

龍の討伐から帰ってきた後、華佗の根回しのおかげで俺たちは「暑気あたりの民のために、龍の肉を手に入れてきた」ことになり、半日ほど街を離れていたことについてはお咎めなしだった。

華佗が街のみんなへの分配計画を作っているはずなので、後は華佗と朱里たちに任せてきた。

俺たちは俺たちでやることがあるのだ。

「・・・ギル、皮は？」

「おいおい、英雄王の宝物庫をなめるなよ？鮮度も品質も一切落ちてないぞ。むしろ上がったといつてもいい。」

「さっすが、ギルの兄貴！」

兵士たちからの変な呼び名が定着していることをスルーしつつ、服屋へと急ぐ。

皮と注文書を手渡し、職人たちに腕を振るってもらうためだ。

すぐに服屋へと到着し、宝物庫から取り出しておいた皮を渡す。

一刀は一度城に戻って注文書を取りに行っているから、後で酒屋で合流する手はずとなっている。

「・・・水着か」

蜀や呉の将たちの水着のデザインも一刀に一任したため、どんなのが出来るかは見てからのお楽しみというわけだ。

兵士たちもよく頑張ってくれたということで、水遊びの際の警備兵に任命することを、俺と一刀が約束した。

さて、後は酒屋へ向かうだけか。

・・・

「かんぱーい！」

八人の男が、杯をぶつけ、一気に酒を飲み干す。

「つかー！この一杯のために生きてるツス！」

「ははは、おいおい、俺たちはこの一杯のためなんかにあの激戦を  
潜り抜けたんじゃないぜ？」

「そうですね！大将、ギル様、あの約束、忘れないでくださいよ？」

「大丈夫だ。・・・というか、すでに根回しは終わってる」

「なんと！？？」

「ふっふっふ。俺の無駄な文官スキルをなめるなよ！」

「すぎる？・・・よく分からないが、ギルの兄貴がすごいのは分か  
ったぜ！」

みんな酔っている所為かテンションが高い。

すっかり出来上がった兵士たちと騒いでいると、華佗がやってきた。

「お、やってるな」

「ん？・・・華佗か。配給は終わったのか？」

「ああ。暑気あたりの人たちの分はもちろん、他の人たちの分まで確保できた。よくあんなに大量の肉を持って帰れたな。」

「あ、あはは。街の人たちのためにを思えば、あんな量、どうってこと無いさ！な、ギル！」

「そうだな！」

流石に王の財宝ゲイトオブパピロンに入れてきたからほとんど全身持って帰れたとはいえない。

それから華佗が龍を倒したときの話を聞いたり、華佗からこっそり龍の唾液から作ったという古の秘薬をもらったりと騒がしいまま夜は更けていった。

・・・とりあえず、月に使ってみるかな。

・・・

朝。暑さで目が覚める。

「・・・こう暑いと、仕事する気力も無くすなあ。」

まあ、あまり仕事は回ってこないし、三国同盟の要という立場なので、忙しいことも無いんだけど・・・。  
それもこれも、俺の分の仕事をギルが代わってくれているからなんだよなあ。

あいつは「お前にそんな立場を押し付けたお詫びだと思ってくれ」とか言ってたけど・・・。なんだか申し訳ない気持ちで一杯だ。

「街を巡回するか。」

以前俺の役職だった警備隊長のころを思い出してみるのも良いかもしれない。

そう思いながら、服を着替え、扉を開ける。

そうだ、サーヴァントが日常で何をしているのか見て回るのも面白いかな。

「よし、そうと決まればまず・・・」

セイバーだな、ここからセイバーの巡回ルートに行くのが一番近い。ギルは一番どこにいるか予想できないから最後にして・・・そういえば、ランサーのマスターも俺と同じ日本人なんだよな・・・。あの二人は大体家にいるらしいし、二番目はそこに向かうかな。

「えーと、この時間はこのあたりをうろついているはずんだけど・・・」

街へ出てきよるきよるとセイバーを探す。

いつもより過ごしやすいとはいえ、まだまだ気温は高い。

服屋の親父が水着を完成させてくれれば、この暑さも吹っ飛ぶんだけど。

「おい、マスター。これで休憩は何回目だ？」

「っせーなー。こう暑いと鎧着てるだけで死にそうだったのに。何でお前平気なの？馬鹿なの？」

「・・・すごい言われようだな。おそらくだが、それは私が英霊だからだろう。人を超えた存在である私は、外気温の変化にも少しは耐性があるのだと思う」

「本気でうらやましいな。ちょっと俺も英霊になりたいんだけど」

「無理じゃないか？」

「だよなー」

会話の聞こえてきた方向を見ると、セイバーとそのマスター、銀がいた。

セイバーは余裕綽々と言った表情をしているが、銀は木陰に座り込んでだるそうにしている。

「む？・・・これはこれは、天の御使いさまじゃねーか。あんたもくそ暑そうなカッコしてんなー。」

銀が俺に気づき、片手を挙げつつやはりだるそうに声をかけてくる。

「やあ。まあ、これが俺の制服だしな。」

「一刀か。今日はどうしたんだ？」

セイバーも俺に話しかけてくる。銀とは対照的に、涼しそうな顔をしている。

「巡回ついでにサーヴァントのみんなの様子を見学しようかなーと」

「ほづ。それならばいい情報をやろつ。先ほど向こうへギルが歩いていったぞ」

「本当か!？」

思わぬ情報に、大声を出してしまう。

一番見つけづらいと思っていたギルの情報がこんなに早く手に入るなんて。

「うむ。妙に上機嫌だったから声をかけたんだが、ちょっとな、とはぐらかされてしまった。」

「何かあったのかな・・・」

「けっ。ギルもすすしそーな顔してよー。まったく」

そう愚痴る銀に激しく同意する。サーヴァントってずるいよなー。とりあえず、セイバー組の様子は十分分かったし、次はギルを追ってみるか。

「それじゃ、巡回頑張ってくれよ。俺はギルを追ってみる」

「ああ。暑さで倒れたりするなよ」

「大丈夫だって。それじゃなー！」

そういつてセイバーたちの元を離れる。ギルの歩いていったという方向は・・・市場だな。

・・・

「いないなー」

人が密集するのでかなり暑い。



密集している人の海の中でも、ギルは特別目立つ。だからすぐに見つかると思っただけ……。

「おや？御使いじゃないか。」

そんな時、声をかけられる。

「あなたは……えっと、キャスター」

「いかにも。どうしたんだい、こんなところで」

「ギルを探してたんだ。見なかったか？」

「ギル？ギルならついさつき何か買って市場を出て行ったけど。妙に機嫌がよかったから、ちよつと引いたけどね。危うくパワータイプホムンクルスを出すところだった」

「どれだけびっくりしたんだよ……。で、その話、本当か？」

「ああ。私が嘘をつくメリットなんか無いからね」

「そっか……。ありがとう、キャスター！」

俺がそうお礼を言うと、いやいや別になんてことは無い、と謙遜してから

「それと、君はもう少し少し気をつけたほうがいい。君のように立場が高い者が、警備もつけずにこんなところを歩くべきじゃないよ」

「あ、ああ。忠告ありがとう。それじゃっ」

「気をつけなよ」

背後からの声に手を振って答えつつ、市場を抜ける。

ええっと、分かれ道か……。

右に行こう。

……しばらく道を歩いていると、メイド服を着た少女と出会う。

三国統一後に蜀でメイド服を初めて見たときは驚いたが、どうやらメイド服はギルが最初に広めたらしい。

それからというもの、服装のかわいさから、侍女になりたいという少女が増え、ギルから俺にメイド服のデザインをしてほしいと頼まれたこともある。

そのときは全身全霊を尽くして可愛いメイド服をデザインした。政務でもあんなに本気を出したことは無いと思う。

「あれ、一刀さんじゃん。どしたの？」

半そでにミニスカートという夏用メイド服に身を包んだ響が小首をかしげながらそういった。

隣にはアサシンも控えているようだ。……ようだ、表現したのは気配遮断によって認識しづらくなっているからである。

「いや、ギルを探してるんだけど……こっちは来なかった？」

「うーん。私もずっとここ歩いているけど、ギルさんは見てないよ」

さっきの分かれ道から響の元へは一本道なので、響が見てないというのならこっちは来てなかったんだろう。

「そっか、分かった。ありがとうね」

「良いつてことよ。あ、ギルさんに会ったら桃香さまが呼んでたつて伝えておいてー」

「了解。それじゃね」

「ばいばーい」

手を振る響とアサシンに別れを告げ、さっきの分かれ道へと戻る。  
・・・アサシンって意外にフレンドリーなんだな。仮面で隠れて表情は分からないけど、手を振ってくれるなんてなかなかいい奴じゃないか。

再び分かれ道へと戻ってきた俺は、左の道を選んで進む。いつもみんなと飲む酒屋はこの通りにある。

「・・・」

「・・・あれー？」

その通りにある建物と建物の間。裏路地への入り口に、バーサーカーが立っていた。

「何でこんなところにバーサーカーが・・・。尚香ちゃんはどこいったんだ・・・？」

「・・・」

「・・・もしかして路地裏で何かしてるのか？」

そういつてこっさり覗こくとすると

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおっ！！」

「ひいっ！ごめんなさい！」

地面のそこから響くような雄たけびがあがる。

街の人たちも何事かと足を止めてこちらを見て、なんだ、とかまたか、とか言っつてすぐに歩き始める。

・・・え、これって日常茶飯事なの？

ちよつと怖いんだけど・・・立ち入らないほうが良いな。

「・・・バーサーカーは裏路地への侵入を防いでいる・・・と。」

心のメモ帳にメモしながら、俺はギルを追うために通りを歩き始めた。

・・・

「あれ？こっつて」

通りを歩いているうちに、ランサーとそのマスターの家へとたどり着いた。

ランサーのマスターは以前の名を捨て、甲賀、と名乗っているらしい。

たまにギルのところに顔を出しているのを見るが、家に来るのは初めてかもしれない。

・・・ついだし、ランサーの家にも寄ってみるかな。

「すいませーん」

扉をノックすると、とたとたと規則正しい足音が聞こえ、扉が開かれた。

「おや？これは天の御使い殿ではありませんか！何か御用でしょうか！」

直立不動で敬礼をするランサーに事情を話し、手を下げてもらった。

「なるほど、ギル殿をお探しですか。奇遇ですね。先ほどまでここでお茶を飲んでいらしたんですか」

「ここにきてたんだ」

「ええ。ギル殿はマスターに生き方を教えてくださいました方ですから、たまに様子を見に来てくれるのです。」

「おい、ランサー。長引いているようだが、誰が着たんだ？」

ランサーの背後から渋い声が聞こえてくる。男の生き様というか、よくテレビで見えるようなハードボイルドな探偵のような重みを感じさせる声だ。

「はっ！ただいま、天の御使い殿がご来訪しております！」

「ほお、なんだ、依頼か？」

「いえ！ギル殿をお探しのようで」

「ああ、ギルか。さっきまで茶を飲んで煎餅食って帰ったが」

「煎餅・・・」

煎餅は、食べたいと言い出したギルが開発し、俺がそれを改良し、甲賀が大陸へと広げたお菓子の一つである。

甲賀の家の内装は古い日本家屋といった内装で、常に煎餅や緑茶などが常備されている。

忍者の活動中に寄った倭国からもいろいろと持ってきているらしい。

「どこに行く、とか言っただけか？」

「そうだな・・・そんなこと言っただけか、ランサー」

「ふうむ・・・いえ、どこに行く、とは言っていないかと思いません。妙に上機嫌ではありませんが。」

・・・やっぱり、機嫌よかつたんだな。

「で、どうするんだ、御使い。茶でも飲んでくか？」

「いや、ギルを追うから、また今度で」

「あいつがここを出て行ったのは十分ほど前だ。それじゃあな」

「ああ！ありがと！」

「では！」

びしっ、と敬礼してくれるランサーに手を振りながら、甲賀の家を後にする。

今までに手に入れた情報をまとめると、上機嫌で、市場で何か買い物をして、どこかへ向かっている、と。  
・・・うーん、ぜんぜん分からない。

「取り合えず、このまま進んでみるか。」

この先には・・・川に作られた港と、森しかないけど・・・。

・・・

「お、御使い。元気か」

軽い調子で声をかけてきたのは、ライダーのマスターである瀧だった。

「元気つちゃあ元気かな。暑いけど」

「あー、あつちいよなあ。でもよ、ライダーとかはあの全身スーツで暑くねえとか言い始めるんだぜ。・・・やってらんねーな」

ああ、それはとても同意する。

「あれ？ライダーは？」

話題に上りながらも、いつもは瀧と行動をともにしているライダーがいないことに気づいた俺は、瀧に聞いてみる。

「ライダーなら、森の中で修行中だぜ」

「修行・・・？」

「新しいライダーキックのために、特訓するんだって」

「……流石は仮面ライダーだな」

妙に納得してしまうのが、仮面ライダーの恐ろしいところだ。

「月に一回くらい、こうして森の中とかで特訓してるぜ。御使いもどうだ？鍛えられるぞー」

特訓かー。ちょっとあこがれるよなー。

考えておくよ、と言おうとした瞬間、森からずん、と地震のような振動を感じた。

「おー、派手にやってんなー。……で、どーするよ」

「い、いや、遠慮しておくよ」

流石にまだ死にたくないです。

「そか？……ま、良いけどよ」

そういえば、瀧も真っ黒なスーツに身を包んでいるのにそれほど暑そうじゃないな。

「なあ、そんな真っ黒なスーツ着て、暑くないのか？」

「あ？ああ、素<sup>す</sup>駆<sup>か</sup>流<sup>りゅう</sup>守<sup>まも</sup>有<sup>あ</sup>通<sup>つう</sup>のことか？」

……スカルスーツ？



そういう名前なのか。・・・ああ、髑髏をモチーフにしてるからか。

「そうそう」

「ああ、実はな」

そういつて取り出したのは、青い石だった。

「キャスターから貰ったんだけどよ、これ、一定の風を送ってくれる石なんだ」

そう言つて瀧は石をこちらに向ける。確かに、そよそよと風が送られてくる。

なるほど、ミニ扇風機か。

「いやー、これがあるだけで変わるもんだな。あっちいのはかわらねえけどさ」

「便利だなあ……。後で俺もキャスターに貰おうつと。」

「そうしろそうしろ。あると無いとじゃ大違いだ。」

「・・・あ、そうだ。なあ瀧、ギル見なかったか？」

「ギル？」

「ああ。妙に上機嫌で森か川に向かつてったみたいなんだけど。」

「んー。少なくとも森には来てないと思っぜ。街から森に行くにはここ通らないといけないけど、ギルが通ったのはみてないしな」

「・・・そっか。なら、港のほうかな」

「そうかもなー。」

「分かった。ありがとな」

そう言つて瀧に手を振りながら川へと向かう。

瀧は石から送られてくるそよ風を受けながら、ぷらぷらと手を振り返してくれていた。

・・・

「・・・港までやつてきたけど・・・」

特に変わったところは無いな。

「でも、水辺だからか涼しいなあ」

しばらくここで休むのも良いかもしれない。

俺は港の端に腰掛け、足をぶらぶらとさせながら目をつぶった。

この大陸の川は対岸が見えないくらい広い川があるから、一見海と区別がつかないときがある。

子供たちも暑さを嫌つてか涼しいここで遊んでいるようだ。楽しそうな声が聞こえてくる。

「おー！三匹目だ！ギルすげーなー！」

「ねーねーギル、二番の竿引いてるよー。私がやってもいい？」

「なーギルー。まだ読み終わらないのかよー」

「ギルギルー、暇ー」

「浩太、三匹程度なら別にすくなくないって。まだまだ釣るから、後で持って行け。魅々、何だって挑戦が大事だ。引いてみるといい。司、そつちの雑誌は読み終わったから読んで良いぞー。幸、後で遊んでやるから、あまり引つ張るな。」

・・・聞き覚えのある名前と、聞き覚えのある声が聞こえてきた。ちようど港の先端で、子供に囲まれる金色の男が、黄金の竿を四本立てながら、仁王立ちしていた。

間違いない。あそこにいるのが、この暑い中捜し求めていた人物だ。・・・だが。

「・・・なんで釣り・・・？」

疑問に思いつつ再びギルの様子を見る。

数人の子供に囲まれて、当たりのきた竿を子供に引かせたり、釣った魚をあげたりと、いつも優しいギルがさらに優しくなっている。子供には特別優しいのか、釣りの時は上機嫌になっているいろとはつちやけているのか・・・。

「この川は結構な魚が釣れる。もう少し中央に近づけば、もっと大物がいるだろうな。今度は船でも持ってくるか。」

「船ー！乗りたい！」

「船釣りかー。ギルー、父ちゃん呼んでもいいかー？」

「ギルギルー、船のそうじゅうしたーい！」

「船って面白いー？」

再び子供に囲まれるギル。ギルが何か言うたびに、子供たちから引つつかれたり絡まれたりしているようだ。

・・・すごい人気だな。やっぱり民の中で人気ナンバーワンの将なだけある。

「・・・とりあえず、今日は帰ろう。」

なんだか、あのテンションのギルとはかわりあいたくない。はっはっはー！と大笑いしているギルを尻目に、俺は港を後にした。

・・・

最近、とてつもなく暑い。

サーヴァントである俺にはあまり気にならないのだが、月たちは夜寝苦しいらしい。

俺も生前の経験からその気持ちかとてつもなく分かる。この体を手に入れてなければ、暴れていたかもしれない。

しかし、月はこの暑い中俺の隣ですうすうと寝息を立てている。何でも、俺を隣に感じていたい、とのことだ。

たまに、だが、月とは逆の方向に詠がいることもある。今日はいないようだが。

「・・・すごい汗だな。」

暑さの所為か、月の額には汗が浮かんでいた。それを拭いながら、寝台から降りる。

その際、布団がめくれて何も身に着けていない月の身体が見えてしまったので、そっと布団をかけなおす。

最近月は響や孔雀に変なことを吹き込まれているらしい。以前下着姿で布団に包まり待機していたのも、孔雀の入れ知恵らしい。後で孔雀を問いたださねばならないだろう。

そんなことを考えながら着替えていると、扉が開かれた。

「ギル、今日の政務のことなんだ・・・け・・・ど・・・」

「ん？何か問題でもあったか？」

「ば、ばばばばばば・・・」

「ば？」

「バツカじゃないの！？着替えてるなら着替えてるって言いなさいよ！」

「・・・んな無茶な」

「うつさい！ヘンタイ！」

詠は大きな音を立てながら扉を閉める。相当恥ずかしかったらしく、耳まで真っ赤になっていた。

うーむ、やっぱり詠は照れてる姿が可愛いよなあ。

「へう・・・ギルさん、おふあようございます・・・」

詠が照れながら強がっている姿を妄想しながら服を着ていると、月が目をこすりながら寝台の上で体を起こした。

「おはよう、月。起こしちゃったか？」

「いえ……。あ、あの……」

「ん？」

「きよ、今日は何かご予定がありますか？」

「予定？……さつき詠が来て、何か用があるみたいなのを言っていたから、それ次第かな」

「そう……ですか……」

明らかにしょぼん、とした顔で自分に掛かっていた布団をくしゅくしゅと弄る月。

何かお気に召さないことがあったらしい。

「？……まあいいや。なにせよ仕事は午前中に終わるだろうし、一緒に昼でも食べるか」

月の昼休みまでに終わらせればまったく問題は無いな。

どうだ？と月に聞いてみると、月はさつきまでのしょんぼりした顔と打って変わって一瞬で嬉しそうな顔を浮かべた。

「はいっ！是非、ご一緒させてください！」

あー……。なんだか、月に犬耳と犬の尻尾をつけたようになってきた。

どう見ても今の月は尻尾を振る犬である。こっ、撫で回してから抱きつきたくなる感じとかそっくりだ。

「よかった。それじゃあ、昼休みになったら迎えに行くよ」

「はい」

微笑む月にそれじゃあ、また後でと声をかけてから、部屋を出る。部屋の外では、壁に寄りかかった詠が腕組みをして待っていた。とんとんと腕を叩いている指が詠の苛立ちを表現しているようだ。

「遅い」

「悪いな。ちょっと手間取ってた」

「ふん。・・・ほら、行くわよ」

「ん。そうだ、手つないでいくか」

俺がそう言って詠の手をとると、詠は全身をびくりと震わせて驚きをあらわにした。

「な、なに勝手に手繋いでるのよ!」

「まあまあ。あまり大声出すと暑くなるぞ」

「ううゝ・・・。」

恨めしそうな声を出しつつ、それでも手を離さないのはやっぱり詠らしいと思う。

政務室へ向かう途中、俺の顔を見つめるくせに、俺と目が合つと慌てて視線をそらす詠を存分にからかった。

今日も良い一日になりそうだ。

・・・

「ふんふんふふーん」

「んにゃ？月ちゃんご機嫌だね。なんかあったの？」

「え？・・・あ、えっと・・・」

「・・・なんかあったみたいだね。その様子を見るに・・・ギル関係か。」

「へうっ！？」

「そついえば最近は何と詠でギルの部屋に入り浸ってるみたいじゃないか。いやはや、この暑いのによくやる。」

「ばっ！ぼ、ボクはそんなことしてないわよ！」

「ほっほっ？？」

慌てて反論した詠に、孔雀が詰め寄る。

「『ボクは』？気になるなあ。じゃあ月は何してるのかなあ。何で月がしてることを詠が知ってるのかなあ・・・？？」

「あ、あう、し、ししし・・・知らないっ！」

「あ。・・・いじめすぎたか」



いやー、ついやりすぎちゃっうよね、と後頭部をかきながら響に向かつて笑いかける孔雀。

「んまあ、詠ちゃんの慌てる姿って可愛いからねー。分からないでもないよ?」

でもま、やりすぎだよなー、と冷静に響に責められ、うっ、と言葉に詰まる孔雀。

そんなやり取りに月は苦笑を浮かべるしかないが、自分の話題から外れて少しほっとしていた。

「・・・ま、それはそれとして」

「そうだね。それはそれとして」

先ほどの雰囲気から一転、にやにやと笑う響と孔雀。

「この暑いのに、夜な夜なギルと何をしてるのか、聞いてみたいなー」

「この暑いのに、詠ちゃんと一緒になってギルさんと燃え上がっちゃってるのかなー?」

「あ、あははー・・・。へうう、助けて、ギルさあん・・・」

休憩時間のほとんどを使って、月は最近アーチャーの部屋で何をしているのか、大部分を白状させられた。

・・・

「月ー？」

月が昼休みに入ったのを確認してから、昼飯を食べるために迎えに来たのだが……。

「あ、ギルさーん！」

「レディを待たせるものじゃないよ、ギル」

「お、遅かったじゃない！」

「へう、ごめんなさい、ギルさん」

侍女組が全員集合していた。なんじゃこりゃ。

「……どういうこと？」

「あの……」

おずおずと前に出た月からの説明によると、最近俺の部屋に入り浸っていた月と詠のことを根掘り葉掘り聞かれ、さらについてに今日の昼の予定も聞かれてしまった。

孔雀はその昼食について行こうと言い出し、響もノリノリで賛成。後でその話を聞いた詠も参加することになり、こうして侍女組四人が集まったらしい。

「そっか。ま、たまにはこういうのもいいだろ。」

また今度、埋め合わせするからな、と言いながら頭を撫でる。月が

残念そうにしているのは、たぶん二人つきりじゃなくなったからだろう。

それくらい、俺にだってわかるのです。もう誰にも鈍感とは言わせない！

「は、はい・・・！」

案の定、嬉しそうにする月。よしよし、俺の判断に間違いは無かったようだ。

「さて、それじゃ昼食に行こうか。どこで食べようかなあ」

「んー、そういえばお城出てちょっといったところに新しく出来たお店あるんだけど、そこ行ってみない？」

「おや、そんな情報知らないぞ。」

「新しい店なんか出来てたんだな。」

「じゃあ、そこにするか。」

「おー！」

メイド服を着た少女三人と執事服の少女に囲まれながら、日差しの下を歩く。

今日はまだ風があるので過ごしやすい。熱中症で倒れることも無いだろう。

・・・

「あれ？」

「どうかしましたか、隊長」

「いや・・・あっちから歩いてくるの、ギルじゃないか？」

「ギルの兄さんやて？・・・なんか、すごい光景やな」

「・・・なんていうか、すごい王様っぽい・・・」

沙和や真桜の言うとおり、通りの向こうから歩いてくるギルの姿は半端じゃなかった。

メイド服の少女三人と執事服を着た少女一人の計四人に囲まれながら歩いてくるギルは、身にまとう王氣オーラの所為で、人ごみをモーゼのように割って歩いてくる。

ギル自身は四人と談笑しながら歩いているため気づいていないのだろうが、将の散歩、というよりは王の凱旋といった雰囲気をかもし出している。

・・・昨日見た釣りしているギルとは似ても似つかないな、と思いつながらギルを見ていると、ギルもこちらに気づいたらしい。気さくによお、と手を上げながら近づいてくる。

「一刀じゃないか。巡回か？」

「ん、あ、ああ。」

少し緊張してしまったようだ。言葉がうまく出てこない。

・・・なんでいつもと違うんだろっ、ギル。

「今日はなんかあったのか？その・・・王氣オーラが出てるけど」

遠まわしに聞くのも変なので、直球で聞いてみた。  
ギルは首をかしげながら、何か変か？と逆にこちらに聞いて来る始末。

「・・・いや、ほら、いつもは一人なのに、今日は大勢連れてたり、人ごみを割って歩いてきてたし・・・」

俺がそこまで説明してようやく気づいたのか、ギルはきよろきよろと周りを見渡して、しまった、とつぶやいた。

「カリスマ切るの忘れてた。みんなと出かけるからって浮かれてたなあ」

そう言っただけで目をつぶり、ふうと短く息を吐くと、先ほどまであふれ出していた重みのようなものが和らいだ。

完全に無くなった訳ではなく、ギルからは依然として人知を超えた存在であると証明するかのような『何か』が漏れていたが。

「教えてくれて助かったよ。」

にこりと笑いながらそう言ってくるギル。

うーん、こういう人当たりのいいところとかがモテる秘訣なんだろうか。

メイドと執事少女を侍らせるなんて正直羨ましいぞ、と思っていたが、うん、ギルぐらいの器量がないと無理なんだなあと再認識した。俺も、尻たちに愛想をつかれないような隊長でいたいとな、なんて気合を入れなおしてみる。

「いやー、通りで道が通りやすいわけだ。そりゃ人がいなきゃ通りやすいよな。」

少だけ恥ずかしそうに笑うギルに俺も笑いを返しながら、さっきの言葉を思い出した。

みんなと出かけるかといっていたが、どこかへ行くのだろうか。聞いてみると、ギルはああ、そうだと行って

「これからみんなで昼飯だ。一刀たちも一緒にどうだ？奢るぞ」

一瞬、心を揺さぶられた。

最近沙和や真桜、たまに凧に昼飯を奢ってあげている所為か、俺の懐はすでに若干寂しい。

その点、ギルは黄金率というスキルで特技が金持ちとかふざけたことを言い出すくらいに金がある。

以前数え役満姉妹に気前良くおごっていたのを見て、やっぱり真似できないなとギルを見直したとさえあるのだ。

そんなギルからのお誘い……。

「そ、そんな……。ギル様に食事を奢っていただくなんて恐れ多いこと……！」

「でもでも、お腹空いたのー」

「そやなあ。そろそろ昼時やしなあ」

「おい、沙和、真桜。お前たち……」

そこまで言って、凧のお腹からくっ、と可愛い音がした。

「っ！」

顔を真っ赤にしてお腹を隠すが、たぶんそれじゃ意味が無いと思う。ギルは柔らかく笑いながら、遠慮するなよ、と凧を説得する。

「ま、今日はお言葉に甘えようぜ、凧」

「た、隊長……。うう、それじゃあ、ごちそうになります……。」

「おう、任せろ」

それからギルは侍女の少女たちにいいだろ？と確認を取っていた。もちろん、と即答してくれたのは少し嬉しかった。

「で、どこに行くんだ？」

隣を歩くギルに聞いてみる。隣と言っても、ギルの周りにはすでに四人の少女がいるので、少し離れているのだが。

「ん？響が新しい店を見つけたとか言ってたから、そこに行ってみようかなって」

「へえ。新しい店かあ」

「あ、あれだ！」

ギルの一步前を歩いていた響が指を指した。

そこには、大きな文字で泰山、とだけ書かれていた。

「……。俺、すごくいやな予感がしてきたんだが。」

「？どうしたんだよギル」

「いや、うん、俺の勘違いだよな、たぶん」

顔が強張り、変に汗をかき始めたギルに首を傾げつつも、泰山へと入店した。

「いらつしゃいませー」

店員さんに人数を告げると、すぐに案内してくれた。

案内された席は二つ机が並んでいる所で、やはりというかなんと言  
うか、ギルの周りには四人の少女が集まっていた。

ギルの隣には月ちゃんと詠ちゃん。対面には響と孔雀ちゃんだ。  
いまだこわばった顔で、ギルは採譜をめくる。

「お、風、これ見てみ。激辛マーボーやて。」

「おお……。じゃあ、私はこれで」

そう言った風を、ギルはありえないものでも見るかのように見つめ  
ていた。

その後何かぶつぶつつばやいていたが、俺には外道とか今後ともよ  
ろしくといった断片的な言葉しか聞き取れなかった。

「うーん、俺はチャーハンで良いかな。月たちは？」

「んー。じゃ、私もチャーハン！」

「ボクはこの日替わり定食っていうの貰おうかな」

「ええっと、私はギルさんのチャーハンを少し貰えれば大丈夫です。」



「なんだ、あーんしてほしいのか？」

「へうつ！？」

にやにやと笑うギルが、月ちゃんをからかう。  
顔を真っ赤にした月ちゃんが両頬に手を当てて恥ずかしがる姿を見て、ギルは楽しそうに笑いながら月ちゃんの頭を撫でた。

「ぼ、ボクも」

「ん？」

「ボクも・・・ギルから、貰いたいな・・・ダメ？」

「駄目な訳ないだろ。ふむ、じゃあ俺のチャーハンは大盛りにした  
ほうが良いかな」

少し考え込んだギルだが、すぐに顔を上げてこちらに顔を向ける。

「で、一刀たちは決まったか？遠慮せずにじゃんじゃん食べてくれ  
よ」

「えーっと、じゃ、俺は普通の麻婆豆腐に青椒肉絲。」

「私は先ほどの激辛麻婆豆腐で。」

「んじゃうちは・・・焼売と・・・」

こうして遠慮を知らない真桜と沙和が結構な量を頼んでいたが、ギルは良く食べるなあ、と笑っただけだった。

「いやー、あれが余裕っていうやつか。すごいなあ……。しばらくして、みんなの前に料理が並んでいく。

おお、良い匂いだ。食べなくてもおいしいと確信できる。

「よし、じゃあいただきますか。」

ギルの音頭で全員が食べ始める。

大量に並んだ料理を前に嬉しそうな顔をする凧たちと、ギルにあらんされて嬉しそうにしている月ちゃんと詠ちゃん。

「詠ちゃんがあんなに乙女チックな表情をするのを、はじめてみた。」

「ギルさんギルさん、私にもあーん」

「まったく、響もか。ほら、あーん」

「えへへ……あーん。はむっ」

テーブルに乗り出すようにしてギルからチャーハンを貰った響は、ギルの両隣にいる二人と同じように幸せそうな顔をして席に戻る。それを見て母親のように微笑んだ孔雀ちゃんが……。

「よし、次はボクだね。あーん」

「孔雀も？珍しいこともあるもんだ。ほら、あーん」

「あむっ」

響と同じようにしてギルからチャーハンを分けてもらった孔雀は、いつも浮かべている微笑みからさらに少しだけ口角を上げて席に戻った。

もぐもぐと口を動かす孔雀はいつものようなクールさが抜けて、少女らしい表情を浮かべていた。

「うん、おいしいな」

それを見届けたギルは、自分でもチャーハンを掬って口に運ぶ。

そんなやり取りを見ていた真桜が、怪しい笑みを浮かべ、自分の目の前にある皿から焼売を取ってギルの方を向く。

「ギルの兄さん、焼売も良い感じじゃ。食べてみ？」

そう言っつて真桜はほら、あーん、とギルに迫る。

両隣・・・さらには対面からの恨めしそうな視線に気づかないまま

「お、本当か？」

なんて言いながら真桜から焼売を貰っていた。

その瞬間の威圧感の増加は、食事を取りに来てたのにいつの間にか戦場に迷い込んだようだった。

「た、隊長！」

「ん？どうしたの、凧」

「え、えつと、その・・・あ、あーん・・・」

それに触発されたのか、凧までそういいながら麻婆豆腐を乗せたレ

ンゲを差し出してきた。

照れながら差し出してくれる凧の可愛さに和みながら、その麻婆豆腐をぱくつ、と食べる。

「おー、辛いのもなかなか・・・か・・・？」

最初はピリ辛程度だった辛さが、口の中で爆発する。

「か、らっつ！？」

ありえないほどの辛さ・・・いや、痺れが舌を攻撃してくる。

こんなもの、凧は涼しい顔で食べてたのか・・・！？

「一刀！？・・・全く、外道麻婆を食べたのか。仕方ないな・・・」

ばたばたと暴れ始めた俺に一瞬驚いた声を上げたギルも、すぐに状況を把握してくれたいらしい。

宝物庫の中から瓶入りの牛乳を取り出し、手渡してくれる。

辛い料理を食べた後には牛乳です。辛いカレーの後も、牛乳がよいでしょう。

「んぐ、んぐ、んぐ・・・ぶはーっ！」

俺の反応がすごかったからか、他のみんなも凧の頼んだ麻婆豆腐に興味を持ってしまい、全員が一度ずつ悶絶して、ギルの牛乳のお世話になった。

まあ、なんだかんだ言いつつも楽しい食事会になったと思っている。

・・・

### 第三話 サーヴァントたちの日常を知るために（後書き）

川に港や泰山のお店はホロウネタを書きたいがために創作したものであり、実際にはたぶん無いものだと思います。

あーん、つてたぶん全男の夢とか浪漫だと思っています。

誤字脱字のご報告、ご感想お待ちしております。

#### 第四話 蜀での水泳大会に行くために（前書き）

長いです。切ると短く、中途半端になるため、長いまま投稿させていただきますことにしました。

それでは、どうぞ。

#### 第四話 蜀での水泳大会に行くために

いつもの政務中、桃香からこんなことを言われた。

「久しぶりに、ご飯と一緒に食べに行かない？」

「・・・そうだな、久しぶりに一緒に街へ行ってみるか」

「やったっ。それじゃ、がんばって終わらせようねっ」

「おお、やる気だな。」

「もっちろん！」

そう言って先ほどよりも早く筆を動かす桃香。

よほど街で息抜きできるのが嬉しいらしい。

これは、俺がしっかりとリードして、桃香に楽しんでもらわないとな。

俺も桃香に負けないように筆を動かしつつ、どこに行こうかと頭の中でプランを組み立てていった。

「・・・よしっ、終わったよ、お兄さん！」

「ん、俺もだ。じゃあ、行くとするか」

「はいっ」

元気に返事をする桃香を見て自然と笑みが浮かんでしまう。さて、どうするかなあ。

・・・

「桃香はどんなものが食べたいんだ？」

「ん？んー、ちょっと暑いから、軽いものが食べたいかなあ。」

「ふむ・・・じゃあ、饅頭にするか。アレくらいなら、ちょうどいいだろ」

「うんっ」

そんなことを話しながら目的地まで歩いていく。

最近暑いねー、とか、他愛も無い話題でも、桃香は嬉しそうに話す。

「お、ここだ。すいませーん」

「はいよ！おや、ギル様じゃないか。今日は劉備様と一緒になんだね。」

「

「へー、お兄さん。今日』は』ってどういことなのかなあ。」

にっこりと笑顔でこちらを振り向く桃香。

「どういことなんだろうなー。と、桃香は何にするんだ？」

「・・・じゃあ、肉まんにしようかな」

「分かった。肉まん二つください」



「はいはい、ちょっと待っててくださいな」

そう言っつて奥へと引っ込むおばさん。

いつも大量に買うときにはお世話になっているので、顔も覚えられていたのだろう。

・・・いつも、鈴々とか恋たち大食いの将とくるからなあ。タイミングが悪かったな。

「はい、肉まん二つ。お待ちどうさま」

「ありがと。代金は・・・っと」

こっそり宝物庫を開き、お金を取り出す。

それを渡すと、おばさんはうん、ちょうどだね。まいどありー、と大きな声をあげた。

俺と桃香は饅頭屋を後にして、歩きながら肉まんを食べる。

「あ、あそこの木陰に座ろ、お兄さん」

「おお、いいな。涼しそうだし。」

そう答えると、桃香は俺の手を引いて小走りで木陰へと連れて行く。そのまま木の根元へ座り込んだ桃香に習うように、俺も腰を下ろす。

「ふえー……。涼しいねえ」

「年寄りみたいだな」

「むー！女の子にそういうこと言ったらだめなんだよ、お兄さん！」

そうやって肉まんを持っていない手で俺の頭をぼかぼかと叩いてくる桃香。

ごめんごめん、と謝るが、心が籠ってない！と機嫌を直してくれない。

「ちょっとした冗談だよ。ほんとにそんなことは思っていないから」

「・・・ホント？」

「ああ。」

「なら、いいよ。」

「ありがとう」

そうやって桃香の頭を撫でる。前に撫でてほしいって言ってたしな。突然のことに驚いたみたいだったが、すぐにこちらに頭を寄せてきた。

「んゝ・・・。お兄さん、頭撫でるの上手だね」

「慣れてるからかな。」

「ふふ。・・・ん、なんか、ねむ、く・・・」

桃香は呟く様にさういうと、俺に完全に体を寄りかからせてきた。寝息が聞こえるので、眠ってしまったんだろう。

「全く、また睡眠時間削って勉強してるのか？」

以前も桃香は他の王に負けないように、と政務の勉強をしていたことがあった。

その時は睡眠時間を削って勉強していたためか、常に眠そうな顔をしていたのを思い出した。

「・・・にしても、こっちのほうは肉まんっばいよな」

俺の腕を抱きこむようにして眠ってしまったので、桃香の二つの凶器が腕に押し付けられているのだ。  
全く持ってけしからん。

「ふにゅう」

奇妙な声を上げながら、桃香がさらにこちらに密着してくる。

「全く、可愛いなあ、うちの王様は」

ゆっくりと腕から離れさせて、胡坐を搔いている俺の脚に桃香の頭を乗せる。

女の子が男に膝枕をされて嬉しいのかは分からんが、座ったまま寝るよりはましだろう。

幸いにも木の周りには芝が生い茂っている。体を痛めることは無いだろうが、あまりにも寝すぎるようだったら城に行つて寝かせないと  
な。

桃香の前髪が額に張り付いていたので、撫でるついでにかき上げる。さらさらとした手触りが心地良い。

「昼休みが終わるまでは・・・んー、体感的に三十分くらいかな。それまでは、しばらく寝顔を楽しむか」

桃香は午後からは何もなはずだし、部屋で寝かせたほうがいいだろう。

通りがかる人たちの暖かい視線を受けながら、俺はしばらく桃香の寝顔を楽しんだ。

「お兄さん・・・だいすき・・・」

「ありがとう。俺も大好きだ」

「えへへえ・・・」

寝言を言う桃香も、とてつもなく可愛い。  
これが・・・癒しか。

・・・

「お兄さん、大好きだよ」

「ああ、俺も大好きだ。」

確実に夢だと分かる夢ってあると思う。

たぶん、これはそんな夢。

でも、なんだか暖かいものが胸に広がるこの感覚は、夢じゃなきゃいいのになあって思う。

「ほんとに、私のこと好き？」

「疑り深いなあ。じゃあ、証明しようか」

そう言ってお兄さんの手が私の頬をさらりと撫でて、私は瞳を閉じ

る。

うつすらと開けたまぶたから、近づいてくるお兄さんの唇を捉えて、あと少して触れる……。

「っはっっ!？」

「おおっ!？びっくりした……」

……なんてところで、目が覚めてしまいました。

突然奇声を上げた私に驚くお兄さんは、変な夢でも見たか？と言いながら私を背負いなおしました。  
つて、おんぶされてる!？

「な、なんでおんぶ!？」

「え?いやほら、桃香途中で寝ちゃったろ?俺の昼休みも終わりそうだったから、城で寝かせたほうが良いかなあって。」

いやあ、気持ちよさそうに寝てたから、起こすのも可愛そうだなと思つて、と言うお兄さん。

ここからだと後姿しか見えないけど、きつと優しい笑みを浮かべてるんだろっなあ。

……お兄さんの背中、広いなあ……。また、寝ちやいそう。

「まだ眠かったら寝てていいぞ」

「……ふえ?でも、重くない?」

眠気でちょっと反応が遅れた上に変な返事になっちゃったけど、お兄さんは気にした風も無く

「重くなんか無いぞ。むしろ軽いくらいだ。ほら、俺ってサーヴァントだし」

「むう、それじゃあ、一般の人からしたら重いつてことー？」

なんだかちょっとお兄さんのことを苛めたくなくて、そんな意地悪なことを言いつつ首に回した手をきゅっと締める。

お兄さんとさらに密着しちゃって、ちょっと恥ずかしいけど、それ以上に嬉しいと感じる。

「うお、苦しい苦しい。大丈夫だって。普通の人が背負っても、桃香は軽いから」

「ふーん。そーなんだー」

「うむむ、これ以上はまずいぞー」

「知らないっ。もう寝るっ」

「おう、おやすみー」

こんなに自分勝手に振舞っても、お兄さんはさらっと受け入れる。

・・・んもう、そういうの、反則なんだから。

・・・

再び寝息を立て始めた桃香を背負って城へと戻る。

いつぞや共に戦った兵士たちがさすが兄貴ですっ！とか良く分からないことを言っていたが、気にしないことにした。

「あれ？ギルじゃない。」

「お、詠。ちようどよかった。桃香の部屋ってどこだ？」

「へ？桃香の部屋？……って、何であんたの背中であんなに寝てるわけ……？」

「まあまあ。とにかく、部屋に案内してくれよ」

はあ、仕方ないわね、付いてきなさい。と歩き始めた詠の隣に並ぶ。すると、詠はもじもじとしながら話しかけてきた。

「……もしかして、桃香と……その、なんかしてきたの？」

「んー、まあ、いろいろと」

「っ。……そう、なんだ」

「ああ。よっぽど疲れてたんだろうな。」

「疲れるようなこと、したんだ」

詠は何かぼそりと呟いたが、俺の耳には届かなかった。何て言ったんだ？と聞く前に、詠は立ち止まって口を開く。

「……、桃香の部屋よ」

「お、ありがと。開けてくれるか？」

「・・・仕方ないわね」

そう言っただけ扉を開けた詠の後ろに続いて、桃香の部屋へと入る。桃香の部屋では香を焚いていたのか、甘い香りがする。優しく、ゆったりと包み込むような甘い香りを感じながら、詠が案内するとおりに寝台へと向かう。

「よ・・・っと」

桃香を寝台に横たわらせると、薄い布団をかけておく。

いくら暑いといっても、布団を全くかけないでないと体を冷やしてしまうからだ。

女の子が体を冷やすと良くないと前に何かの本で読んだことがある。

「ねえ、ギル？」

「なんだ、どうかしたか？」

「・・・今日の夜、あんたの部屋に行ってもいいかしら」

「構わないぞ。ただ、午後から政務があるから、少し遅くなるかもしれない」

「ん、大丈夫。待ってるわ」

その後、ほら、政務室まで行くわよ、と言って俺の手を引く詠。おお、詠から手を握ってくれるなんて。

・・・



日も沈み、夜空には星が輝きだした頃。  
政務を終わらせた後、手伝ってくれた朱里と愛紗に礼を言ってから、  
帰路へとついた。

すでに詠は部屋で待っていることだろう。  
自分の部屋へとたどり着き、扉を開く。

「遅れた、ごめんな」

「べ、別に、気にしてないわ」

俺が入ってきたことに気づいた詠は、肩をびくりと震わせた。  
灯りも点けず、寝台の上に座って待っていたらしい。

「ありがとう」

そうやって俺は詠の隣に腰掛ける。

それで、何かあったのか？と聞くと、詠は俯いたまま

「・・・あんたってさ、月とはもう・・・し、したの？」

「したって・・・ああ、そういうことか。ああ、したよ」

それを聞いた詠は、そう、と一言つぶやいてから、顔を上げた。  
潤んだ瞳で俺の顔を見上げながら、詠は口を開く。

「その・・・ボクのことも、抱いてほしいの」

・・・なるほど、あのちよっと追い詰められていたような顔はその  
ことを考えていたからか。

思えば、月も下着で布団に包まっていた日、同じような顔をしてい

たよつに思つ。

「いいのか？・・・痛いらしいぞ」

「だ、大丈夫よ！あんたくらい、受け入れてやるんだから！」

それならいいけど、と言いながら、俺は詠を抱き寄せる。

んひゃ、と可愛い悲鳴を上げながら胸へと飛び込んできた詠と一緒に、寝台に倒れる。

俺の上に乗った詠に口づけをして、ゆっくりと服に手をかけていく。

「途中で怖くなったりしたら言うんだぞ？」

「そんな事言わないわよ！」

憎まれ口を叩きつつも、詠の顔は真つ赤に高潮していた。

・・・

鳥の鳴き声で目が覚める。なんて清々しい目覚めだろうか。

隣に眠る詠を起こさないように気をつけながら、体を起こす。

ぎっ、と寝台が音を鳴らし、その音を聞いたからか、詠がんう、と声を上げる。

少しの間のおと、寝息が聞こえてきたので、起こしたわけではないようだ。

寝台から降りて、服を着替える。

・・・ちなみに、だが、俺の体の汚れはほとんど無いといってもいい。

なぜなら、鍛錬の未取得した魔力放出Eがあるからだ。

「よつと」

効果としては、『自身の魔力を外に放出し、若干の衝撃を発生させられる』程度だが、体の汚れを吹っ飛ばすにはちょうどいい威力だ。

「ん、大体取れたな」

しかし、服を着た状態から、もしくは裸からの鎧の脱着は一瞬なのに、裸から服を着るまでは自らしなければならぬとは。

・・・いや、そこまでずばらになる気は無いのだが、若干の疑問はある。

まあいいや。とりあえず、詠の体を拭くための水とか持ってくるかな。・・・かなり、べとべとだし。

ああ、シーツも変えないといけないな。血と違って落ちないしなあ・・・。

「さて、今日も頑張りますか」

朝食の時間まではまだ少しある。水を汲んできて、詠を起こして、体を拭けばいいか。

そうと決まれば行動しよう。

桶を片手に、扉を開く。ここから一番近い水汲み場はどこだったかなあ。

・・・

あの後、恥ずかしがる詠の身体を隅々まで拭いてやり、朝食を食べた。

今日は街の巡回と称して、服屋の職人から水着を受け取りに行かな

ければならない。

後で一刀と合流して、服屋へと行くべきだな。

そんな事を考えながら一人城の中を歩いていると、一刀が壁に寄りかかって腕組みをしていた。

「・・・ギル」

きらり、と白い歯を光らせながら、一刀は俺を呼ぶ。

俺は一刀の前で立ち止まり、一刀のほうを見ないまま口を開く。

「服屋はなんと？」

「完成させた、と言っていた」

使いの人から受け取ったと思われる竹簡を一刀から手渡される。ざっと中に目を通すと、おおむね一刀の言ったとおりのことが書いてあった。

完成したので、受け取りに来て下さい、という旨の内容だ。

「ならば、今日にでも受け取りに行こうか」

気分は怪しい取引をしている業者だ。

にや、とニヒルな笑みを浮かべた一刀が、無言でサムズアップする。こつこつと二人分の足音を響かせながら、俺たちは服屋へと向かった。

・・・後で聞いた話によると、あまりにも鬼気迫る雰囲気纏っていたため、兵士たちはドン引きしていたという。

「ごめんくださいーい」

一刀が服屋へと入っていくのに続いて、入店する。

「おお、これはこれは、いらっしやいませ、お二人とも。」

「こんにちわ。例の品は？」

「出ていますとも。・・・量が多いのですが、大丈夫でしょうか？」

「ああ、大丈夫だよ。・・・なあ、ギル？」

「もちろんだ。俺の蔵に限界の文字は無い」

「はあ、そつでございますか。それでは、こちらへ」

そう言つて、店主は俺たちを裏へと通してくれた。そこには、ずらりとならぶ水着の列。

「おお・・・すばらしい・・・！」

一刀が立ち並ぶ水着を見て感嘆の声を上げる。

「完璧だよ！ありがとう」

「いえいえ。こちらも、龍の皮を裁縫するという経験をさせていただき、嬉しく思っていますよ」

その後、一刀には店主への支払いをするという事で表に連れて行ってもらい、その間に俺は宝物庫を開ける。

「ゲートオブパピロン  
王の財宝」

真名を開放すると同時に、水着たちが地面へと沈むように消えていく。  
きちんと宝物庫の中へ収納されたのを確認してから、俺も表へと戻る。

事前に確認した作戦通り、一刀が店主相手に時間稼ぎのための世間話に興じていた。

「一刀、終わったぞ」

「お、そうか！じゃあ、俺はこれで」

「あ、はい！毎度あり！」

服屋を出て、城へと戻るまで、俺たちは無言だった。  
だが、そこには確かに男の友情があった。

「……それじゃあ、今夜、いつもの酒屋で」

「了解。それまでに、予定をつめておく」

「ああ、頼んだ」

そう言って、俺たちは拳をぶつけ合い、分かれた。

「……よし、後は……っと」

……

俺の財力によって貸切になった酒屋で、俺は黒板（のようなものを前に口を開く。

「・・・これで全員か？」

「ああ」

「よし、それでは、これから計画を発表する。」

俺以外の男が、わずかに首を縦に振る。

その視線は、期待に彩られており、どれだけ楽しみにしていたかが伺える。

黒板にチョーク（のようなもの）で文字を書き記す。

「まず、川へ行く順番だ。まずは鈴々や朱里、雛里といった暑さに強くない小さい子が多い蜀からいこうとおもっ」

数日前に暑さで雛里が倒れたばかりだし、緊急性が高いのは確かだ。

「それから、魏。最後に、一番暑さに耐性がある呉を連れて行くこと思っている」

うんうん、と男たちが頷く。

「そして重要なのが、見張りの兵の位置だ。」

ざわ、と雰囲気が変わるのを感じる。

俺は全員の性癖や所属する国を考慮しながら立てた兵の配置図を黒板に張って説明を始めた。

兵たちは納得してくれたようで、露骨に喜びをあらわにするものや

こっそりとガッツポーズをとるものなど、さまざまな反応をしていた。

「後、一刀の事なんだが・・・」

ごくり、と一刀がツばを飲み込む音が聞こえた。

「一刀には、水着の発案者として、これからの水着の有用性を確認するため、として俺と一緒に前線に出る事になる」

「そ、それってつまり・・・!」

「ああ。水着の有用性を確認するためには観察しないといけない。・・・そう!じろじろと水着姿を見ても、文句を言われない立場なのだ!・・・あ、月と詠のをじろじろ見たら王の財宝ゲイトオブパピロンな」

「あ、ああ。大丈夫だ。節度を持って、怪しまれない程度にチラ見するから。」

「ならいい。総員、節度を持って楽しく見ようじゃないか!」

「応!」

俺と一刀のことについては、兵士たちから文句が出ると思ったが・・・特に反発もなく決まったな。

「俺と一刀だけみんなに近くなるが、お前たちはいいのか?」

俺が単刀直入に聞いてみると、兵士たちはなに言ってますか、と笑い



「そもそも、大将が言い出して兄貴が船を出してくれなかったら、俺たちは水着を見ることすら出来なかつたんだぜ？」

「そつツスよ。遠くから見られるだけで満足ツス！」

「お前ら……」

一刀の瞳が、感動で潤む。俺も、少し感動してきた。

なんて……なんていいやつらなんだ……！

一刀……お前、いい仲間ともを見つけたな！

「よし！計画の開始は明日！みんな、体調を整えておけよ！」

「応……！」

その後、俺たちは翌日に響かないように自重しながら酒を飲み、騒いだ。

おかげで程よく疲れる事が出来て、ぐっすり眠れるだろう。

俺も明日の天气がよくなることを願いながら眠り、翌朝、まぶしい日差しを感じて目を覚ました。

「おお……！」

天気は快晴。じりじりと肌を焼くような日差しは、今日も猛暑になる事を示していた。

これならば、水浴びは確実に受け入れられる事だろう。

「よし、早速動こう。」

いてもたってもいらねず、俺は政務室へと急いだ。

・・・

「あーっーいー！」

桃香がへたれ、机に突っ伏した。

ふふふ、いい感じに気温が上がってきている！

「へう、大丈夫ですか、桃香さま・・・」

月も暑さでふらふらしているようだ。

・・・うーむ、弱っている月も良いな。

「月、大丈夫か？」

「はい、まだ、大丈夫れす」

ああ、暑さで月の呂律がわやわやに・・・

「・・・桃香、一つ提案があるんだが」

ここは、月の体調を一番に考え、少し早めに計画を発動するとしてよ  
う。

「ふえ？なーに、お兄さん」

「実はな・・・？」

俺は桃香や朱里、愛紗に水浴びをしてはどうかと持ちかけた。

「ギル殿が以前話していた暑気払いの話ですね。ですが・・・」  
当然彼女たちは服を濡らすのはどうか、と言ってきたが、それについてはこちらに解決策がある、と伝える。

「解決策、ですか・・・？」

「ああ。だから、後はみんなが行きたいかどうか、何だけど」

「お兄さんが服の問題は何とかしてくれるみたいだし、行くつよ、愛紗ちゃん。このままじゃ、みんな仕事にならないよ？」

「・・・そうですね。確かにこの暑さでやられているのも事実・・・分かりました、将達を集め、川へと行きましょう」

「それじゃあ、いろいろと準備が必要ですね。」

「そうだ。朱里、これを」

「ふえ？これは・・・。見張りの配置図ですか。なるほど、そういうのも必要ですね。使わせていただきますね。ありがとうございます」

よし、以前話を通していたからか、唐突にこんなものを出しても怪しまれない。

これは事前準備が功を奏したな。

「それでは、愛紗さんは将の皆さんを集めてくださいますか？ギルさんは見張りの兵の人たちの招集をお願いします。」

「分かった。すぐに向かおう」

「了解だ。それじゃあ、後でな、桃香」

「うんっ。二人とも、いつてらっしやーい」

「いつてらっしやいませ、ギルさん、愛紗さん」

元気を取り戻した桃香と、少し回復したもののまだふらふらしている月に見送られながら、俺は一刀の部屋へと急いだ。

部屋に着くと、決められたタイミングで扉をノックする。

「ギル、成功したのか」

扉を開けるなり、そう聞いてくる一刀に、サムズアップすることのできる答える。

その後、俺たちは兵士たちが集まっているであろう中庭へと歩き出した。

「兄貴！大将！」

中庭に着くと、兵士たちが出迎えてくれた。

「その表情・・・成功したみたいですね」

「兄者、楽しみだな」

「そつだな弟者。」

「そう考えると、この暑さも気にならなくなってくるッスね！」

「ああ、むしろ暑さに感謝したくなってくる」

「よし、将達は後少して門の前に集まるはずだから、先に向かおう。」

全員が頷いたのを確認して、俺たちは門へと向かう。

宝物庫に入っている水着のすべては頭の中で管理できていて、すぐにでも取り出せるようになってる。

「・・・お、集まってきたるな」

「あ、お兄さん！」

「ギル殿、ご苦労様です。」

「いやいや、全然だよ、と答えると、それでどうするのだ？と鈴々に聞かれた。

「川で水浴びはいいけど、服が濡れるのはいやなのだ」

「ああ、それは大丈夫。・・・ゲートオブパピロン王の財宝」

警備の兵士のおかげで人払いは出来ているので、人目を気にせずには宝具を展開できる。

地面から、服屋にあったままの姿で水着が出現する。

頭と手足が無いマネキンのようなものに着けられた水着たちは、まるで荒野に突き立つ無限の剣のように並び立つ。

「はわわ・・・地面から、下着が生えて来ました・・・!?」

「ギル殿っ!?!いきなり何を・・・!?!」

「ああ待て待て、これはだな・・・」

「一刀と一緒にあって、水着の説明をする。」

最終的に水を掛けて機能の説明をして、ようやく納得してもらった。さらに、一刀が発案者であり、水着の有用性を確かめるためにいつてきてもらう事を話した。

「・・・なるほど。・・・というか、その蔵を水着の収納場所を選ぶなんて・・・」

神秘の塊である宝具の使い道について若干首を傾げられたが、まあそこはスルーしてくれ。

「好きな水着を選んでいいぞ。着替えてから向こうの川まで来てくれよ?警備の兵士たちには道案内の役を任せてあるから。」

俺の言葉に、兵士たちが驚いた顔をする。

最初はそんな話なかったからな。だが、兵士たちにも眼福があつてしかるべきだろう。

みんなにはれないように笑いかけると、兵士たちは嬉しそうな視線を向けてくれた。

「それじゃあ、俺と一刀は先に行って準備してるよ。頼んだぞ、みんな」

「はいっ!お任せください、ギル様!」

蜀の兵が元気な声を上げる。

「さて、一刀、行くぞ」

「ああ！」

・・・

先に川に来て、日よけのための場所を作ったり、みんなが休むスペースを作ったり、お菓子を置いておいたり。

後は、酒だな。桔梗辺りが飲むだろう。

しばらくすると、みんなやってきた。案内してきた兵士たちは、何人かがくがくしている。大丈夫か、あいつら。

それから、みんなは川の中へ飛び込む。

つめたーい、とか、気持ちいいですね、とかいろいろな声が聞こえてくる。

「おお・・・！」

一刀が感動の声を上げる。

水の中に入って戯れるみんなを見ると、それだけで報われた気がする。

「あれ、お兄さんは水着、着ないの？」

「ん？ああ、俺は着なくても大丈夫だしな。」

魔力放出で水くらい弾けるし。

「そうなんだ。なーんだ、お兄さんの水着姿も見たかったのになあ」

「また今度な。」

「うんっ。．．．でも、この水着ってやっぱり布の面積が少ないように感じるんだけど」

「それでも多いほうだぞ。なあ、一刀？」

「え？あ、ああ。そうだな。．．．もつと、小さい水着を着てるやつだっているしな。」

その言葉で脳内に浮かぶのは、ある漢女。  
うっふうううんとかぶるああああとか吼えるあの化け物だ。

「うっ．．．」

「くっ．．．」

「え？え？どうしたの、二人とも」

心配し始めた桃香になんでもない、と告げて、ヒモビキニの話をする。

天の衣装には不思議が多いんだねえ、なんていう桃香たちに苦笑を返しながら、周りを見渡す。

すごいな。ここまで水着の美女美少女が集まるのは、この大陸だけなんじゃなからうか。

一刀も恥ずかしそうにしながら、ちらちらと水着姿の少女たちを見て楽しんでいる。



「・・・あの、ギルさん」

そんな時、くいくいと俺の服のすそが引かれる。誰だろうか、と引つ張った人物を見ると・・・。

「へう、あの、この水着・・・似合ってますか？」

「そ、その、この水着・・・どう？」

月と詠の二人が水着姿で立っていた。

月の水着は白一色でひらひらとした装飾が特徴的な水着。

詠の水着は白い生地の中に黄色がアクセントとして使われている水着だった。

こうしてみると、二人の白い肌がかなり露出している。いや、水着だから当たり前なんだけど。

いつもは長袖のメイド服着てるし、さらにハイニーソックス穿いてるから生足なんて見る機会はほとんどない。

「二人とも、綺麗だよ。」

正直それしか浮かばなかったので、恥ずかしがらず、きちんと伝えた。

二人は嬉しそうに笑みを浮かべると、一緒に涼みませんか？と誘ってくれた。

喜んで、と返すと、桔梗が酒盛りをしている場所の近くの岩場までつれてこられた。

ここなら、みんなの楽しむ様子が見られるし、水にも近いから涼しいし、と詠に説明される。

「一番は、ギルさんと密着できるから、なんですけど」

確かに、今座っている岩は三人が座るには小さく、かなり密着しなければならぬ。

今の俺の服装は、いつもの暑苦しい姿ではみんなも暑く感じるだろうという事で上は白いTシャツにしているのだが・・・二人の肌が直接触れて、俺は今大変な事になっている。

何だこのすべすべな肌。うおお、寝台の上で触れるのとは違う健康的な肌の感覚が、俺をだめにするううう・・・。

救いを求めて一刀を見ているが、一刀も一刀で水辺でぽーっとしている。どうやら、みんなの水着姿にあてられたらしい。なんだそりゃ。ピュアボーイ過ぎやしませんか。

「うう、なんかどきどきするよう・・・。」

「えへへ、私もだよ、詠ちゃん」

そういつて笑いあう二人を見て、なんだかほんわかとした瞬間。

「いつくのだーっ!」

「てえい!」

「ぬおっ!」

「きゃあっ!」

「ギルツ!」

鈴々の手からすっぱ抜けた木の棒が、俺の顔面にヒットする。神秘の籠っていない攻撃のため俺には通用しないが、衝撃まで無効

化できるわけじゃない。

こおんっ、と甲高い音を立てて、俺の額に当たった木の棒は、俺を後ろへ倒れさせた。

「いつつ・・・」

実際そこまで痛くはないが、そこは癖である。

俺に当たった後空中に跳ね返った木の棒が、俺の横に落ちてからんからんと情けない音を立てる。

「だ、大丈夫なのか、お兄ちゃんっ！」

「大丈夫かよ、ギルっ！」

岩の向こうから鈴々と翠の心配そうな声が聞こえる。

木の棒をつかんで起き上がり、岩の上へと上る。

「大丈夫だー。ほら、鈴々」

ぺいつ、と木の棒を投げて渡す。

見事にキャッチした鈴々は、ごめんなのだー、と少し気落ちした様子で謝って来た

「いや、俺でよかったよ。詠や月だったら、こんなものじゃ済まなかっただろうし。だから、鈴々はある意味上手に飛ばしたって事で。」

「えへへー、そうなのかい？」

「そうだよ。ただ、玉をちゃんと打ち返して、すっぱ抜けなかったらもっと上手だな」

「分かったのだ！今度は、玉を打って飛ばすのだ！」

危ないから、飛ばす方向も気をつけるんだぞー、と注意してから、岩に座りなおす。

「ふふ、ギルさんは将来良いお父さんになりますね」

俺たちの目の前で遊んでいた紫苑が、そんな事を言ってきた。

「そうか？」

「ええ。鈴々ちゃんに危ない事を教えてあげたり、上手に誘導したり。そういうことが出来る人は、良い親になるんですよ」

「へえ。紫苑に言われると、真実味が増えてちょっと嬉しいな」

「ギルお兄ちゃんはおとーさんになるのー？」

「そうね。もしかしたら、璃々のお父さんになるかもしれないわよ？」

「ぶっ！」

「ちょー！」

「ふえっ！？」

紫苑の言葉に、俺と月、詠がそれぞれ驚きをあらわにする。そんな俺たちの様子を見て、紫苑はくすくすと上品に笑うと

「璃々の相手もしてもらっていますし、私はギルさんのこと、とても好きですよ？」

「そう直球で言われると、照れる前に嬉しく思っちゃうな。ありがとう、紫苑」

「いえ、どういたしまして。」

そんな中、璃々が蟹を捕まえたらしい。嬉しそうにこちらに報告してきた。

「おかーさん、お兄ちゃん、カニさん捕まえたー！」

「あらあら、小さなカニさんね」

「んー」

璃々はカニをまじまじと見て、何か考え込み始めた。その様子をほほえましく見ていると、ぎゅう、と両手の甲をつねられる。

「ギルさあん？まさか、紫苑さんだけじゃなくて璃々ちゃんも一緒にいただいたちゃうんですか？」

「ギールー？璃々はまだあんなに小さいんだから、無茶しちや駄目なんだからね！？」

「なんだと！？違う、そういつ目で見ていたんじゃないぞ！？」

「だって、紫苑さんと璃々ちゃんを見て鼻の下を伸ばしてました」

「璃々をそのケダモノみたいな視線で見てたくせに」

「すごい勘違いをされているぞ……。」

それから、二人の勘違いを直すためにしばらくの時間を要した。

最終的に、璃々がもう少し大きくなってから手を出すのは良い、という事になった。

……全く勘違いは直らなかつたようだ……。

もう勘違いを直すのはあきらめる事にして、目の前のみんなに視線を戻す。

そこでは、朱里と雛里が水を掛け合っていた。……スク水で。

「それっ」

「ひゃっ。……朱里ちゃん、やったなあ……!」

「雛里ちゃんこそ、やりましたね〜!」

うわ、何あの空間。飛び込んでいいの?すごい癒されそうなんだけ  
ど。

今のこの傷心を癒すのはあの空間しかないと思うんだ……。

「きゃっ、もう、冷たいよお……あ、ギルさん」

「えへへ……。え?あ、あわわっ。ぎ、ギルさんっ」

ずっと見ていたのに気づいたのか、朱里と雛里がこちらに手を振って  
くる。

手を振り返すと、二人は水掛けを中断してこちらにやってきた。

「ギルさん、この水着というのは機能的でいいですね。水が掛かっても透けませんし、何より動きやすいですっ」

「それはよかった。・・・二人はみんなと遊んでこないのか？」

あつちで野球っばいことやってるのとかいるけど。

「いえ・・・その、皆さんの本気の遊びにはついていけないというか追いつけないというか・・・」

「あー・・・」

そうだな、文官の二人に本気で遊ぶ鈴々たちに追いつけというのは無茶だったな。

「あら、それなら璃々と遊んであげてくださいませんか？鈴々ちゃんたちには流石に璃々の力が追いつかないので・・・」

「はいっ」

雛里が元気に返事を返す。いつもは帽子で隠れる事が多い雛里の表情も、こうして水着だけになると隠される事なく見ることが出来る。笑顔も照れた顔も楽しそうにはしゃぐ顔も、すごく新鮮に見える。

「璃々ちゃん、よかったら、私たちと遊びませんかー？」

新鮮といえば、朱里もなんだか新鮮な感じがするな。

水着に着替えてはっちゃんけているのか、やはり帽子がないから印象が代わるのか、とても楽しそうに遊んでいる。

「わーい！遊ぶ遊ぶー！」

こうして璃々と遊んでいるときも、実に楽しそうな表情で水と戯れている。

・・・水着の力、恐るべし・・・。

「桃香さま！周囲に怪しいものはいませんでした！」

そう言つて一刀の近くの茂みから出てきたのは、いつもどおりの服装をした焰耶だ。

焰耶も水着を着ればいいのに、お前たちがかわったものを着れるか！と断言されてしまった。

・・・まあ、桃香至上主義の焰耶は、同時に少し男嫌いでもあるからなあ。

目の前で蒲公英にからかわれて真っ赤になっている焰耶を見ながら、でも、もったいないなあ、と思つてしまうのである。

で、十分に焰耶をからかった蒲公英は、杯を傾けて酒を飲んでいた。

「・・・蒲公英つて結構飲むんだな。」

先ほどから桔梗と同じペースで飲み続けているような気が・・・。

「おう、ギル。こやつ、なかなかいけるクチだぞ？」

「えへへー、いけるクチだぞー！」

「へえ、意外だな。月なんか、三杯くらいでふらふらするのに」

「ぎ、ギルさんっ」



慌てた様子の方が恥ずかしそうに変なこと言わないでくださいっ、とちよっと怒ったように言ってきた。

そんな月も可愛いなあ、と思いつながら、ちょうど酒を飲みきった桔梗の杯に、ワインを注いだ。

「ぬおっ?」

いきなり空中から注がれたワインに驚き、杯を落としかけていたが、すぐに持ち直した。

「いきなりごめんな、桔梗。それ、俺のお勧めのお酒だから飲んでみて」

「なんじゃ、ギルの仕業か。酒を貯蔵して置けるとは、便利じゃのう」

そう言ってくいと杯を傾げる桔梗の向こうで、蒲公英が桔梗だけずるーいと騒ぐ。

「大丈夫だって、蒲公英にもあげるから。」

ぱちん、と指を鳴らし、蒲公英の杯にもワインを注ぐ。わーい、と喜んだ蒲公英は一気にワインを飲み干した。

「ふえー、なんたるこれ、果物みたいな味がするー」

「ああ。ブドウっていう果物から出来た酒なんだ。」

「ほほう。・・・これは、一気に飲み干す類の酒ではないな?料理

と共に楽しむような酒であろう」

「おお、すごいな桔梗。肉料理とか、魚料理とか、料理に合わせて白と赤を分けて飲んだりするんだよ、それ。今はお菓子しかないから、それで我慢してもらうほかないけど」

「ふむ。ならば、今度は食事のときに貰おう」

まあ、ワインだけでもおいしいんだけどね。

料理と一緒に飲むと、さらにおいしいといつかなんと云つか。

「そうしてくれ」

おーいしー！と絶賛する蒲公英を見て楽しんでいると、桃香と愛紗、星がこちらに向かって歩いてきていた。

「ギル殿、愛紗を見てくれ。こいつをどう思う？」

「すごく・・・可愛いです。・・・って、何を言わせるんだ。」

「いやなに。やはり愛紗のこの姿を見ないのは損だろうと思ってな」

先ほど天の御使いにも見せたのだが、鼻血を出して倒れてしまったと星は続けた。

急いで一刀を見ると、幸せそうな顔をして倒れていた。

・・・アレはアレで、良い逝き方なのかもな。

「は、離せ星！ギル殿の前でこんな事・・・恥ずかしいではないか！」

「ほほう？先ほど、ギル殿はどう思っただろうか、と言っていたのはお主ではないか」

「そ、それはっ、ギル殿が用意してきた水着だからであって・・・」

「遠慮するな、愛紗。ほうら、見てみるギル殿。この育ちに育った果実を」

そう言っつて、星は背後から愛紗の胸を鷲掴み、むにゅむにゅともみ始めた。

「な、なにをっ!?!」

「おー」

「へう、すごいです・・・」

「アレが・・・巨乳の威力・・・!」

愛紗も桃香に負けず劣らずすごいもの持つてるなあと感心している  
と、両隣からも驚いたような声が聞こえる。

いやー、女の子から見てもすごいだろうね、アレ。

「ちょ、やめ、星っ!」

「はははっ。どうですギル殿。ご満足いただけましたか？」

「ああ、大満足だ。ありがとうな、星、愛紗」

「ほら、愛紗。ギル殿がありがとうと言っているぞ？」

「ううっ、嬉しいような恥ずかしいような・・・」

ぼそつと何かを言いつつ、愛紗は桃香に慰められていた。あの二人が一緒にいると、威力が四乗になるよなあ。

「お、星も水着似合ってるじゃないか。綺麗だよ」

先ほどまで愛紗の後ろにいたために見えなかった星の水着姿がはつきりと見えた。

「む？・・・ふ、ギル殿は正直に者を言う御仁だな。少し恥ずかしいくらいだ。」

おお、照れてる星が見れるとは。可愛いじゃないか。

「まあ、ありがとうと言っておこう。それでは、愛紗でも慰めてくれるかな。」

そう言っつて愛紗のほうへと歩いていく星。

そういえば二人がおとなしいな、と両隣の少女を見てみると

「やっぱり胸なのかしら・・・。むむう」

「へう・・・胸が無くても、ギルさんへの気持ちなら負けません・・・」

・・・二人とも、胸が小さいの気にしてるのかな。それとなくそんな事関係なく好きだと伝えるべきか。

「どうしたの？お兄さん」

「ん？桃香か」

「なんか悩んでるみたいだったから」

「いやあ、みんなでこうやって水浴びが出来るのは良い事だなあつて思ってたんだよ。」

貧乳の娘をどうフォローしようか考えていた、何ていえないため、当たり前障りの無いことを言うておく。

「そだね。少し前じゃ、考えられなかったけど」

「また、こうしてみんなで来ような。」

「うんつ。そのためにも、平和な今を続けていかないかね」

「そうだな。俺も、微力ながら協力させてもらっよ」

「うん、ありがとう。・・・でもたまには、こうしてお休みしながら、ね」

桃香の言葉に、そうだな、と答える。  
なんだかしんみりしちゃったな。

「よし、俺も鈴々たちと遊ぼうかな」

「あ、じゃあ、私もー！」

「ギルさん、頑張ってくださいね？」

「また棒にあたるんじゃないわよー」

「分かってるって。」

こうして、月たちと楽しく水遊びが出来るなら、こうして平和を維持してきた甲斐があったというものだ。

もしかしたらまたなにか問題が起きるかもしれないけど・・・そのときは、七体のサーヴァントが相手になる。

ま、そんな事がこない事を願うばかりだけど。

・・・こうして、暑い夏の一日はゆっくりと過ぎていく。

・・・

#### 第四話 蜀での水泳大会に行くために（後書き）

というわけで、蜀の水泳大会のお話でした。

・・・画像がないと、誰得なイベントですが・・・。  
しばらく水着回が続くかと思えます。

誤字脱字のご報告、ご感想お待ちしております。

**第五話 魏と仲良くなるために（前書き）**

五話目です。

魏の誰と仲良くさせるか、結構悩みました。

それでは、どうぞ



## 第五話 魏と仲良くなるために

「次は魏か。」

華琳たちをどう説得して川へと連れて行くか、が問題だな。とりあえず説得してみる、と玉座の間へ入っていった一刀に取り残されるように、扉の前で待ちぼうけ。見張りの兵と雑談しつつ時間をつぶしていると、一刀がひょっこりと顔を出した。

「水着を見せたいんだ。来てくれ、ギル」

「おう。・・・それじゃ、仕事がんばって」

「ええ。ギルさまも」

兵士に別れを告げ、玉座の間へと入る。

「あつ。あんたは、前に私のことを抱きかかえた金髪男！」

「・・・第一声がそれか。」

猫耳軍師、苟？にびしりと指を指され、大声で糾弾される。前に、というのはたぶん赤壁のときに沈みかけた船から助けたことだろう。

というか、それ以外に苟？と接触したことは無い。

「うう、北郷がそいつを連れてくるなんて、いやな予感しかないわ・・・」

「一刀、俺ってなんかしたかな」

「生まれてから、あんなに男に密着されたことなんか無いのに！つてしばらく騒いでたぞ、あの後」

「・・・あー」

そりゃ嫌われるか。

「だけど、この暑いのを何とかするにはギルの協力が不可欠なんだよ。頼む」

「おう。ゲートオブパピロン王の財宝」

「ちょっと、こんなところで宝具を・・・って、なにこれ」

一瞬焦りを見せた華琳だが、出てきたのが聖剣や魔剣のような宝具ではなく、水着を着けたあのマネキンもどきであることを確認すると、訝しげな表情になった。

「下着ではないか！こんなところで、そんなものを出すとは・・・」

しゃきん、と七星餓狼を構えた春蘭を慌ててとめる。

その間に、一刀に説明してもらっ。これは下着ではなく水着と言って、水遊びのときに着るものである、とか熱弁する一刀を守るように春蘭を押しとどめる。

なんだろうこの威圧感・・・この娘、英霊じゃないよね？

「・・・ふうん、なるほど？」

華琳が納得したように鼻を鳴らす。説得は成功か。

・・・納得したんなら、華琳、この暴走猪とめてほしいんだけど。

・・・

川へと移動した後、魏の将たちが着替えるのを待つ。

今回は一刀のほうが親しい将が多いので、俺は騒ぎから離れたところで見学することに。

「行くぞ北郷ーっ！」

「うわ、ちょ、春蘭っ!？」

ざっぱーん、と暴れる春蘭に巻き込まれ、一刀が川の中に消える。

・・・まあ、一刀も水着を着てるし、濡れても大丈夫だけど・・・。

「おにーさんは、遊ばないのですかー？」

いつの間にか俺の隣で寝転がっていた風がのんびりと口を開く。

「そだな、今日は良いかなあ」

「そののですかー。それじゃ、風と一緒に日向ぼっこですねー」

「そうさせてもらうかな。・・・なあ、風？」

「はい？なんででしょうかー」

「・・・凜が川に沈んだんだが、アレは大丈夫なのか？」

「大丈夫ですよ。いつもはあれより死にそうな目にあってますから」

鼻血とか鼻血とか鼻血のことだろうか。

まあ、いつも一緒にいる風が大丈夫だというなら大丈夫なのだろうか。

春蘭も、流石に死なせはしないだろうし。

「にーいーちゃんっ！」

「季衣っ！？ちょ、今は無理・・・わーっ！？」

小柄でも力が強い季衣に飛び込まれて、一刀はしりもちをつく。跳ねた水が涼しそうだ。

「あららー、お兄さんも大変ですねえ」

「にーさま、風さま。」

一刀をほほえましい視線で見ていると、流々が話しかけてくる。

流々とはたまに厨房で出会って食材を提供して食事を作って貰ったりにしているため、魏の将の中でも仲が良い。

「ん？・・・流々か。どうかしたのか？」

「いえ、どうかした、というわけではないのですが・・・お二人とも水の中に入っていないようでしたので・・・」

「あー、俺は水着ないし。今回は見学ー」

「風はこうしてるだけで満足なのですよー」

「そんなんですか・・・」

ちよつとがっかりした様な顔をする流々。

どうかしたのだろうか。

「流々はあなたと遊びたいのよ。察してあげなさいな」

いつの間にか近くまで来ていた華琳が呆れたようにそう言った。

あなたって・・・俺か？

確認するように流々を見てみると、俯き加減にこちらを見つつ、こくりと頷いた。

「そっか、なら俺も参加してこようかな。風、華琳、どうする？」

「風は寝てるのですよー」

「私は・・・そうね、水着姿の桂花でもからかってこようかしら」

ざばざばと水の中を移動して華琳は苟？の元へと向かっていった。

「にーさま、こっちですよっ」

その後ろ姿を見送りながら、俺は流々に手を引かれて秋蘭の元へ。なにやら秋蘭と流々、俺対春蘭と季衣、凜と一刀、で対戦するらしい。

「負けないよ、にーちゃん！」

「ギルがそつちかよ・・・」

「ふはは！ギルなどおそるるに足らず！いつくぞー！」

「よし、行くぞ、ギル。」

「にーさま、がんばりましょうね！」

「おっけー、がんばるかな。」

魏のみんなとはまだ付き合いが浅いからな。

こうやって、ちよつとずつ仲良くなっていけるのは嬉しい。

「よーし、まだまだいくよー！」

季衣の元気な声が、空へと響いていく。

・・・

その後、呉にも水泳大会のことを伝えようとしたが、折り悪く暑い日に来ず、しばらく過ごしやすい気候が続いた。

まあ、まだまだ夏が終わるようなことは無いので、すぐに暑くなると思うが。

それに、連日みんなを水浴びに連れて行くのも変だしな。ちよつど良い休みになるだろう。

「・・・はあ？」

「・・・いや、だから春蘭と秋蘭が喧嘩しちゃったんだって。」

「何とまあ、珍しいことで」

あの二人が喧嘩したところなんか見たこと無いぞ。

まず、秋蘭が春蘭をいないもののように扱うところから始まり、部屋にある春蘭の家具を片付けるのを手伝って欲しいとまでいわれいているらしい。

「・・・とりあえず、ギルの蔵に家具を入れて、適当な部屋に春蘭を移動させておきたいんだ」

「りょーかい。手伝うよ」

秋蘭のところへいくと、隣に立つ春蘭を見えないもののように扱いつつにこやかに家具を片付けるように頼まれた。

「ゲトオフハピロン  
王の財宝」

地面に沈むように収納されていく家具。

うーん、しかし、実際に見るとすごい怒りっぷりだな。

露骨な無視じゃなく、本当に春蘭がいなかったかのように振舞うんだから。

「うむ、これでさっぱりとした。ありがとうな、ギル」

「いやいや、構わないよ。な、一刀。」

「ああ！・・・ほら、行くぞ、春蘭」

小声でそういうと、一刀は春蘭の手を引いて歩き出した。ううー、と唸りながら春蘭は引かれるままに別の部屋へ向かった。

「それじゃな、秋蘭。」

「ああ。ギルと北郷も、わざわざ済まないな」

「・・・これは、手ごわいぞ・・・？」

「・・・で、どうするんだ？」

翌日、一刀と荀？と歩いていると、秋蘭に出会った。

秋蘭はいきなり弓を構えると、城の通路を曲がってきた春蘭に向けて矢を放った。

「うおっ!？」

「秋蘭!?!いきなり何してるんだよ!！」

「いやなに、急にここからあそこの壁際まで矢が届くのか試したくなってるな。」

「・・・まあ、当てる気はないみたいだし、春蘭も矢を弾き始めたので大丈夫だろう。」

「何とかしなさいよ!あんだ、超人なんですよ!？」

こちらを睨む荀?にそう言われるが、いやあ、それは無理っでもんですよ。



・・・

「ギル、何とかならないの？」

「・・・なんでみんな、俺のところに来るかね」

その日の夜、華琳にまでそういわれた。

まあ、魏の中でも華琳に告ぐ実力者である二人が喧嘩したままというのはまずいことなのだろう。

うーん、一刀に聞いたところによると、杏仁豆腐のさくらんぼを食べてしまったのがいけないのだと聞く。

だが、その前にもいくつか春蘭は秋蘭のおかずをつまんでいたらしい。好物だから、という理由があったとしても、さくらんぼだけで怒るような人間じゃないはず。

・・・なら、何か他のものと違う出来事があったはずなんだが・・・。

「まあ、いろいろと話を聞いて解決してみるよ」

「ええ。一刀の手にも余ってるみたいだから、協力してあげて」

「おうさ。じゃあ、失礼するぞ」

「構わないわ。それじゃあ、頼んだわよ」

「任せろって。」

そう言って玉座の間を後にする。

・・・うーん、とりあえず一刀にその時の状況を詳しく聞いてみる

かな。

うんうんと考えこみつつも、足は一刀の部屋へと向かっていった。

「一刀ー、いるかー」

こんこん、とノックしながら声を掛けると、おー、いるぞー。入れーと返ってきた。

「邪魔するぞ」

「ギル、何か進展はあったか？」

「いや、華琳にも何とかしてくれって言われたところだ。だから、一刀から起こったときの状況を詳しく聞きに来たんだ」

「そっか。それくらいなら、お安い御用だ。ええっと、あの時はだな……」

一刀から、詳しい話を聞いていく。

ふーむ、それだけ聞いてると、やっぱり好物を取られたから、としか考えられないなあ。

……ふむ、ちよつと確かめてみるか。

「怒った理由は分からないが……何とか秋蘭から聞き出してみよう。」

その日は流々にある頼みごとをしてから眠りについた。

……これで何とか仲直りしてくれればいいんだけど。

……

翌日、流々にお菓子を作ってもらい、秋蘭と一刀、季衣、そして俺の五人で食べようとしていたとき、春蘭がやってきた。

「おー、良い匂いがすると思ったら！」

ここまでは計画通り・・・ってうお！？秋蘭の顔に怒りのマークが！？

ぴくぴくと怒りに震える秋蘭に、あと一人人を呼んでいいかと聞いてみる。

「構わんぞ。誰だ？華琳様か、桂花か？」

「ええ？」

「風を呼ぶなら凜も呼ばねば拗ねるしな。」

「ちよ、秋蘭様・・・？」

・・・こりゃ、理由を聞くどころじゃないな・・・。

俺の作戦としては、春蘭がいる前で秋蘭の怒っている理由を話してもらえば、理由も分からずに謝れるかと言いつ張る春蘭も理由が分かるだろうと思っていたのだが・・・。

しかし、そこで思い切って一刀が口を開いた。

「な、なあ、秋蘭？」

「なんだ、北郷？」

「その、俺の知り合いの姉妹の話なんだけど、姉が妹を怒らせちゃ

ったんだ。だけど、姉は何で妹が怒っているか分からないって言うてるんだけど……」

「一刀がそういうと、秋蘭は良く分からないといった顔をして

「私に姉妹はいないぞ？」

「それでもいいから、意見が欲しいんだよ」

「ふむ……察するに、好物を黙って取られてもしたんじゃないのか？流石に、許可も無く好物を取られては、その妹も怒るだろう」

「……！」

なるほど、上手いな、一刀。

そういう風に聞き出せば、秋蘭も話しやすいし、春蘭もきちんと理解できるだろう。

実際に、その後はとんとん拍子に進んでいった。

もう黙って人のはとらないし、麻婆茄子一つに対して餃子を二個渡すようにするだとか言いながら、二人は仲直りをしていた。

「ふふ、それでは姉者、お菓子を取る皿を持ってきてくれないか」

「ああ！ちょっと待っている！」

そう言ってただだっ、とどこかへいき、ただだっ、と帰ってきた。その手には皿を抱えており、嬉しそうな顔をしている。

「持ってきたぞ！」

「よし、それでは食べようか。」

「おう！・・・む？秋蘭、これをいただくぞ！」

「・・・！？」

「・・・あー、流々」

「・・・えと、季衣」

俺は流々の手をつかみ、一刀は季衣の手をつかむ。

「逃げるぞ」

二人同時にそう言つて、全速力で駆け出した。  
もう、面倒見切れん！

・・・

ある日、中庭を何気なく歩いていると、急に地面が消えた。

「うおっ！？」

急いで天の鎖エルキドゥを上から張り巡らせ、落下を阻止する。

・・・ふう。地面が消えたと思つたのは、落とし穴に落ちたからか・  
・・・。

「全く、こんなところに落とし穴を作るなんて。」

誰だろうか。一瞬で浮かんでくる候補は蒲公英と荀？だけど。

・・・下には蠢く爬虫類。こついつタイプの精神的にくる畏を仕掛けるのは、苟？のほうか。

「はぁ・・・とりあえず、下の爬虫類たちは逃がして、穴は埋めておくか・・・」

ふむ、これはまた、たくさん集めたなあ。

とりあえず落とし穴を一つ埋めることに成功し、ふうとため息を吐いて歩き始める。

・・・二歩目を踏み出した瞬間、地面が消えた。

「またかつ！」

エルキドゥ  
天の鎖にお世話になりながら、全く、とつぶやく。

次はただの落とし穴だ。・・・うーむ、いくつも落とし穴を作る手口は蒲公英のものだが、これはどちらのなんだろうか。  
宝具をフル活用して穴を埋めて、再び一步を踏み出す。  
瞬間、無重力かのような感覚にとらわれる。

「・・・」

無言で鎖に引き上げられつつ、ぷつんとどこかで何かが切れた。

ゲートオブ  
「王の・・・」

右手を上げる。宝剣聖剣魔剣聖槍魔槍・・・さまざまな宝具の原典が空中に待機する。

バヒロン  
「財宝ツ！」

地面に突き刺さっていく宝具たちは落とし穴を隠すカモフラージュを吹き飛ばし、落とし穴を白日の下へ曝け出す。

「・・・こんなに作ってたのか。全く、二人とも懲りないんだから・・・」

落とし穴を埋めつつ、地面を平らに整地していく。後で、それとなく注意しておくか。

・・・

「ギルさんっ、大変なんですっ」

「どうした、月」

慌てた様子でこちらに走ってきた月を落ち着かせて、話を聞いてみる。

何でも詠についての話らしいが・・・。

「あの、信じられないかもしれませんが・・・詠ちゃんは、不幸を溜め込む体質なんです」

「・・・ほほう」

周りの不幸を肩代わりしている、ということだろうか。おおむねそんな認識で間違っていないらしい。

そして、その溜め込んだ不幸が辺りに撒き散らされることがあるらしい。

「で、それが今日だと？」

「・・・はい。」

もうすでに、それらしき現象がいくつか起きているらしい。

空腹で倒れた恋を介抱していた詠と響が、ねねの持ってきたお茶を掛けられ服をびしょびしょにされたこと。

その後、着替えた詠が紫苑とぶつかり、メイド服が少し破れてしまったこと。

それを紫苑に直してもらった後、部屋から出るときに璃々とはつかりそうになり、紫苑の手を掴もうとして服を掴み、びりびりに破いてしまったこと。

その余波で、璃々のお菓子が抜きになったこと。

「・・・なるほど」

詠から月が聞いた話はそれだけらしいが、今また何か不幸な現象を起こしているのかもしれない、と月は締めくくった。

「それで、ギルさんをお願いなんですけど・・・」

「ん？」

「ギルさんの能力で、幸運って高いですよね？」

「・・・ああ、そういうことが」

不幸が溜まり、詠の近くに降りかかるなら、それを相殺するように幸運の高い人が一緒にいればいい。

月はその考えに至り、俺に詠の手助けを頼むために探していたらしい。



「いいよ。他でもない詠のためだ。そのくらいならお安い御用だ」

「……気を付けてくださいね」

「……え、そこまで覚悟が必要なこと!？」

……

詠を見つけるために人づてに目撃情報を聞いていると、苟?が新しく掘っていた落とし穴に春蘭が落ちたとき、近くに詠がいたり、荷物を届けにきた業者が荷台を引かせていた牛が倒れてしまったときに詠が近くにいたり……。

何か不幸な出来事が起きた場所をたどっていけば、必ずと言ってもいいほど詠の目撃情報があった。

とりあえず、詠には近づかないようにすること、と軍部に通達し、将や兵に近づかせないようにした。これ以上、犠牲を増やすことは無い。

一刻も早く合流して、詠の不幸を何とかしないと……。

「あわわ、ギルさん、大変ですつ。軍師会議で、皆さんが……!」

城の通路の向こうから走ってきた雛里があわあわと慌しくまくし立ててきた。

「落ち着いて、雛里。深呼吸をしてくれ」

「は、はひっ、す、すう、はあ……すう、はあ……」

数回の深呼吸で落ち着いていた雛里は、ゆっくりと離し始める。

さして重要な軍議ではなかったため、お菓子でもつまみながら話し合おうということになったらしい。

ところが、そのお菓子やお茶がまずいことになっていた。

お茶はめんつゆに、肉まんは中身が入っていないスカスカなものになっており、煎餅はかなり古くカチカチになったものだった。

雛里は小腹が空いていたため、事前に少し食事を取っていたらしい。そのため、お菓子に手をつけることなく無事だったのだが、他の軍師は軒並みノックダウン。

なぜか放心しているという詠を残して、助けを求めに雛里は走っていたとのことだ。

「分かった、会議をしていた場所へと案内してくれ」

「はいっ。こちらです」

そう言って走る雛里の後ろについていく。

そのまま軍議を開いているという部屋の前に着くと、声が聞こえてきた。

先に月が何人かを連れてここに来ていたらしい。

「近づかないほうがいいわよ。あんたたちもこうなりたくなければ・・・ね」

なんだ、立てこもりの犯人みたいな事言ってるぞ、詠。

「詠ちゃん、もしかして・・・」

「ええ。やっぱり、あれみたいね。久しぶりだから、かなりやばいかも」

「ふむ・・・詠よ、不幸体質とは本当なのか？」

月に続いて、星が詠に質問する。

詠はもうあきらめた、とでも言うような口調で

「これを見たら分かるでしょ。これが不幸体質なのよ」

扉を開け、中に入ると、自嘲するかのような表情をしてそう言っている詠がいた。

・・・

あの後逃げるように去って行った詠。

それを追うより先に、軍師たちの介抱をする必要があった。

武官と違って体が弱いからな。もしかしたら長引く可能性もある。

「華佗からいろいろと貰っておいてよかった」

龍を素材とする薬を飲ませつつ、月に話しかける。

「月、詠のこれからの予定は分かるか」

その問いかけに、月ではなく星が答える。

「む、それならこれから私たちと訓練だったはずだが・・・」

「・・・星、急いで訓練の中止を伝えて来い。」

「了解した」

そういうと、星は軽い足取りで走り去っていく。

あの速さなら、詠を追い抜いて先に撤収させる事も可能だろう。

「よし、大体大丈夫だな。後は任せたぞ、月、荀？、雛里」

「はい」

後は三人に任せて、俺は詠を追う。

・・・

・・・体質の事を完全に失念してたわね。

「ふう、しばらく無かったからなあ。」

いつからだろう。確か、最後に溜まった不幸が降りかかってきたのは・・・ギルがくるちよつと前ね。

という事は、かなり溜め込んでるんじゃないかしら。

でも、あれだけの数の軍師に不幸が降りかかったわけだし、おそらくアレは終わったわね。

「・・・他の軍師たちの代わりに訓練を見に行かないと」

みんなの分まで働いて、汚名返上よっ。

「なに、朱里がつ！？・・・それは恐ろしいな」

「うむ。私も最初は笑っていたのだが、あの惨状を見ると、流石に眉唾とは思えん。」

訓練をしている場所へと着くと、愛紗と星がなにやら話し合っていた。

「何やってるの。訓練中に兵士を放っておいて雑談なんて」

「こ、これは詠！？ど、どどどしたのだ？」

「噂をすれば影。．．．なるほど、恐ろしいな」

「なによ。何の話？」

私が聞くと、二人は顔を見合わせていや、なんでもないぞ、と口を合わせたように答えた。

．．．二人が後ずさりしているように見えるんだけど、それは気のせいなのかしら。

ために一歩近づいてみる。

「．．．」

ずぎっ、と近づいた分だけ離れる二人。

「．．．」

もう一歩近づく。同じ分だけ二人は離れる。

「ははは、どうした、詠。そんなに怖い顔をしていると、鬼も逃げてしまっぞっ。」

「うむ。娘はやはり笑顔が一番だと思うのだがな。」

「ええ、ボクもそう思うわ。・・・ねえ、何でさっきから距離が縮まらないのかしら」

良く見ると、ボクが近づくと、將軍である二人だけじゃなく後ろの兵士たちも同じ分だけ後ずさっている。

・・・どう見ても避けられてるわね。

「あ、あいたたた。急にお腹の調子が・・・」

「む、大丈夫か星。これはいかん、訓練どころではないようだな」

「・・・ちよつと。將軍が仮病でずる休みなんて士気にかかわるわよ？ちゃんとなさい！」

「む、兵の皆も腹の調子がおかしらしい。先ほど食った肉まんにあたったのだろう」

そうやって星が目配せすると、兵士たちもお腹を抱え始める。仮病だって言うのがばれれば、バカバカしくなってくる。

「む？・・・う、うぐ、何だこれは・・・まさか、本当に・・・？」

「これでは訓練にならないな。今日はこれにて終了とする！」

そうやって兵士たちに解散を宣言すると、蜘蛛の子を散らすように走り去っていく。

・・・馬鹿ね、もう不幸は終わったのに。って、知らない人には分かるわけもないか。

「はいはい。邪魔者は消えるわよ。ふんだ!」

そう言つて背中を向けた私は、演技ではなく、本当に腹痛に襲われている二人を見る事はなかった。

「う、うう……。つ。愛紗、私はこれで失礼するっ」

「え?……。ちょ、ちょっとまで、私もお腹が……。!」

……

お腹を抱えながら疾走する星と愛紗を見つけた。

「星、愛紗!詠は!?!」

「分からん。どこかへ去つていった……。いつつ……。!」

「すみませんギル殿、失礼しますっ」

そう言つて、二人は走り去つていった。

……。詠、まだ不幸が残つてるのか……。

とりあえず、詠の性格からして城から出ているはずだ。

城の中には詠の体質の事を知っている人たちはばかりだからな。

つて、街に出たらさらに被害が広がらないか……。!?!?

「まずいな……。間に合えよ!」

街へ出て大きい通りを走ると、詠と凧が話しているのが目に入った。周りには……。頭上の籠から……。蛇が落ちそうになってる!?!?

「おっちゃん、この籠借りるよ！」

「ええっ！？ギル様、いったい何を……！」

『幸運にも』近くにあった空の籠を引っつかむと、凧の頭上に構える。

どざどざ、という感覚と共に、落ちてきた蛇が籠へと入ってくる。

「すみませーん！食用の蛇を落としましたー！」

「ああ、こちらで受け止めた！気をつけてくれよー」

「ギルっ！？」

「ぎ、ギル様っ！？」

「ふー。危なかったな。」

驚く二人を尻目に、持ち主に蛇と籠を返す。

「悪いな、いきなり。凧は街の巡回に戻ってくれ。ほら、あっちから沙和と真桜が着てる。」

「は、はいっ。それでは、失礼します、詠さん、ギル様！」

少し緊張した面持ちで去っていく凧を見送り、詠のほうに振り向く。

「ようやく見つけた。全く、探したんだぞ」

「ボクの事、聞いてないの？」



「聞いている。不幸が降りかかる一日があるんだって？」

「・・・なら、離れてなさいよ。あんたも、不幸になるわよ」

「ならん。なぜなら、俺の幸運ランクはA++だからな」

「なにそれ。」

くすりと笑みを浮かべる詠

「とりあえず、城に戻るわ。まだ不幸が終わってないなら、町にいるわけにはいかないもの」

「ああ、そうしようか」

城へと戻り、東屋で休憩しようとする、兵士から声を掛けられる。

「ギル様ー！」

「ん？」

声の聞こえてきた方向に身体を向けようと立ち止まると、べちゃっ、と何か液状のものが落ちた音がした。

恐る恐る視線を向けてみると、目の前に鳥のフンが落ちていた。・・・危ない。『幸運にも』呼び止められてなければ、直撃してたな。

「・・・どうした。って、蜀の」

「はい。これを渡すように、と諸葛様から・・・」

「あ、ああ。ありがとう。」

「それでは！」

そう言って去っていく蜀の兵士。

「なに、それ」

「ん？分からない。たぶん、町の整備がらみだと思っただけど」

「ふうん・・・」

詠からの質問に答えながら、東屋を目指す。

・・・近くにみんなの気配を感じる。

たぶん、巻き込まれないようにしながら詠の不幸が終わるのを確認するつもりだったんだろう。

「あ、着いたぞ、詠。」

「そうね。なんだか、今日は朝から慌しかったから座るのが久しぶりな気がするわね・・・」

そういいながら、ベンチのような椅子に座る詠。

俺も詠と卓を挟むようにして背もたれの無い長いすに座る。

「それにしても、助かったわ。あんたみたいなのがいれば、不幸も何とかなりそうだし。」

「そうか？詠にそう言ってもらえるなら、助けにきた甲斐があった

な

「……全く、そういうこと、真顔で言うんじゃないわよ。馬鹿」

「ははは、ごめんごめん」

それから、詠の不幸体質がいつから始まったのか、なんて話をしながら時間をつぶしている

「ギールーサーンー！」

「どづつ！？」

背後から誰かにタツクルされた。

それによって机に突っ伏すように倒れこむ。

強かに顔面を打つが、全く痛くない。……でも、びっくりしたあ。

「危ないのだー！」

そして、その直後。

先ほどまで俺の頭があったところに、何かが飛んできた。

ずどん、と鈍い音が聞こえるが、何があったのかは分からない。

「ねーねー、なんか今日私お茶被ってから微妙に不幸なんだけど！ さっきも水汲みの途中で転んじゃってー！」

「きよ、響か？ああ、うん、わかったから、とりあえずどけてくれ  
！」

何だこのカオス空間。

鈴々がごめんなのだー、と謝って近づいてくる足音が聞こえる。そんな中、ようやく身体を起こすと、次は思いのほか背中への響が引張る力が強く、仰け反るように後ろに傾いた。

「おっとつと」

何とか倒れないように耐えていると、目の前を高速で何かを通り過ぎていく。

「……ボク、今すごいものを見たわ……」

「ふう、ほら響、どうしたんだ？」

何とか体勢を建て直し、呆然としている詠を尻目に響から話を聞く。

……

「……ねえ、今のって……」

草むらの影から、桃香が半ば呆然としながら口を開く。

「……ええ、響がギル殿に飛び込んだ瞬間、ギル殿の頭があったところに鈴々の蛇矛が吹っ飛んできて、柱に突き刺さりましたね」

「しかも、その後後ろに引張られて仰け反ったときに、鈴々ちゃん振り回した蛇矛がお兄さんの目の前通っていったよね……」

「あれは、仰け反っていなければ直撃していましたね。」

「……『幸運にも』、響が飛んでこなければギル殿は……」

「へう、ギルさんの幸運は、やっぱりすごいです……」

「えーっと、らんくえーぷらすぷらす、っていうのだったよね。それってどのくらいなの？」

「ええっと、確か基本の値をを1としたら、えーぷらすっていうのは、ええっと、えーが50で、ぷらすぷらすの効果で三倍までありますから……」

「普通の人のお150倍の幸運!？」

「袁家ですら勝負にならない位の幸運ですね……」

全員が驚きながら再びアーチャーを見る。

「……まあ、納得だよな。」

「月、もしよければ、今度ギル殿のすべての能力値を教えてくださいな  
いだろうか。」

「ええっと、ギルさんに許可を得るなら、全然大丈夫ですけど……」

ほんとに聞くんですか?と視線で訴えてくる月に、愛紗はゆっくりとつぶやく。

「……つむ、覚悟して聞くとしよう」

……

「でねでね、もうハサンがいなかったら私今頃六着ぐらい着替えてたんだよー……」

背中に飛び込んできた響は、それからというものマシンガントークを続けていた。

俺と詠は時たま笑いながら話を聞いていくんだが、さっきの鳥のフン以来不幸は起きていないようだ。

「……詠」

「うん、もう終わったみたいね」

安心したように笑う詠に笑顔を返しながら、俺は響を慰める。

「ほら、響。そろそろ部屋に帰ろうか。日も暮れてきたし、身体も冷えるぞ?」

「……うん。もう帰るう」

すっかり凹んでしまった響をつれて、俺は詠と共に城の通路を歩く。さて、いろいろあったが、これで詠の不幸な一日は終わったと思っ  
ていいだろう。

「詠、これからは不幸の日になったら俺のところに来るんだぞ?」

「ええ、もちろんそうするわ。あんたの幸運、馬鹿に出来ないって  
わかったしね」

……

## 第五話 魏と仲良くなるために（後書き）

詠の不幸はギルには効きません。

『幸運にも』、回避できてしまいますから。

ランクの数値化は、以前どこかでみた数値表を元に行っています。

＋一つで二倍か三倍か思い出せなかったので、二倍に行っていますが、ソースがあつてのものではありません。

どなたか、正しいランクの数値変換が分かる方はご一報ください。

誤字脱字のご報告、ご感想お待ちしております。

## 第六話 将との出会いと戦いに（前書き）

今回はいろいろな将が出てくるので、若干まとまりが無いかもしれませんが。

ですが、久しぶりの戦闘描写などいろいろと詰め込みましたので、お楽しみいただければ幸いです。

それでは、どうぞ



## 第六話 将との出会いと戦いに

「ねえお兄さんっ」

「お、桃香か。どうした？」

蜀への屋敷へ行く道中、桃香に出会った。

桃香は嬉しそうに笑うと、俺の腕に抱きつき、お出かけしよーよ！と上目遣いで誘ってきた。

出会ったたびにこうして腕を組まれ、二つの凶器を押し付けられてきて大変だったのだが、最近ようやく慣れてきた。

「んー、それも」

「ギル殿！」

それもいいが、仕事が、と続けようとしたとき、後ろから愛紗の声が聞こえる。

・・・しかも、若干ご立腹気味だ。

「あ、愛紗ちゃん！」

「おはようございます。・・・ギル殿、どこかへお出かけですか？」

「い、いや、違うよー？大丈夫、ちゃんと訓練のことは覚えてたから」

「・・・本当ですか？桃香さまのお誘いに、ずいぶんと乗り気のようでしたか？」

・・・聞いてたんですね、愛紗さん。  
でもそれ、まだ答えの途中だったんですよ。いや、本当に。

「ほ、本当だって！」

おそらく怒っている理由は勘違いからによるものだが・・・今は逃げの一手だ。

この世界の将たちは、宝具さえあれば英霊と打ち合えそうな娘が何人かいるから困る。

愛紗もその中の一人で、青龍偃月刀の一撃はこのサーヴァントの身体でも痛みを感じるときがあるほどだ。

なので、怒らせてこの場で仕合になるよりは平和的に逃げる方がいい。

「・・・そうですか。では、訓練場まで行きましょう」

「あ、ああ。でも、俺屋敷にとりに行くものあるんだ。先に行つてくれないか、愛紗」

俺がそう言うと、愛紗は俺を見た後、ちらりと桃香を見て、少し目を伏せた後

「分かりました。急いでくださいね」

きりつとした口調でそう言ってきびすを返し、城へと向かっていった。

その愛紗の後姿を見ると、急に桃香が

「お兄さん、私、ちょっと愛紗ちゃんとお話してくるね？」

「おう。・・・悪いけど、ちょっと説明しておいてくれるか？」

「ふふ、りょーかい。あ、そうだ。お兄さん、用事があるのに誘っちゃってごめんねっ」

両手を合わせ、謝意を表す桃香に、大丈夫、気にしてないよ、と返すと、桃香はもう一度ごめんね、と謝ってから城へと走っていった。少しして愛紗に追いついた桃香が呼び止めるのを見てから、俺も蜀の屋敷へと向かう。

「・・・今日の訓練、ちょっと厳しくなりそうだなあ・・・」

全力で振るわれる愛紗の青龍偃月刀を必死にさばっている俺の姿が容易に想像できた。

・・・うん、良い稽古になると思おう。

・・・

その後、覚悟して訓練場まで顔を出すと、すでに兵士たちは訓練を始めていた。

愛紗はというと・・・。

「・・・あ、あの、ギル、殿」

・・・あれ？

あまり怒っていないように見える。

「どうかしたのか？愛紗」

「い、いえ。・・・先ほどは、すこし早とちりをしてしまったよう  
で・・・」

ああ、なるほど。さっき追いかけていた桃香に事情を説明されたん  
だろう。

誤解が解けたんなら良いや。元々そんなに気にしていたわけじゃな  
いし。

「はは、誤解が解けたんなら何よりだよ、愛紗。・・・よし、これ  
でこの話は終わりだな。」

「そう言っていただけと助かります。」

そう言つて微笑むと、愛紗はすう、はあ、と深呼吸を一度してから、  
先ほどまでの目じりが下がったような弱気な顔ではなく、いつもの  
凛々しい表情を浮かべる。

「では、久しぶりに手合わせをお願いします」

「・・・ああ、お手柔らかにな」

「それはこちらの台詞・・・ですっ!!」

言い切ると同時に青龍偃月刀を低く構えこちらに突っ込んでくる愛  
紗。

地面すれすれを低空飛行する龍のように迫る切っ先は、大戦が終わ  
る前の俺なら視認すら難しかっただろう。

だが、今は違う。

青龍偃月刀の軌道の予測すら出来るようになった俺は、半歩だけ引  
いて、エアを横薙ぎに振るう。

ちょうど下から切り上げるように迫っていた偃月刀にぶつかり、甲高い音と共に偃月刀は横に弾かれ、一瞬の隙が出来る。

「なっ・・・!?!」

弾かれたことが予想外だったのか、愛紗は目を大きく開いて驚きをあらわにする。

だが、そんな動揺も一瞬で無くなり、横に弾かれた勢いを使って独楽のように一回転。

勢いをつけた高速の一撃を、エアを振った後のがら空きの右半身に叩きつけるように振るう。

「食らうかつ!」

速度が最高速になる前に、自分から青龍偃月刀にぶつかりに行く。鎧の肩の部分にあたるようにして、衝撃を弱める。

ぶつかり合った鎧と偃月刀が火花を散らし、俺と愛紗が同時に顔をしかめる。

俺は言わずもがな、鎧に偃月刀が当たった衝撃で。流石にすべての衝撃をなくすことは出来なかった。

愛紗は、たたきつけた偃月刀からの反動が思いのほか強かったのだろ。俺も槍なんかの長物に慣れないときは良くそれに苦しめられた。

「は、あっ!」

「お、りゃあっ!」

再び振るわれた武器が、火花を散らす。

どちらも、相手に当てることを考えたものではない一撃だ。

牽制程度にぶつけた一撃の後、お互いに距離を取る為、後方に跳んだ。

ざり、という土を踏みしめる音がやけに大きく聞こえた。

「……流石です、ギル殿。あの戦乱を戦い抜いただけはありますね」

「いやいや、それはこっちの台詞だよ、愛紗。大戦のときはその力を振るっていたと思うと、改めて敵じゃなくて良かったっておもっぜ」

「ありがとうございます。」

「どういたしまして」

腰に手をつけ、ふう、と一息。

右手にはエアを持ち、警戒も緩めてはいないが、今の攻防で結構精神をすり減らした。

一息つかないとやってられない。

「やはり、あなたのような方には、私のような無骨者よりも」

愛紗は小さな声で何か呟いたが、離れていて何も聞こえなかった。再び暗い顔をした愛紗が心配になってきた。悩みでもあるのだろうか。

「……どうかしたのか、愛紗？何か、悩み事でもありそうな顔だね」

「い、いえっ。何もありません！」

慌てて顔を上げた愛紗がそう答えるが、何も無いようには見えない。  
・・・今は、無理に聞かない方が良いかな。

「そう?」

「ええ。お気遣い、ありがとうございます」

「どういたしまして。でも、何かあったら言ってくれよ?愛紗がそんな様子だと、俺も元氣なくしちゃうぜ」

だから、いつでも相談してくれよ、と笑顔で伝える。

笑顔は人との潤滑油。暗い顔で元氣を出せといっても説得力は無いのです。

「・・・ええ、分かりました」

愛紗も笑顔を返してくれる。

うん、やはり

「笑顔のほづが、愛紗は綺麗だよ」

「っ!？」

「はは、照れてる愛紗は可愛いなあ。・・・ほら、続きと行くこうじやないか、愛紗」

「ギル殿はズるいです・・・」

「ほめ言葉にしか聞こえないよ」

「・・・ふふつ。行きますよ?」

「おう! ドンと来い!」

「はいっ!」

偃月刀を握りなおした愛紗が、一瞬のタメの後弾丸のように飛び出す。

愛紗の攻撃は激しくなったが・・・少し、すつきりした表情をしているのを見て、まあいいか、と思ってしまうた。

・・・

結局決着はつかず、兵士たちの休憩に合わせて俺たちも手合わせを終了させた。

木陰の近くにあるベンチに腰掛けると、疲れがどっと押し寄せるようだった。

あー、もう一週間くらい動かなくていいんじゃないかなあ、とか思うくらいには疲れた。

「お疲れ様です、ギル殿」

「愛紗もお疲れ様・・・ってほどには疲れてなさそうだな」

「ええ、いつもは鈴々や恋、星と共に手合わせをしているので。まだまだいけますよ」

もう一戦しますか?と視線だけで聞いてくる愛紗に首を振って断りを入れる。



少し残念そうにそうですか、とつぶやいた愛紗は、俺の隣に腰掛ける。

「ですが、ギル殿もあまり疲れているようには見えませんか？」

「んー、意識的に力を制限してるからかな。その精神的な疲れなのかも知れない」

流石に英霊の力を全力で振るうわけにも行かず、意識して魔力の循環を抑えることによって、ステータスのランクをいくつか落としている。

いやはや、そのやり方を身に着けるまでが大変だった。

まあ、そのおかげで力押しではなく、きちんとした技術を身に付けていくことが出来ているのだが。

ステータスはたぶん全体的に2つ1つくらい落ちてるんじゃないだろうか。

それ以上下げると、愛紗や恋に力で押し負けるため、そこがギリギリの妥協ラインだ。

というか、ステータスのランクCとかDに生身で追いつくとかこっちからしたら驚き以外の何物でもないんだけど。

「・・・制限してアレですか」

「まあ、人間とは一線を画してるのが英霊たちだからなあ」

「実際に戦うと、その言葉が身にしみますね。そのおかげで良い訓練になるのですが。」

愛紗と話していると、休憩が終わった。

「さて、次は兵士の訓練だな」

先ほどまで走ったり組み手をしていた新兵を、俺と愛紗で集め、別々に手合わせしていく。

数合も持たずに吹き飛ばされるのがほとんどだが、慣れてくると持ちこたえるようになってくる。

それから、だんだんと手加減を弱めていけば、そのうち戦える兵になっていく。

「よいしょつと。はい次っ！」

こうして、午前中は兵士を吹き飛ばして過ごした。

・・・

昼の休憩に入ったので、厨房へと向かう。

「あ、にーさま！」

エプロンをつけ、鍋や包丁を用意している流々に出会った。食材から見るに・・・チャーハンだな。

「流々か。今から調理か？」

「はいつ。あ、にーさま、お昼は食べましたか？」

「いや、ただだけど」

「良かった。なら、今からおつくりしますね！」

「本当か？助かるよ。」

「えへへっ、それじゃあ、座って待っててください」

「了解。あ、なんか手伝うことあったら遠慮なく言ってくれよ」

「はい」

嬉しそうにそういうと、鼻歌でも歌いそうなくらいに上機嫌で調理を始める流々。

「ん〜ふふーん」

訂正、鼻歌を歌うぐらい上機嫌に料理し始めた。

手際は華琳が認めるほどのものなのでもちろん早いし丁寧だ。

俺はそんな流々の後ろ姿を見ながら、妹がいればこんな感じなのかなあと微笑ましく思っていた。

「よしっ、良い出来」

味見をした流々が、頷きながらそう言った。

料理が出来たらしい。さらにチャーハンを移すと、卓へと運んでくる。

「はいっ、どうぞ、にーさま」

「ありがとう。いただくよ」

「どうぞっ」

レンゲですくって口へと運ぶ。  
・・・うん、やっぱりおいしい。

「ど、どうですか・・・？」

「おいしいよ。流々も食べたらどうだ？」

さっきから拳を握って俺がチャーハンを食べる一挙一動を見ている流々にそう促すと、そうしますっ！と元気に返事をしてくれた。

二人で他愛も無いことを話しながら食事していると、チャーハンはすぐになくなってしまった。

「ごちそうさま。」

「お粗末さまです。お茶、飲みますか？」

皿を片付けた流々が、茶葉を手に持ちながら聞いてくる。

欲しいな、と答えると、ちょっと待っててくださいね、と準備に取り掛かる。

「はい、お茶です」

ことり、と湯飲みが置かれる。

お礼を言ってから一口飲む。・・・当然のことながら美味しい。

「あ、そういえば、華琳様がにーさまのこと探してましたよ」

「え？華琳が？」

「はい。急ぎの用事ではないとおっしゃっていましたが・・・」

「そっか。なら、落ち着いたら行ってみるかな」

「まず、とお茶を飲みながらなんで呼ばれたのか、と考える。  
んー、別に華琳の機嫌を損ねるようなことしてないし……。  
それとも、前の会議の時に話していた経済支援のことだろうか。」

「むむー」

「どうかしたんですか、にーさま」

「いやあ、なんか華琳に呼ばれるようなことしたかなあと」

「……確かに、そうですねえ」

「というか、華琳が直接呼ぶなんて相当なことなんじゃなからうか。」

「まさか、第八のサーヴァント呼び出したとか？」

「……本当にそうだったらすぐに呼ばれるよな。  
全く予想がつかないぞ……」

「ふう……。ま、行けばわかるか」

「流々の入れてくれたお茶を飲み干し、再びお礼を言ってから厨房を  
後にする。」

……

「道行く兵士に華琳の居場所を尋ねると、玉座の間にいると聞いた。  
玉座の間ということは、何か政務での話だろうか。」

「華琳ー？いるかー」

「いるわよ。」

珍しく一人のようだ。

春蘭とか秋蘭とか荀？とか凜とか側近がないのは珍しい。

「何か用だつて？」

「ええ、あなた、これから時間はある？」

「有り余ってる」

「そう。なら、ちょっと来なさい」

そう言つて先に歩いていつてしまう華琳。

・・・何の用かはいまだに分からないが、とりあえず着いていかな  
いど。

「・・・この辺でいいかしら」

あまり人の来ない中庭へやってきた。

セイバーと一緒に宝具を使って戦う時なんかにはここは良く使うので、  
ここにあまり近づかないのは暗黙の了解みたいになっている。

「で、何のようなんだ？そろそろ教えてくれよ」

「ええ、もちろん。用というのは簡単よ。あなたの宝具を見せて欲  
しいの」

「・・・はあ」

今のは呆れた、というはあでは無く、そうですか、というニュアンスのはあ、だ。

「以前見た時は唐突だったし、混乱もしていた。落ち着いてきた今、あなたの力を少し見ておきたいのよ」

あなた、三国の中で一番ありえない存在だから、と締めくくった華琳。

それは俺も思う。英雄王の能力というのは本当にありえないくらいに反則だ。

・・・まあ、本気で全力を出した場合は、という前提があるが。

「ええっと、あなたの宝具は宝物庫と乖離剣の二つでいいのよね？」

「ああ。その二つが俺の宝具だと思って良い」

厳密には王の財宝と天地乖離ゲートオブバビロン エヌマ・エリシュす開闢の星だが、わざわざ今言うことでもないだろう。

それに、横文字は華琳たちには難しいみたいだし。

「宝物庫の能力は、大量の剣を発射すること、でいいのかしら？」

「んー、それはちょっと違うかな。宝具の原典がすべて入っていて、それを発射したり使用したりすることが出来るってところだな。」

「宝具の原典？」

「そう。英霊を英霊たらしめるものが宝具。で、その宝具の原典に

なつたものがこの宝物庫には入ってる」

だから、剣だけじゃなくて槍も斧も鎌も縄も鎖も発射するぜ、と補足する。

何よそれ、反則じゃないの。と呆れる華琳に同意する。

「すべての英霊の宝具の原典がこの中には入ってる。だから、もちろんすべての英霊の弱点となる宝具も入ってる。」

「・・・なるほど？ならば、あらゆる英霊に対して常に弱点をつける、というわけね」

「そうだ。そもそもギルガメッシュという英霊は『戦争そのもの』とまで呼ばれる力を持っている。ほら、兵や将や軍には勝てるだらうけど、戦争という概念には勝てないだろ？」

まあ、原作の英雄王さんは油断と慢心のおかげで勝つ可能性が存在してるんだけど。

俺？俺は言わずもがな、精神的に付け込む隙もあるしまだまだ鍛錬不足だ。『戦争そのもの』には遠い。

「ならば、乖離剣のほうは？私は見ることが無いけれど、刀身の回転で旋風を巻き起こしたと聞いたけど」

「えーっと、乖離剣の説明は難しいな。・・・この世界がまだ、あらゆる生命の存在を許さなかった頃の生命の記憶の原初。その光景を再現する宝具、って言うって通じる？」

「・・・ちよつと待ちなさい。」



少し俯いた華琳は、頭に指を当てて考え込むそぶりを見せた。

「あらゆる生命を許さなかった頃、というのは？」

「えーと、その説明は長くなるんだけど」

「構わないわ。今日は珍しく仕事が無いの」

「・・・なら、華琳はこの大陸が巨大な球体・・・地球、というものに張り付いてるって言ったら信じる？」

「はあ？・・・そんなの、裏側の人間が落ちるじゃない」

「ええつと、球体の中心が下なんだよ。重力っていうのがあってだな・・・」

それからしばらく、重力や引力についての話になる。

数十分をその説明に費やしたからか、華琳はきちんと理解してくれたようだ。

「・・・ふむ、地球の概念については大体理解したわ。で、それが何か関係するの？」

「地球って言うのは、最初、人間どころかどんな動物も植物も無かった。ただ、地獄が広がっていた」

「ああ、だから『あらゆる生命を許さない』のね」

「そ。だから乖離剣は別名『地獄を識るもの』とも呼ばれる」

「・・・はあ、反則反則と言ってきたけど、ここまでとはね」

「そういわれると言い返せないな」

なんともまあ、ありえない能力を貰ったよなあ。

使いこなすのも大変だったが、隠しておくのはもつと大変だった。

「あ、宝物庫がどうなってるのか、実際に見せてちょうだい」

「構わないけど・・・どうすればいい？」

「あそこにちょうど良い人形があるわね。アレを目掛けてみて」

あの人形は・・・ちよくちよく宝具の標的となっている人形か。  
基本この場所に置きっぱなしだもんなあ。

「分かった。ゲイトオブパビロン 王の財宝」

少しだけ扉を開き、十数本の宝具が人形を串刺しにする。

「これでいいか？」

「ええ、十分よ。そういえば、鎖も出せるのよね？」

「一応。エルキドゥ 天の鎖！」

串刺しになった人形に、四方八方から拘束するように鎖が巻き付く。  
宝物庫の扉はある程度離れた場所にも出現させることもできるので、  
そのまま鎖を戻すことによって相手を引きちぎることも可能だ。

・・・まあ、英霊相手だと引きちぎる前に拘束から抜けられちゃう

んで、対人間用だ。未だ引きちぎったことは無いけど。

「ふうん、それ、べんりねえ」

背筋が冷えるような笑みを浮かべた華琳が、嬉しそうにつぶやく。

「ねえ、あなたに頼みたいことがあるんだけど」

「ん？構わないぞ。なんだ？」

この頼みの内容を聞かずに頷いてしまったことは、ここ最近でもっとも後悔したことである。

・・・

「ぎる、ちよっときて」

ある昼下がりに。恋が現れ、俺をちよいちよいと呼ぶ。  
手には軍神五兵コトフオース。まさか、手合わせのお誘いだろっか。

「どうしたんだ、恋」

「ぎる、恋と・・・本気で、戦って欲しい」

「・・・えーっど？」

「恋も、今ある全部の力使う。ギルも、ほーもつこと、乖離剣使う」

「それ、本気で言ってるのか？」

「ん」

こくり、と首肯する恋。

いったい何がどうしてそんな結論に至ったのか……。

「……恋、天下一品武闘会出れなかった」

「え？なんでだろ。恋はかなり強いのに。」

怪我するから出ちゃだめ、みたいな理由での出場拒否じゃないと思うんだが……。

ちなみに、麗羽が出ようとしていたのだが、怪我するとうるさいしたぶん初戦で負けるのが目に見えてるため、と出場拒否されていた。

「わかんないけど、みんなにお願いだから出ないでって言われた。」

「……あ、そういうことか」

少し考えて答えにいたる。

恋が強すぎて仕合にならないからだ。

軍神五兵ゴッドフォースを使っている時はもちろん、方天画戟を使っている時でさえサーヴァントを圧倒する飛將軍呂布だ。

そりゃあストレートに勝ち抜くに決まってる。

「だから、出れない分をぎると戦って何とかする」

「なんとかかって……愛紗とか鈴々とかと手合わせすればいいじゃないか」

愛紗たちも武闘会前の良い訓練になるだろうし、恋もストレス(?)

を解消することもできるだろうし……。

「んーん。思いきり、身体動かしたい。ぎるじゃないと、恋は受け止められない」

どれだけ本気で動く気なんだろう、この娘。

場合によっては城を半壊させるくらいまで覚悟しないといけないぞ、これは……。

「……いい？」

いつもならやんわりと断っているところだが、先日の華琳の頼みの内容を聞いてもうどうにでもなれー、となっていた俺は頷いてしまった。

俺もいろいろと溜まっていたんだろうか。今思い出しても恋との手合わせを承諾したのが信じられなかった。

「じゃあ、やる」

手に持った軍神五兵ゴッドフォースを構える恋。

形態は矛盾。ならば、スキルの絶武無双絶対無双が発動していると思っていだろう。

防御に圧倒的に有利な補正を受けるスキルで、相手の防御行動に一定の妨害効果がある。

距離を取って戦うのが一番だが、それだと必中無弓必中無弓で打ち抜かれる。下手すると打ち抜かれ、隙を無理やり作らされることになる。

一瞬とはいえ、スタン状態は絶体絶命のピンチだ。

しかも、赤兎無尽せきとせいでしなすのおかげでダメージの自然回復までこなす万能武器となっている。

さらに恋自身の戦闘のセンスも合わせて考えると、勝率が見えない。

たぶん王の財宝の宝具の雨すら何とかするんじゃないかなるか。

「……こないの？」

「どつやって戦おうか考えてるんだよ」

とりあえず鎧は着て、エアを手に持っているものの、どつ戦おうかという点については全く思いつかない。

「こないなら、恋から行く。」

そう言つて恋は肩に乗せていた軍神五兵を両手で構え、こちらに走りこみながら振り下ろす。

こうやって説明しているだけだとゆつくりに見えるが、恋がいく、と言い終わつてからこちらに軍神五兵を振り下ろすまで、二秒も掛かっていない。

「ちよつ！」

慌ててエアを当て、軍神五兵を弾く。

危ない。とっさに防御行動を取りそうになつたが、恋の攻撃に合わせるように攻撃して何とか相殺した。

・・・ステータスをセーブしてる場合じゃないな。

俺は急いで魔力を身体に循環させ、ステータスを元に戻す。

「ん、ぎるも、本気出した。」

・・・最初の一撃を防げたのは奇跡みたいなものだ。  
これは、全力で行かねば負ける。

「回れ、エア。恋も本気みたいだし、こっちも出し惜しみなしだ。」

エアを回し、背後には宝物庫への扉を開けておく。

「恋は、こっついう風に戦って欲しいんだろ？」

「そう。」

ゆけ、と宝具たちに命ずる。

その瞬間、発射待機状態だった宝具たちが恋目掛けて飛んでいく。

「っ」

短く息を吐いた恋は、踊るようにステップを踏んで宝具の密度が少ないところへと移動する。

そこでしばらく宝具を弾いた後、また密度が少ないところへと何度か繰り返す。

いくつか恋の身体を掠る宝具もあったが、赤兎無尽せきと、いまだたじなまずによって軽症ならほとんどタイムラグ無しで修復する恋にはほとんど無視しているものとなっている。

改めて思うが……呂布に軍神五兵ゴッドフォースは鬼に金棒と同じかそれ以上の相性だ。

「は、はは……」

だが、滾る。

目の前の宝具の雨を凌ぐ英雄を見て、エアを握る手に力が入る。

「……止まれ」

降り注いでいた宝具の雨がぴたりと止まり、地面に突き刺さっていたものも、今にも発射されそうになっていたものもすべて宝物庫の中へ引っ込む。

「どうしたの？ 疲れた？」

恋は軍神五兵を肩に担ぐいつもの格好で、息も切らさずに聞いてくる。

そんな恋に、違つよ、と答え

「発射しても意味無いから、止めたんだ」

回転するエアの刀身は、風を巻き起こし、木々を揺らす。

この状態のエアは、全力ではないにしろ天地乖離す開闢の星を放てるようになる。

その風で宝具が散ってしまうため、俺は宝物庫を閉めたのだ。

「行くぞ、恋。俺も今、すごく恋と戦いたくなった」

・・・

「あ、その洗濯物はそっちに干しておいて、詠ちゃん」

「了解。・・・にしても、洗濯するには良い天気よね」

「そうだね。すぐに・・・きやつ！？」

「な、なによこれ！？」

洗濯物を干していた月と詠の二人は、突然の地震に慌てる。



すぐに収まったが、間隔を置いて何度か地面が揺れる。

「魔力反応・・・まさか、ギルさん!？」

「じゃあ、まさか・・・ギルが全力出すような相手が出たってこと!？」

アーチャーが全力を出せば、世界が揺れることはすでに知られていた。

ならば、今こうして地面が揺れているのも、アーチャーが全力を出しているからだろう。

そう判断した二人は、洗濯物を干すのも放り出し、魔力の反応があるところへと走った。

「全くもう、平和になったと思ってたのに!」

「ギルさん・・・!」

アーチャーの元へと向かう途中、響と孔雀が合流する。

「月ちゃん、これってやっぱり・・・?」

「たぶん、そうだと思います・・・!」

「・・・そっか、ハサン、先に行つてて!もし何かあるようだったら、ハサンが判断して」

響が虚空に話しかけるようにアサシンに話しかける。

気配遮断でないように感じるだけで、アサシンは常に響の周りを警戒しているのだ。

「キヤスター、何か異常は感知できた？」

「いいや、何も。セイバーと本気の手合わせでもしてるのかと思っただけど、この魔力はセイバーじゃないね」

「バーサーカーとかランサーとかは？」

「どれとも違う。既存の七つのサーヴァントのどの魔力にも当てはまらない」

「え……？じゃあ、八体目のサーヴァント!？」

孔雀が珍しく驚きをあらわにする。

キヤスターはなにやらうんうん唸りながら、何が起きているのかを把握しようとしているらしい。

途中で、後ろからセイバー組が追いついた。

「……やはり、ギルが」

セイバーは諦めたようにつぶやく。

やはり、の部分にはいっそう呆れのようなものが籠っていた。

「あ、あははー。ギルさんって罪な男だよなー」

「そうね。天変地異が起こったらまずあいつが真っ先に浮かぶものね……」

はあ、とため息をつきながらも、走る足は緩めない詠。

「いたっ！あそこ！」

「あれ、ハサン……？何で突っ立って……え？」

「ギル、誰と戦って……おや？」

「ん？おー、みんなそろって。どうした？」

「みんな、見に来た？」

全員がぼかんとした顔になる。

そこには、アーチャーと恋が武器を持ってたっていたからだ。

「え、えーと、ギル？何をやってるのかな……？」

孔雀が少し引き気味に質問する。

地面はところどころ抉れ、木の葉は散り、壁には穴があいていた。

「何って……手合わせだけ。なあ、恋」

「うん。全力の手合わせ。」

「ば、ば、ば……」

「ば？」

「ば？」

詠の言葉に首をかしげる二人。  
次の瞬間。

「馬鹿ああああああー！！」

詠の絶叫が、中庭にこだました。

・・・

「あなたね、自分が何振り回してたか分かってんの！？」

「・・・はい」

「恋、あんたも！こんな状況で宝具振り回したら騒ぎになるって分かるでしょ！？」

「・・・ごめんなさい」

先ほどまで暴風吹き荒れ火花散る戦場だった中庭で、ギルさんと恋ちゃんの二人は正座させられていました。

その目の前では、詠ちゃんが仁王立ちでお説教中です。

「大体、何でこんなことになったのよ」

「それは」

かくかくしかじか、とギルさんが詠ちゃんに説明を始めました。

・・・恋ちゃん、武闘会から外されて寂しかったみたいですね。

「・・・そう。確かに、今の恋じゃギルくらいしか相手できないわね」

「ぎる、悪くない。恋が無理やり誘った。」

「いやいや、途中で自重を忘れた俺のほうが悪い。」

「はいはい、分かったわよ。全く」

むすつとした顔で詠ちゃんは二人の言葉をさえぎりました。

「……とりあえず、この中庭何とかすること。いくわよ、月」

もう、走ってきたのが馬鹿みたい、とつぶやいてきびすを返す詠ちゃん。

慌てて後ろを追いかけます。

「あちゃー、改めてみるとやりすぎたなあ」

「……頑張つて直す」

「そだな、頑張るか」

……あの二人を二人つきりにするっていうのに若干の抵抗はあるけど、今は詠ちゃんの機嫌を何とかするのが先です。

暴れちゃったギルさんも悪いけど、詠ちゃんも詠ちゃん心配したんだから、って素直に言えばいいのに。詠ちゃんはやっぱりシン子だなあ。

「まあ、そこが可愛いんだけど」

「月、何か言った？」

「んーん、なんでもないよ、詠ちゃん」

振り向いて質問してきた詠ちゃんに首を振りつつ答えます。

「ぎる、恋の所為で仕事増やしてごめん」

「気にしてないよ。だからそんな風に暗い顔するなよ」

ちらり、と後ろを見ると、恋ちゃんの頭を撫でているギルさんが見えました。

恋ちゃんも嬉しそうにして・・・とっても仲睦まじいですね。

・・・何故かは知りませんが、ちよつと戻って二人の作業のじやま・・・げふんげふん、お手伝いしてあげたくなっちゃったな！。

「ふ、ふふふ、ふ」

「ゆ、月？ちよつと、目が怖いわよ？」

詠ちゃんに声を掛けられて顔を戻すと、詠ちゃんが変にこわばった顔をしていました。

「え？どうかしたの、詠ちゃん」

「・・・うつん、なんでもないわ」

変な詠ちゃん。

・・・

## 第六話 将との出会いと戦いに（後書き）

おそらく魏からは流々がハーレム入りするかと思えます。  
華琳は・・・どうしましょうか。悩んでおります。

あえてステータスを下げていた云々の話は完全に捏造設定です。原作でサーヴァントたちが実際にできるのかはわかりません。 原

誤字脱字のご報告、ご感想お待ちしております。

## 第七話 勘違いの後に（前書き）

今回は長いと思います。そして、なんだかラブコメっぽい内容とな  
っておりますので、ご了承下さい。

それでは、どうぞ



## 第七話 勘違いの後に

「水泳大会？」

本日は晴天なり。気温はかなり高く、政務室にいる雪連やシャオが暑い暑いと騒ぎ、連華が暑いわねとため息をついていた。

あ、ちょうどいい、と思った俺は、説得しやすそうな雪連に水浴びでもしたらどうだと持ちかけた。

「・・・ふうん、水着、ねえ」

宝物庫から取り出した水着の中から一つ選びいろいろ弄っている雪連。

水を掛けたり引つ張ったりして水浴びに使えるのかどうかを確認しているようだ。

「いいじゃない、これ。幸い今日は急ぎの仕事もないし、暇そうな子を何人が誘って行きましようか」

「よしてきた。準備はこっちしておくから、雪連は人集め頼んだ」

「あら、張り切ってるじゃない」

「当然だろ。龍を倒しに行つてまで作った水着だぜ。着てるところを見ないと倒した甲斐がないからな」

「そう？じゃあ、目の保養になりそうなのを何人が連れて行くところしら。・・・あ、シャオは確定ね」

「ん、まあそりゃあそうだろうな」

誘わなかったら後が怖いし、シャオがどんな水着を選ぶのかも気になる。

「意外ね。嫌がるかと思ったけど」

嫌がる？・・・ああ、いつもシャオに迫られ絡まれてるからか。

「別にシャオのことは嫌いじゃないしな。ああやって好かれるのは嬉しいし。・・・ちょっと押しが強すぎるからこっちも引いちゃうっていうのはあるけど」

「でも、お淑やかなシャオとか想像できないでしょ？」

「・・・なるほど、確かに。あれもシャオの良い所なんだなあ」

俺がそう答えると、雪連はにぱっ、と笑って

「そうよ、あの子は少し感情を素直に出しすぎるだけなんだからだから、きちんと受け止めるのよ、と雪連はどこか嬉しそうに言った。

「了解。分かったよ。それにしても・・・やっぱり雪連もお姉さんなんだな。」

「ん？」

「いや、シャオのことキチンと分かっているみたいだし、妹の誤解解

く思いやりもあるし」

「な、なーに、急に褒めて。何もでないわよ？」

いつものようにおちやらけつつ、恥ずかしそうに苦笑いを返す雪連。そんないつもとは違う雪連を見て嬉しいみたいだ。雪連を見て、俺の顔には微笑が浮かんでいる。

「俺もシャオを見習って素直になってるんだよ。雪連も、素直に受け取っておけ」

「・・・ふふ、分かったわ。ありがとね、ギル」

「いえいえ。さて、じゃあそろそろ行くか」

「ええ。みんなも誘わなきゃだし・・・あ」

「大丈夫。お酒も用意してある」

何かを思い出したとばかりに手を叩く雪連が何か言う前に答える。俺の言葉を聞いた雪連は一瞬きよとんとしたがすぐに笑みを浮かべ

「あら、分かってるじゃない。それじゃ、楽しみにしてるわよ？」

「おう、期待してくれ」

そう言って、雪連の部屋の前で俺たちは別れた。

さーて、一刀呼んで、兵士かき集めて・・・。ちよつと急ぐかな。

・・・

少し上流に行った川へとやってきた。  
瀧があったりといつてもより起伏に富んだ地形となっている。

「ギールっ、お待たせー！」

「おおっと。シャオか。どうだ、水着は」

「えへへ、ぴったりだよ。どう？悩殺されそう？」

背中に抱きついてきたシャオが俺の目の前まで移動してくる。  
おお、紐じゃないですか。この子、三姉妹の中でも一番セクシー路  
線を突っ走ってるんじゃないかなろうか。ロリいのに。

「すごいな、シャオ。ここまでこの水着を着こなせるなんて」  
できればスク水着て欲しかったけど。・・・っと、危ない危ない。  
口が滑った。

「んふふっ。こーんな風に、くっついてみちゃったりー・・・」

「こ、こら！シャオ！？ギルにそんな破廉恥なこと・・・！」

俺に背中を預けたまま艶かしい動きをするシャオに、とつとつ連華  
が怒った。

だがシャオはそんなもの聞こえていないかの様に振舞う。

「どつどつ？シャオのこと、お嫁さんにしたくなっちゃった？」

改めて考えると、こつやって堂々と気持ちと言えるってというのはす

「いいよなあ。」

「じゃ、シャオ！もう、離れなさいって！」

「えー？お姉ちゃんもくつついちゃえばいいのに。ギルの背中、あいてるよ？」

「うっ……せ、背中……直接肌に……触れ……っ！」

シャオの言葉を聞いてからぶつぶつ言い始めた連華だが、すぐに川へと顔を突っ込んだ。  
少しすると顔を上げてこちらを見据え……

「え、えいつ」

俺の背中に、少しだけくつついてきた。

「うおっ、連華冷たいなあ。びっくりした。」

まあ、さっきまで川に入ってたしなあ。そりゃ冷えるか。

「ふ、ふふふふ。ここのくらしい、どどどっつってことないわね」

「お姉ちゃん、声、すっごいどもってるけど……」

「気のせいよっ」

「ふうん？」

「なによ？」

「……どうでもいいんだけど、俺の身体を挟んでにらみ合うのやめてもらっていいですかね……？」  
「……というか、連華といえば尻に目が行きがちだけど、胸もなかなか……」

「だめだ。意識するといらんとところに血液がいつてしまう。何か別のことを考えないと。」

「亞莎ちゃん、それ〜！」

「きゃっ！？の、穩さまっ！やりましたね〜」

「えへへ〜、先手必勝なのですよお？」

「きゃっきゃと戯れる亞莎と穩に目を向ける。

「亞莎はスク水着用だ。あの野暮ったい感じと亞莎の鋭い目がちょうど良くマッチしていると思う。」

「穩は……あ、駄目だ。また血液が……。あの胸、桃香と良い勝負……いや、穩の方が攻撃力は上か！？」

「とにかく、あの二人は駄目だ。他には……」

「んー、このお酒、おいしいわねえ」

「何でも、ワインと言っらしいが……」

「ぶはあ〜！何杯でもいけるわね！」

「パラソル（のようなもの）の下で酒を飲みつつ涼む雪連と同じく酒を飲みつつ本を読んでいる冥琳が視界に入った。」

「雪連は赤、冥琳は黒の……って、あつちも駄目じゃないか。何で

呉には巨乳が多いんだ。全く、けしからん。  
最後の瞥、滝行をしている思春と明命に目を向ける。

「……ほわぁ」

「どこを見ている、明命。今は集中しろ」

「は、はいっ！」

「……穩の胸が」

「思春さまも気になりますか!？」

「いやでも目に入る。……ちっ」

「おつきいですよね……もげればいいのに」

「?何か言ったか？」

「いいえ、なんでもありません」

「……なんであんな競泳の水着みたいなものまであるんだろう。  
一刀、お前……ストライクゾーン広いなあ……。  
それとも、先見の明があるというべきか……。」

「……ふう」

しかし、あの二人を見ていると自然と落ち着いた。これならば、冷静に対処できるだろう。

そう思っていた矢先……。

「ギル、この水着、というものはなかなかよいな」

祭が黒いビキニとパレオを装備して近くに立っていた。

「・・・しまった、忘れてたぞ、この穩と双壁を成す巨大な敵の存在を・・・！」

「どうしたのじゃ、ギル。急に固まって」

そっちこそどうしたんですか。胸、こぼれそうになってますよ？

「・・・しまった、思考回路にバグが。あまりの衝撃に碌な事考えられん。」

「い、いや、どうもしてないよ？祭が綺麗過ぎたから、驚いてただ」

「そう褒めるな。年甲斐も無く嬉しくなってしまうじやろう」

かっかっか、と笑う祭は髪をかき上げながら雪連のほうへと歩いていった。

「・・・何とか、凌いだか。」

さて、そろそろこっちの二人の相手をしないと、と思いつながら口を開く。

「よし、シャオ、連華、せっかく水遊びしに来たんだ。遊ぼうぜ」

「ほんと！？じゃあ、シャオはギルとおいかけっこしたい！」

「そ、それより、ギル。私と向こうで涼まないか・・・？」



「えー！？ギルはシャオと追いかけてくるの！お姉ちゃんは一人で涼んでれば！？」

「な、まだそう決まったわけではないでしょう！？シャオこそ、一人で走つてきなさいよ！」

「まあまあ、とりあえず川にいる魚でも探しながら涼むとしよう」

もちろん、三人一緒に、と付け加えるのを忘れない。

姉妹は仲良くしないと。

連華とシャオの相手をしているうちに穏や雪連に絡まれたりもしたが、とてつもなく充実した時間だったといえるだろう。

・・・あと、雪連酒飲みすぎ。

・・・

呉の水泳大会の翌日。

さて政務でもするかと思っていたとき

「ギルおにーちゃん！」

扉の向こうから璃々の声が聞こえた。

「璃々か。どうしたー？」

扉を開けると、小さいメイド服を着てお盆を持っている璃々がたっていた。

お盆の上には湯飲みと急須。湯気がたっていないことから、すでに冷めていることが伺える。

・・・さて、脳をフル回転させようか。

まず、何でメイド服？何でお茶？というか、何で璃々？  
駄目だ。情報が少なすぎて何も推理できない。

「り、璃々、どうしたんだ？」

「あのね、月おねーちゃんに、めいどふく着たいって言ったら、璃々の分もよういしてくれたの！」

「うんうん」

「それで、月おねーちゃんのお手伝いしたいって言ったら、お茶を届けて、って言われたの！」

・・・なるほど、それでお茶が冷めてるわけか。

万が一こぼしてもしたら危ないからな。さすが月。気遣いをさせたら右に出るものはいないな。

「そっかそっか。ありがとな、璃々」

「へへー。ギルおにーちゃん、座ってっ。璃々がお茶入れてあげるー！」

「ああ。お願いするよ。」

俺は椅子に座り、璃々がお茶をいれてくれるのを見守ることにした。璃々は近くにあった椅子を引っ張り、台にした。足りない身長分を補完してるんだろっ。

「ん、んー・・・」

とぼとぼ、ときこちなくもお茶を湯飲みに注ぐ姿は見ていて和む。

「よし、もう十分だよ、璃々。ありがとう」

あまり続けるのもつらいだろう。そう言って手で制すると、わかった、と急須を戻す璃々。

だが、璃々は姿勢を戻すと同時に後ろへと傾いてしまった。

「あぶなっ……!」

「ひゃ……っ!」

急いで手を伸ばして手を掴む。

……危ない。何とか間に合ったか。

「あ、うう〜」

しかし、間に合ったのは璃々だけだったようだ。

湯飲みと急須に入っていたお茶がすべて璃々に掛かってしまった。

「あー……ごめんな、璃々。そこまでは気が回らなかった」

「だ、大丈夫だよ、ギルお兄ちゃん。」

「しかし、ぬるいお茶で助かったな。いつもどおりの温度だったらと思うと……。」

「えへへ、そうだね……っくち!」

「あー、びしょ濡れだもんな。ほら、璃々。一回服脱ごうか」

・・・いや、いやらしい意味じゃなくてね？

応急処置的対応といえますか、濡れたまま帰すわけにも行かないじゃないですか。

って、俺は誰に言い訳を・・・。

「うんっ。・・・あ、ギルおにいちゃん、脱ぐの手伝ってー！」

「はいはい。えっと、月や詠のと同じなら・・・」

万歳をする璃々の正面に回って、ボタンをはずしていく。

あーあー、結構お茶掛かっているなあ。下着までいっちゃっているかも。

「ほら、脱がすぞー。ばんざーい」

「もーしてるよー」

「そうだったな。」

ああ、娘を持つ父の気持ちってこんなのだろうか。  
そんな風に和んでいると、扉が開いた。

「ねーお兄さん、政務のことなんだけど・・・へ？」

「はわわ、桃香さま、のつくをしませんと・・・はわ？」

「ん？二人とも、何を固まって・・・っ!？」

開いた扉の向こうには、桃香と朱里、そして愛紗の姿が。  
ぱっちり目が合った後、三人の視線は俺の手元に向かう。

俺の手元・・・そうだ、今璃々を脱がせて・・・って

「ち、違う！たぶん桃香たちが思ってることはすべて間違ってる！」

「お、お兄さん・・・私や愛紗ちゃんに手を出さないと思ったら・・・」

「は、はわわ・・・これは、私たちに勝機が・・・？」

「ギル・・・殿・・・？う、嘘ですよ・・・？」

愕然とする桃香と愛紗。そして何故か軍師の顔になっている朱里。

「どーしたの、ギルお兄ちゃん。璃々、下着までびちゃびちゃだから早く脱がせて？」

「下着まで・・・」

「・・・びちゃびちゃ!？」

「違うぞ!？今は決定的に言葉が足りなくて・・・」

「お、お・・・!」

「おっ..」

わなわなと震えながら桃香は後ずさる。おってなんだ。

「お兄さんの幼女趣味ー!」

そういうことかっ。

というか、なんて失礼な！

「お、お待ちください桃香さまー!?!」

「っ!」

泣きながら走り去る桃香に、それを慌てて追いかける朱里。そして、深刻そうな顔をして部屋を去る愛紗。

・・・不味い。何が不味いってすべてが不味い。

「?桃香さま、どうかしたのかなー」

「・・・うん、どうか、したんだよ」

もういいや。今から追いかけても無駄だろう。とりあえず、璃々を着替えさせないと。

下着はさすがないが、俺のTシャツでも着ていてもらうか。

「璃々、寒いだろうから寝台にいつてていいぞ」

「うん。」

ててて、と走る璃々。

だが、足元に広がるお茶に気づかず、そのままお茶を踏んで

「ふにゃっ!」

すっころんだ。

「・・・ああもう、璃々つてば可愛いなあ・・・」

おっと、和んでいる場合ではない。

下着姿で地面に転んでしまったのだ。相当痛いだろう。

急いで起こさないで。

そう思つて璃々の元へと駆け寄る。・・・が

「大丈夫か璃々・・・つてうおっ!?!」

しまった、俺もお茶を失念していた!?

目の前には・・・璃々!

「うおっと!」

璃々に倒れこむ直前、何とか地面に手を着くことができた。これで俺と地面のサンドイッチになることは防げただろう。ふう、と安堵の息を吐いた瞬間。

「あら、扉が開いてるわね。お邪魔するわ・・・よ・・・?」

「おーい、ギルー?前に言つた新作の服のはな・・・し・・・」

声が聞こえた。しかも、すごく聞きたくない種類の。

ぎぎぎ、と油の切れたような音を出しながら、横を向く。

そこには、何かいけないものを見た、という表情をした華琳と一刃が立っていた。

「ごめんなさい。扉が開いていても、のっくはするべきだったわね」

「・・・え、えーと、ごめんな、ギル。・・・その、や、優しくし

「てやれよ？」

「よし、分かった。一度落ち着こうか。説明するからこつちに・・・あ、逃げるな！」

二人に手を伸ばした瞬間、脱兎のごとく逃げ出された。なんということだ。これで蜀と魏の二つの国に俺が璃々を襲っているという噂が流れてしまう！

「くそ、呉に見つかる前に何とかするしか・・・！」

とりあえず起き上がり、璃々を抱き上げ、寝台の上に。

「璃々、とりあえず下着はそのまま我慢して、これに着替えてくれ。」

今、下手に下着を脱がせたらどんな勘違いが起こるかわからないからな。

「うん、分かったー」

「あ、転んだとき怪我しなかったか？」

「大丈夫だよ。ほら！」

「ん、ちょっと赤くなってるだけだな。さ、着替えてくれ」

キャミソール（のようなもの）もショーツ（のようなもの）も無事だ。



「はい。」

んしょ、んしょ、と璃々が着替えている間、こぼれたお茶をふき取る。

・・・さて、後は紫苑のところまで璃々を連れて行けばいいんだが・・・。

「ギルお兄ちゃん、この服だぼだぼだよー？」

「んー？・・・うわ、そこはかとなない犯罪臭が・・・」

下着＋Ｔシャツなんてマニアックな服装を、よりもよって璃々にさせるなんて・・・。

「仕方がない。ここに帯を巻いて、服っぽくしよう」

腰に布を巻き、とりあえずワンピースっぽくする。

これで少しはまともになった。ワンピースにしてはミニスカだけど。

「わー！ぴったりになったー！」

わーい、わーいと喜ぶ璃々を落ち着かせようと声を掛ける。

「とりあえず、これから紫苑のところに・・・わぶっ！？」

「ギルお兄ちゃんにどーん！」

言葉の途中で、璃々が顔面に飛び込んできた。

何とか倒れずに済んだものの、よたよたと足がふらつく。

そして、つま先で何かを踏んだ感触の後、急に前に倒れる。

あ、さつき床を拭いた雑巾ほつといたままだ……。

「あぶな……!」

「きゃーっ」

焦る俺に対し、璃々は楽しそうな悲鳴を上げる。

ぼふ、と寝台に受け止められる。よかった、床じゃなくて。

「あいたた……ギルお兄ちゃん、だいじょーぶ?」

「……一応」

しかし、視界が回復しない。

顔には、何か白くて湿っているものがくっついていて感觸が……。

「ギルー、いるー?あのワインってお酒なんだけ、どー……?」

「雪連、急に部屋に入るなとあれほど……」

目前のものが何か、を理解すると同時に、背後からの声が聞こえた。これは、今日で一番不味い。

顔面に飛び込んできた璃々と寝台に倒れこんだとき、璃々はちょうど寝台に座るように着地。

そして、俺は璃々に引っ張られたため、顔の部分だけ寝台に着地した。

両手は衝撃を和らげるために寝台についたはずだが、細くて柔らかい何かを掴んでいる。

そして、目の前には……。

「！？」

慌てて顔を上げる。

予想通り、寝台に座りこんでいる璃々が頭に疑問符を浮かべている。……しかも、手は足を押さえるようになっていたらしい。なんてこった。

間違いない。あの白い布のところに顔を突っ込んでいたのだろう。どこ、とは明言しない。

「あ、あー……その、お楽しみ所……だった？」

「……ふむ。」

「や、やめろ！その苦笑いとすべてを理解したような笑みをやめろ！」

雪連と冥琳にそう叫ぶが、多分無駄だろう。

「ごめんねー？ワインについては、また後で尋ねに来るわー。……ねえ冥琳、これは、シャオも勝ち目があるんじゃない？」

「うむ。小連さまは璃々と同じような体型だからな。……なるほど、ギルは……」

「あああつ！変な勘違い論議をしながら去るんじゃない！」

早足でテクテクと去っていく二人を逃さないように追いかけて……

「へっくち」

「……ようと思ったが、流石に璃々を放置していくわけには行かない。  
この気温で風邪を引くことは無いだろうが、暖かくするに越したことは無い。」

「ほら、これも着ておけ、璃々。」

「ほわー、あつたかだねー」

「多分そのうち暑くなると思うけどな」

なんちゃってワンピースの上からフランチエスカの制服を羽織らせると、俺は璃々をつれて部屋を出た。

「……なんだろう。寒気がする。こっ、全身で殺気を受けているというか、恋五人くらいに囲まれたくらいの恐怖というか……。」

「めいどぶく、濡れちゃったなー」

「紫苑に洗濯してもらえばいいさ」

「おかーさん、めいどぶく洗えるかなー」

「あー……。分かった、月に頼んでおくよ」

「ほんと!?!じゃあ、お願いね、ギルお兄ちゃん!」

「ああ」

璃々からメイド服を受け取り、宝物庫の中へ収納する。  
後で月を探して洗ってもらえるよう頼んでみるか。

「お、紫苑の部屋に着いたな。紫苑ー？」

声を掛けつつノックするが、反応が無い。

「・・・璃々、紫苑はどこか行くとか言ってた？」

「えー？んー、わかんない。月おねーちゃんの手伝いしてきなさいって言われただけだから・・・」

「・・・まあいい。とりあえず、璃々を部屋に帰そう。」

「璃々、今日は部屋に戻って、下着を替えて、キッチンと服を着るんだぞ」

「はい。」

「それと、部屋から出ないこと。桃香とか、華琳とか、雪連とかもきても扉を開けないこと。」

「おかーさんは？」

「紫苑は例外。きちんと紫苑に今日あったことを報告するんだぞ？」

「うん、分かったー！」

「よし。じゃあ、俺はそろそろ行くな」

「うんっ、ばいばいー」

ぶんぶんと腕を振る璃々に向けて腕を振り替えしながら、紫苑の部屋を後にする。

・・・まずは、桃香たちの誤解から順番に解いていくべきだろうか。それとも、一番重症な勘違いをしている呉から行くべきか。

「桃香だな」

泣いてたし、一番心配だ。

・・・

桃香を探して城を歩いていると、なんだかいつもより兵士たちが騒がしい気がする。

ちょうど会話をしている兵士二人がいたので話を聞こうと近づくが。

「なあ、聞いたか、ギル様の噂」

「ああ。何でも、幼子に手を出したとか・・・」

すぐに物陰に隠れた。危ない。すでに噂が拡散されている。

そんなところに噂の張本人が現れては、兵士たちが俺から話を聞こうと集まってくるに違いない。

それは避けなければ・・・。今は兵士に見つからずに桃香を見つけ出し、誤解を解く。

桃香の近くには愛紗と朱里もいるはずだ。愛紗はともかく、朱里ならば論理だてて説明すればきっと理解してくれる。

「・・・はあ」

でも、何でこんなことしてるんだろっか。

俺って幸運A++じゃなかったっけ？

こんなラブコメの王道みたいなこと璃々とやらかすとは思っててもいなかった。

まあ、どれもこれも誤解を解くまでの辛抱だ。

とりあえず、玉座の間へ行ってみるか。あそこにいる可能性が高そうだ。

「おっと」

気分は潜入任務中のエージェントだ。

兵士の目をかいくぐり、時には宝具を使って切り抜ける。

「・・・着いた」

いつもなら十分と掛からない道のりなのだが、変な手間を掛けた所為で三倍ほど時間が掛かった。

「おーい・・・桃香ー？いるかー？」

小声で呼びかけてみる。

・・・反応が無い。誰もいないのか？

扉から顔を覗かせる。玉座の間には誰もいないように見えるが・・・。

「ギル？何やってんだ？」

「っ！・・・何だ、銀か」

「なんだって何だよ」

何やってんだよ、という銀に、今日あったことを話す。  
銀はまだ噂を聞いていなかったようで、お前・・・大変だなあと肩を叩いてきた。

「なんというか・・・初めて味方を見付けた気がする」

「んな大げさな。それで？劉備さま捜してるんだっけか」

「ああ。見かけなかったか？」

「あー・・・んー・・・」

唸りながら銀はここにくるまでのことを思い出しているらしい。

「あっ」

「お、何か思い出したか!？」

「ああ。そういや、ここにくる途中に通った通路の反対側で、劉備さまが走ってるの見たぜ」

「えっと、銀はあっちからきて、その反対側を・・・どっちに走ってた？」

「西」

「じゃあ、蜀の屋敷だな」

あの方向なら、それが一番可能性が高い。



「ありがとう、銀。俺、ちょっと行って来る！」

「おう。俺は兵士たちの誤解でも解いて回ってやる」

「すまん。恩に着る」

「ははは、良いって事よ。とりあえず、一週間の昼飯な」

「ああ、一週間といわず一ヶ月の昼飯は約束しよう」

「お、俄然やる気出てきたね」

それじゃな、と言って走り出した銀の背中を見送ってから、俺も蜀の屋敷へと急いだ。

・・・

「桃香っ！」

「・・・どうしたの？」

「恋。桃香を見なかったか？」

蜀の屋敷に入ると、恋が動物にえさをあげているところに遭遇した。セキトを筆頭に、大小さまざまな動物がえさにはくついている。

「桃香？・・・あ、多分部屋」

「そっか、分かった。ありがとう」

お礼を伝えつつ、恋の頭を撫でる。  
恋も月たちと同じく頭を撫でると喜んでくれる娘だ。

「〜っ」

嬉しそうな顔をして撫でられている恋を見ると、当初の目的を忘れそうになる。

「・・・おっと、いけないいけない」

恋の頭から手を離し、手を振って別れを告げる。

「ん、ばいばい」

「ああ、またな」

小走りに屋敷の中を走る。

桃香がこの屋敷でいそうな部屋といえば・・・。

「桃香っ!?!」

「お、お兄さん・・・?」

「は、はわわっ。ギルさん!」

「な、え、その、えと」

部屋の中では、小さい服を無理やり着ようとしている桃香と愛紗、そしてすでに着ている朱里の三人がいた。

朱里は別として、着替えようとしている桃香と愛紗はもちろん下着姿なわけでした……。

二人が俺を視認すると、耳を劈つくような悲鳴が上がった。

……

「……なるほど、お茶をかぶってしまった璃々ちゃんを着替えさせよう」と

「そうなんだ。本気で他意なんて無くてだな……」

「そ、そっか、そうなんだ。お兄さんがその……璃々ちゃんくらの娘しか愛せない人なんじゃないかって勘違いしちゃった」

あの悲鳴の後、俺は何とか二人を落ち着かせ、朱里に状況を説明した。

どうしてこうなったのか、と説明した後の言葉が、先ほどのなるほど、だ。

よかった。やはり朱里はきちんと説明すれば分かる娘だったんだ。

「し、しかしですね！璃々だってもう一人で着替えられるじゃないですか！」

「はわ、おそらく璃々ちゃんはメイド服を着たのが初めてで、脱ぎ方が分からなかったのでしょう。月ちゃんたちも、最初は脱いだりするときに困ったって言ってましたから」

「う、そ、そうなのか。」

「はい。思い返せば、確かにメイド服は濡れていた気がしますしね」

朱里がそこまで状況を思い出すと、桃香はなーんだ、と脱力して座り込んだ。

愛紗もため息をつきつつ椅子に座った。

「うう、ゼーんぶ、勘違いだったんだね」

「はい・・・前回といい今回といい・・・私は早とちりばかりしていますね」

「き、気にするなよ。俺だって、ちょっと紛らわしいと思ってたし、今回はタイミング・・・機会が悪かったってことで」

「そう言っただけだと助かります・・・」

「・・・でも、ギルさんはそういう趣味じゃなかったんですね。ちよつと残念かもです」

「ん？何か言ったか、朱里」

「はわわ！なんでもないですっ」

「・・・？変な朱里だな。」

しかしまあ、これで桃香たちの誤解は解けたな。

「よし、それじゃあちよつと呉と魏の屋敷に行つて来る」

「え？何かあったの？」

「・・・いや、桃香たちが去つてつた後にも不幸な事故があつて・・・」

「

その後、華琳と一刀、そして雪連と冥琳にそれぞれ勘違いされたことを話した。

すべて話し終えた後、三人は引きつった笑いしか浮かべることができていなかった。

「・・・お兄さん、何か宝具で呪われたんじゃないの？」

「そうですね。魔術や妖術なども可能性は高いのではないですか・・・？」

「はわわ・・・幸運が高いギルさんがそんなに不運に見舞われるなんて・・・」

「まあ、とりあえずそんなわけなんで、ちょっと行って来るよ」

「はい。御武運を」

「・・・やっぱり、そこまで覚悟しないといけないか」

愛紗の冗談にならない見送りを受けて、俺は蜀の屋敷を後にした。

・・・

・・・呉の屋敷に着いた。だが、何だろっこの気配。

俺の悪いほうにしか働かない直感が、何か起きると知らせてきている。

屋敷の門を開くのすら恐ろしい。

・・・だが、行かねばならぬ。

「いんにち」

「ギルっ!」

わ、と言おうとしてキャンセルさせられた。

お察しの通り、シャオが突っ込んできたからだ。

「ギルギル、シャオは信じてたよ。やっぱりギルは、シャオみたいな女の子が大好きなんだよねっ!？」

「ま、まさか雪連から・・・」

「うんっ。おねーちゃんから聞いたの!ギルはぺったんこな女の子にしか興味の無い男なんだって!」

「なん・・・だと・・・!？」

噂が加速している!俺の尊厳が消えた・・・!?

「そ、それには理由があつてだな・・・」

「う、うそ・・・」

何かに絶望したかのような声が聞こえた後、どさり、と重量のあるものが落ちた音がした。

振り向くと、そこには手で口を押さえてわなわなと震える連華の姿が。

「ぎ、ギル・・・あなた・・・」

何で誤解を解きに来て誤解されなきゃならないんだ……!

「違うぞ。良いか、シャオも落ち着いて聞いてくれ」

「えー、何々、結婚して欲しいってー? きゃーっ、どうしょー!」

「そうなのか……!?!」

何故かはしゃぎだすシャオと、悲しげな声を出す連華。

取り合えず二人を落ち着かせないと、と思った瞬間、鈴の音が聞こえた。

「ギル。貴様……連華様を……!」

「また面倒くさいのが!」

背後から振るわれた一撃を宝物庫から宝剣を出すことによって防ぐ。

「話が進まない! 悪いけど、無理やり話を聞いてもらっぞ! エルキドゥ天の鎖  
」!

「きゃっ!」

「わわっ……!」

「くっ、不覚っ!」

三人を拘束し、ゆっくりと説明していく。

噂は完全に勘違いだということをようやく納得してもらい、鎖を解

く。

「三人とも、わかってくれた様で何よりだ。」

「・・・ちよつとがっかりだけどねー」

「す、すまないな、ギル。私、変な勘違いを・・・」

「ちっ。」

・・・思春さん、何で舌打ちしたんすか？

「取り合えず、姉さんには私から話しておくわ。冥琳も、きちんと説明すれば分かってくれるでしょう」

「ああ、頼んだ。それじゃあ、俺はこれで！」

「ええ。」

よし、蜀と呉は何とか誤解を解くことができたな。最後は魏だ。

・・・

「あ、兄貴！」

「ん？」

呉の屋敷から魏の屋敷へと向かう途中、以前一緒に龍を倒しに行った兵士たちがそろっていた。



「やはり、兄貴はこちら側の人間だったのですね！」

蜀の兵が嬉しそうにそういうと、兵たちはそれぞれに騒ぎ始めた。

「ちよ、まさかお前ら、噂を聞いたんじゃ・・・！」

「ええ。兄貴がついに幼女趣味に目覚めたという噂を聞きまして。噂にしては信憑性があったのでとうとう、と思っていたのですが」

「とうとう、じゃない！あれは勘違いがあつてだな・・・」

それから、俺は兵士たちにすべての出来事を話した。

なるほど、そうだったんすね、と魏の兵士が言ったので、納得してくれたか、と安堵の息を吐きかけたとき

「つまり、おいしい思いをしてることじゃないッスか！」

「どづいつ思考回路をしているんだ！」

「兄貴、是非そんなおいしい目に会うためのコツを教えてください  
」

「というか璃々ちゃんに侍女服姿でお茶入れてもらうとかなんて羨ましい！代わってください！」

・・・そういえば、蜀のは朱里や鈴々がストライクゾーンだったか。

「だが断る！っていうか無茶言っな！」

「兄者、兄貴はとっかえひっかえ侍女を侍らせているということだ

いいのか？」

「弟者、おそらくそれで大体あっているはずだ」

「あつてないぞ！」

駄目だ・・・火がついたこいつらを俺じゃ止められない・・・。

「しかし、兄貴はお嬢様にどう説明するつもりなんですか？」

「は？」

「いえ、いつもの修羅場を見ている限りではお嬢様は相当に嫉妬深いようなので・・・」

董の兵士がつぶやいた一言に、一瞬で思考が固まった。

こいつがいうお嬢様・・・つまり月のことなのだが、確かに月は嫉妬深いところがある。

しかも詠まで参戦しては、おそらく俺一人では対抗できないだろう。

「・・・やばいな」

「なるほど、どまあといいことですね、兄貴」

にやり、と笑う呉の兵士。くそ、今はその笑いに反論できない！

「取り合えず、魏の誤解でも解きに行ったらどうツスか？あそこの噂の伝播、半端じゃないツスよ？」

「え、そうなのか？」

「そツスよ。俺なんか・・・あばばばばばば」

「ど、どうした！魏の！魏のー！」

「駄目だ！気絶してる！」

「・・・そんなに恐ろしいことがあったんですか」

白目をむいて倒れた魏の兵士を支えながら、呉と董の兵士が叫び、蜀の兵がつぶやく。

「特にあそこは楽進將軍たち警備隊の方たちがいるからな、兄者」

「ああ、特に李典將軍と于禁將軍はやばいな、弟者」

・・・なるほど、あの二人なら頷ける。口が軽いってレベルじゃないからな。

「・・・よし、俺、魏の屋敷に行つて来る」

「手遅れでないことを祈ります」

「ありがとう、蜀の。」

間に合え、と心の中で祈り続けながら、俺は走りだした

・・・

「一刀！いるか！？」

そう叫びながら魏の屋敷へ入る。

「・・・ちようどいい。きょんとした一刀がこちらを向いて突っ立っていた。」

「ん？・・・って、ギル。その・・・もう終わったのか？」

まあ、璃々ちゃんも疲れるだろうし、長く付き合わせるわけには行かないよな、と意味不明の納得をする一刀。

「・・・そこへなおれ。」

「殺されるっ!?!」

「違う。説明する。・・・断れば」

ちらり、と宝物庫から刀身を向けると、一刀はすばやい動きで床に正座した。

「取り合えず、あれは勘違いで・・・」

しばし正座させた一刀に説明し、納得してもらおうことができた。

「・・・っていつか、ギル、お前ラブコメの主人公みたいなこと・・・」

「言つな。泣きたくなる」

「やめてくれよ。俺、ギルの男泣きとか見たくないぜ」

「だろうな。・・・取り合えず、華琳にも直接伝えておいてくれよ」

「ああ、勘違いしたお詫びだ。それくらいはしておくよ」

「サンキユ。それじゃ、俺は帰るよ」

「おう、お疲れー」

なんだけ、一刀と話してるところが三国志の時代だつてこと忘れかけるな！。

・・・

今日、いつものようにお仕事をしていると、信じられない噂を聞きました。

曰く、ギルさんが璃々ちゃんに手を出した、とかなんとか。

いつもなら『ちよつと』ギルさんとお話するところなのですが、今回は何か違う気がします。

というかそもそもギルさんはきちんとしている方ですので、璃々ちゃんと・・・その、結ばれたのなら私と詠ちゃんに報告してくれるはずなんです。

それに、ギルさんがもし璃々ちゃんに手を出すとしても、紫苑さんの後のはずです。紫苑さん、張り切っていましたし。

「・・・ねえ月？」

「うん、多分・・・何かの勘違いだと思つよ」

ギルさんは女難の相とかある人なので、九割の確立で勘違いのはずです。

後でお部屋にお邪魔する予定なので、本当のことを聞いてみましょう。

「お、いたいた」

「誰？・・・って、銀じゃない」

「おう。おつかれさん。」

そんな話をしていると、銀さんが普段着で声を掛けてきました。  
珍しく鎧を着ていなかったのが、最初誰だかわかりませんでした。  
・・・へう、ごめんなさい。

「そついや、お前たち噂聞いた？」

「ギルの？」

「ああ。」

「聞ってるわよ。ま、多分勘違いだろうけどね」

「おろ、珍しいな。お前らが暴走しないなんて」

なんだ、つまんね、と言って、銀さんは去っていきました。

「何しにきたんだろ、あいつ」

「多分、誤解を解きに来てくれたんじゃないかな」

「あー・・・変に律儀ねえ、あいつも」

ま、いいわ。仕事片付けちゃいましょ、と詠ちゃんは再び手を動かし始めました。

私も早く終わらせてギルさんに会うため、詠ちゃんに続いて手を動かします。

・・・ギルさんのことを信じていても、やっぱり少しだけでもしかして、という不安があるのも確かです。

早くこの不安をなくすためにも、ギルさんに会って話を聞かないと

・・・

「・・・疲れた」

通路を歩きながら、俺はつぶやいた。本当に今日は疲れた・・・。

最初は璃々がお茶を入れてくれるという最高のイベントだったはずなのだが、何をトチ狂ったのかいつの間にかラブコメみたいな勘違いされていた。

仕事をする気もなくなった俺は、政務を休むことを朱里に伝え、部屋へと帰ってきた。

「あ、お帰りなさい、ギルさん」

「お、お帰り、ギル」

「おや。月、詠。きてたのか」

部屋に入ると、月と詠が卓についてお茶を飲んでいた。

「はい。今日はギルさん、噂で大変な思いをしていらっしまったみたいで」

「で？璃々に手を出したとかってのはただの噂なんですよ？」

「ああ、あれはだな・・・」

初めてきちんと聞く姿勢を持った人に説明した気がする。

黒月が出てくるの覚悟してたんだけど・・・いやよかった。

「・・・なるほど、なんかボクみたいな不運に巻き込まれてたのね」

「ギルさんも、不幸を溜め込む体質なんじゃないか？」

「ギルのは、ただの女難な気もするけど」

「ふふ、そうかもしれないね」

目の前に座る二人はお茶を飲みながら楽しそうにくすくすと笑う。

あー、今日走り回った疲れも、説明に使った精神力も、これを見るためだったのならば受け入れられそうだ。

「・・・さて、と。明日は今日やらなかった分の政務も片付けなきゃならないし、早めに寝ようか」

「あ、はい。」

「仕方ないわね。」

俺が寝台の中にもぐりこむと、すでに寝巻きに着替えていた月たちは両サイドから俺の隣へとくっついてくる。



「おやすみなさい、ギルさん」

「おやすみ、ギル」

「ああ、お休み。月、詠」

小柄な二人にくつつかれながら、挨拶を交わす。  
目を閉じてしばらくすると、二人の寝息が。

・・・俺も、意識、が、遠く・・・。

・・・

## 第七話 勘違いの後に（後書き）

いやあ、王道ですよ、勘違い。

璃々にいろいろするのはちよつとアレかなと思っただんですが、あまり詳しく書かないことになって回避しようと思っっています。

誤字脱字のご報告、感想お待ちしております。

第八話 執事との夜に（前書き）

ちよつと空気になりかけてた孔雀さんメインのお話です。

それではどござ

## 第八話 執事との夜に

「ギル、マスターと添い寝してやってくれ」

「・・・はあ？」

珍しく城にいたキャスターから声を掛けられ、大事な話があるんだと前置きされた後に、そんなことを言われた。

「いきなりすぎて意味が分からない。詳しく説明してくれ」

「もちろん、そのつもりだ。」

それから、キャスターは語り始めた。

孔雀が最近寝るときにうなされている。そうしたのはここ最近のことで、何が原因でそうなっているのか、直接聞いてもはぐらかされてしまう。

彼女はギルには特別心を許しているようなので、一緒に寝るまでは行かなくとも仕事が終わった後の孔雀に話を聞き、できれば解決してあげてくれないか。

というかめんどくさいからさっさと孔雀と一緒に寝て安心させてやってくれ。

・・・大雑把に要約すると、そんな感じのことを言われた。

「・・・ちょっと信じられないんだが、俺って孔雀に気に入られてたのか？」

「うん？ああ、もちろんだとも。ことあるごとにギルがどうだとかギルはああだとか・・・」

「そんな孔雀想像できないな」

「まあ、君ならそういうと思ったよ。・・・でもね、工房で惚気られるこっちの身にもなって欲しいかな」

キャストがため息混じりにそういうと、俺の肩をぽんと叩いて来た。

「そこまでなのか!？」

う、うーむ・・・クール系美少女だと思っていた孔雀に思わぬ一面が・・・。

「と、取り合えず、孔雀にそれとなく切り出してみるよ」

「頼んだよ、ギル。マスターの悩みの解決と私の研究のために!」

「・・・後半に本音が出てきてるぞ」

・・・

「孔雀、今日の夜は開いてるか？」

政務中、お茶をいれにきてくれた孔雀に思い切っけて聞いてみる。最初はきよんとしていた孔雀も、俺の言っている言葉を理解したのか、笑みを浮かべつつ

「どうしたんだい、いきなり。・・・ああ、前に言っていた一緒に寝ようって言う約束、叶えてくれようとしてるのかな？」

「あー、うん。孔雀とはもう少し仲良くなりたいなあと思ってね」  
本来の目的を隠すことには心が痛むが、孔雀が夜毎うなされている  
というのは心配だ。

それを解決するためなら、少し心が痛むくらい受け入れてやる。

「そ、そうなんだ。・・・まあ、今夜は何も予定が無いよ。基本的に、ボクって仕事少ないから」

「そっか。じゃあ、今夜孔雀の部屋にお邪魔するよ」

「ん、分かった。待ってる」

入れかけだったお茶をしつかりと入れ、盆を持って退室の準備を進める孔雀。

「いきなりですまないな、孔雀。」

「気にしないでよ。・・・それじゃ、仕事頑張ってる」

そう言って盆を持って部屋を出て行くこととする孔雀。

俺は片手の無い孔雀のために扉を開け、外へ出やすくなるようにする。

「ありがとう」

そう言って部屋から出て歩き始める孔雀。

俺はいいって事よ、と返し、その後姿を見送る。

「あ、そうだ」

そんな孔雀に声を掛けると、孔雀は背中を向けたまま顔だけこちらに振り向かせて首を傾げつつ、なんだい？と聞いてきた。  
俺は先ほど入れてもらったお茶の味を思い出しながら口を開く。

「お茶、ごちそうさま。最初の頃より上達したな」

孔雀にそう伝えようと、孔雀は少し照れたようにはにかみながら口を開く。

「・・・ふふ、秘密特訓してたから」

「なるほど、納得だ」

くく、と笑いが漏れる。俺の笑い声に触発されたのか、孔雀もふふと笑いを漏らす。

・・・いつもクールな無表情娘なのに、こつやって笑う顔を見るといつも和むんだよなあ。

「それじゃあ、また夜に。」

「ああ。お盆、落とすなよ？」

「大丈夫さ。もう慣れた」

ホテルのウェイターのように盆を持ち、すたすたと早足で歩いていく孔雀。

なるほど、言葉の通り、すでに慣れっこのようだ。

「いらん心配だったかな」

さて、政務の続きをしなければ。

昨日ほとんど処理していないので、昨日の分と今日の分の二日分を一日で処理しなければならぬんだから。

・・・

「・・・うわ」

あれって現実かな？いや、現実のはずだ。後で頬をつねって確認するでしょう。

でも、まさかギルからそんな風に誘ってくれるなんて・・・。

「最近、嫌なこともあったけど・・・もしかしたら、この日のためにあったのかな」

ほら、いやなことの後にはいい事があるって良く聞くし？

「し、しかも・・・お茶、上達したなって・・・!」

何あの破壊力。笑顔が宝具なんじゃないの？ギルって。

・・・くっ、ボク、今日の夜まで生きていられるだろうか。

「あれ？孔雀さん、こんにちわ」

「え？・・・ああ、月。こんにちわ」

一人悶々としていると、月と出会った。

・・・いいよなあ、月。ギルと恋仲なんだよなあ・・・。



「何かあったのですか？嬉しそうな顔をなされてますけど・・・」

「ああ、ええっと・・・」

そういえば、ギルと夜二人つきりってこと、月に報告しておいたほうがいいんだろうか。

・・・ほら、月ってかなり嫉妬深いから。

「じ、実は・・・」

後でややこしくなるよりは、今言った方がいいよね。

かくかくしかじか、と月にさっきあった事を説明する。

すべての話を聞き終わった月は、そうですか、と笑って

「じゃあ、孔雀さんもギルさんに告白するんですか？」

「・・・はい？」

ちょっとまった。どうしてそうなった？

「え？・・・だって、孔雀さん、ギルさんのこと好きですよね？」

「・・・それは、なんというか・・・。」

月が不思議そうに質問してくる。

ボクは何でばれてるんだろう、という言葉が頭の中を埋め尽くして  
いって、その、とか意味の無い言葉が口から漏れるだけだ。

「もしかして、隠してるつもりでした？」

「……うん」

何でだろう。感情を抑えたり無表情になったりするのは得意だったんだけど……。

「だって孔雀さん、ギルさんの前以外で隠す気が無さすぎですから」

……はっ!?

そうか、なるほど。確かにボクはギルにはばれないように、と張りすぎて他の人には特に隠していなかった気がする……。

……ああ、もしかして、最近キャスターから送られてくる変な視線とかそれが原因かな!?

「以前も、ギルさんに助けられたときのお話とかして貰いましたけど……その時の表情が輝きすぎて……」

ちょっと気まずそうに視線をそらす月。

それが本当なら、詠とか響とかにもばれちゃって……

「……言いにくいんですけど、侍女のみんなには周知の事実というかなんと言うか……」

「はっ!?!」

「いつギルさんに気持ちが悪くなるか、という内容で響ちゃんと詠ちゃんが賭けをしていたり……」

「はっ!?!」

「あそこまでやってばれてないなら私もいく!と響ちゃんがノリノリになっちゃったり・・・」

「みゃうっ」

ぐ、グサグサ刺さる言葉の槍・・・!

っっていうか、言ってくれればいいのに!

ボクがそういうと、月は苦笑いを浮かべながら口を開く。

「そ、その・・・ギルさんの前で気持ちを悟られまいと頑張っている孔雀さんを見ていたらとてもそんなことは・・・」

そんなに頑張ってるように見られてたのか・・・。  
なんていうか、すごく衝撃を受けたよ。

「うう、なんかすごく泣きたくなってきた・・・」

「ああっ、孔雀さん、泣かないでください」

おろおろとしながら月がボクの体を支えてくれた。うう、ありがとうございます。

「取り合えず、いろいろとお話をするためにお部屋にいきましょう?」

「うん」

・・・

「と、言うわけで、みんなに集まってもらったのは他でもありません

ん

響が黒板、という文字を書く板の前に立ち、ばん、と黒板を叩く。そこには、頑張れ孔雀！と妙に可愛い文字が記されており、その下には、今日の議題……。

「じくり……」

「我が侍女組にただ一人の執事！孔雀ちゃんがギルさんに告白するにはどうしたら良いか考える会議を開催したいと思います！」

「わ、わーっ」

月がぱちぱち、と手を叩きながら声を上げる。

盛り上げようとしているのだろう。多分、響辺りに事前に言われていたに違いない。

……しかし残念ながら、すごくすべっている。

「……月、別に響に無理やり付き合っただけなくてもいいのよ？」

「でも、響ちゃん、孔雀さんのためにこんなに頑張ってるんだから、私も何かできないかなって……」

「意見を出したりとか、他の事で手伝ってやればいいのよ！」

「う、うん！頑張るよ、詠ちゃんっ」

月っていい子だよねえ。

「はい、ちゅーもーくー！」

パンパン、と手を叩いて自分に注目を集めた響は、黒板の文字をいったん消し、何かを書き始める。

「それじゃ、手順のおさらいね。まず、今日の夜は孔雀ちゃんがギルさんのお部屋に呼ばれてます」

「……たく、もう他の女に手を出すのね」

「へう、詠ちゃん、それは……」

「分かってるわよ。……で？」

いつもどおり詠が月にたしなめられた後、詠に急かされて響は説明を再開する。

響は先ほど書いた字の下に追加で文字を書き記していく。そこに書いてあるのは……。

「経験者のお話！というわけで、月ちゃん、詠ちゃん、ギルさんに告白したときの状況をご説明願います」

おお、これはなかなか参考になる話が聞けるんじゃないかな。

「へうつ。え、えーと、私がギルさんに想いを告げたとき……ですか。」

恥ずかしそうにしながら、月は口を開いた。

……内容はというと、なんと言うか……月らしい、正統派な告白の仕方だと思った。

でも月って以前ギルと結ばれるために下着姿で寝台に待機してた

か言ってなかったっけ。

うーん、大胆なんだか恥ずかしがりやなんだか分からないなあ……。

「えっ！？ぼ、ボクも言うの！？……その、恥ずかしいんだけど」

ずいぶん渋る詠だったが、響にせつつかれて渋々説明を始めた。

うわ、寝てる月の隣で告白とか……ずいぶん命知らず……げぶんげぶん、大胆なことを。

っていうか、告白した勢いで何度も接吻って……へ、変態みたいじゃないか……。

「えーっと、以上を総合して考えると……」

再び黒板の文字を消し、新しい文字を書く。

「直接！ギルさんに！ぶつかる！それだけ！」

いちいち区切って言い放った響がびしいっ！とこちらを指差してくる。

「直接、かぁ……」

「だいじょーぶだいじょーぶ！月ちゃんも詠ちゃんも通った道なんだから。ちなみに、後ろには私が続く予定ですっ」

今から練習しないとねー、と言う響を尻目に、ボクは心の中で段取りを組み立てていく。

ええっと、まずは部屋に来たギルに……。

「孔雀さん、自分の世界に閉じこもっちゃいましたね」

「しょうがないわ、放っておきなさい。・・・ねえ、それよりも響く？あんたも・・・なの？」

「ふえ？・・・あ、うん。その、最初は月ちゃんが恋仲になったから諦めようと思ってたけど、ほら、詠ちゃんもギルさんと一緒になっちゃったじゃない。それなら、私も想いを伝えたいな」と。

「・・・ふん。そう。ま、頑張りなさいよ」

「ふふ、想いを伝えるだけだから、頑張ることなんて無いよ、詠ちゃん」

「馬鹿ね。その後に・・・も、求められたらどうするのよ」

「なんとっ！その可能性は考えて無かったよ、詠ちゃん！」

「ま、せいぜい頑張ることね。」

「うう〜・・・いまさら不安になってきた・・・」

・・・

夜。俺は孔雀の部屋へと向かっていた。

さて、どうやって話を切り出すか。

「・・・直接・・・は、キャスターと同じくはぐらかされるだろうしなあ」

間接的に、と言ってもどう話を振ればいいのかやら……。ああもう。悩み相談なんて受けたこと無いからなあ。これなら、サーヴァント相手に戦ったほうがまだましかもしれんな。

「あ、もう着いたのか……」

考え事をしながらでも、キャスターと孔雀の部屋には迷わずたどり着ける。

なぜかと言うと、孔雀の部屋はキャスターの部屋の隣にあるのだが、キャスターの部屋からはその……奇妙な空気が漏れている。その奇妙な空気をたどって歩けば、少しくらい考え事をしていてもいつの間にかたどり着けるのだ。

「……どうしよう。何も案が浮かばなかったな……」

でも、来てしまったものは仕方がない。入るしかないだろう。

こんこん、と扉をノック。俺だけどー、と声をかけると

「どうぞぞ」

む？なんだか、いつもの孔雀らしくない、硬い声で返事が返ってきた。た。

どうしたんだらうか。まさか、何か異変が！？

慌てて扉に手をかけて開く。

「お邪魔……」

「い、いらっしやいませ！ご主人様っ！」

「……しましたー」



あまりのショックに固まってしまったが、何とか再起動。  
ゆっくりと部屋から出て、扉を閉める。

よし、冷静になろうか。

俺は、孔雀が悩んでるようだから相談に乗ってくれとキャスターに  
言われて、ここに来た。

それで、部屋へと入ると・・・メイド服を着た、孔雀に出迎えられ  
た。しかも妙にきゃぴきゃぴした口調で。

駄目だ。いつものクール系美少女の孔雀しか知らない俺にあの見た  
ことの無い孔雀を相手することは不可能だ。

「あれ？どうしたんだい、ギル」

「あ、キャスター。いい所に」

騒ぎを聞きつけたのか、キャスターが部屋から出てきた。

取り合えず今見たものを説明すると、どれどれ、と言いながらキャ  
スターが扉をノック。

「ど、どうぞ」

「お邪魔・・・」

扉を開いたキャスターが、そのままの体勢で固まった。

「えっ、きゃ、キャスターっ！？ちょ、これはその、ちがくて・・・

」！

「・・・しましたー」

先ほどの俺と寸分たがわぬ反応で、キャスターは扉を閉めた。

「メイド……だったろ？」

「うん。……しかも、ポーズ付きだった……」

え、それは本当か。……ちょっと見たかったかもしれない。

「ね、ねえ！何でキャスターがいるんだい！？」

扉の向こうから、若干必死そうな声が聞こえてきた。

「……答えてやれよ、キャスター。」

「取り合えず……部屋に入るうか」

「そうするか。」

扉を開くと、メイド服で立ち尽くす孔雀がいた。

「い、いらっしやい」

「お邪魔します。」

「はは、いや、改めてみると可愛らしくなったじゃないか、マスタ  
ー。あ、お邪魔するよ」

部屋に入って開口一番笑い始めるキャスター。

「うう、笑わないでくれよ。……全く、響め。全力で外したじゃ

ないか」

「え？マスター、何か言ったかい？」

「なんにも！・・・で、何でキャスターがいるのさ」

「いやなに、外で何やら騒いでいるようだったから、またマスターが何かやらかしたんじゃないかと思ってね。外を見たらギルがいるじゃないか。」

話しながらキャスターは椅子に座る。俺も近くの椅子に座り、背もたれにもたれる。

「で、状況を聞いたなら信じられないものを見たとか言い出すから私も覗いたら、って訳。了解したかい、マスター」

「・・・大体は。」

「ならばよろしい。・・・それじゃ、私は失礼するよ。研究も残ってるしね」

「うん。お休み、キャスター」

「ああ。ギル、こんなマスターだけど、よろしく頼んだよ」

「あ、ああ。」

この状況で帰るんだ、この人。

まあ、キャスターからの頼みとかは孔雀には伝えてないし、キャスターがいると孔雀も悩みを話してくれないかもしれないしな。

それじゃ、また明日ー、と言いながら部屋から出て行ったキャスタ  
ーを見送った後、孔雀の方へと向くと、凄いジト目でこちらを見て  
いた。

「まさか、メイド服を着ただけであそこまで動揺されるとは思って  
無かったよ、ギル」

「それは謝る。ごめん」

「ふん。もういいよ。」

そっぽを向きながら不機嫌そうに言い放つ孔雀。

あー、へそ曲げちゃった。どうしようかな、ここから。

「それで？今日はなんか用なの？」

どうしようかと悩んでいると、向こうから話を振ってきた。

これに乗っからない手は無いな。

「ああ。孔雀には魔術方面でいろいろお世話になってるし、お礼つ  
いでにちよっと話してもしていこうかなー、と。」

「・・・そつか。まあ、月たちに魔術を教えるのは趣味みたいな  
ものだし、別に気にすること無いよ」

「まあまあ。おとなしくお礼を受け取っておけて」

そう言っってはちんと指を鳴らす。

宝物庫が開き、ワインが入っている状態の酒器が卓の上に現れる。

「いつ見ても凄いね。キャスターもこんなことできたらなあ」

「キャスターにはキャスターのいいところがあるって。取り合えず、飲もうか」

「ん。」

いつも執事服を着ている孔雀がメイド服を着ていることに違和感はあるものの、立ち居振る舞いはいつもどおりの孔雀だ。なんだか妙な感覚に囚われつつも、ワインを口にする。

「いつ飲んでも美味しいね。」

「ああ、全くだ。」

ふう、とお互いに一息つく。

取り合えず、何か話題を振らないとな。

「・・・ところで、孔雀」

「ん、なにかな、ギル」

「なんで・・・メイド服着てたんだ？」

俺の質問に、孔雀は少しびくつくつと、諦めたようにため息をついた。

「その、響に着せられたんだ」

「響に？」

何でまた。・・・いや、でも響ならやりかねない。

「その・・・ギルは、メイド服が大好きだから、これを着たら喜ぶよ、って」

「何でそんな結論に・・・？」

「だって、月と詠はメイド服着てるじゃないか」

「なるほど、そういうことか。」

俺と恋仲である月と詠はメイド服を着ているから、俺はメイド服が好きなんじゃないか、と思ったわけだな。

・・・いや、否定はしないけど、董卓の時の服着てる月とか、軍師姿の詠とか結構良いものですよ？

「ってことは、孔雀は俺を喜ばせようとしてくれたのか？」

「っ！いや、その！・・・うん、まあ、そうなるね」

慌てて否定しようとした孔雀だったが、すぐに思い直したらしく、素直に頷いた。

なるほど、キャスターが言っていたように、俺は孔雀に気に入られているらしい。少なくとも、喜ばせようと思っくらいには。

「そっかそっか。孔雀もなかなか嬉しいことをしてくれるじゃないか。」

「い、いつもギルにはお世話になってるからね。これくらいはしないよ」

最初は少し緊張して強張った顔をしていた孔雀も、少しずつ表情が柔らかくなり、笑顔を見せるようになってきた。

それから、俺は悩み事を聞く、と言う当初の目的を忘れ、ただ普通に話をしていった。

たとえば、孔雀はいつもどんな仕事をしているのか、とかそんな日常の様子を聞いたり、今日の仕事に響が洗濯物を持ったまま転んだとか、そんな他愛も無い話だ。

どちらかと言うと騒がしい娘たちが多い中、物静かと言うか冷静な孔雀と話すのは、案外楽しく、時間はすぐに経ち、夜中と言って差し支えない時間となってしまった。

「・・・おっと。もうこんな時間だ。そろそろ帰るよ」

そう言って立ち上がり、扉へ向かおうときびすを返す。

・・・が、裾をつかまれる感触に足を止めた。

振り向くと、顔をそらした孔雀が、俺の裾を掴みながら立っているのが視界に入った。

「どうした、孔雀。」

「一緒に、寝てくれるんじゃないの？」

酔った所為か、恥ずかしいのかは定かではないが、耳まで真っ赤にした孔雀がつぶやくようにそう言った。

まさか本気で寝るつもりだったとは思っていなかったもので、少し驚いてしまった。

「・・・いいのか？」

「だって、約束したじゃないか」

少し拗ねたように唇を尖らせた孔雀に、思わず笑いが漏れる。  
孔雀の頭を少し乱暴に撫でながら

「よし、じゃあ寝ようか」

「・・・うん」

・・・

「・・・狭くない？ギル」

「大丈夫だぞ。・・・暑くないか？」

「全然。ボク、暑さには強いから」

身体、常に冷たいんだ、と続けて、俺の頬に手の甲を当ててくる。  
本当に冷たいな。夏は重宝されそうだ。

「じゃあ、冬の寒さには弱いのか？」

「うん。ずっと火を焚いて、掛け布団いっぱい掛けないと寒くて眠れないんだ」

なるほど。現代で言えば、ストーブつけっぱなしで寝るようなものか。

この時代だと、布団も種類は少ないしなあ。

・・・まあ、真桜辺りがいろんなの開発しそうだけど。



「・・・ねえ。」

「んー？」

変に現実味のある未来を妄想していると、孔雀に話しかけられた。考え事をしていた所為か、返事が少し曖昧になってしまった。だが、孔雀はそんなことを気にしないで話を続ける。

「最近ね、少し腕に違和感があるんだ」

「腕に？」

「そう。切れたほうの腕に。なんか、腕があるような、変な感覚」

「痛み、とかは？」

どこかで、そんな話を聞いたことがある。無いはずの腕が痛む。腕とか足を切断した後に、無いはずの腕や足があるように感じたり、痛み出したりする。

「たまに、かな。最近は夜になると少しだけ痛む」

幻肢痛、だったっけ。

「いつから？」

「違和感なら、切った後、少ししてからかな。痛みは最近。」

・・・なるほど、最近夜にうなされている、と言うのは孔雀が痛みを感じていたからだろう。

「実を言つと、今日一緒に寝ようっていったのは、少し不安になってきたから」

「不安に？」

「うん。一人でなくなったはずの腕の痛みを感じてると、不安になるんだ」

そついいながら恥ずかしそうに笑う孔雀。

「ごめん、変なこと言つて。」

「全然変なことじゃない。．．．というか、もっと早く頼ってくれば良かったのに」

「だって．．．無い腕が痛むなんて、変かもしれないって思つて．．．」

「変じゃないつて。大丈夫。」

そつ言つと、孔雀はそうかな、と呟いた。

「．．．やっぱり、ギルは優しいなあ」

「前にも言われたな、それ」

「ふふ、最初に助けてもらったときにね。．．．その時から、ボクは」

「ボクは？」

「あ……えと」

いきなりもじもじとし始める孔雀に首を傾げる。

いつものように冷静な表情など当の昔に消え去っており、眉を八の字にして恥ずかしそうな表情を浮かべている。

しかし、次の瞬間、孔雀の表情はいつもどおりの冷静な表情に変わる。……顔は、赤いままだったけど。

「……もう、白状しちゃうけど、ボク……ギルのことが、好きだ。」

「ええつと、それは……」

「もちろん、男の人として、ってことなんだけど……」

いまだに恥ずかしさが抜けないのか、表情は無表情に近いが、視線は俺に合わせようとはしない。

「ありがとう、嬉しいよ」

そう言って、孔雀を抱き寄せる。

そばに寝ていたので、抱き寄せるのは簡単だった。

「……うあ、恥ずかしいよ、ギル」

「いやだったか？」

「……全然。むしろ嬉しいよ、ギル」

「それなら良かった。」

「ね、ねえ？」

「どうした？」

「今日は、これだけなのかな？」

「これだけ・・・って？」

「・・・月とか、詠とかにしてるようなこと、しないのになって  
なんと。  
凄い積極性だな。」

「俺は今すぐでもしたいけど・・・孔雀は大丈夫なのか？」

「・・・ぼ、ボクはむしろ今日するくらいの覚悟だったんだけど」

「あ、だからメイド服だったりしたのか？」

「実はそうだったり」

へへ、と悪戯が成功した子供のように笑う孔雀。

「そっか。じゃあ・・・するよ？」

「あ、改めて聞かれると緊張するなあ・・・」

寝台に仰向けになった孔雀に覆いかぶさる。  
俺が動いたからか、寝台がぎっ、と音を立てる。

「ほら、力抜いて」

「うう、慣れてる人の台詞だ・・・んっ」

少し落ち込んだ様子の孔雀に口付けして、メイド服に手を伸ばす。

「や、優しくお願いします・・・」

「了解したよ、孔雀」

妙にしおらしい孔雀に苦笑しながら、メイド服を脱がしていった。

・・・

「昨夜はお楽しみでしたね」

翌朝、俺とほぼ同時に起きた孔雀と共に着替えを終え、少しだけ部屋でのんびりすごしていると、部屋の中へキャストが入ってきた。部屋の空気が違うことに気づいたキャストは、開口一番さっきのような台詞を吐いたのだ。

「聞いてたの？キャスト」

「聞こえたんだよ、マスター。部屋が隣の上に防音の結界なんて張ってないからね。」

「くっ・・・こうなったら、令呪で記憶をなくさせるしかないか・・・

・！」

「何言ってるんだいマスター。たかが恥ずかしい声を聞かれただけで」

「き、キャスターに分かるものか！この乙女の恥ずかしさを！」

「常時執事服の乙女には言われたくないよ。」

必死に問い詰める孔雀と、のらりくらりとかわすキャスター。

何時見てもこのやり取りは面白いな、と思いながら見守っていると、孔雀が俺の手を掴んで歩き出した。

「おや、マスター、どこへ？」

「仕事！」

「そうか。頑張ってくるといい。」

そう言っただけで笑うキャスターの隣を通って部屋を出る。

「・・・ギル、ありがとう」

そして、キャスターの隣を通り過ぎるとき、俺の耳元でそう呟いた。俺は後ろを向かず、手を振って答える。

なんだかんだいって、キャスターも心配だったんだろう。

「もう、キャスターには気遣いしてもものが足りてないよね。」

部屋から遠ざかると、孔雀はそう言って立ち止まる。

「・・・ごめん、ギル。先にお城行っててくれない？」

「ん？孔雀はどうするんだ？」

「えと・・・ちょっと、休んでから行く」

「・・・ああ、なるほど」

これは、あれか。月と詠も陥ったあの・・・。

「く、こんなに違和感を覚えるものだとは思わなかった。よくこんなので歩けたな、ボク。」

下腹部を押さえながら忌々しげに呟く孔雀。

「痛むか？」

「痛くはない、けど、なんかまだ入ってる感じが・・・」

「あー、そっか。それじゃあ・・・」

よいしょ、と孔雀を横抱きに抱える。

最初は背負おうかとも思ったが、こちらのほうが負担は少ないだろう。

「ギル、いったい何を」

「いいから。今日は部屋で休んでろ」

「・・・むう。仕方がない。そうするよ」

孔雀が諦めたように体から力を抜いたので、俺は来た道に戻る。キャスターはもう部屋に戻っているだろうし、孔雀がまたからかわれることは無いだろう。

なんとか扉を開けて部屋に入り、寝台に孔雀を横たわらせる。

「服は・・・まあ、それで我慢してくれ」

「うん。しばらくはこのままで寝てるよ。」

「それじゃ、ゆっくり休んでろ」

「じめんね、わざわざね」

「謝ることじゃないさ。好きな娘を気遣うのは当然だろ？」

「そんな台詞、よく素面で言えるね。・・・でも、嬉しいよ。ありがと」

皮肉るような口調のあと、ちよっとだけ視線をそらせてお礼を言った孔雀。

じゃあ、俺は行くよ、と伝え、部屋を出る。

すぐ隣にあるキャスターの部屋へと入ると、予想通りキャスターは机に向かって何かを研究しているようだった。

「・・・ん？おや、ギルか。どうした？」

足音で気づいたのか、後ろを振り向いたキャスター。

机にはさまざまな器具や書物が広げられている。



「お邪魔するよ。孔雀のことなんだけど」

「マスターがどうかしたのかい？」

「ちょっと調子が悪いみたいだな。部屋で寝てるんだ。何かあったら、孔雀のことは頼んだぞ」

「ほほう？昨夜やけにうるさいと思ったら、ギル、マスターに結構無茶しちやっただのかな？」

「はっはっは・・・否定はできません」

気まずさを感じた俺は、視線を逸らしつつそう言った。

「ま、分かったよ。それとなくマスターの様子は見ておく。」

「悪いな。俺も仕事が終わったらまた孔雀のところに戻ってくるから」

「ああ、了承した。ほら、もう行くと良い」

そう言ってしっしっ、と手で出て行けとジェスチャーするキャスター。

「おう。研究の邪魔して悪かったな。」

最後にそっぴい残して、俺はキャスターの部屋を後にした。さて、今日も一日、お仕事頑張りますか！。

・・・

「ギルさん、昨夜はお楽しみでしたね？」

「月・・・？」

「ギル、昨日はお楽しみだったみたいじゃない？」

「詠まで・・・」

朝食を食べようと厨房へ行くと、月と詠に出会った。

二人が作ったという朝食を食べていたのだが、ニコニコとこちらを見ている月と、じつとこちらを見つめる詠の行動に首を傾げていたのだが・・・。

朝食を食べた後にどうしたんだ、と聞いたところ、開口一番これである。何これ。流行ってるの？

「全く、一緒に来なかったところを見ると・・・まあ、アレに苦しんでるのね」

「へう、翌朝気づくんですよ、アレ」

月と詠も経験済みだからか、孔雀がない理由を悟ったようだ。良かった、説明する手間が省けた。

「今夜は・・・私と詠ちゃんの二人でお邪魔しますね？」

いつもどおりの微笑を浮かべた月はそう言って歩き出した。

「そ、その・・・覚悟しておきなさい！」

照れながら強がるといういつものツン子を見せてくれた詠も、月と一緒に歩き出した。

「・・・今夜、死なないようにしないとなあ」

ぼそりと呟く。割と本気で切実な呟きだと自分でも思った。取り合えず、仕事をしないと。昼休みに孔雀の様子を見に行こう。

・・・

「あ、お兄さん、おはよー」

「おはよう、桃香。」

「おはようございます、ギルさん」

「おはよう、朱里。今日は何か急ぎの案件とかある？」

「ええつと、今急ぎは・・・あ、天下一品武闘会の開催に關係した書類の整理と、後は・・・」

「ごそごそと書類を用意し始めた朱里を見ながら、俺も準備を開始する。」

墨とか筆とか、政務に必要な道具は意外とあるんです。

「んしょ、これくらいですね」

「どろどろと詰まれた仕事。」

「うーん・・・少なめだな」

「え？・・・そ、そうですか？」

「十分多いと思うけど・・・」

俺の一言に、桃香と朱里が反応する。

・・・あれ、俺がおかしいのか？

「ごめん、気にしないでくれ。」

「うう、お兄さんみたいに余裕の発言をしてみたいよぉ」

「はわわ、流石はギルさんです・・・」

「・・・取り合えず、仕事始めようか。」

変な空気を振り払うように声を掛ける。

それぞれ返事をしてくれたので、俺も筆を滑らせる。  
えーっと、予算と規模は・・・っと。

「そっついえばお兄さん？」

「なんだ、桃香」

始まって少ししか経っていないのに、桃香が話しかけてくる。  
一応手は動いているので、少しくらい話しても大丈夫だろう。

「あのね、今日のお昼なんだけど・・・」

「昼？」

「うん。お昼、一緒に食べたいなって。」

「今から昼飯の話かよ……」

「いまだ仕事は始まったばかり。もちろん太陽はまだ真上より低い位置にあり、さらに言えば朝食を食べたばかりだ。よく昼飯の話とかできるな。」

「えー、だってだって、お兄さんいつの間にか他の娘と約束してたりするし。だったら早めに約束しておこうかなって思って」

「な、なるほど、勉強になります……」

桃香の言葉を聞いた朱里が、何やらさらさらとメモを取っていた。

「で、どう？お兄さん」

「あー、悪いけど、昼は孔雀と約束があるんだ」

「えー！次は孔雀ちゃんなのー！？」

「次はってどういことだ桃香」

「……だって、前に誘ったときは月ちゃんと詠ちゃんと食べるからって断られて、その前は恋ちゃんと食べに行っちゃっし……」  
「ふてくされながら桃香は筆を動かす。」

「分かったよ。孔雀との用事が終わった後なら、付き合おう」

「ほんとっ！約束だよ、お兄さん！」

「ああ、約束だ。・・・さ、それじゃあさっさと終わらせちゃおうぜ」

「はいー！」

先ほどより倍の速度で、桃香は書類を片付けていく。

・・・現金な奴。さて、昼はなにを食べに行こうかな。

・・・

ただいま、とある大衆食堂で昼食をとっている最中だ。  
右には、言いだしっぺの桃香が胸を押し当てるようにくっついてい  
る。

「お兄さん、はい、あーん」

差し出されるレンゲ。

そこにはチャーハンが乗っており、ほかほかと湯気を立てている。

「・・・あーん」

周りの視線のほとんどがこちらを向いているのを感じながら、その  
チャーハンを食べる。

「ぎ、ギル殿！こちらも美味しいですよ。・・・そ、その、あーん  
・・・」

そして左には愛紗がいて、俺へと麻婆豆腐を乗せたレンゲを差し出してきた。

「・・・あーん」

それを食べると、愛紗がほっとしたようなは笑顔を浮かべる。

・・・どうしてこうなった。

もぐもぐと咀嚼しながら、こうなるまでを回想する。

まず、仕事中に異変はなかったはずだ。

仕事が終わった後、孔雀の様子を見に行く前に桃香に「お城の門のところであってるね」と言われて、分かった、と返したところも問題は無い。

そして、孔雀の様子を見に行ったところ、すでに回復して歩けるまじになった孔雀に出迎えられ、話をした後にはキャスターに礼を言いに行った。

「はは、特に問題もなかったし、別に礼を言われることじゃないよ」

とさわやかな笑顔で返された俺は、もう一度だけ礼を言って屋敷から出た。

そして、待ち合わせ場所へと到着すると、桃香が大きく手を振っているのが見えた。さらに、隣で少し恥ずかしそうにしている愛紗も見えた。

「おや、愛紗も誘ったんだ」

「うんっ。愛紗ちゃんも、お兄さんとお昼食べたいって!」

「ちょ、桃香さまっ」

「えへへー。じゃ、いつつ、お兄さん、愛紗ちゃん！」

そう言つて俺と愛紗の手を取つた桃香が走り出し、今いる食堂に着いた。

俺の腕を引つ張つて隣に座つた桃香に勧められ、愛紗は桃香の反対側に座り、もじもじと注文を決めていた。

それから注文した品が来て、三人それぞれ食べていると、先ほどのように桃香があーん、といい始めたのだ。

・・・なるほど、分かん。

「ねえねえお兄さん、この後甘いもの食べに行かない？」

桃香の声で回想から意識を引き戻される。

「ん、甘いものか……。桃香、太るぞ？」

「むっ、むー！お兄さん、失礼だよー！？」

「怒るな怒るな。」

ぶんすかと怒る桃香の頭を撫で、落ち着かせる。

「にしても、甘いものか。・・・愛紗はどうだ？」

「わ、私、ですか？」

「ああ。愛紗は甘いもの平気か？」

「はいっ。大丈夫です」



「そうか・・・なら、甘味処に行くのも悪くないな。」

すっかり機嫌を直した桃香を引き続き撫でながら、どこに行こうかと思案し始める。

そういえばしばらく行ってないところがいくつかあったな。顔見せるついでに食べていくのも悪くない。

「よし、それじゃあ行くか。おばさん、お勘定」

「あいよっ」

三人分のお金を出して、店を出る。

「さて、こつちだったかな・・・」

ギル殿に払っていただくなど、申し訳ないです！と言う愛紗を宥めつつ、街を歩く。

愛紗が説明を聞いて納得した頃には、次の目的地である甘味処にたどり着いていた。

「おーい、おじさん、久しぶりー」

「んー？・・・おお、ギル様ではありませんか」

久しぶりだというのにおじさんは俺の顔を覚えていたらしい。

「いくつかお勧めのお菓子とか頼んだ。あ、あとお茶」

「分かりました。少しお待ちください」

そう言っておじさんは店の中へ入っていく。  
俺たちは外に並べられた卓につき、品物が来るまで待つ。

「んー、美味しそうな甘い匂いが・・・」

「・・・桃香さま、後で私と一緒に身体を動かしましょうね」

「えー。大丈夫だよ、太らないよー？」

「いいえ、桃香さまは日ごろから運動不足ですので、少しでも身体を動かしておきませんか」

「ぶーぶー！おーぼーだよ愛紗ちゃん！」

冷静に返す愛紗と、手を大きく動かしながら何とか回避しようと頑張る桃香を見ていると、お茶が運ばれてきた。

それでいったん話は中断され、桃香と愛紗は出されたお茶を飲んだのほほんとしていた。

「おまちどうさま」

「お、ありがとう」

三人分の団子やら饅頭がやってきて、卓の上に並べられる。

「ほわー・・・美味しそうだね」

「違うぞ、桃香。美味しそう、じゃなくて美味しいんだ」

「ふふ、ギル殿がそこまで言うのならそうなのでしょね。」

それでは、いただきましょか、という愛紗の声に、桃香が真っ先にいただきまーす！と反応した。

はむ、と饅頭にかじり付く姿はハムスターとかその辺りの小動物を髣髴とさせた。

「おいひいね」

「だろう？愛紗はどうだ？」

「はい、とても美味しいです。お茶ともあいますね」

うんうん。久しぶりにきたけど、やっぱりこの饅頭とか団子は美味しいな。

多分華琳をつれてきても大丈夫なくらい美味しいんじゃないだろうか。今度つれてきてみよう。

・・・

## 第八話 執事との夜に（後書き）

孔雀さんは意外と乙女だったようです。

執事服の上から白衣、なんていうマニアック極まりない姿をしている孔雀さんですが、本当はメイド服が着たかったんだとか。

ですので、響に着せられたといいつつ半分以上ノリノリで着ていたんじゃないでしょうか。

誤字脱字のご報告、ご感想お待ちしております。

## 第九話 弓兵として弓を使うために（前書き）

蜀の将との好感度アップイベントや城の改装（一部）イベントを詰め込んだため、今回はなかなか長いです。

それでは、どうぞ

## 第九話 弓兵として弓を使うために

「風呂に常時入れるようにしたいと思う」

「・・・つつてもなー。この辺、温泉なんて出ないぜ？上下水道も全然だし・・・」

ある日の昼下がりに、珍しく政務と一緒にになった一刀に、休憩を利用して話しかける。

内容は上記の通りだ。今のようにお湯を沸かしてためる方式ではなく、何らかの方法でいつでもお湯を出せるようにする。

そうすれば、女性が多い将も嬉しいだろうし、一番汗をかく兵士たちのリフレッシュにもなるだろう。

・・・まあ、本音を言えば中身が日本人である俺が風呂に常に入れるようになりたいと思っているだけなのだが。

「んー・・・でもま、気持ちには分からないでもないぜ。俺もたまに風呂に入れないとき困るからな」

「だよな。取り合えず、これが終わったら甲賀のところに行くか。いろんなところに伝手があるあいつとなら、何か案が出るかもしれないし」

「おう。じゃあ、さっさと終わらせようか」

速度が二割り増しになった俺たちは予想より早く仕事を終わらせ、甲賀の元へと向かった。

甲賀の住んでいる家と言うか屋敷は目立たないように住宅に囲まれてひっそりと存在している。

まあ、職業柄目立つ家には住めないのも当然だけど。甲賀の家の扉をノックする。ある一定のリズムで叩かなくては開いてくれないので、いつもこの瞬間は気を使う。

「・・・む、何だお前たちか」

扉を開けた甲賀が怪訝そうな顔をする。

「おはよう、甲賀。あがってもいいか？」

「構わんぞ。」

そう言つて家の奥へと戻つていく甲賀の後に続き、俺と一刀も家中へと足を踏み入れた。

家の中では着物を着た人たちが忙しそうに歩き回っており、日本に帰ってきたのかと錯覚するような光景が広がっている。

たまにランサーの複製がいたりするが、ランサーの格好も大日本帝國軍の制服なので、全く違和感がない。

「こつちだ」

すすすー、と障子を開けて甲賀はとある部屋の中へと入っていく。

「あれ、甲賀の部屋変わったんだ」

「うむ。人が増えたし、ランサーと言う労働力もあるからな。増築とまでは行かなくとも、改築は人知れずできるものだ」

「・・・改築、したのか」

一刀が呆然とした表情で家の中を見回す。  
その気持ち、分からないでもないぞ。俺も以前来たときと代わりすぎたて一瞬どこか分からなくなったから。

「ま、座れ。・・・ちよつと待ってる。今茶と茶菓子を持ってくる」

「そんなにお構いなく」

「こつこつというのは、礼儀だ。命の恩人であるお前になら、なおさらな」

甲賀は口角を上げるだけの笑みを浮かべて、部屋から出て行く。

「・・・なあギル？」

「ん、どうした一刀」

「この家だけ、昭和っぽいんだけど」

「確かに。白黒テレビとかの家電はさすがに無いみたいだけど、雰囲気は日本のそれだよなあ・・・」

一刀がきよろきよろと部屋を見回しているのに習って俺もきよろきよろと周りを見回す。

良くもまあここまで再現したものだ。

「待たせたな」

再び障子を開いて部屋の中に入ってきた甲賀。

その手には盆が乗っており、お茶が人数分あった。

さらに甲賀の後ろからはオリジナルのランサーが入ってきて、お茶



菓子をちやぶ台の上に置いた。

「よくいらっしやいました、北郷殿、ギル殿」

「元気が、ランサー。」

「ええ。ギル殿も息災のようでは何より。北郷殿もお元気そうでは何よりです」

「ああ、ありがとな、ランサー」

「・・・それで？今日は何用だ」

「そうそう。早速本題に入るんだけどさ・・・」

俺は甲賀とそのそばに正座しているランサーに風呂を作りたいと説明する。

「風呂・・・と言うよりは温泉に近いな、それは・・・しかし、この辺で温泉などあったか・・・？」

「湧き出るものはおそらく少ないかと。」

甲賀とランサーは首をかしげて考え込んでいるようだ。やっぱり甲賀でも知らなかったか・・・。

「うーん・・・もうこうなったら最終手段に出るしかないかなあ・・・」

「最終手段？」

きよとんとした顔の一刀が疑問を口にした。

「ああ。乖離剣を真名解放して、ドリルみたいにして地面を掘る。いつか何かに突き当たるだろ」

「ちょっとまで。ギル、貴様何時からそんな馬鹿になった」

焦ったように腰を浮かせた甲賀に笑い返ししながら、俺は口を開く。

「いやー、流石に半分は冗談だつて。温泉が湧き出るかもしれない、つて言うところでやるならまだいいけど、何もないと掘るほど暇じゃないさ」

「・・・ギル殿がいうと冗談に聞こえないのが不思議です」

「ふむ・・・少し難しいかもしれないが、後は給湯システムを作るとはしないんじゃないか？」

「給湯システムを？」

「ああ。川かどこかと風呂場を繋げて、何らかの手段で風呂場に入れる前に川の水を温める。湯になった川の水を風呂場に流せば、風呂にはなるじゃないか」

甲賀が説明してくれたのは、水道があつて、給湯のためのボイラーがある前提の話だ。

・・・だが、いい案かもしれない

「よし、取り合えず今から俺の宝物庫の中からいくつか使えそうな

のを見繕うから、ちょっと検討してみようぜ。」

「使えそうなのって・・・宝具でか？」

「そんなに所帯じみた宝具があるのか・・・？」

疑問符を頭の上に浮かべる二人の言葉をスルーしつつ、宝物庫を開く。

中から取り出したのは常に燃える剣。多分何かの炎の剣の原典だとは思っただけど、常に燃えているのならボイラー代わりにならぬだろうか。

「ううむ・・・燃料としてはいいが、その温度調整はどうするんだ？流石に沸騰している湯を風呂にはできないだろう」

「・・・確かに。もう少し温度が低いものか・・・」

常に燃える剣をしまい、ごそごそと宝物庫をあさる。

「お、これならどうだ？水をお湯に替える杖」

「何でそんなぴったりなものがあるんだよ!？」

ただの木の枝にしか見えない杖を取り出すと、一刀に突っ込みを入れられた。

んなこといわれても、さまざまな宝具の原典が入ってるんだからあつても不思議じゃないだろ。

「・・・まあ、それで湯の問題は解決したな。後は水道か・・・」

「川からの水を風呂場に送ると、風呂場のお湯を川へと戻す二つが必要だな・・・」

「それに、川と風呂場の高低差を考えると、何か水を動かすような装置が必要だな・・・ギル、宝物庫の中に水を操る宝具とかないのか？モーセが持っていたようなの」

「・・・一刀、お前結構無茶言うんだな。まあ、探すけど。」

水をお湯に替える杖をちゃぶ台の上に置き、再び宝物庫をこそこそ。

「あ、こんなのあったぞ」

「なんだ？」

「水が下から上に流れるようになる珠」

「ほほう。なるほど。それなら使いようによっては何とかなるな。」

「よし、ボイラーと水道はこれでいいとして。後は施設だな」

取り出した杖と珠を見ながら、一刀がうんうんと頷く。

「まあいい。施設の建設は任せる。こっちは労働力が大量にいるからな」

確かに。忍者たちはすでに大量に存在しているし、ランサーだつてその気になれば千人規模に増えられる。

「それに、俺の魔術は何かを組み立てるのに向いてるからな。宝具

を使うのは初めてだが、やれないことはないだろう」

「よし、頼んだ。俺はまず城の風呂を改装する許可を取ってくる」

「そうだな。それが成功したら、兵士の宿舎とか、町に作るのもいいかも。」

「ああ。風呂に入ればさっぱりするし、みんなも喜ぶだろう」

それから、俺と一刀、甲賀とランサーの四人で、内装には富士山を描こうだとか自動的にかぼーん、と鳴るような魔術装置を作ろうだとか様々な話をした。

・・・後半は、確実にポイラーや給湯装置に関係ないことだったのに気づいたのは、話し合いが終わって、帰り道を歩いているときだった。

・・・

「・・・常に入れるお風呂、ですか」

早速朱里と雛里に相談してみる。

真剣な表情になって考え込む二人は、俺の提出した企画書とにらめっこしているように見える。

「いいかもしれませんね。今まではお風呂の日じゃないときに訓練すると、水浴びくらいしか身体を洗うすべはなかったようですし・・・

「・

「この・・・宝具と魔術の併用による常時給湯装置、と言うのが気になるのですが・・・」

「ああ、それはどうせお湯が流せるんだったらシャワーとか欲しいなあと思って」

「じゃ、シャワー、ですか？」

俺の説明に、朱里と雛里が首を傾げる。そっか、シャワーとか分からないよな。

昨日は一刀や甲賀と話してたから、すっかりここが三国時代だって忘れてた。

「ええと、こう、小さい穴がたくさん着いた筒から、お湯が出てくるんだ。で、それで身体の汚れを流したりするんだけど・・・」

こんな感じ、と図を描いて説明する。

模型でもいいから作ってくればよかったかな。

「はわわ・・・そんな便利なものが・・・」

ちなみにその後、シャワーが作れるのならカランも作れるだろうということになったのだが、それでは水の出力が足りないという壁に突き当たった。

そこで再び宝物庫をあさると、流れる水の勢いを加減速させる石が出てきた。

それを使って、水の勢いを高めるとのことだ。

「それなら、できそうですね・・・でも、宿舎や町に作るのは、その宝具がいくつもないといけないですよね？」

「そこはまだ検討中だ。取り合えず城内で作ってみて、いろいろと

不具合とか使い心地とか聞いてみる。それで大丈夫そうだったら宿舎とかにも水道を伸ばして……って感じかな、今のところは」

「……さすがギルさんですね。そこまで考えてらっしゃるなんて」

「はは。ありがと、嬉しいよ。それで、風呂ができたときには朱里と雛里と一緒にしてもらいたいんだが」

「はわわっ！？ギルさんと一緒にですか！？」

「あわわ……ま、まだ心の準備が……」

俺の言葉に、顔を真っ赤にしてあたふたし始める二人。

……どうしたんだろうか。

「俺と一緒にってことじゃないんだが……。それに、俺がいなくても怪我するようなことはないから大丈夫だと思うけど……？」

「そ、そういうことではなくて……」

「ん？ああ、使い方ならちゃんと説明してから入ってもらってから大丈夫だ」

「……雛里ちゃん、多分私たちが思ってることと全然違うこと思ってるね、ギルさん」

「そだね……。先は長そつだよ、朱里ちゃん」

次は二人いっせいに落ち込んだため息をつき始め、本気でどうしたんだろうかと心配になった。

そんなに俺と一緒に風呂に入りたかったんだろっか。

「・・・大丈夫か、二人とも。そんなに落ち込むほど俺と一緒に入りたかったのか？」

「はわわっ!? そんな恐れ多いこと!」

「あわわ・・・む、無理です・・・!」

・・・よく分からないが、再び混乱し始めた二人を落ち着けさせ、改築の許可を貰った。

早速一刀と共に甲賀の家に行き、計画を始動させる旨を伝えた。

「よし、ならば忍者集団の中から、工作活動が得意なのを十数人と、ランサーを二十人ほど連れて行け」

「助かるよ。」

「俺はお前が取り出した宝具をどう給湯装置に組み込むかを考えるから、しばらく工房に籠る。用があるときはオリジナルに言え。」

「ああ。よし、それじゃ一刀、お前は内装のデザインを頼む」

服の意匠を考えたという一刀は、やはりと言うかなんというかデザイナーの才能があるらしく、衣装を作るときや家の内装といったことを頼むとかなりのクオリティで仕上げてくれる。

「おう! 日本と見間違っくらいのもの作ってやるぜ!」

「その意気だ。取り合えず、壁とかの素材を作ったりする職人たち



の工房の場所、教えとくな。」

さて、俺はちよっくら宝物庫でものぞいてみるかな。

何か使えるようなのがあれば甲賀のところを持っていくとしよう。

・・・

「・・・バーサーカー。そういえばお前も日本人なんだよなあ」

「・・・」

給湯装置を作成するにあたって、川から風呂場への水道やらの工事を始めることに。

がっこんがっこんと何かを掘り進めたりする音が、土ぼこりが飛ばないようにと引かれた幕の向こうから聞こえてくる。

その様子を見に行こうと街を歩いていると、道中で路地裏への入り口をふさぐ様に立っているバーサーカーを見かけたので、ちよっただけ話しかけてみたのだ。

・・・まあ、答えが返ってくるとは思ってないが。

「まあ、次は温泉でも掘り当てるから、そのときはお前も呼ぶよ。城の風呂場はお前には小さいからなあ」

「・・・」

仁王立ちの体勢から微動だにしないバーサーカーにそういうと、かすかに首肯してくれたような気がした。

俺は一人で納得しながら、路地裏にいろであろっシャオは何をやっているのか気になった。



できてました。なんていうか、昨日までただの川だったのに今じゃ城への支流ができてるんだもの。  
驚いた。凄いな工作部隊とランサーたち。

「む……？ギル様！どうかいたしましたか？」

ランサーの一人が気づくと、全員がこちらを見る。

「いや、どれくらい進行してるかなっていう確認をしにきたのと、後どれくらいで終わりそうかなって聞きに着たんだけど……」

「なるほど。ええっと、ここで計画の統括してるのは……」

「私ですっ」

「ああ、そうでした。それではギル様、詳しい話は彼から」

そう言ってランサーがよけると、別のランサーが前に出る。  
同じ日本人だけあって顔立ちは似ているが、服装以外はやはり別人だ。

まあ、服装もちよっとだけ違ったりするんだけど。

「説明させていただきます！川の支流を城の浴場と繋げる工事は、今のままで行きますと明日には完成すると思われます！」

「……早いな」

「はっ。恐縮です」

そう言つて敬礼するランサー。甲賀の一件以来、俺にも敬意を払つてくれるようになってちよつとこそばゆく感じる。

まあ、明日繋がるつて言うんなら、後は甲賀の給湯装置がどうなつたか、だな。

次はそつちに行つてみるか。

「うん、分かった。じゃあ、俺は甲賀が作つてる給湯装置の様子を見に行くよ。」

「はい。・・・大丈夫ですね。今は家にいるようです」

ああ、そういえばランサー同士はお互い一瞬で意思疎通できるんだっけ。

「分かった。じゃあ、オリジナルに今から行くこと伝えておいてくれ」

「はっ。それでは、お気をつけて！」

「ああ、ありがとう」

そう言つて俺は休憩のときにでも食べてくれ、とランサーに手土産を渡し、別れを告げた。

・・・え？いや、手土産くらい用意しないと。俺たちのわがままで動いてくれてるんだし。

・・・

「お、ランサー」

「・・・ああ、ギル殿ですか。お待ちしておりました」

そう言っただけで出迎えてくれるランサーが、それで、何か御用でしょうか、と聞いてきたので、俺はそうそう、と前置きしてから口を開いた。

「さっき工事現場を見てきたんだが、明日には完成するって言うたからさ。甲賀の方はどうかと思って。」

「なるほど。・・・今ならマスターも大丈夫だそうです。」

念話かなにかで確認を取ったのか、ランサーは中へどうぞ、と玄関を開けて言った。

お邪魔します、と声を掛けて家の中へ。一応説明はされていたので、工房まで一直線だ。

「甲賀、入るぞー」

「む、ああ、入れ」

入れ、といわれたので遠慮なく入る。

工房は純和風の内装をしており、様々な道具が並んでいる以外は他の部屋と変わらないように見える。

が、周りに張ってある札や置いてある様々な薬品などから魔力を感じるので、結界を張ってあることが分かる。

「どっかしたか？」

畳に正座しながら宝具を弄っている甲賀は、こちらを見ないまま用件を聞いてくる。

「装置のほうはどうか、と思って。ランサーから聞いてると思うが、明日には支流を繋げる工事も終わるみたいだし、装置の状況はどうかなあ」と

「うむ、宝具を弄るのは初めてだったが、何とかコツはつかめた。明日の工事終了までにはできるだろ」

「そっか。それは良かった」

なら、明日から給湯装置と水道工事の両方を進めていけるだろう。よし、当面は甲賀たちに任せて大丈夫だろう。後は一刀の様子を見に行ったあと、政務に戻ればいいだろう。

・・・

「あ、ギルさん。お疲れ様ですっ」

一刀の様子を見に行ったがいなかったので、諦めて政務へと戻ることにした。

政務室には朱里だけがいて、俺が入ってきたのでいったん筆を止めてあいさつしてくれた。

「お疲れ様。今日は朱里だけか？」

「はい。桃香さまは午前中で政務は終わっていますし、さっきまで雛里ちゃんもいたんですけど、愛紗さんと隊列の訓練に行っちゃって・・・」

「そうなんだ。よし、じゃあ今日は二人で頑張るか」

「ふ、二人・・・二人きり・・・は、はいっ！頑張りますっ」

「そこまで肩肘張らなくていいよ。二人しかいないっていつても仕事は少ないんだし、ゆっくりやっていこうぜ」

そう言つて朱里の頭を撫でる。こうすると喜んでくれることは経験から分かっている。

俺の予想通り、朱里は少し恥ずかしそうにしながらも笑顔で撫でられている。

「はわわ・・・ゆ、ゆっくり頑張りますっ」

「おう。ゆっくり頑張りようぜ」

朱里から余計な肩の力が抜けたのを見て、俺も自分の席に座る。

自分で言っておいてなんだが、本当に仕事少ないな。これなら日が暮れる前に終わりそうだ。

「・・・あ、あのっ」

「んー？」

朱里が政務中に声を掛けてくるとは珍しい。

いつもはせつせと一生懸命筆を動かしているだけなのに。

「その、ですね・・・。ば、晩ご飯をご一緒させていただきたいのですが・・・！」

「晩飯と一緒に食べたいってことかな？」

「はいつ……。もう、誰かのご予定があったりしますか……。？」  
「いや、特にはないよ。……。うん、今日は一人で食べようと思っ  
てたから大丈夫だ」

今日は侍女の仕事が長引いてちょっと遅くなるので、先に食事を取  
っておいてください、と月に言われてたし。  
それに、朱里と一緒に食事するというのは久しぶりじゃなからうか。

「それじゃ、仕事終わったら街に行こうか。」

「はいつ。」

さて、どこに連れて行くのかな。  
最近は治安も良くなったし、日が暮れても開いてる店は増えてきて  
いる。  
だから、以前よりはいろいろと選択肢があるんだが、むしろありす  
ぎて困るな。

「朱里、何か食べたいものとかあるか？」

ただ悩んでるだけで答えが出るわけでもないのに、思い切って本人  
に聞いてみることに。  
俺の質問にふえっ！？と驚いた朱里だったが、次の瞬間えーっと、  
えーっと、と悩み始めた。  
お互いに筆が止まってしまっているが、幸い時間には余裕がある。  
少しくらい話をしていても大丈夫だろう。

「えと、あんまりたくさん食べられないので、量が少ない料理が置



いてあるお店がいいです」

「なるほど。・・・あ」

そつだ。小食の朱里に、ちようどいいところがある。

あそこなら朱里もちようどいい量が食べられるだろつ。

よし、行くところは決まつたな。

「うん、行くところが決まつたよ、朱里」

「はわわ、どこでしょうか・・・？」

「はは、まだ内緒」

「ギルさんが意地悪です・・・」

ぷう、と頬を膨らませて怒っていますよ、とても言いたげにこちらを見つめる朱里に思わず笑みが漏れた。

「笑わないでくださいよう・・・」

「ごめんごめん。別に馬鹿にしたわけじゃないんだよ。ちよつと朱里が可愛かつたから」

「はわわっ!？」

そんな、可愛いなんて、はわわ、と面白いぐらいに取り乱している朱里を見ていると、やっぱり笑みが漏れてしまう。

しかし今度は俺が笑っていることなんか気にならないぐらいに取り乱しているらしく、いまだに顔を真っ赤にしながら俯いている。

しばらくは再起動しなさそうなので、朱里の分の仕事もいくつかやっておく。うむ、このくらいならまだ手伝えるな。

さて、早めに終わらせて、朱里の可愛い姿を見る作業に戻るかな。

・・・

「はわ〜・・・もう日も暮れるのに、人が一杯ですねぇ」

はぐれないように、と手を繋いだ朱里から、驚いたような感心したようなどちらとも着かない呟きが聞こえてくる。

大戦も終わり、街の巡回に回せる人員が増えたことや、街を明るくするための工夫のおかげで日が暮れても人がいなくなることはなくなった。

流石に深夜になれば人も出歩かなくなるが、大戦前よりも街の人たちが外出している時間は長くなっただろう。

「朱里たち軍師が一刀や俺の案を実現してくれたからだよ。ありがとうな、朱里」

「はわわっ。そんな、私はただギルさんや北郷さんの案が素晴らしかったから、ちよっとお手伝いしただけで・・・!」

「まあまあ。謙遜するなっつて」

そんなことを話している間に、目的の場所へと着いた。

ここは街にいくつかある大衆食堂の一つのだが、ちよっただけ俺と縁がある店でもある。

以前来たときに店主から相談を受けたのだが、その時の俺の提案が大当たりしたらしく、それ以来ちよくちよく店主に相談を受けることになった。

なので、ここのメニューの半分は俺の提案、もしくはそれに近いものである。

今日はそのうちの一つが朱里にぴったりだと思って連れてきたのだ。

「こんばんわ、親父」

「おお！ギルさまですか！いらっしやい！」

元気良く迎えてくれた親父と挨拶を交わし、四人がけの卓につく。

「朱里、今日は朱里にぴったりな品があるんだ。それを食べてもらいたいんだけど、いいか？」

「はいっ。ギルさんのおすすめなら、断る理由なんてないですっ」

「そっか。親父！ラーメン一つと、特別定食一つ！」

「あいよ！」

「あの・・・特別定食って・・・？」

「ん、まああまり食べられない子供とかのために作られたんだけど、朱里も小食だしちょうどいい量かなって」

そんなものが、と咳く朱里。

最初はお子様定食と言う名前にしようとしたけど、それだと頼めるのが子供だけになってしまうので、今の名前になった。

「量は少ないけど料理の種類はあるし、ちょっとづつ食べられるから朱里みたいな娘には良いと思うよ」「

「そうなんですかぁ……。どんなのがくるのか、ちょっと楽しみですっ」

「はは、気に入ってくれるといいんだけど」

客が少なかったからか、料理はすぐに来た。

「はいお待ちどうぞさん！こっちがラーメンで、こっちが定食！」

「お、ありがとう。」

「ありがとうございますっ」

「それで、これは定食のおまけです、諸葛さま。諸葛さまは女性ですから、こういのがいいと思ひまして」

「おまけ……ですか？」

「へい。この定食は子供が良く頼むんで、おまけがついてるんです。」

なんだか感動した面持ちで、朱里は貰ったおまけを眺めて、特別定食　もうお子様ランチと言うことにしよう　を眺めてをしばらく繰り返してから、スプーンを手取る。

やはりお子様ランチにはスプーンだということで、お子様ランチの開発と同時にスプーンも作成した。

現代と比べると粗いところがあるが、それでもスプーンとしての役割は完璧にこなしている。

まあ、みんなにはスプーンではなく匙として認識されているのだが、

まあそれは後でどうとでもなるのでよしとする。

ちなみにおまけもお子様ランチにつき物だということに頼んだ人にはおまけをあげるようになってる。

おまけは商人が持っていた工芸品とか玩具とかのあまりものを安く仕入れているので、おまけをつけても負担ではないようだ。

「よし、いただきますか。いただきます」

「い、いただきますっ」

お子様ランチの内容はいたってシンプルだ。

まず山の形に整えられたチャーハン、おかずには餃子がふた切れと麻婆豆腐が少し。

果物を小さく切って現代版お子様ランチのゼリーの代わりにした。

後は親父の気分で惣菜が二つほどつくことになっている。

そして最後に小どんぶりに入ったラーメンができて、なかなか手ごろなお値段なのです。

「はむっ」

チャーハンの山を崩して、スプーンですくい、口に運ぶ朱里。

流石に爪楊枝にくっついた国旗は用意できなかったので山の頂上には何も突き刺していない。

「どうだ、朱里。味のほうは」

「とっても美味しいです。それに、このくらいの量なら私でも簡単に食べ切れますし、いろんな種類の料理を少しずつ食べられるのはいいですね」

ニコニコと嬉しそうに笑いながら感想を告げてくれる朱里。うんうん、親父の苦勞も報われるだろう。これ作るために、親父の息子とか息子の友達に試食を頼んだらしいし。

「喜んでくれたなら、ここを案内した甲斐があつたよ」

俺も朱里に釣られて笑顔になる。やっぱり食事は楽しく食べないとね。

お互いに今日の仕事のことや明日の予定のことで話が盛り上がりながら食事をしていると、すぐに皿は空になる。うん、満足満足。

正面に座る朱里も、満足そうにはぶ、と息を吐いている。

「よし、じゃあ帰ろうか。」

宝物庫から代金を出して親父に渡す。

親父に見送られながら、俺と朱里は店を後にした。

「はわわ・・・いつもご馳走になっちゃってすみません・・・」

「いって事さ。女の子にご馳走するのは男の特権だからな。素直に奢られると良い」

「は、はい。ご馳走様でした」

帰り道は人通りも落ち着いていたので、行きとは違って手は繋がなかった。

だが、ふと朱里を見ると、なんだか俺の手を見ては手を伸ばして急に引っ込めたりと忙しそうだ。

多分俺と手を繋ぎたいんだろうな。帰り道もはぐれそうで不安なん

だろうか。

まあ、取り合えず繋いであげればわかるか。勘違いだったら謝って離せばいいんだし。

俺はおずおずと手を伸ばしていた朱里の手を取る。

「はわわっ!？」

「さっきから俺の手に手を伸ばしてたから、こうしたいのかなって思ったんだけど・・・俺の勘違いだったかな？」

「い、いえっ。勘違いじゃないです・・・」

「そっか。これからは遠慮しないで俺の手を取って良いぞ。別に怒ったりしないから」

「はわわ・・・その、が、頑張りますっ!」

むむっ、と拳を握って宣言した朱里。

そのときに俺と繋いでいる手にも力が入っていたが、全くと言っていいほど痛くなかった。

俺もちよっとだけ握る手に力をこめる。・・・もちろん、潰そうなんて全く思ってもいない。

「あっ・・・」

それに気づいたのか、朱里が少しだけ切なそうな声を出した。

・・・その後の帰り道は、すっかり日が暮れたな、とかそんな益体もない話をして帰った。

なんだかほっこりとした心で城へと帰ることができた。

・・・

サーヴァントにはクラスというものがある。

劉備はセイバー、本郷猛はライダー、といった具合にそれぞれにクラスがあり、さらに、クラスにはクラススキルというものがある。

一番ポピュラーなのは対魔力じゃないだろうか。セイバー、アーチャー、ランサー、ライダーの四クラスが持っているスキルだ。

そう言ったスキルを有効に活用することが、聖杯戦争で勝ち抜いていくためには必要だろう。

・・・なんでこんな話をしているのかと云つと、ある日自身のステータスを見たときに思ったのだ。

「・・・戦闘用のスキルが皆無に近いな・・・」

原作のギルガメッシュのスキルは対魔力E、単独行動A+、黄金率A、カリスマA+、神性Bの五つだ。

最初は俺もその五つしかなかったが、こうしてこちらで過ごしているうちにいくつかのスキルがついた。

魔力放出Eと、軍略C、そして千里眼Dだ。

軍略は一对多数でないと発動しないし、魔力放出は戦いに使えるラックではない。

唯一使えそうな千里眼も、俺自身が弓を使わないためにほとんど無用の長物と化している。

一对多数の戦いでは有利になるが、一对一の戦いの際に使えるものがない。

そんな考えに行きついた俺は、千里眼を生かすために弓を習うことにした。

弓の英霊として召還された以上は、ちょっとくらい弓も使ってみようのです。



「あ、いたいた。」

宝物庫の中から魔力をつぎ込むほど威力が上がるといふ弓の宝具を引つ張り出し、城にいるであろう紫苑を探すと、割とすぐ見つかることができた。

蜀で弓といえはやはり紫苑だろう。一応桔梗も弓兵扱いだ、轟天砲はちょっと……。

「おーい、紫苑」

「はい？……あら、ギルさん。いかがなさいましたか？」

俺の声に振り向いた紫苑は、柔らかな笑みを浮かべている。

こういふ母性あふれるところがみんなに頼られる所以なんだろう。

「ちょっと頼みがあるんだ。この後、仕事とかあるかな」

「ギルさんから頼みごとと言つのは珍しいですね。私にできることなら良いんですけど……」

「紫苑じゃないと駄目なんだ。」

「私じゃないと駄目……ですか」

俺の言葉に、真剣な表情をする紫苑。

そんな紫苑に頼みごとをするため、俺は口を開く。

「俺に……弓を、教えて欲しいんだ」

「……弓を？」

「ああ、弓を。」

「なるほど、だから手に弓を持っているんですね。・・・分かりました。私がどれほどお役に立てるか分かりませんが、お手伝いしましょう。」

「本当か！？ありがとうございます、紫苑！」

よし、と軽いガッツポーズ。

「うふふ、それじゃあ、訓練場へ行きましょうか」

「ん、よろしく頼む」

「はい」

・・・

「弓の訓練場に来るのは・・・二度目か」

前に璃々が遊びに来たときに紫苑を訪ねてきた以来だ。

以前は良く見てなかったたので分からなかったが、練習用の矢が矢束に入っていたり、？<sup>ゆがけ</sup>や弓が置いてあるのが見える。

「ギルさんは弓を持参していらっしやるから、後は？<sup>ゆがけ</sup>と矢ね」

「あ、右手だけ籠手出せるから、それを替わりに使っよ」

「あら、便利なんですね。じゃあ、矢だけでいいかしら」

そう言つて、大量の矢を持つてくる紫苑。

紫苑はここにくる途中で部屋に立ち寄り着替えてきているので、自分の弓と籠手を持ってきている。

「ギルさん、弓を使ったことは？」

「ない。ほとんど剣で戦うか宝具を射出するかだったからなあ」

「なるほど。それでは、基本からゆつくり教えますね」

そう言つて、紫苑は弓の持ち方から始まり、矢の番え方、引くときの注意点などについて教えてくれた。

日本であつたような弓道ではなく、どちらかと言つと戦いのための弓術といった感覚である。

千里眼のおかげか、少し習つただけで基本はマスターできた。

動いたり馬に乗ったりしながら矢を放つのは無理だが、動かずに的に当てるくらいなら九割の成功率だ。

うむ、これからもちよくちよく教わるとしよう。

「ギルさんは筋がいいわ。この調子なら、すぐに上手くなるわね」

長く話していたからか、紫苑から硬い敬語が抜け、普通に話しかけてくれるようになった。

流石に年上に敬語を使われるのはちよつと抵抗あるからな。

「それじゃあ次は・・・」

「んー？なんじゃ、紫苑。わしに内緒でギルと逢瀬か？」

「あら、桔梗じゃない。どうしたの？」

次の練習に移ろうとしたとき、弓を持った桔梗が訓練場へとやってきた。

桔梗は俺と紫苑を見るやいなや、にやり、と笑いながらからかってくる。

「なに、轟天砲を調整に出しておつてな。ならば久しぶりに弓を引くかと思いつて来てみれば・・・。」

「そうなの。私は今ギルさんに弓を教えているのよ。想像と違って悪いわね」

「ほう、弓をな。・・・ふむ、ならば今からわしも教えよう。紫苑、交代じゃ」

そうやって紫苑と桔梗が視線をぶつける。二人の間に火花が散るのを見て、ああ、多分これから普通の練習じゃなくなるな、とひそかに覚悟を決めていた。

しばらく視線で押し問答していた二人だが、紫苑が折れたのか、俺から一歩はなれる。

「うむ。よし、ギルよ。取り合えず構えて矢を放つてみる」

「分かった。・・・よっ」

紫苑の教えのとおり矢を番え、弓を構え、弦を引く。

きりきりと音を立てて矢が引き絞られていく。

十分ひきつけたところで、勢い良く右手を離す。

「ほう……」

たんっ、と心地いい音を立てて的に突き刺さる矢を見て、桔梗が感心したような声を漏らした。

おお、結構好感触だったり？なんて思いながら姿勢を戻すと、何度か頷いた桔梗が口を開く。

「なるほど、基本はばっちりじゃな。引くときに時間を掛けすぎなところがあるが、まあおいおい直っていくじゃろっ。」

「そっか。ありがとう、桔梗」

「なんのなんの。ふむ、後は細かいところなんじゃが……」

それから数点直しておいたほうが良い所を教えられ、次はそれに気をつけながら弓を引く。

「よし、先ほどより良いぞ。この調子でもう二、三本ほどやってみる」

「了解っ」

少し離れたところにいる紫苑からもいくつかアドバイスを貰ったりしながら的を撃っていると、背中に何か柔らかいものが押し付けられる。

一瞬何か分からなくて混乱したが、後ろから手を回して姿勢の変なところを密着して直している桔梗の胸が当たっているのだ。

これはまた、桃香とは違った色気を持った柔らかさが心地よく……  
とと。危ない。暴走しかけた。

「どうした、ギル。手が止まっておるぞ？」

背後から笑い混じりの声が聞こえる。

「……ああ、桔梗にからかわれてるなあ、と確信する。」

「ごめんごめん。背中に幸せが広がってたから、堪能してた。」

矢を放つと、たんつ、と的中した音が聞こえる。

確認してみると、なかなか真ん中に近い場所だ。うん、上達してるな。

「はっはっは。ふむ、なかなか嬉しいことを言ってくれる。……ま、今の状況で的中させたのは褒めてやろう」

そう言って離れる桔梗。……なんだか背中が寂しくなった気がする。

「……桔梗？そろそろ私に代わってくれないかしら？」

「ん？……まあもう少し待て。後二射ほど……」

また問答が始まるのか、と思った矢先

「なんじゃ、ギルがこんなところにいるとは珍しい。」

「お、祭。こんにちわ」

「うむ。」

「ギルが弓を使っているのを見るのは初めてだな。」

「秋蘭まで。弓使い勢ぞろいだな」

訓練場にやってきたのは、祭と秋蘭だった。桔梗と同じように、片手には弓を持っている。

「祭と秋蘭も練習に？」

「ああ。今日は華琳様が姉者と出かけていてな。時間が空いたから練習でもしようかと思ってきたのだが・・・」

「儂もそんなようなところじゃ。暇だから酒でも飲んで凄そうかと思っておったんじゃがの。冥琳がうるさくてのう。弓の練習をするといつて逃げてきたのじゃが、途中で秋蘭と出会ったのでな。一緒に来たのだ」

なるほど。今日は弓使いが暇な日なんだろうか。

「それで？ギルが弓を持っているところなんて初めて見るが、一体どうしたんだ？」

「あーっと、なんといいですか・・・。俺って弓兵の役割の英霊なのに、弓使わないだろ？せつかくだから使えるようになっておきたくて、紫苑に指導を頼んだんだよ」

それで、桔梗も一緒に教えてくれることになって、今に至る、と説明すると、秋蘭はほう、と呟き、祭はかつか、と笑った。

「それならば、儂も教えてやろう。蜀の二人よりも経験はあるし、弓がもつと上手くなるじゃろうしな」

「ほう？祭よ、面白いことを言ってくれ。わしと紫苑の二人がかりで教えた弓よりも、おぬし一人のほうが上手く教えられるというか」

「なんじゃ、自信がないのか？」

祭のその一言に、桔梗もイラツと着たのか、売り言葉に買い言葉で次は祭が教えてくれることに。

・・・だんだんと当初の目的から離れていつてるな・・・。

「さて、ギル。儂が見てやるから、何度かやってみよ」

「ん、分かった」

それから、弓使い四人の視線にさらされつつ矢を放った。

紫苑と桔梗の二人に教えてもらっていた時点で、立ち止まっていたの射なら完璧的に当てられるようになっていたので、放った矢は大体的真ん中へと突き刺さった。

「・・・ふむ、なんじゃ、つまらん。いくつかは外すかと思っておったが・・・まあよい。立ち止まっていたの射が完璧ならば、次は動きながらの射をするぞ」

「ちょっと、まだギルさんは弓を取って一日しかたっていないのよ。ちょっと早すぎない？」

「ほう。今日だけでアレだけできたのか。ならば次の段階も今日中にはできるようにはなるじゃろ。」



そうやって祭は秋蘭を呼んだ。

何でも、走ったりしながらの射なら秋蘭のほうが上手らしい。

紫苑や祭も動きながら射ることはできるが、秋蘭にはかなわない、とのこと。

・・・ちなみに、桔梗の武器は轟天砲なので動き回る動き回らない以前の問題だった。

アレを撃つためには立ち止まらなければならぬし、半分は大剣だし。

「・・・まあ、私でどこまで力になれるかは分からないが・・・できる限りのことはしよう」

こうして、日が暮れるまで弓を射ることに打ち込んだ。

そのおかげで、立ち止まってるの射はもちろん、戦いながらや馬上からの射もほぼ完璧となった。

これからもちよつとづつ練習はしていくが、あの四人からお墨付きを貰うくらいには上達したので今度誰かとの手合わせで使ってみよう。

「ふう。・・・今日は良く眠れそうだなあ」

紫苑や桔梗、祭と秋蘭の四人とも仲良くなれたし、弓も上手くなった。良い日だなあ。

すでに日が暮れて暗くなった城内で、背伸びをして歩きつつ、そんなことを思った。

・・・

## 第九話 弓兵として弓を使うために（後書き）

宝物庫の中の宝具はいろいろと便利なものが入っているのです。

そして主人公は新しい武器を手に入れた！てってれー。という弓兵イベント。

これは完璧に紫苑たちと絡ませたいがために書きました。多分ちよつとしか弓は使わないです。

誤字脱字のご報告、ご感想お待ちしております。

第十話 みんなでお風呂に（前書き）

甲賀大活躍です。

それでは、どうぞ

## 第十話 みんなでお風呂に

弓の練習で疲れた身体を動かしながら、厨房へと向かう。

昼飯を食べてから今までぶっ続けだったので、疲れと同時に空腹もやってきた。

取り合えず何か食べて、それからゆっくり寝よう。

政務はほとんど片付けたから明日は暇だし、いつもより多めに寝ても大丈夫なはず。

とにかく、今はささと晩飯を食べて眠りたい。

明日の午後には給湯装置も出来るらしいし、風呂はそのときでいいだろう。

「・・・おや？」

厨房を覗いてみると、何故か連華とシャオの姿が。

食事をしているわけではなく、エプロン姿でお玉を持って調理の真っ最中らしかった。

「おい、連華、シャオ。」

「ぎ、ギルっ！？なんでここに!？」

「あ、ギルっ。ねえねえ、今お料理の練習中なんだけど、味見してかない？」

「こらっ、シャオ！」

「えー、いいじゃん、食べてもらおうよー!」

「ちよつとまで。今料理の練習してたのか？」

俺がそう聞くと、シャオはにっこりと笑ってうんっ、と首肯した。連華も少し恥ずかしそうに首肯したため、間違いではないようだ。

「・・・それにしても、これは・・・」

「あのねっ、これはその、ちよつと違って・・・!」

「ねえ聞いてよっ。お姉ちゃんったら華琳に教わったこととかすっぽり忘れて料理するから、大変なんだよー!？」

「変な事言わないの!」

「なによー。ほんとのことじゃない!」

わーきゃーと言い合いを始めた二人をいったんスルーして、台所をちらつと観察。

切ったネギなどの材料が散乱しており、いくつか失敗作らしき作品が並べられている。

「・・・で、何でいきなり料理なんか始めようと思ったんだ？」

まあまあ、と二人を落ち着かせてから事情を聞くことに。

二人は大人しく椅子に座り、シャオが始めに口を開いた。

「花嫁修業よ!」

「花嫁修業?」

「そ！だつてシャオはギルのお嫁さんになるんだし、お料理くらい出来ないかね！」

「わ、私も一応花嫁修業だが・・・その、姉さまが言うには、私もギルのお嫁さんになるかもしれないからって・・・」

「・・・シャオはともかく、連華もか？俺、初耳だぞ」

と言うか、シャオを嫁としてもらうことも了承してないんだけど。何故かほとんど拍子で勝手に進んでいってるが、どうすればいいんだろう。

「私は姉さまの後を継がなきゃならないし、まだ早いつて言ったんだけど・・・あ、ぎ、ギルがいやだつて訳ではなくて・・・！」

「あー、うん、大丈夫だ連華。雪連の性格はわかってるつもりだから。多分、シャオと競わせたら面白そうだなー、とか思ってるんだろう。」

ほんとにいやつて訳じゃないのよ！？とあたふたする連華をなだめて落ち着かせる。

連華は真面目な娘だから、多分上と下の姉妹の挟み撃ちを食らって引くに引けなくなつたんだろう。

「そつだ、味見して欲しいとか言ってたな。ちようど腹も減ってるし、二人の料理食べてみたいな」

「わかつた！今すぐ用意するから、ちよつと待っててね？」

「その・・・私のも、用意するわね」

そう言つて二人は再び台所へと立ち、かちやかちやと料理の準備をする。

そして、俺の前へと運ばれてきたのは、チャーハンと麻婆豆腐。どちらも少し不恰好ではあるが、美味しそうな匂いは漂つてくる。ちなみに、チャーハンはシャオ、麻婆豆腐は連華が持つてきた。

「そ、その、今日初めて料理したから、ちょっと自信はないんだけど……」

「ついさっきまで華琳に教わつて作つてたものだから、多分美味しいよー!」

「へえ、今日初めて作つたにしては上手じゃないか。凄いな」

「そんな……華琳の教え方が上手かつただけよ」

「でも、作つたのは連華自身だろ?ちゃんと身についてきてるってことじゃないか」

「そ、そうか……ありがとう」

「もー!お姉ちゃんと喋つてばかりじゃなくて、料理食べてよー!」

俺と連華が話しているところに割り込んでそう叫ぶシャオ。

まあ、確かに飯はさめないうちに食べたほうがいいだろうな。

「分かったよ。じゃあ、こっちのチャーハンから」

「うん。召し上がれっ」

レンゲで掬って一口。

「……ん、少し焦げてるところもあるけど、不味いってほどじゃない。」

「と言うか、シャオの身体で中華なべを振れたのが不思議なんだけど……。」

「まあ、鈴々がアレだけの怪力を持っているんだし、小柄イコール非力って訳じゃないからな、この世界。」

「美味しいよ、シャオ。これなら完璧にチャーハンを作れる日も近いな。」

「本当っ！？ありがとっっ！」

「そう言っただけの元へと飛び込んでくるシャオ。食器を倒さないようにシャオを受け止める。」

「こ、こらシャオっ！危ないじゃない！」

「へへーん。ちゃんとギルが受け止めてくれるから危なくないもん。」

「だからって……！」

いきなり飛び込んできたシャオと、いきなりの出来事に怒った連華が言い合いを始めそうになるが、それを手で制す。

「あー、待った待った。奇跡的に怪我もしなかったから大丈夫だよ。な、連華。」



「そうだけど・・・」

「シャオ。これからはこういう危ないことしたら駄目だからな。」

「はい。・・・ごめんね、ギル」

少し反省したように返事をするシャオ。

うんうん、きちんと謝れる子はいいい子になるぞ。

「よし。じゃあ、次は連華の麻婆豆腐食べようかな。」

「ど、どうぞ」

シャオを地面に下ろしながらそういうと、連華は俺の前へ料理を置いてくれた。

またレンゲで掬って口に運ぶ。おお、熱々で美味しいじゃないか。少し水っぽい感じもするが、今日初めて作ったにしては上出来だ。二人ともこのまま頑張ればとても料理上手になるだろう。ううむ、見事に胃から捕まえられそうである。

「うん、こっちも美味しいな。これならすぐに上手くなるよ」

「そ、そうかしら・・・」

「ああ。俺が保障するって。良いお嫁さんになるよ」

「っ!?!?・・・そ、そう」

恥ずかしそうに顔を真っ赤にする連華。褒められなれてないんだろ  
うか。

いつもは男言葉の連華がここまで柔らかい言葉を使っていることは相  
当恥ずかしいんだろうな。

こんなことを言っただけだが、とても可愛いものである。

「ほら、二人も一緒に食べようぜ」

せっかく作ったんだし、みんなで食べたほうが美味しいだろう。

俺の提案に、二人はすぐに返事を返してくれた。

三人で卓について、料理の練習中に起きた出来事なんかを聞きなが  
ら食べていると、すぐに料理はなくなった。

「ごちそうさま。さて、後は片付けだな」

「うう、ごめんなさい」

食事中、食べさせてもらったお礼と言うことで台所の片づけを手伝  
う、と言ったところ、連華に猛反対された。

散らかしたのは私たちだから、私たちが片付ける、とかそもそも味  
見のはずだったんだから、ギルがお礼をする必要はない、とか。

美味しいものを食べさせてもらったし、味見とか関係なくお礼した  
いんだ、と言っただけで何とか納得させたがな。

「よし、取り合えず材料の欠片を集めて、こぼれた汁を拭こう」

そういつつ、ジャケットを脱いで厨房にある余ったエプロンを身  
に着ける。

こういう作業のときには服が汚れるかもしれないからな。

取り合えず俺は崑崙の周りの欠片を集めたり、飛び散ったりこぼれ  
たりした汁をふき取る。

連華とシャオの二人もせっせと作業しているようだ。この分なら、

十分も掛からずに後片付けは終わるだろう。

・・・にしても、シャオがこうも片付けに精を出すとは思わなかった。

いつものわがまま姫っぷりはなりを潜めているし・・・。もしかしたら、今日の花嫁修業で大人に一步近づいたのかもしれない。後で褒めてあげないとな。

・・・

「おわったー！」

「ふう、終わりね」

「よっし、ご苦労さん」

予想通り十分足らずで片づけを終えた俺たち。

先ほどまでの惨状から一転し、きちんとした厨房へと戻っている。

「火の元は大丈夫だよな？・・・うん、大丈夫だ。さ、帰ろうか」

「うんっ。・・・ねえねえ、シャオ、ギルのお嫁さんになれるかなあ？」

厨房から出た瞬間に、シャオが腕に抱きついてそんなことを聞いてくる。

・・・ううむ。料理は美味しかったし、片付けのときの手際も悪くなかった。

現状でこれならば、シャオはまだまだ伸びしろがあるんだし、将来はもしかしたら良妻賢母となるのかもしれない。

「・・・そうだな、なれるかもな」

「ほんとっ!?!やったー!」

今は、まだまだ足りないところがあるけど、これから先が楽しみだな。

そんな風に思いながら受け答えをしていると、シャオとは反対側を歩いている連華が、俺のジャケットの袖を掴んで引っ張ってくる。

「どうした?」

「あ、あの・・・私は、どうかしら・・・?」

どうかしらって・・・ああ、そうか。連華も花嫁修業のために料理してたんだよな。

そりゃあ、花嫁になれるかどうかは気になるか。

「ああ、ばっちりだ。俺だったらすぐに貰いたいくらいだよ」

「そっ、そう?・・・ふふ、ありがとう、ギル」

連華はその猫のような瞳を細めてそっつと笑った。

袖を握ってくるという行動もあいまって、凄くドキッとした。

ええい、孫家の姉妹は可愛すぎるだろ!何だこの姉妹。

いたって冷静そうに装いながら、どういたしまして、と返す。

「駄目だよギルっ。ギルのお嫁さんはシャオなんだから!」

「まだ決まったわけではないでしょうっ」

「だってギルに会ったのはシャオのほうが早いし、その分有利なんだから」

俺を挟んで姉妹喧嘩をする二人を微笑ましく思いながら、呉の屋敷へと向かう。

道中は常にどちらかから話しかけられていたので、一切暇しなかった。

二人を屋敷まで送り届けたあと、一人で街を歩くときの寂しさがいつもの倍ぐらいに感じるくらいだった。

「さつてと・・・予想外に遅くなっちゃったな。ちょっと急ぐか。」

恋と全力で戦った日の次くらいに疲れた。

帰ったら真つ先に寝台に飛び込もうと思いつながら自室の扉を開ける。

「あ、お帰りなさい、ギルさん。」

「お帰り。遅かったじゃない。何やってたのよ」

「・・・月。それに詠も。何か用か？」

「何も用はないけど・・・用がなきゃ、あんたの部屋にきちや駄目なの・・・？」

そう言って上目遣いになりながら俺の目を見つめてくる詠。

・・・むむ、確かにそうだな。

「えへへ、ご迷惑かと思いましたが、お邪魔してました。」

「ん、全然構わないよ。・・・ごめんな、詠。」

謝りながら詠の頭を撫でる。

詠は、ん、と気持ちよさそうに声を上げる。

「・・・別に気にしてないわ。」

頭から手を離すと、詠はその部分を手で押さえて不機嫌そうにそっぽを向く。

不機嫌そう、とはいっても耳まで真っ赤にしているので多分照れ隠しだろう。

二人が座っている寝台に上がり、仰向けに倒れこむと、両隣に二人が寄り添ってくる。

「・・・ギルさんのおいがします」

「こっちは月の匂いがするよ」

「へう・・・今日お風呂入ってないから臭いかもしれないです・・・」

「はは、大丈夫。全然そんなことはないよ」

強いて言えば少し汗のにおいがするくらいだが、その程度は全く気にならない。

・・・と言うか、女子って問答無用で良い匂いするからずるいと思う。

今となりに寝てる月も詠も、風呂に入っていないとは思えないほど良い匂いがする。

「詠も良い匂いするな」

「ちよっ、ばっ、髪の毛匂い嗅ぐなばっ」

「ふははー、諦めろー」

「何棒読みで言って・・・あ、ちよっどこ触ってるのよ!」

「太もも」

「答えるなっ」

どこ触ってるんだといわれたから答えたら怒られた・・・。  
理不尽な気がしなくもないが、まあ詠が恥ずかしがり屋のツン子だ  
っていろいろは前から知ってるし、別に気にすることでもあるまい。  
これだけ疲れてるんだ。最後の最後まで疲れきってやる。

「あ、ギルさん・・・その、するんですか?」

服の中に手を入れられながら、月が潤んだ瞳でそう聞いてくる。  
すべすべと柔らかいお腹を撫で回していると、月はくすぐったそう  
に身をよじる。  
もしかしたら俺以上に疲れてるかもしれないと思っていやか?と尋  
ねてみるが、いいえ、と返してくれた。

「えへへ。また私と詠ちゃんと一緒に、なんですね」

「うう・・・せめてお風呂には入っておきたかった・・・」

そんな詠の独白を聞かなかったふりをして、俺は二人の肌へと手を  
伸ばした。

大丈夫。明日にはいつでも風呂に入れるようになってるはずだから。

・・・

「・・・朝か」

朝日が目に入ると自然に目が覚める。眠気はない。

・・・早起きしすぎたらしい。早朝訓練をしている兵士の声すら聞こえない。

まあ、健康的でいいとは思うが。

「・・・月も詠も、幸せそうに寝てるなあ。」

隣ではハイニーソックスとガーターベルトだけを身に着けた二人がすうすうと寝息を立てて眠っている。

月と詠に抱きつかれている腕をゆっくりとはずし、起こさないように寝台から降りる。

疲れは取れてるから十分眠れたということだろう。背伸びをすれば、背骨がぱきぱきと気持ちのいい音を立てる。

「ふう。・・・ちよっと早いけど、朝飯を食べに行くか」

二人に布団を掛けなおして、少し乱れている髪を直してから、部屋を出る。

あー、朝日が目にまぶしい・・・。

「お、ギルじゃねえか」

「ん？・・・瀧か。どうしたんだ、こんな朝早くから」



「そりゃこっちの台詞だぜ。ギルがいつつも起きてくるの、もうちよい後だろ。」

「あー、なんだか目が覚めてな。眠くないから二度寝もできないし」

「つまり暇ってことか」

「……そういうことになるな」

「んじゃ、俺と一緒に走るか？」

「走る？」

灌の説明によると、ライダーの特訓についていくための体力づくりとして三日に一度の間隔で城壁を走っているらしい。良くやるなあ。

「で、どうする？」

「んー、そうだな、俺も一緒に走ろうかな」

「おう、了解。さっさと着替えてこいよ。運動用の服くらいあるだろ？」

「あるけど……」

そういつつ宝物庫の服と今の服を交換する。

「一瞬で着替えられるから」

「・・・英霊つてずりいなあ。」

「まあまあ。ほら、行くうぜ」

「あいよ。」

城壁の上へと向かっている途中、見張りの兵以外の兵には一切出会わなかった。

見張りの兵は俺を見て驚きだす始末だし、いかにこの時間に出歩く人間が珍しいことが分かる。

瀧は見張りの兵と仲が良いらしい。まあ、城壁ランニングの度に話しかけてるらしいから、仲良くなるのも当然か。

実はこいつ、初対面の人間とも数時間後には一緒に酒飲んでるぐらいに人当たりが良い。

瀧は街の警邏の仕事をしているのだが、店で暴れている暴漢とすら打ち解けて自首させるように導いたことも多々ある。

敵対している奴とすら仲良くなる瀧が、見張りの兵と仲良くならないうほつがおかしいのだ。

「よっしゃ、まず軽く五周くらい行くか。」

「五周？大丈夫なのか、瀧」

「あん？大丈夫に決まってるだろ。最初はきつかったけどな。今は余裕もって走れるぜ」

・・・一体何時からやってるんだろ。

「よっしゃ！行くぜ」

掛け声と共に走り出す瀧を追うように俺も走り出す。一定のリズムを崩さずに走る瀧を見て、走り慣れてるなあと感心する。

かく言う俺もここに来た当初より体力はついている。ついていけないことはないだろうが、ペースは一定に保つていこう。

規則正しい呼吸で走り続ける瀧と共に城壁の上を五周走りきる。

「よっしゃ、調子いいからこのまま街を走るか！」

そう言っただけじゃなかったのかと驚きながらもついていくと、

言どおり街の中を走り始める。仕事の都合上朝が早い人たちが出てくる時間帯になったからか、ま

ばらながらも人が活動を始めているようだ。

街の人とも仲が良いらしい。おはようさん、とか頑張れー、と瀧に声を掛ける人がかなりいる。

「人気だなー、瀧は」

「はっ、そうか、ふっ、ねえ、ふっ」

呼吸の合間に言葉を織り交ぜるようにして喋る瀧。

警邏の人間も声を掛けられることはあるだろうが、それと比べても瀧の人気は高いほうだろう。

大体瀧の警邏ルートとは違う場所の人と仲が良いのは驚くしかないだろう。

「・・・これも、瀧の才能かもしれないな・・・」

破天荒な瀧がなんだかんだいって受け入れられているのは、こういう人当たりの良さとかがあるのかもれない、と思った朝だった。  
・・・ちなみに、この後街の裏路地すべてを走ってから早朝ランニングは終了となった。

今まで知らなかった裏路地のルートやらを教えてもらえたのはラッキーだったな。今度街の散歩でもするときにゆっくりと見るとしよう。

・・・

ランニングの後、軽く汗を飛ばして服を着替える。

まあ、後で風呂に入れるとなればこのくらいは我慢できるな。

甲賀が作業している給湯装置設置予定地に向かう。

城の風呂場の後ろに建てられた小屋の中に入ると、中では甲賀が宝具を組み込んでいるところだった。

「おはよう、甲賀」

「む、ギル。・・・もう朝になったか。」

「・・・もしかして、徹夜か？」

「結果的にはそうなるな。そう心配そうな顔をするな。慣れているから苦ではない」

こちらを振り返った甲賀にそういわれ、心配そうな顔をしてたかと顔を触りながら呟く。

それから少しだけ装置を組み込むために手を動かしていた甲賀だが、装置が完成したのか、蓋らしきものを取り付けてから立ち上がる。

「これで完成だ。理論上はこれで動くはずだが、なにぶん宝具を弄ったのは初めてでな。不具合が出るかもしれない」

「ありがとう、甲賀。・・・で、操作を教えてくださいんだけどいくつかスイッチらしきものがついているが、俺では全く理解できない。

つまみらしきものがついているので、それで温度調整をするのだらうと推測できるだけだ。

「ああ、元よりそのつもりだ。いいか、このボタンで・・・」

甲賀の説明によって給湯装置の使い方は理解した。

と言っても、大まかに分けて、お湯を沸かす、温度を調節する、あとは給湯を開始、停止させる機能があるというだけだ。

後は故障したときに甲賀が弄る用の機能がついているだけなので、覚えやすく助かる。

「取り合えず入ってみるか。一刀を呼んで来い」

「了解。ちょっと待っていてくれ」

「ああ。俺は最終的な調整をランサーとやっておくから、別に急がなくても良い」

小屋を出る直前にその声を掛けられつつ、俺は一刀を探しに城へと向かう。

この時間なら、多分城のほうにいるだろう。

「・・・やっぱり」

「え？・・・あ、ギル」

俺の声に気づいた一刀がこちらに振り返り、駆け寄ってくる。幸い一人のようだ。連れ出しやすい。

「給湯装置が完成したらしくてな。実験ついでに風呂に入ろうかと思つて」

「ほんとか！？いやー、ちょうど入りたいと思つてたんだよなー」  
そう言つてにつこり笑う一刀をつれて再び城内の浴場へ。  
入り口にはランサーの複製が立っており、すでに脱衣所で甲賀が待っていると伝えてくれた。

「ありがとう。それじゃあ、入らせてもらうよ」

「はっ。ごゆっくりどうぞ！」

敬礼をしてくるランサーの複製に手を上げて答えながら、「ゆ」と書かれた暖簾をくぐる。

脱衣所では甲賀とランサーがすでにタオル装備で待っていた。

「来たか。大体の調整は終わった。後は入つて確かめてみるだけだ」  
さつさと着替える、と目で訴えてくる甲賀に急かされる様に、俺たちは服を脱いで脱衣籠にいれ、タオルを腰に巻く。  
先導するように入つていったランサーと甲賀の後ろに続き、浴場へ。

「おお」

「どうだ？できる限り一刀の設計図に準拠してるつもりだが」

以前入った時とは全然違う内装となっている。

いくつか並んで設置されているシャワーとか、口からお湯が出てくるようになってる籠の頭なんかが増設されてある。

壁には富士山の絵が書いてあって、現代日本の銭湯を思い出す内装に替わっていた。

「すげー！ここまで無茶な注文して平気かなあ、とか思ってたけど、かなり再現されてる！」

「ああ。俺も一刀の設計図を見たことあるけど、ほとんどこれと一緒だ。」

「まあいい。テストもかねてシャワーで身体を洗おう。・・・貴様らから、異常なほど生臭いにおいがする。あと女の甘いにおいも。」

「うっ」

「・・・かたじけない」

少し半眼でこちらを睨んでくる甲賀と目を合わせないようにそそくさとシャワーの前まで移動する。

風呂椅子に座ってシャワーの栓をひねる。

「お、シャワーだ」

楽しそうに一刀がシャワーから流れてくるお湯を身体に受ける。

俺も一刀と同じようにシャワーからのお湯で身体の汚れを流してい

く。

「・・・うわー、なんか向こうで銭湯に行ったときみたいだな」

感慨深そうに一刀が呟く。

確かに。こうして両隣に純日本人の外見である一刀と甲賀がいるとどこかの銭湯に着たかのような錯覚を覚える。

「ふむ。シャワーに不具合は見られんな。」

「ええ、こちらにも不具合はありません。」

「次は頑張ってくれた工作忍者たちに入らせてあげてくれよ、甲賀」

「ん、元よりそのつもりだ。そのくらいの役得があったほうが良い」

男四人が並んで頭を洗い始める。

おー、なんか感動するな、これ。

ちなみにこの排水はこの後下水道を通って川へと戻っていく。

甲賀の話によると一応浄水はするらしいが期待はするな、とのこと。ふうむ、しかしこれはいいものだ。

男の意見だけではなく女性の意見も聞きたいので予定通り後で朱里たちにも入ってもらうことにしよう。

「そつえば宝具の起動のための魔力ってどうしたんだ？」

「霊脈からちよっぱらってきた。近くにいいのがあったからな。少し弄って、宝具が常に発動するくらいの魔力を貰ってる」

大元には影響ないから大丈夫だ、と断言する甲賀。



甲賀がそこまで言うなら大丈夫だろう。

「さて、頭も身体も洗ってすっきりしたことだし、ついにメインディッシュだ」

「おお・・・！」

そっぴいなながら立ち上がり、甲賀や一刀が本日のメインディッシュ、浴槽へと歩いていく。

・・・

「はあ〜」

アレから数分。

かぽーん、と魔術によって出された音が浴場内に響く。

このかぽーんという音は五分ごとになるようになっており、入浴中の目安として使えるようになってる。

・・・というか、本当にこの音が出るようにするのは・・・。

「いや〜、いいねえ、風呂は」

満足そうなため息をついた一刀がまた満足そうにそう言った。

再び四人一列に並んで湯に浸かっている俺たちは、頭の上にタオルを乗せながら風呂を堪能していた。

「こつちも不具合は無い様だな。・・・うむ、ゆっくり浸かるとするか」

しばらくまったりと浸かった後、全員ほくほくとした顔で暖簾をく

ぐっっていた。

「大成功だったな。これで城内での風呂の問題は解決したといっても過言ではないな」

「ああ。・・・それじゃあ俺は朱里たちに話をつけてくる」

「入れるなら夜にしろ。工作忍者たちには日が暮れるまでに入っておけと伝えておく。」

「分かった。それじゃ、甲賀、ランサー、ありがとな」

「ふ、面白そうだと思ったから手伝ったまでだ。礼には及ばん」

「また何かあれば是非！喜んでお手伝いいたします！」

「はは、なら、またお言葉に甘えるかもしれないな。」

そう言うってから三人に改めて別れを告げ、政務室へと歩いた。

・・・

「はわわ、そうなんですか・・・」

「給湯装置にしゃわー……。完成したんですね」

政務室に行くと朱里と雛里が政務を始めるために準備をしているところだった。

早速話を切り出してみると、今日の夜なら大丈夫です、と二人とも同意してくれた。

「よし、じゃあ日が暮れた辺りに迎えに来るから、政務室にいてくれ」

「はいっ」

「はい……！」

その後政務の準備を手伝った後、政務室を後にする。

今日は政務の仕事はないし、何より今日はちよつと試すこともある。日が暮れるまではまだまだ時間があるし、ゆっくりといくかな。

「さて、忘れないうちに一つ目はやっておかないと」

日が昇っているうちにやるべきことは、大まかに分けて二つある。

一つ目は……。

「お、こつちか。」

瀧に今朝教えてもらった裏路地の様々なルートを確認することだ。

こつちという通路が放っておかれると、犯罪者なんかは逃走するためや隠れるために使うかもしれない。

……まあ、かなり治安はいいほうなので、そんなことはほとんどないとは思うんだが。

「むっ？」

いくつかのルートの安全を確認し、少し狭い隙間を通ると、表通りからは外れた広場に出る。

こんなところがあったのか、と思いながらきよきよと回りを見

ていると、近くから声が聞こえてくる。

「だーかーらー、ギルの好きそうな食べ物を調べて欲しいのよ!」

「で、でも・・・私がこっそり忍び寄ってもギル様は気づいてしまわれるんですよ」

「んもう! 明命もあの黒いみたいな気配遮断を身につけなさい!」

「無茶ですよ! 小連さまが直接聞いてはどうですか? ギル様なら、こっそり調べるより簡単に教えてくれそうですよ?」

・・・声と会話内容から察するに、ここには明命とシャオがいるらしい。

と言うことは、もしかしてこの広場へ誰も来ないようにバーサーカーに入り口を塞がせていたのか。

うーむ、流石のシャオもこっちのルートから人が来るとは予想していなかったんだろう。俺もこんなところに出るとは予想してなかった。

「そんなの意味ないじゃない! 先にギルの好きなものを調べて、それを作れるようになってれば、お姉ちゃんより一歩先にいけるですよ?」

「それは確かにそうですが・・・」

先ほどから話を聞いていると、どうやら俺の好きな食べ物を明命に調べさせようとしているらしい。

しかし、明命はその頼みに難色を示している、と。

・・・まあ、明命はちよつと抜けてるところがあるからなあ。

猫に目がないところとか。あれは結構致命傷だと思う。

そういえば以前も明命からいろいろ聞かれたりこっさり後を着けられたりしていたのだが、あれもシャオのお願いがらみなんだろうか。アサシンの気配遮断で慣れている俺はそう言った類の『気配を消そうとする』感覚に敏感になっているのですぐに気づいてしまったのだが。

「ううむ。しかし明命の言うとおり直接聞きにすればいいのに」

多分昨日の花嫁修業の一環としてまた料理を食べさせたいと考えてくれているんだろう。

そして、俺に食べさせるのだったら俺の好きな料理のほうが良い、と思いついて明命に調査を依頼、って所か。

直接聞きに来ないのは・・・やはり、サプライズで食べさせてあげたいとか考えてくれているのか・・・？  
そうだとすると、とてつもなく嬉しく感じる。

昨日の一連の流れから、俺の元にシャオが嫁に来るのも悪くないと思っっている辺り悪質である。

まさかシャオ、計算済みか・・・！？

シャオ、恐ろしい子・・・！

「・・・ま、なんにせよこのまま盗み聞きはよくないな。」

少し遠回りになるが、いったん戻って別ルートから行こう。

そう思って踵を返した瞬間、足元でぱきっ、と音がした。

慌てて足を見てみると、枯れ枝を踏んでしまったらしい。なんて王道な・・・！

「っ！誰ですか!？」

向こうまで響いたのか、明命が俊敏に音の方向……つまり、こちらに向けて構えを取る。

「バーサーカーの目をかいくぐってここまで来れるなんて……相当やるみたいね」

これは出て行くべきなんだろうか。

……このまま逃げたら後で大変なことになりそうだ。諦めるしかあるまい。

害意がないことを示すために両手を挙げながら二人の前に歩み出る。

「あれ？ギルじゃない」

「ぎ、ギル様でしたかつ」

俺の姿を見た二人の反応は対照的だった。

きよとんとした顔をしつつも冷静な反応を返したシャオと、構えを解いてあたふたと取り乱した明命。

「どしたの、こんなところまで。……っていつか、どうやってきたの？」

「そ、そうですよつ。ここへの入り口は、バーサーカーさんが塞いでくれてるのに……」

「あーっと、話すとき長くなるんだけど……」

二人に問い詰められ、俺は裏路地の隠しルートのことを話した。

前も話を聞いてたの？と聞かれ、今日この場所を知ったばかりで、話はちょっとしか聞いてない、と返した。

あの話の中身を全部聞いていたとなると少し面倒くさくなりそうだったので、来てすぐに枯れ枝を踏み、会話内容は詳しく聞こえなかった、と言っておいた。

「そ．．．ならいいわ。過程はなんにせよ、あんなところまで通ってシャオに会いに来てくれた、ってことだもんねっ」

そう言っただけで俺へと飛び込んでくるシャオを受け止める。  
凄いいびりタイプシンキングだな、と感心しながら頭を撫でてやる。

「で、こんなところで何の話をしてたんだ？」

立場的には俺は何も知らない人なので、こういっておかないと怪しまれる。

「ん、明命とちよっと訓練してたの」

「へえ、花嫁修業といい、シャオは意外と頑張り屋さんなんだな」

「えへへー。シャオはちゃんと頑張る子なんだからっ」

そう言っただけで嬉しそうに飛び跳ねるシャオ。

「明命もお疲れ様。シャオはお転婆で大変だったろ？」

「あ、えと．．．その、まあ」

「あー！何よそれ、ひどーい！」

明命が少しだけ視線をそらしながら気まずそうにそう答えると、シ

ヤオが頬を膨らませて怒った様に声を上げる。  
まあまあ、と言ってなだめるように頭を撫でるとすぐに機嫌が戻ったので、多分本気で怒ったわけではないんだろう。

「ま、今日の訓練はもういいわ。ねえギル、シャオと明命と三人でどこか行かない？」

「わ、私もですかっ!？」

「当たり前じゃない。ね、いいでしょ？」

「あー……」

まあ、二つ目の目的は一人じゃなきゃ駄目、ってことはないから大丈夫だけど……。

「別にいいけど……午後からは俺、別にやることあるから付き合いえないぞ？」

「あれ、今日はお仕事休みじゃなかった？」

「……なんで俺の予定把握してるんだ？」

「だって、シャオはギルの奥さんになるんだもん。夫の予定くらい把握してないとなっ」

「……まあいいや。仕事じゃなくてな。ちよつとした野暮用なんだけど……どうせなら一緒に来るか？」

「えっ? いいの?」



「ああ。多分作業的には単調になるからな。話し相手が欲しいんだよ」

「じゃあじゃあ、シャオが話し相手になってあげる。」

「そっか。」

「明命も午後は大丈夫よね？」

「はいっ。大丈夫ですけど・・・ご迷惑ではないですか？」

シャオから俺へと視線を変えて聞いてくる明命。

「全然そんなことないよ。むしろ、明命にもきて欲しいな」

「あ・・・。は、はいっ！」

嬉しそうに返事をして俺の近くへ寄ってきた明命の頭を撫でてやる。明命は猫好きだが、明命本人は犬っばい。撫でると明命の頭に犬の耳と尻に全力で左右に振られる尻尾が見える。

「そだ。バーサーカー、戻っていいよー」

いつの間にか広場の入り口にまで来ていたバーサーカーにシャオが声を掛ける。

すると足元から粒子になっていくように霊体化していくバーサーカーだ。

「いこつ、ギル」

「ああ。」

シヤオは俺の右腕に両腕を絡ませ、明命はニコニコと左隣を歩いている。

・・・さて、ここから近いところは・・・蜀の屋敷か。

・・・

## 第十話 みんなでお風呂に（後書き）

と言っわけで、しばらく呉中心になるかもしれません。

そして完成したお風呂。これで定番のお風呂イベントができる！

誤字脱字のご報告、ご感想お待ちしております。

## 第十一話 お菓子を食べるために（前書き）

サブタイトルを考えるのって難しいといまさら気づきました。  
今回はいろんなところに手を伸ばしています。

そしてようやくキャスターの正体が判明します。

それでは、どうぞ

## 第十一話 お菓子を食べるために

二つ目のやるべきこと。

それは俺の宝物庫から出てきた一つの宝具・・・地下に眠るものを探し出すという羅針盤だった。

地下にあるものなら有形無形問わず探せて、探す深さはこめた魔力によって変わる。

これならば温泉も突き止められるのではないかと思い、こうして街中を歩いているのだ。

かれこれ一時間は歩いているが、いまだに羅針盤の針はくるくると回るだけで一方向を指さない。

「温泉とかってないのかな、この辺」

「温泉？」

「そう。地面から湧き出るお湯のことをそういっただけで・・・」

見たことないなあ、とシャオ。明命も見ることがないと答える。

・・・火山とかないから温泉もないのかね。

「・・・ここにはないか。次はあっちだ」

「あっちね。いっこいっ」

「あ、待ってくださいよー！」

次は呉の屋敷の近くを調べてみるか。

俺たちは人ごみを掻き分けながら呉の屋敷へと向かう。

羅針盤にまだ反応は現れず、くるくると回っているだけだ。  
流石に街中にはないか、とため息をつきかけたそのとき、前方から  
声が聞こえてきた。

「ぎ、ギル！偶然ね」

顔を上げてみると、そこには思春を連れた連華がいた。

「連華。それに思春も。こんにちわ」

「ええ、こんにちわ。・・・その、ギルは何をしてるの?」

「おねーちゃんには関係ないでしょー!」

「シャオ!?あなた、どうしてギルと・・・!?」

「んふふー。ギルと一緒にいて欲しいって言うてくれたの。ねー、  
ギル?」

「ん?ああ、一人で作業するのが心もとないから、話し相手になっ  
てくれてシャオと明命に頼んだんだ」

「・・・なんだ、そついつと」

「むー、ちょっと正直に言いすぎじゃない。」

ほっとした様子の連華と頬を膨らませるシャオ。

「そついえば、連華は何してたんだ?」

思春を連れて歩いていたってことは、城に何か用事があったとか・  
・？

「え、ええと・・・と、特に何もしてないわ。街を歩こうかなって  
思ってた・・・」

「そうなんだ。あ、ちょっと早いけど俺たちと飯でもどうだ？ちょ  
うど終わりにしようと思ってたし」

本当はまだまだ余裕があるが、四人もつれての温泉探索は効率が悪  
いだろう。

それに、まだまだ日暮れまで時間があるといっても余裕は持ってお  
きたい。

早めに朱里たちの元へ行っておいたほうがいだろうしな。

「そ、そうね・・・。ご一緒させてもらおうかしら」

「ん、じゃあ行こうか。」

新たに二人を加えて俺たちは歩き出す。

向かうのは・・・うーん、どこへ行こうかな。

あ、そういえば前に流々が手伝いをしていた店があったな。あそこ  
にしよう。

・・・

「いただきますーす！」

六人がけの席へと案内された俺たち。

俺の両隣にシャオと連華が座り、対面に思春と明命が座った。

その後、それぞれの注文を店主に告げる。  
時間が中途半端だからか、客は少ない。  
そのためかすぐに注文した料理が来て、一番にシャオがレンゲを手  
に取り、先ほどの挨拶を口にしたのだ。  
それに釣られるように残りの四人もいただきます、と声を合わせる。

「ギールー」

「んー？」

「はいつ、あーん」

名前を呼ばれて振り向いてみれば、レンゲに乗ったチャーハンを差し出してくるシャオがいた。

「ちよつ、シャオ!？」

「あーん」

あ、美味しい。うむ、この街の飲食店ははずれがないのがいいよな。

「ギルっ!？」

連華がそんな俺たちを見て何故か声を荒げる。

「う、うう・・・ぎ、ギルっ!」

「おお?」

急に連華に声を掛けられ、少しびっくりする。



振り返ってみると、連華もシャオと同じように箸を突き出してきている。

箸には餃子が挟まれており、連華の腕が震えているのか、ぷるぷると餃子も震えている。

「あ、あーん！」

威嚇するような圧迫感と共にそう言い放つ連華。

あれ、あーんってもつとこつ、和やかな雰囲気で言い放つ台詞じゃなかったか。

この娘、真剣勝負の時のように気合入ってるんだけど・・・。

「あー」

取り合えず食べないことには始まらないので餃子をいただく。

おお、肉汁が良い感じに染み出てくる。

「ありがとう、連華。」

その後、シャオと連華に俺の麻婆豆腐を食べさせた。

二人とも嬉しそうにしていたのでよしとしよう。

全員が食べ終わった後、五人分の料金を払って店から出る。

「ぎ、ギル。自分の分は自分で払うわ」

「いいっていいって。お金のことなら気にしなくていいから」

黄金率のことは言っているはずなのだが、やっぱりみんなは遠慮するみたいだ。

俺と良く食べに行く娘たちはあまり気にしないようになったけど、

今日初めて一緒に行った連華は遠慮するか。

「ギル、ごちそうさまでした。お礼に今度はシャオが何か作ってあげるからね!」

「ん、どういたしまして。楽しみにしてるよ」

「じゃ、じゃあ、私も今度料理を作る!」

「そっか。分かった。そっちも楽しみにしておく。」

「・・・ふん。一応礼は言っておく」

「ごちそうさまでしたっ。じゃあじゃあ、私は今度お仕事のお手伝いしますっ」

「おう。何かあったら頼むな」

「はいっ」

その後、四人を呉の屋敷まで送り、城へと向かう。  
そろそろ日も暮れそうだ。朱里たちを迎えに行かないと。

・・・

政務室へとたどり着く。

こんこん、とノックの後、扉を開ける。

「朱里、雛里、いるか?」

「あ、ギルさん。二人ともいますよ」

「あ、あわわ・・・お疲れ様でしゅ」

政務室の中では、二人とも書類を片付けている最中だった。

しかしそれももうすぐ終わるだろう。元々の量が少なかつたし、二人の処理能力なら完全に日が暮れたぐらいに片付くはずだ。

かといって何もしないのもあれなので、少しくらいは手伝う。

「こっちの書類片付けておくよ。」

「はわわ、すみません」

「いって事よ。二人にも早くシャワーを体験してもらいたいしな」

「あわわ・・・楽しみです」

そう言って笑う雛里。

女の子だからやはり身だしなみ関係の充実は嬉しいんだろう。

それなら、道具を使ってまで改築した甲斐があったというもの。

朱里と雛里がどんな反応をするか想像しながら筆を動かしていると、すぐに片付いた。

「よっし、終わった」

「こちらも終わりましたっ」

「こっちもです・・・!」

「ん、じゃあ片づけしておくから二人は風呂に入る準備をしてきて

くれ」

「はわわっ、そんな、お片づけをお任せするなんて……」

「大丈夫だから。それに、俺が片付けてる間に二人が準備してきたほうが効率がいいだろ？」

「あわ……確かにそうです……」

少し渋った二人だが、半分無理やり納得させる形で準備させに向かわせた。

政務の道具を片付けるのぐらい一人でできるし、女の子の準備は往々にして時間が掛かるものだ。

しばらくして準備を終えた二人が戻ってきた。

「よし、じゃあいこっか」

「はいっ」

「はい……!」

……

二人と共に風呂場へと到着する。

取り合えず服を脱ぐ前に説明しておかなくてはならないので、服を着たまま浴場へと入る。

「はわわ……凄く変わっちゃってますっ!」

「あわわ……見たことがないものが増える……」

龍の口から常に出てくるお湯や、シャワーとカランに二人は興味津々のようだ。

「これがシャワー。で、こっちがカラン。ここの栓を右にひねるとシャワー。左にひねるとカラン」

実際に出して説明する。

二人は目をぱちくりとさせて驚いているようだ。

「す、凄いです。これなら髪の毛や頭が洗いやすくなります・・・」

「桶にお湯を溜めておけるのも便利ですね」

自分でも栓をひねって確かめている二人。

「それから、こっちはいつでもお湯が張ってある浴槽。川の水をお湯にしてここの龍の口から出て、この床についている穴を通して川に戻る。」

「川から水を引っ張ってきたんですか!？」

「ああ。まあ、いろいろと手を借りたけどね」

甲賀のところの工作忍者とか複製ランサーとか。彼らがいなければ完成まで数年掛かっていたかもしれない。

「よし、説明はこれくらいでいいだろ。後は実際に使ってみてくれ。」

脱衣所へと戻り、二人にそう告げて俺は脱衣所から出る。  
さて、後は二人が出てくるまで待とうかな。

・・・

脱衣所で衣類をすべて脱ぎ、生まれたての姿となった朱里と雛里の二人は、手ぬぐいだけを持って浴場へと戻ってきていた。

「このシャワーっていうの、凄いいね」

「うん。私は髪が長いから、こういうのがあると洗うのが楽になるから嬉しいな」

「あ、そっか。雛里ちゃん、かなり髪の毛長いもんね」

そんな他愛もない会話をしながらシャワーを使う二人。  
しばらくシャワーの便利さを体感した後、常にお湯が張ってあるという浴槽へと向かう。

龍の頭を模した像の口から、どばどばと絶え間なく湯が出てくる様子は、二人の興味を引いた。

「近くで見ると、改めて凄いつて思っちゃうね」

「うん……。ギルさん、宝具を使っただけで言ったけど……」

「川の水をお湯にしたり、水道を整えたり……。そんな宝具もあるんだね」

「……今度、ゆっくりお話したいな」

「うん。私も。」

にこやかに会話をしつつ、二人は湯船に身体を沈める。

「ほわぁ・・・沸かしたお湯を溜めてるわけじゃないから、お湯が冷めなくて暖かいね」

「そうだね。なんだか、疲れが全部溶けちゃうみたい」

「ふふ、確かにそんな感じがするね」

「早く皆さんにも試してもらいたいね、シャワーとか」

「愛紗さんとかは雛里ちゃん見たいに髪が長いから、喜んでくれるかもね」

二人の頭の中には、愛紗や翠といった髪が眺めの将の姿が何人か浮かぶ。

「兵士さんたち用に同じようなものを作れば、兵士さんたちが気分転換できるようになるかもね」

「そっか。兵士さんたちは訓練の後とか凄い汗だもんね」

「お風呂からあがったら、ギルさんに聞いてみる？一つしかこういうのは作れないのか、それともいくつか作れるのか」

「うん。そうしようっか。・・・でも今は、もうちょっと寛いでいたいかな」

「ふふっ……。そうだね、朱里ちゃん」

途中でいくつか政務関係の案が浮かんできたが、とりあえずは新しい風呂を堪能することにした二人。

二人が風呂から上がったとき、ちよつと入りすぎでのぼせかけていたのは仕方がないことであろう。

・・・

ふあ、と何度目かのおくびをかみ殺した頃、朱里と雛里の二人が暖簾をくぐって風呂場から出てきた。

お、あがったか、と声を掛けながら立ち上がると、二人はこちらに駆け寄ってくる。

ううむ、小柄な二人がこうして駆け寄ってくれる姿にはちよつとした感動すら覚えるな。

「ギルさんっ、しゃわーの使い勝手は素晴らしいかったです。髪の毛や身体を洗う時間が短くなって、効率的にお風呂を使えるようになると思います！」

「常にお湯が張ってあるというのも素晴らしいと思います……！好きなときに身体を流せるというのは、とっても嬉しいですよ……」

「

俺の前に到着すると同時にまくし立てるように話しかけてくる二人。よっぽど感動したんだろうな。まあ、俺もできた風呂を見たときは同じようなことを思ったけど。

「なるほど。あ、シャワーとかに不具合はなかった？使いつらいと



ころとか」

こういうのは聞いておかないと。

慣れた俺たちでは気づかないような不具合とか使いづらさとかあるかもしれないしな。

・・・なんてことを思っただけで聞いたのだが、杞憂に終わったようだ。二人はぶんぶん頭を激しく振って

「全然ありません！むしろ使いやすくて戸惑っちゃったくらいでした！」

朱里の言葉に頷く雛里。

「そっか。なら、他の娘たちにも使ってもらおうかな。そのときは、朱里と雛里に説明役を頼みたいんだけど、いいかな」

元々この二人に新しい風呂に入ってもらったのは、不具合や使いづらさを見つけてもらうこととは別に、他の将に説明する役割をしてほしかったからだ。

頭が回る二人なら、説明も分かりやすくやってくれるだろうしな。・・・といっても、シャワーもカランも使い方が複雑って訳じゃないからあまり意味はないかも知れないけど。

ま、日ごろ政務や訓練なんかで一番苦勞を掛けているであろう二人だから、こうやってリフレッシュしてくれたのは良かった。

「はいっ。任せてください！」

「あわわ・・・が、がんばりましゅっ」

やっぱり雛里はちょっと緊張してしまうのか、少し噛んでいたもの

の、それでも力強く頷いてくれた。

「それじゃ、湯冷めしないうちに部屋に戻ろうか。」

二人にそう促して、俺たちは城の通路を歩き始めた。

とりあえず、これから温泉の搜索は続けよう。

今は宝具を使って擬似的に水道や給湯装置を作っているが、あれは流石に量産できない。

温泉が発掘できれば効能も期待できるしな。よし、明日からも頑張ろう。

・・・

「ギル。頼みがある」

朝起きて部屋から出たら、キャスターが立っていた。

驚いて硬直している俺にそう言い放ってからしばらくして、ようやく俺はキャスターに何か頼みごとをされかけていることに気づいた。

「・・・頼み？」

多分ろくなもんじゃないな、と目の前で笑みを浮かべるキャスターを見て直感する。

こういう笑みは隣の部屋で孔雀の恥ずかしい声を聞いていたとき以来だ。

「ああ。・・・そう身構えるな。簡単なことだからさ」

「聞くだけは聞こう。」

「なに、本当に簡単なことさ。・・・私の作ったホムンクルスと戦って欲しい」

・・・想像以上にろくでもなかった。

「ホムンクルスって・・・あの？」

「もちろん。最近は研究環境もよくなってきたからね。いい感じのレシピができたんだ。」

「・・・ほう」

前に部屋を訪れたときも広げていた何かの設計図っぽいものはホムンクルスのレシピだったのか。

・・・まあ、最近あまり動いてないし、鈍ってないか確認するためにも受けておくかな。

「それくらいならいいだろ。」

「助かる。私では作り出せはしても性能確認はできないからね。ほら、キャスターだし」

自慢になってないけどね、と言いながら薄く笑うキャスター。

・・・そういえば、キャスターって何の英霊なんだろう。三国大戦のときから今まで、一切キャスターの情報は知らなかったからなあ。

ホムンクルスくらいしか特徴は知らないから、錬金術師かなあ、位の憶測しかない。

「・・・なあ」

「ん？」

「その頼みごと受ける代わりに、俺からの質問に答えてもらっていいか？」

「全然構わないよ。なにかな。マスターのスリーサイズ？」

「大丈夫。それは知ってる。・・・終わった後でいいよ」

「了解した。それじゃ、中庭にでも行こうか」

ちようど良く捕まえた兵士に政務に少し遅れるという連絡を頼み、仲良く連れ立って中庭へ移動する俺たち。

ホムンクルスと戦えといわれたが、俺が思い出すのは一番最初の失敗ホムンクルスと量産型ホムンクルスだ。

前者は一番最初にキャスターが攻めてきたときに遭遇し、後者とは聖杯戦争中何度か戦っている。

・・・一体では足止めくらいしかできないが、何体も出現すればかなり手こずる相手になっていく。

新型はどんな感じなんだろうか。若干楽しみである。

「・・・よし、この辺でいいかな。」

そう言ってキャスターは立ち止まり、持ってきたフラスコに手を伸ばす。

中身は見えないが、八つあるように見える。

「ふふふ、とりあえず八連戦位してもらうけど大丈夫かな？」

「ん、魔力にも余裕あるし、連戦なんて・・・ふふ、こっちの訓練じゃ連戦なんて日常茶飯事ですよ」

愛紗 鈴々 翠 紫苑 恋の連戦のときは本気で死ぬかと思ったけど。

まあ、そのおかげで技量も上がったし、文句はないんだけど・・・もう少し、自重してくれても良かったんじゃないかな。

・・・ちなみに、そのときに心配してくれた璃々に思わず求婚して紫苑にあらあらまあまあと言われながら額を打ち抜かれたのはいい思い出だ。

あれ、英霊じゃなきゃ死んでたよな・・・。

「・・・そ、そうかい。なら遠慮はいらないね！ゆけっ、ホムンクルスよ！」

そう言っただけでキャストはフラスコの一つを地面に叩きつける。

軽い音と共にフラスコが割れ、煙を上げながら中身が外に具現化する。

「・・・これは」

全体的に緑色なのは変わらないが、手には双剣を持つその姿には見覚えがある。

と言うか、つい先日同じスタイルで戦う奴と模擬戦をしたばかりだ。

「ふっふっふ、驚いたかい？驚いただろう！私は気づいたのだ！骨格を一から作るより、すでにあるものを参考にすればいいと！」

嬉しそうに語るキャストの前で、ホムンクルスが剣を構える。

・・・剣にも魔力が宿っているようだ。普通の剣ではないが、かと

いって宝具でもない・・・微妙な代物だ。

「セイバーを筆頭に、七騎のサーヴァントを基にしたホムンクルスを作ってみたのさ！」

その言葉と共に、ホムンクルスが突っ込んでくる。

慌てて宝具を発射しそうになったが、キャスターは性能テストと言っていたはずだ。

ゲイトオブバビロン  
王の財宝で制圧射撃をしてしまったのは、性能を測るところではないはず。

ならば、普通に戦うのが一番いいか。

そんな結論に至った俺は、宝物庫から一つの宝剣を抜く。

メロタック  
原罪。選定剣の原典になったという剣で、必ず心臓を穿つ、とかの特殊な能力がない代わりに、圧倒的な使いやすさを誇る。

「ふっ！」

左右から迫る双剣を避けるため、スウエーバックで状態をそらす。

目の前を通り過ぎる双剣の隙を突くように原罪を横薙ぎに振るう。メロタック

だが、セイバーを模したというホムンクルスは俺が原罪を振るい始めたときからすでに身体を引いていた。メロタック

「・・・なんとまあ」

そのままバックステップでホムンクルスは俺から距離を取り、すり足で移動しながらこちらとの間合いを計り、低く構えている。

元になったセイバーの技術を模倣しているのか、その構えは先日見たセイバーのものと同じだった。

実験体なので倒しても良いと言うお墨付きがなければかなり苦戦するだろう。手加減はかなり難しいのです。

「はっ！」

魔力放出で踏み込みの速度を加速させ、瞬きよりも早くホムンクルスの目の前へと到達する。

最高速のままホムンクルスの左から剣を振るう。が、ホムンクルスはしつかりとその速度に反応していた。

俺の顔を見据えたまま、両手に持つ双剣を俺の原罪メロタックにぶつけ、下に逸らす。

地面に引つかかる原罪メロタックの感触に、あ、やべ、と思わず心の中で呟いた瞬間、目前には双剣が迫ってきていた。

「ぬ、おおおっ！？」

原罪メロタックを一旦離して身体を深く倒す。

風をきりながら俺の頭の上を通っていく双剣。

俺は双剣が通り過ぎたのかを確認しないまま原罪メロタックを抜いて、ホムンクルスの背後へと回る。

ホムンクルスが俺に背後をとられたと認識する前に、原罪メロタックを振り下ろす。

「・・・ふう」

ホムンクルスの頭を叩ききる直前で、剣を寸止めする。

よかった。もう少し振り下ろすのが遅れてたら、切り裂くしかなかった。

「・・・ふむ、まあこんなものか」

そう言って、キャスターは空のフラスコにホムンクルスを戻した。

・・・どうも、あの国民的モンスターゲームを髣髴とさせるよなあ、あれ。

「さて、次はこいつだ！」

そんなことを考える俺を尻目に、キャスターは新しいフラスコをこちらに投げってくる。

さて、後七体だ。頑張りますか。

・・・

あの後、想像通りと言っかなんというか、ランサーを元にしたものやアーチャー・・・つまり俺を元にしたものなど、七騎のサーヴァントを模したホムンクルスが出てきた。

ランサーホムンクルスはスピードに重点を置いているらしく、ステータスで言うならA+の敏捷を誇るらしい。

・・・その代わりに、耐久と幸運が哀れになるほど低く、牽制のつもりで入れた蹴りで決着してしまった。

アーチャーホムンクルスは遠距離からの攻撃を中心にしており、キャスター曰く「完全な後方援護用」とのことだった。

接近するまでは手こずったが、懐に入ればすぐに決着はついた。

ライダーホムンクルスは・・・うん、まあ、ライダーって乗り物あって初めて実力を発揮するじゃないか。

流石にそっちは用意できなかったらしくて、ただ徒手空拳で戦うホムンクルス、といった感じだった。

アサシンホムンクルスは右腕が長く、トリッキーな動きでこちらを翻弄してくるタイプだった。

こっちもやっぱり宝具は用意できなかったらしく、トリッキーな動きに慣れればすぐに対処できた。

バーサーカーホムンクルスが一番脅威だった。



量産型ホムンクルスに薙刀を装備させ、パワーをそのままに機動力を上げたという隊長機のような扱いだっただ。薙刀を砕いたところでキヤスターからストップがかかり、しばらく破壊した中庭を修復することになった。

そして、最後。

キヤスターホムンクルスは一番・・・弱かった。

魔力を籠めた石を投げってくるのはなかなか怖かったが、それがなくなればただのホムンクルスだった。

一切攻撃しないで終わった唯一のホムンクルスである。

「・・・ふむ、これで最後まで終わったわけだけだ」

そして、八つ目のフラスコの中身は貂蟬を模したホムンクルスだった。

・・・妙にリアリティがあり、緑色の身体をしていたサーヴァントホムンクルスとは違い、人間と同じ肌の色をしていた。

しかも、声まで再現しており、そっちに能力の容量の九割を使ったとかで戦闘能力は皆無だったが、倒すのに一番時間が掛かった。

サーヴァントホムンクルスは寸止めが終わらせていたが、この貂蟬ホムンクルスだけは切り裂いた。容赦なく切り裂いた。

キヤスターが、惜しいことを・・・とか呟いていたが、知るものか。

「よし、とりあえず問題はまとめられたな。・・・また手伝ってくれると嬉しいね」

「・・・貂蟬ホムンクルスをやめたらな」

「分かった分かった。あそこまで拒否反応が出るとは知らなかったんだ。許してくれ」

「分かったならいいんだ。・・・それで、手伝った見返りだけど」

「ん？ああ、そんな話してたね。見返りと言っても・・・金は要らないよね？前にあげたような概念武装でも作るかい？」

「いや、一つ聞きたいことがあるんだ」

「ほう。いいよ、それくらいならお安い御用だ。」

意外そうな顔をするキャスターに、ずっと気になっていたことを聞くことにした。

「キャスターの真名が知りたい」

「・・・へえ。そういえば誰も知らないんだっけ。あ、マスターは知ってるけど？」

「ごういうのは本人から聞くものだろ？」

確かに孔雀に聞けば嬉々として教えてくれそうだが、それはなんだか意味がないように感じたのだ。

まあ、それに本人に聞いたほうがいろいろと面白そうだ、っていうのもある。

「んー、じゃあ東屋にでも行こうか。腰を落ち着けたほうがいい話だろうし」

「ああ、そうしよう」

・・・

中庭から少し歩いたところにいつもみんなが使っている東屋のひとつがある。

そこに座った俺は、宝物庫からワインと酒器を取り出す。話をするのに、口を潤すものがないのはどうかと思ったからだ。

「お、ずいぶんサービスがいいじゃないか。神代のワインとはね」

「昼間から酒っていうのもどうかと思ったが、お茶を用意するのもなんだかな、って思ったんだ」

「ま、いつか。遠慮なくいただくよ。・・・それで、私の真名だっけか。」

「ああ」

キャスターの質問に頷く。

「私の真名はね、パラケルススっていうんだ。本名はテオフラストウス・フィリップス・アウレオールス・ボンバストウス・フォン・ホーエンハイム。長いからパラケルススのほうで呼んでくれて構わない」

「・・・錬金術師じゃないかとは思ってたけど、まさかそんな大御所だったとは」

「宝具は知ってると思うけど、四大元素<sup>エレメンタル</sup>の精霊とアゾット<sup>Azoth</sup>剣。アゾット<sup>Azoth</sup>剣のほうは、柄から出した粉を固めて賢者の石にしたり、粉のままエリクサーのような治療薬として使うこともできる」

・・・それ、相当凄くないか。  
賢者の石、あるいはエリクサーと言つのは、不老不死を与えるとい  
われている霊薬のことだ。

「ま、作り出せるといつても流石に完璧なものは無理だけどね。と  
りあえず作り出した賢者の石に指向性を持たせることができるのと、  
ある程度の治療に使えるくらいさ」

「それでも凄いだろ」

「流石にデメリットもあってね。生成するのに魔力を多めに消費し  
ちゃうのと、生成した賢者の石の内包する魔力は、生成するとき  
籠めた魔力の半分くらいになっちゃうんだ」

「・・・燃費悪いな。バーサーカー並だぞ」

「はは。まあ、時間を掛けて大量に生成して、戦闘になったら一気  
に使うのが私の戦い方なんだ。」

「なるほどなあ・・・。」

ちなみに、とキャスターは帯刀していたアゾット剣を鞘Azothごとぬいて  
立ち上がる。

「これが短剣のほかには杖とも呼ばれてたのは、こうして鞘から抜い  
て使えば短剣にしか見えないけど、こうして鞘に入れて刀身を下に  
向ければ・・・」

そついいながらキャスターは剣の柄が上に来るように鞘を持つ。

それは空想の中でよく見る魔術師が杖をもった姿に見えた。

「こつこついう風にもって柄の先っぽから賢者の石出してたから、杖の先から賢者の石が出ているように見えたんだと思う。それで、これが杖なんじゃないかって話になったんだろつね」

「・・・何ともまあ、すさまじい勘違いだな」

「はは、昔の話なんてそんなものさ。・・・さて、これくらいかな。後は聖杯からの情報でも見てくれよ」

「ああ。ありがとな、わざわざ」

「構わないさ。それを言うなら、私もわざわざ君に頼みごとをしたんだしね」

そう言っつて、俺たちは立ち上がる。

「じゃあ、私はホムンクルスを改良してくる。」

「おう。俺は・・・政務しに行かないとな」

大遅刻である。

ま、今日は愛紗がないみたいだし、このくらいの遅刻ならまだ取り返せる。

昼前には大半の仕事は処理できるだろう。

「それじゃ、頑張ってくれ」

「そつちこそ」

こつ、と靴の音を鳴らしながら、俺たちは正反対の方向へと歩き始めた。

・・・にしても、パラケルスス、ねえ。

っていうか、あいつ賢者の石遠慮なく爆破させてたのか。

錬金術師が見たら泣きそうな光景だな・・・。

・・・

「遅いじゃない」

「・・・は？」

政務室に入ると、女卑弥呼が俺の席に座って政務をしていた。

朱里や雛里、桃香はいないようだ。

「何でここに・・・？」

「何でって・・・あんたが遅刻するみたいだから、代わりにやっ  
いてるんだけど。」

何いってんのアンタ？とでも言いたげな顔でしれっと言われてしま  
った。

「・・・何が目的だ？」

「ん？特に何も。暇だったからね。たまには仕事でもするかー、っ  
て。」

「たまには・・・って」

「いやー、だってほら、わらわって女王じゃん？たまにはそれっぽい仕事もしておかないと。うちの弟、そういうの厳しいのよねー」

ああ、あのどんなどころにいても姉に声を届けられる弟のことか。  
・・・まあ、こんな姉を持てば誰でも厳しくはなると思う。いつか会うことがあれば、龍の内臓を材料とした胃の薬をあげよう。

「ほらほら、座んなさいよ。わらわの対面で仕事できるんだから、狂喜しなさい」

「・・・すげえこと言い出すな、この女王」

そんなことを卑弥呼に言いつつ、言われたとおりに卑弥呼の対面に座る。

別にどこに座っても良かったのだが、多分この娘は対面に座らなかつたらかんしゃく起こすだろうと思つてのことだ。

「ほら、アンタの分」

卑弥呼はずず、と机の上の書類をこちらにずらしてくる。

まあ、卑弥呼がやっておいてくれた分、いつもより少なめだ。

「そついえば朱里たちは？」

「ああ、はわわはたわわに呼び出されて、あわわはなんかの会議だったかしら。」

・・・訳すと、朱里は穩に呼び出されてどこかへいき、雛里は軍か何かの会議に行ったのだろう。

「それで、ちょうど遊びに来てたわらわが代わりにやってあげてんのよ。」

遊びに来てた、の辺りで不安になったが、仕事はちゃんとやってるよつだ。

流石は女王。ふざけてばかりじゃないんだな。

「ふんふーん」

しばらく手を動かしていると、静かだった政務室に鼻歌が響き始めた。

目の前の卑弥呼が、筆を動かしながらふんふーん、と歌っているよつだ。

「何の曲だ？」

「・・・へ？」

声をかけてみると、顔を上げた卑弥呼と目が合った。卑弥呼はきよとんとした顔でこちらを見ている。

「いや、なんか鼻歌歌ってたから、何の曲かなーと」

そこまで言っつてようやく卑弥呼は心当たり思い至つたらしく、ああ、と呟いた。

「鼻歌歌つてたのね、わらわ。っつていうか、曲とか知らないわ。わらわのセンスがあふれ出たのよ」



「・・・そっか」

「ええ。」

再び書類に顔を戻す俺たち。

しばらく筆を動かしていると

「ふーんふーん」

紙の上を筆が滑る音しかなかった政務室に再び聞こえる鼻歌。

・・・なんだろう。卑弥呼が上機嫌な気がする。

いつもは不機嫌そうにむすっと真一文字に結ばれている口も、下弦の月のように曲がってるし、鼻歌まで歌っている。

何かいいことでもあったんだらうか。

「あ、そうだ。金ぴか」

「・・・せめてギルって呼んでくれ」

「う、うん。・・・ギル？」

「ん？」

「・・・これ終わったからお昼でしょ？」

「ああ、そうしようと思ってるけど」

「そ。じゃあちようどいいわね。ギルに街を案内させてあげる。ついでにお昼おごんなさい」

「・・・別にいいけど。どうしたんだ、急に。」

「別にいいじゃない。急に街に行きたくなっただけよ。・・・それともなに？わらわとじゃ嫌なの？」

後半の台詞はすさまじく不機嫌そうにこちらを睨んで言った卑弥呼。心なしか、魔力が収束している気がする。

「全然嫌じゃないぞ。あまり卑弥呼と出歩いたことないからな。ちよつと驚いただけだ」

「ふん。ならいいのよ」

キャスターの真名を教えてもらったからか、卑弥呼のことももうちよつと詳しく知りたいと思つてたところだしな。

・・・管理者のほうの卑弥呼？ごめん、だれそれ？

「じゃあ、さつさと終わらせちゃおうか。」

「ええ。・・・といつても、わらわは九割方終わらせてるけどね」

そついいながら卑弥呼は最後の書類に手を伸ばす。

・・・確かに九割がた終わってるな・・・。

ま、俺もあと少しだし、あまり焦って間違つても大変だからな。焦らずいつもどおりやっていこう。

・・・

「で、どうさくの？」

「んー、取りあえず腹ごしらえからかな。何か食べたいものあるか？」

「なんでもいいわよ。わらわ、嫌いなものないし」

「なんでもいいっていわれてもなー」

それが一番難しいんだけど。

「ま、ぶらぶらしながら気になったところに入ればいいじゃない」

「・・・それもそっか。ほら、はぐれるなよ、卑弥呼」

俺がそういうと、卑弥呼は腕組みをしつつぶいっ、と顔を背ける。

「はん。わらわを子ども扱いしないの。ま、なんかあったら飛べばいいし」

「飛ぶな」

「な、なによう。いいじゃない、便利なんだし」

「飛・ぶ・な・！」

「・・・分かったわよ。飛ばないわよっ」

俺の説得が通じたのか、卑弥呼は不承不承といった感じに頷いた。流石に街中で飛ばれたらとてつもなく困る。

仙人が町に現れた！とか大騒ぎになるに決まってる。

「ま、たまには自分の足で歩くのもいいわね。ほら、ギルがリードするのよ。」

飛ぶなつて言ったのあんたなんだから、と言いながらこちらを見上げる卑弥呼に、分かっているよ、と返す。

我がまま女王な卑弥呼の扱いもようやくわかってきた。

戦場以外ではまともに話した事もなかったんだなあ、といまさら気づく。

こうして外を歩くのは楽しいみたいだし、これからもちよくちよく誘ってみるかな。

「?なによ、わらわのことじろじろと見て」

「ん、あー、いや、卑弥呼って可愛いなあって」

「・・・当然じゃない。女王よ、わらわ」

俺がそうごまかすと、卑弥呼は俺の方とは真逆の方向に顔を向けながら、そんなことを言い放った。

・・・これと似たような反応を詠にされたことがあるな。

その時の詠と同じようなことを卑弥呼が思っているなら、確信は持てないが、照れてるんだと思う。

一人で納得しつつ、テクテクと歩く。うーむ、やっぱりこの辺の活気は凄いな。

「あ、ギル。前に月に聞いたんだけど、ここのラーメン、美味しいんだって?」

そのまま俺のほうを向かずに歩いていた卑弥呼は、ある一軒の屋台を見つげ、俺の裾を引っ張りつつ屋台を指差しながらそう言った。

卑弥呼が指差した屋台に目を向けてみると・・・ああ、確かにここは美味しいな。  
何せ、華琳がなかなかやるわねと褒めていた屋台だからだ。  
幸い客も少ないみたいだし、すぐに食べられるだろう。

「ああ、なかなかのものだぞ。食べていくか」

「ええ。ふふん、わらわの口に合うかどうか、試してやろうじゃない」

そう言つて不適に笑いながら、卑弥呼は俺の服の裾を引っ張つたまま屋台へと足を向けた。

・・・

「美味しいじゃないっ。ちょっと、この店うちの城に持って帰りましょうよ」

「無茶を言つな。・・・ご馳走様。ほら、行くぞ卑弥呼。」

二人分の御代を払い、やだやだこの屋台もつて帰るのー！と駄々をこねる卑弥呼を持ち上げつつ屋台から離れる。

しばらく俺に運ばれると、騒いでも無駄だと悟ったのか、俺の腕からふわりと地面に降り立つ。

「ちつ。いいじゃん、屋台の二つや二つ買ってくれても。損はしないわよ？」

「・・・あー、はいはい」

「何その生返事！わらわのことを何だと思ってるのよっ」

「外見だけ成長した子供」

「・・・うー。なんか今日は冷たくない？」

「冷たくしてるつもりはないんだけどな・・・。疲れてるんだよ、多分」

実際今日はキャスターのことやら卑弥呼のわがままやらで意外と疲れている。

・・・まあ、多少面倒くさいというのもあることは認めよう。

管理者のほうも、魔法使いのほうも、卑弥呼と話しているといつの間にか振り回されている。

「ふーん・・・。ま、いいわ。わらわの遊び相手がいなくなると困るものね。今日はこのくらいにしておくわ」

城に着いた途端に魔法を発動させる卑弥呼。

「ちよっと弟に愚痴ってくる。また来るわ」

「ああ、そのときは屋台ぐらい買ってやるっ」

俺がそう返すと、卑弥呼は一瞬虚を突かれたような表情になる。だが、すぐに笑顔になると、いいわよ、そんなことしなくても、と苦笑気味に言った。

「はは。じゃあ、何か卑弥呼を持って成す案を考えておく」

「ええ、楽しみにしてる。じゃね。」

魔力の残滓を残して平行世界に飛んだ卑弥呼。

少しの間それを見届けた俺は、午後の政務を行うために政務室へと向かった。

・・・

「お、今度はいるな」

部屋に入ると、桃香と朱里、雛里の三人が机に座ってお茶を飲んでいた。

「あ、お兄さんだー。お昼食べてきたの？」

「ああ、三人は昼飯食べたのか？」

「うんっ。それで今は、お仕事前に食後のお茶なの」

俺の質問に、桃香が代表して答えた。

朱里と雛里はこくこくと頷いて桃香の言葉を首肯している。

そうなんだ、と桃香に言葉を返しながら、自分の席に着く。

すると、朱里がそっだ、と呟いてから

「ギルさんも、お茶いかがですか？」

と聞いてくれた。

・・・お茶か。今出かけてきたばかりでちょっと一息つきたい気分だし、貰おうかな。

「そつだな……。うん、貰おうかな」

「分かりました。すぐにご用意しますね」

俺の答えを聞いた途端に立ち上がり、かたかたと準備を始める朱里。

「あんまり急がなくていいからなー」

そんな朱里に声を掛けると、大丈夫ですー、と返答が返ってきた。

「そついえばさ、雛里」

「あわわっ……。!?は、はひっ」

急に話しかけたからか、雛里はあわわと慌てだす。

雛里の頭に手を置いて落ち着かせてから、再び口を開く。

「前にお菓子作ってくれるって言ったじゃないか。それ、今日できるかな」

疲れたときには甘いもの、と言う考えが頭によぎったときに思い出した二人との約束。

以前、政務中にお菓子が得意だといった二人に、今度食べさせてくれよ、と俺は返したはず。

で、その機会に恵まれずに今日まで来てしまったが、これはいい機会だと思って頼んでみる。

「今日、ですか。……。材料があれば、多分大丈夫です」

「材料か。……。んー。ああ、そうだ。使わなくて残しちゃったっ



て言うお菓子の材料、確か城にあったな。あれ、もつたないからさっさと使おうと思ってたんだけど・・・それでも大丈夫かな？」

確か何かの祭りがあったとき、お菓子を作って振舞おうとしていたのだが、予定していた職人がこれなくなり、材料だけが余ってしまったのだ。

祭りも小規模なものだったし、数十人が食べればすぐになくなってしまつくらいのお菓子しか作れないのだが、二人が作る分にはちよつどいいだろう。

「あ、そういえばありましたね。すっかり忘れていました・・・」

「まあ、俺たちが直接取り仕切つたわけじゃないしな。覚えてないのも無理ないよ」

確かあの祭りは区画を取り仕切つている長がやりたいと言い出したからちよつと協力しただけだったはずだ。

他の政務に追われていたときに、その内容まで覚えておくというのは難しいだろう。

「じゃあ、後で朱里ちゃんと相談してみますね」

「ああ。楽しみにしてる。」

「あ、私も食べたいな」

ニコニコと話を聞いていた桃香は、手を上げながら雛里に言った。

「は、はい。桃香さまもどうぞ。」

恥ずかしいのか、帽子のつばを押さえて俯いてしまう雛里。

「お待たせしました、ギルさん。・・・あれ？どうしたの、雛里ちゃん。顔が真っ赤だよ？」

「あ、あのね・・・？」

タイミングよく戻ってきた朱里は、俺の前にお茶を置いた後、顔を真っ赤にして俯く雛里の顔を覗き込んだ。  
雛里は恥ずかしそうにしたまま、いきさつを話した。

「お菓子、ですかあ。確かにしばらく作ってませんし、久しぶりに作ってみるのもいいかもね、雛里ちゃん」

「うん。・・・ちょっと、自信ないけど」

「えへへ、頑張ろうねっ」

「うんっ・・・」

「よし、じゃあ残りの政務も片付けて、お菓子の時間にしますか。」  
今からこの量なら・・・うん、ちょうど三時のおやつに間に合うくらいには終わるだろう。

楽しみもできたことだし、今日も頑張るかな。

「私、いつもより頑張っちゃおうよー！」

「いつも、頑張ってくれればいいんだけどな」

「はづつ。そ、そういう意地悪な事言わないでよあ、ギルさん」

「ごめんごめん。つい」

「んもー。つい、じゃないよ」

頬を膨らませる桃香を見てほんわかと和やかな気持ちになりながら、筆を取る。

ふと朱里たちを見ると、朱里たちもニコニコと笑顔になっている。

・・・こういう風に、人を自然と笑顔にさせられるのも、桃香の才能だよなあ。

・・・

## 第十一話 お菓子を食べるために（後書き）

と、言うわけでキャスターさんはパラケルススさんでした。

人格なんかは私の独断と偏見が遠慮なく入っているのでその辺はご了承ください。

そして、いろんなところでいろんなフラグを立てる主人公君。ちょっと替わってくれ。

誤字脱字のご報告、感想お待ちしております。

番外話 サークヴァントステータス キャスター（前書き）

と言うわけで、ようやく判明したキャスターさんのステータスです。キャスターと言うクラスを作るのがここまで難しいとは思ってなかったです・・・。

## 番外話 サーヴァントステータス キャスター

クラス：キャスター

真名：パラケルスス 性別：男性 属性：混沌・善

クラススキル

陣地作成：B

ホムンクルスを設計、作成する際に有利な判定を得られる工房を構築できる。

なお、パラケルススは工房内で賢者の石を生成した場合、消費魔力を三分の一抑えることができる。

道具作成：A

魔力を帯びた道具の作成ができる。

賢者の石、ホムンクルスの作成、精霊の調整などの際に必要なスキル。

固有スキルの魔術と合わせ、魔術装置を作ることに秀でている。

固有スキル

魔術：A+

一般的な魔術のほかに、錬金術にも精通している。

賢者の石を生み出したとされるその技術力は格段に高く、現代の魔術師よりも高度な魔術行使を可能とする。

医術：A

元々は医者であるパラケルススは、魔術だけではなく医術の能力も

高い。

ももとのランクはC程度だが、賢者の石との併用によってそのランクを高めている。

困ったときは賢者の石。とっても便利らしい。

護身術：D

旅をしている際に自然に身についた護身術。

一対多などの状況ではほとんど役に立たないが、一対一の状況で、なおかつ相手が盗賊などであれば、取りあえず危機は凌げる、といった程度。

英霊との戦いではほとんど役に立たないスキルだが、魔術師相手ならば撃退することができる。

学術：B

医学部で教授をこなせる程度には教養を持ってそれを生徒に伝えられる。

人に何かを説明するとき、本来の半分の文書量で伝えることができ、相手を納得させられる。

ただし、自分よりランクの高い者に論破されたときや、理不尽に否定された場合、焚書に走る。

能力値

筋力：E + 魔力：A + 耐久：E 幸運：D + 敏捷：E 宝具：  
A +

宝具

『エレメンタル四大元素の精霊』

ランク：B 種別：対人宝具 レンジ：50 最大補足：四人

パラケルススが再発見した四大元素。その元素の精霊たちと共に戦える宝具。

赤、緑、青、茶の色に光る野球ボールほどの大きさをした球体にか見えないが、それぞれに自我がある。

パラケルススと特殊なパスを繋いでおり、パラケルススから供給された魔力によって飛行、攻撃を行う。

火、風、水、土の属性に弱点を持つものに対して大きなアドバンテージを発揮する。

精霊たちの協力がなければ、ホムンクルスは生成できなかったかもしれない、とパラケルススは語る。

### 『アゾット剣』<sup>Azhot</sup>

ランク：A+ 種別：対人宝具 レンジ：1〜2 最大補足：一人

パラケルススが帯刀している短剣。杖とも言われていた。

魔力の通りやすい短剣として使えるほか、柄では粉末状の賢者の石が生成されており、取り出して使用することができる。

賢者の石を固体にした場合は、前もってその魔力をどのように使うのかを設定しておかなければならない。

爆発させるとしたら、普通に爆発させるだけなのか、何か対象に向けて指向性を持った爆発にするのか、などを設定しなければならぬので、攻撃手段としての賢者の石は速度としては劣る。

粉末状、もしくは液状ならば主に霊薬として使う場合がほとんどである。

治療の際に併用したり、固めて固体の賢者の石にしたりと汎用性は高い。

ちなみに、刀身の部分には四大元素<sup>エレメンタル</sup>の精霊を宿すことができ、それ



それぞれの属性を纏った剣として使用することができる。

番外話 サークヴァントステータス キャスター（後書き）

医師で錬金術師って凄い出自ですよね。

そして、賢者の石のチートっぽさが目立ちます。

こここのスキルちょっと変じゃないか、というところがあれば指摘お願いします。

誤字脱字のご報告、ご感想お待ちしております。

## 第十二話 大人から子供に（前書き）

今回の話は、感想でいただいた案を元にした話があります。  
感想で案を下された方、どうもありがとうございます。

それでは、どうぞ

## 第十二話 大人から子供に

政務が終わった後。俺たち四人は厨房へと来ていた。

目の前では朱里と雛里がお菓子作りに精を出している。うむ、エブロンっていいなあ。

俺の隣にいる桃香も、ニコニコと二人を見守っている。

「ふふ、二人とも楽しそうだね」

「ああ。お菓子を作るのが好きなんだろうな。」

「あ、雛里ちゃん、次それ貸して」

「うん。・・・はいっ」

「ありがとうっ」

二人とも満面の笑みである。

よほど楽しいんだろうなあ。

・・・思えば、大戦の頃からお菓子を作っていないことになるんだし、そりゃ楽しいか。

「朱里ちゃん、あんどできたよ」

「あ、俺味見してみたい」

「私もっ」

出来立てのあんこと言うものに興味が沸いてついつい出てしまった

一言だったけど、雛里は笑顔でいいですよ、と言ってくれた。ちやつかり手を上げていた桃香と一緒に、あんこを味見する。

「・・・おお」

「おいひーね、おにーさんっ」

もごもごと口を動かす桃香に同意を求められ、ああ、と頷く。あんこだけでもすでに旨い。店を出したら確実に繁盛するだろう腕前だ。

「あわわ・・・よ、良かったです」

「それでは、もう少しだけお待ちくださいね」

俺たちの反応を見た二人は、満足そうに作業に戻る。

これから生地を作ったりするんだろう。

ならば、邪魔しないように静かにしているのが一番だろう。

「くんくん・・・美味しそうなおいがするのだっ！」

静かにしようと思った瞬間に、背後から鈴々の声が聞こえた。

「まてっ、鈴々っ・・・って、ギル殿!？」

そのすぐ後に、愛紗の声も聞こえる。

どうやら匂いを嗅ぎつけた鈴々と、それを追いかけてきた愛紗、ということなんだろう。

「あれ、愛紗ちゃん。どうしたの?」

「いえ、その・・・鈴々が突然走り始めまして・・・」

「あーっ、朱里と雛里、お菓子を作ってるのだ！」

「はわわっ、り、鈴々ちゃん？」

「あわわ・・・愛紗さんまで・・・」

突然現れた二人に、朱里と雛里は持っているものを落としそうになるほど驚いていた。

・・・まあ、どたどたと大きい音をたてながら走ってくれば、誰でも驚くか。

「ほら、鈴々。こっちにおいで。静かに待ってるなら、お菓子を分けてあげるから」

そう言って手招きすると、鈴々は

「ほんとにつ！？わかったのだー！」

元気に返事をして、俺のひざの上へと着席した。

・・・あれ？

「なあ鈴々、何でひざの上に？」

「ふえ？お兄ちゃんがこっちにおいで、って言ったからなのだ！」

「・・・そっか、そういえばそう言ったな」

俺の想定していた「こつち」とはちょっと違ったが、まあ鈴々が嬉しそうなのでいいだろう。

「……鈴々ちゃん、いいなあ……」

「はは、桃香はまた今度な」

鈴々を羨ましそうに見ている桃香を撫でつつ言う。

前に桃香にひざを貸したこともあるし、なんだかんだ言って子供っぽい桃香ならではといったところか。

喜ぶポイントが鈴々と同じようなところは桃香の可愛いところだ。

「ほんとにっ!？」

「ああ。俺のひざでいいなら、いつでも」

「えへへ、やったー」

今にも飛び上がりそうに喜ぶ桃香と、それをいさめる愛紗。全力でいつもどおりの展開だ。全く問題ない。

「……いい匂い」

「恋殿お〜、そんな犬のように四つんばいにならないでくださいませ〜!」

くんくんと鼻をならしながら散歩中の犬のように厨房へとやってきた恋と、それを必死に止めようとするねね。

「……とてつもなくねねに同意したい。やめてくれ、恋。」

「あ、ぎる」

「むむっ！ギルですかっ？」

「・・・恋、四つんばいはやめなさい。ほら、裾とか汚れまくりじゃないか」

「いい匂い、したから」

「駄目だぞ、そういうことしたら。女の子がはしたない」

ちよいちよいと手招きして恋を呼び、裾についた土やら砂を払う。  
ああもう、手のひらも汚いな。水で洗わないとな。・・・水、まだストックあつたっけ。

「・・・あ、あつた。ほら、恋。これで手を洗うと良い。」

「・・・ん」

「いつ見てもその宝物庫とやらは不思議ですなー」

それから恋とねねも朱里たちのお菓子を待つことになり、翠や蒲公英、星まで集合する騒ぎになってしまった。  
まあ、元から材料は大量にあつたからお菓子も大量に作るつもりだったし、消費する人間は多いほうがいいだろう。

「できましたー！」

「それでは、中庭に移動しましょうか」



そう言って完成したお菓子を持って二人が歩く。  
確かに、この人数だと厨房は手狭だし、外は良い天気だ。  
ぞろぞろとみんながお菓子を持つ朱里たちについていく。

・・・

「それでは、皆さんどうぞっ」

そう言って朱里がお菓子を並べると、鈴々と恋、そして翠が真っ先に飛びついた。

消えるようになっていくお菓子。もう半分ほど消えている。

「・・・ふっ！」

意識せずもれた気合の声と共に、お菓子に手を伸ばす。

敏捷値に任せた速度で、やっとお菓子を一つ取れる。

・・・なんでこの娘たち、お菓子を取るのに牽制とかフェイントとか掛けてるんだろう。

「あむ。・・・おお、良い甘さだ」

くど過ぎない甘さは、俺の好みにぴったりと合う。

・・・って、うわ、もう皿の上に何も無いぞ・・・。

「・・・ギルさん」

「ん？」

隣から雛里の声が聞こえる。

視線を向けてみると、小さい皿にいくつかのお菓子を乗せて俺にすつと渡してくれた。

「こうなるかもって思って、最初にとっておいたんです・・・」

「おお、ありがと！桃まんとか一つも食べてないから助かるよ」

「あ、そんな、お礼なんて・・・！」

いつもの魔女帽子ではなく頭巾をつけている雛里の頭を撫でる。

あわわといつもとどおりに照れる雛里にもう一度ありがとつと言ってから、桃まんを手取る。

「・・・どきどき」

「・・・わくわく」

朱里と雛里が、擬音を口に出しながらこちらを見ている。

・・・なんだか桃まん一つ食べるだけなのに緊張してきたぞ・・・？

「あ、む。・・・おー、こっちも良い感じじゃないか。美味しいよ」

「あわわ・・・！やったね、朱里ちゃん・・・！」

「うんつ。ギルさん、そちらのお饅頭も食べてみてくださいー！」

恋や鈴々が物欲しそうにこちらを見る中、俺は雛里が取っただけのお菓子を一つずつ味わっていく。

美味しいと伝えると、その度に嬉しそうにはしゃぐ二人を見て、こっちも嬉しくなってくる。

「……うん、また二人にはお菓子を作ってもらおう。」

「……あ、後ですね……」「こちらもどうぞっ」

「これは？」

目の前に出されたのは、パイ……のようなもの。

少なくともこの時代のこの国にはないものはずだ。

「えっと、以前教えてもらった天の国の料理の中で、このパイ、というものだけは材料があったので……」

「おそらく、祭りでパイを作るつもりだったのでしよう。作り方も一緒にありましたので、その、ギルさんのいた国のお菓子を作ってみたんですっ！」

ほほう。

「……そういわれれば確かに、祭りで珍しいものを作りたいと頼まれて一刀と一緒にパイのレシピを思い出した覚えがある。」

俺の財力でそろえた材料と、一刀の努力によって完成したレシピが、まさかそんなところに眠っていたとは……。

「……にしても良くできてるなあ……。俺たちが考えたレシピ、若干怪しいところもあったはずだけど」

一刀と二人で「……あれ、ここってどんな材料使うんだろ」「えー、なんか白い粉じゃなかった？」「あー……名前が思い出せない……。」「白い粉、でいいだろ」みたいなやり取りが数回あった。

「……ごめん、嘘ついた。数十回くらいあった。分量とか全力で適

当だった。

「あ、あはは〜・・・。その、作り方と完成図を見てなんとなく推測して作ったんですよ〜」

「ちょっと失敗もしましたけど・・・味のほうは大丈夫なので・・・」

・・・凄いな。あのあやふやなレシピを見て完成させたのか。

「・・・えっと、取りあえずいただこうかな。・・・いただきます」  
そう言って一口かじる。

・・・おおっ、パイだ！これ、パイだ！  
うむうむ、ちょっと味が薄い感じがするが、あやふやレシピで、しかもぶっつけ本番で作ったにしては完璧だ。

「あの、取りあえず作り方は別に書き留めておいたので、後で確認してみたいです・・・」

「ああ、俺たちが作ったレシピ・・・作り方より、断然そっこのほうがいいと思う。」

それから俺は、久しぶりに食べられた現代のお菓子が懐かしかったのか、一人ですべて平らげてしまった。

桃香たちには全然構わないよ、といわれたが、流石にそれは気がとがめる。

また材料をそろえるので、桃香たちにも作ってあげてくれ、と朱里に頼んでおく。

・・・そんなこんなで、朱里と雛里のお菓子はとても美味しくいた

いただきました。

・・・

「・・・は？」

「いえ、ですから、手合わせを願いたいのです」

二人のお菓子に舌鼓をうった後。

腹ごなしついでに街でも回ってくるか、と考えていた俺に声を掛けてきたのは星だった。

星は自身の獲物である赤い槍、『龍牙』をちらりと見せながら、食後の運動に手合わせでもどうですか？と言ってきたのだ。

そこから、さっきのやり取りに繋がるわけなのだが・・・。

「・・・俺より、愛紗とかの方が訓練にはなると思うけど」

「何を言っておられる。訓練ではなく、食後の運動・・・腹ごなしですよ」

「ですよ、とか言われてもなあ・・・。」

「私はいまだに一度もギル殿と手合わせをしたことがないので。ですから、ここは一つ」

「・・・まあ、断り続けても諦めないだろうしなあ」

自身の背後に手を伸ばし、ゲイボルグの原典を取り出す。

「ほほう？ギル殿の獲物は突撃槍のような剣と聞いておりましたが」

「リーチ・・・間合いの問題だよ。槍に剣は不利だろ？」

「ふむう・・・剣のほうも見たかったのですが・・・」

「それに、俺の宝具は相手に合わせるのが本来の使い方だからな」

不死の生物には不死殺しを。物量には宝具の雨嵐を。

そうして相手を圧倒するのがギルガメッシュの戦い方。・・・だと、俺は思っている。

と言うわけで、相手が長いリーチを持つなら、こっちも長いリーチの獲物を。

「ま、俺も槍は使えるから・・・」

取り出した原典を星に突きつける。

「満足はさせてやれると思うけど」

「・・・面白いですね、ギル殿は」

原典を構える。鎧はつけない。もし当たっても、神秘を纏っていない武装は俺に通用しないからだ。

「ふふ、それでは・・・行きますっ!!」

不適に笑った星が、力強く地面を蹴る。

ふわりと蝶のように跳んだ星が、上空から突き刺すように龍牙を突き出してくる。

上方から攻撃されることなんて一度もなかったので、一瞬思考に空

白ができる。

「……しっ！」

だが、すぐに思考を張り巡らせ、上空の星を迎撃する。空気を切って迫る槍と槍が中空でぶつかり合う。

一瞬、切っ先が火花を散らし、星と俺の視線が交じり合う。

「はっ！」

槍を基点に滞空していた星は、そのまま俺の後ろに回るように着地する。

こんなに身軽な人間がいるとは……！

背中合わせで立っていた俺たちは、何かを考える前に一步前へ足を踏み出していた。

槍は中距離をカバーする武器。密着するほどの距離では進化を發揮しない。

振り返りざまに横薙ぎの一撃。星と考えることは一緒だったらしい。お互いの武器が再びぶつかり合い、火花を散らす。

ぶつかり合った槍は、すぐにお互いの手元に引き戻され、次の攻撃に備える。

「……やりますな、ギル殿」

「星にそう言ってもらえると、自信つくよ」

槍に腕を絡めるように構える星と、腰を下ろし、両手で構える俺。お互いに不敵な笑みを浮かべ、相手の間合いを計る。

少しずつ、少しずつ間合いをつめていく。後数ミリ……今！

「はああああああああっ！」

「せええええええええいっ！」

お互いが間合いに入ったと感じ取った俺と星は、一步前に踏み込み、槍を突き出す。

シャツ、と刃物を研いだような音を立てて、お互いの槍がすれ違う。軌道がずれて顔の横を通っていく赤い切っ先。……って、あぶねえな!?

「……ふ、ふふ。分かりました。これくらいにしておきましょう」

「ん?……いいのか?どう見ても不完全燃烧、って顔してるが」

槍を戻した星がいきなりそんなことを言ったので、思わず疑問が口をついて出てきた。

正直言つて、決着がつくまでやめないような人間だと思ってたので、とても以外だ……。

「ええ。この辺でやめておかねば、やめられなさそうになりますので」

それはあれか。今まではウォーミングアップだったのよ、と言つてとか。

「それに、待ち遠しそうにしている娘もいることですし」

そう言つて、星はちらり、と視線をずらす。

その視線を追つてみると、そこには恋が軍神ゴッドフォース五兵をもって立っていた。



「……えーっと、恋？もしかして……手合わせしたい……とか？」

「ん」

こくり、と首肯。

「そ、そっかー！じゃあ、俺は街に行くから、星と存分にやっつけて……」

「……ぎる、と」

最後まで言わずに、言葉をかぶせてくる恋。

……あー……。

「恋、お前はギル殿の奇妙な剣を見たことがあるんだっただな？」

「……ん。かいりけん、って言ってた」

「……ほほう。申し訳ありませぬ、ギル殿。ギル殿の本気が見なくなっていました」

そう言って、妖艶に笑う星。……あ、いやな予感が。

「恋と二人ならば、ギル殿の切り札も引きずり出せましょう。……恋、良いな？」

「……いい。最近はぎるも強いから、多分ちようどいい」

・・・この後、恋と星を相手にしている最中に偶然通りがかった翠、鈴々、雪連を追加した五人を相手にし、攻撃を防ぐためとはいえ宝物庫を使うほど追い詰められた。

あ、死んだ、と思ったのは両手では数え切れないほどだ。・・・良く生きてたな、俺。

その後、何とか休憩を入れてもらい、神代の酒を振舞ってうやむやにし、逃げてきたわけだ。

「あーよかった、今度こそ、街にいけそうだな・・・」

エアを回さないで戦うのがアレだけ辛いとは思わなかった。

・・・まだまだ精進が足りないな。

・・・

「あ・・・ギルさんっ!」

「お、月。・・・なんだか凄く久しぶりな気がするなあ」

駆け寄ってきた月の頭を撫でつつ、そんな感慨にふける。

あー、こうやって月の頭撫でてるだけで、今日のあの激戦の疲れが癒される・・・。

「・・・あの、何かあったんですか？」

「え？」

「いえ、その・・・お疲れのようでしたので」

「あー、さっきな」

かくかくしかじかつまつま、と月に事情を説明する。

「・・・恋さんと鈴々ちゃん、それに星さんと翠さんと雪連さんを同時に相手して、良く生きていましたね・・・」

「やっぱり、月でも引くようなラインナップだったか・・・」

若干笑顔が引きつっている月が、お、お疲れ様・・・でした？となんだか気まずそうにねぎらってくれた。

「アレに愛紗と春蘭が入っていたら・・・ああ、多分駄目だ」

「あ、あはは・・・」

「・・・そういえば、月はまだ仕事なのか？」

何も持っていないから、もしかした休憩時間かも知れないな、なんて思っただけで聞いてみる。

すると、月は笑顔のままふるふると首を振った。違うらしい。

「いえ、今日はお休みなんです。お仕事が夜遅くまでだったので、今まで寝てたんです」

「そうだったのか。遅くまでお疲れ様」

そういえば、たまに兵士の夜食を作る手伝いとかに行ってたな、と思いつきながら月をねぎらった。

月は両頬に手を当てて、へう・・・ありがとうございます、と呟くように答えてくれた。

「あ、じゃあ月は今暇なのか？」

「は、はい。」

「じゃあ、街にでも行かないか？」

「ぜひっ。」

「良かった。どこ行こうか？・・・お任せします、以外でな」

「へう。・・・え、えーっと・・・。」

んー、と考え込み始めた月の隣を歩きながら、平和だ、と心の中で  
呟く。

少なくとも月なら南海霸王を握りながら「血が滾るわ・・・！」と  
か言わないし、無言で必中無弓ゆみきこうを撃つてこないし、地面をへこませ  
るほどの一撃をはしやぎながら放つてくることもない。

・・・ああ、さっきまで俺、地獄にいたんだなあ。気がつかなかっ  
た。

「あ、そうだっ。あの、ギルさん。私、服をみたいですっ」

「服？」

「はいっ。あの・・・し、下着を、選んで欲しいんですっ」

・・・人通りの多い街中で、何をおっしゃってやがりますが、マイ  
マスター！

ああっ、饅頭屋のおばちゃんの優しい視線が痛い！

「・・・ゆ、月？そういうのは、もうちょっと声を抑えて欲しかったなあ・・・」

「えっ？・・・あつ・・・。へ、へうう・・・」

ようやく周りの状況やら視線に気づいた月は、恥ずかしいのか、顔を真っ赤にして抱きついてきた。

俺のお腹の辺りに顔を埋めて、恥ずかしそうにいやいやと首を振り、慌てた様子で口を開く。

「ち、違うんですつ。その、紫苑さんと下着の話になりまして、いろいろとお話を聞いたんです。それで、その、ギルさんを選んでも良かったらどう？といわれまして・・・」

・・・煽った紫苑も紫苑だが、素直にそれを実行する月って凄いな・・・。

「は、反対したんですけどつ、そ、そうしたら、その・・・をすするときにも、楽しみが増えるわよ、と言われて、ぎ、ギルさんが選んでくれるなら、って・・・」

「あー、うん。もういいよ。大丈夫、大体の事情はわかった。」

「へう・・・お恥ずかしいです・・・」

「ま、取りあえず行こうか。」

下着を取り扱っている店へと向かう途中、ようやく落ち着いた月が口を開く。

「今日、本当は詠ちゃんも一緒の予定だったんです」

「そうだったのか？」

「はい。でも、急に軍師のほうのお仕事が入っちゃいまして、一人でお部屋にいるのもなんだかもったいなあって思ってたんです」

「それで、外を散歩してたのか？」

「散歩・・・ではないです。ギルさんが今日お仕事だっていうのを聞いて、政務室に向かう途中だったんです」

「ああ、そういうことだったんだ」

「そういうことだったんです。」

そう言って繋いでいる手に力を入れる月。

「どうした？」

「なんでもありませんよ」

ニコニコと笑顔でそういうと、月は再び前を向く。

・・・？

凄く上機嫌だ。卑弥呼といい月といい、なんだか今日は街に出ると上機嫌になる日なんだろうか。

「・・・謎だな」

余談ではあるが、将に女性が多いからか、街の店も若干女性向けのものが多い。

「……まあ、男勝りの武将もいるとあって、飲食店はどちらかと言うと男性向けといった様相を呈しているが。

何を言いたいのかと言うと、下着が売っているところに男が行くべきではない、と言うことだ。

「……ぎ、ギルさん、そんな顔しないでください。なんだか私まで恥ずかしくなっちゃいます……」

「いや、無理を言うな。女性用下着売り場こんなくころで男に平常心を求めるのは間違いだと思うんだ、俺」

「へう……」

気まずい表情をしている俺と、恥ずかしそうに俯く月。

「……なんだか変な二人組が、女性用下着売り場で立ち往生していた。

うーむ、落ち着いて見回してみると……月に合いそうなのがいくつかあるな。

月が落ち着いたら、後でちょっとあわせてみるかな。……お、あの白いのとかいいかも。

「……あ、あの、ギルさん？」

「……よし、月、いくつか良いのあったから、ちょっとあわせてみようぜ」

「え？え？……あの、ちょっと、ギルさんっ……!?!?」

・・・

「ごめんなさい」

「いえ、その、大丈夫ですから、頭を上げてください・・・！」

あの後、良い感じに暴走した俺は、数点の下着を選び、月に合わせて確認していた。

三着目あたりからはうはう言い始めた月に気づき、こうして頭を下げているわけだ。

「そ、それに・・・ギルさんを選んでもらえて、嬉しかったです」

「それはなによりだ。いくつか見繕って、買って行こう。暴走したお詫びと言うわけではないけど、代金は俺が持つ」

「自分で払います・・・といっても、無駄なんですよね」

「ああ。こういうときに払うのは、男の甲斐性だからな」

「・・・それでは、お言葉に甘えることにいたします。」

数着の下着と、追加で服を見繕う。

やっぱり、メイド服以外の服も見てみたいのだ。

「今度一緒に出かけるときは、これを着ていきますね」

「ああ、楽しみにしてる」

・・・さらに余談であるが、その夜見た月の下着は、その日買った



うちの一つであったと言っておこう。

・・・

俺の宝物庫にはいろいろなものが入っている。

風呂桶やら着替えといった生活用品から、秘薬や宝具までその数は数え切れない。

「・・・これは・・・」

ある日見つけた秘薬。

それは、ギルガメッシュも使用していた若返りの秘薬。

あの子ギルに変貌する薬である。

その霊薬を見て、俺は疑問に思った。

・・・俺が飲むと、どうなるのか？

まず一つ目の仮説は、俺の少年期に戻る、と言うもの。

これが一番可能性としては高い。

二つ目は、原作の子ギルが出てくる可能性。

多分可能性は低いだろう。

「どっちなんだろう。凄く気になる」

ええっと、なになに・・・？

うわ、ラベルに用法、用量がきちんと書いてある・・・。

まあ、ぐいっと飲み干せばいいんだろう？

「む、ぐっ、ぐっ・・・ぷはあっ！不味い！」

ぱあん、と床にビンを叩きつける。

ありえないほどに不味い！なんだこれ！飲み干したことを後悔した！

「う、お・・・おおおお・・・？」

・・・

桃香が街へ出ると、子供たちのはしゃぐ声が耳に入ってきた。

「あれ、今日は新しい子がいるのかな」

子供たちの中に、いつもは見ないような少年が一人混ざっていることに気づいた。

たまに桃香も子供たちの中に混ざるため、いつもは見ない子供がいればすぐに分かる。

その少年は子供たちの輪の中で、中心となっていた。

「なあなあ、次は何するー!？」

「そうだなあ・・・あ、そうだ。これはボクのところの遊びなんだけど・・・」

会話を聞いているだけでも、彼らが楽しそうに遊んでいることが分かる。

「でも・・・あんな子、この街にいたんだなあ」

彼の服装は街の子供と同じようなものだ。

しかし、彼の髪は金色。あんな色をしているのはなかなか珍しい。

「ふふ、でも、みんな楽しそう」

少年を中心に、なにやら球を蹴り合う遊びを始めたようだ。みんなが笑顔になって遊んでいるのを見て、自然と笑顔になる桃香であった。

・・・

「あら？」

北郷一刀は、華琳と共に街を歩いていった。その際、華琳が何かを見つけ、立ち止まった。

「ん？どうした、華琳」

「・・・ねえ、あの子供・・・」

「え？」

そうやって華琳が指差したのは、金髪の少年。何人かの少年少女と遊んでいるようだが、見た目も動きも人目を引く。

「凄いな・・・あんな子供なのに、動きが違う」

間近で春蘭や霞の動きを見てきたため、一刀も身体の動かし方である程度の実力を見て取れるようになっていた。そんな一刀の目から見て、少年の動きは一般人とはかけ離れているように見える。

「ええ。・・・いいわね、あれ」

「いいわねって・・・まさか、武将として雇うわけじゃないだろうな・・・?」

「何言ってるの。当たり前じゃない。良い人材は、それをきちんと使いこなせる主の下へ行くべきなのよ」

そう言つて、少年の下へと向かつていく華琳。

放っておくわけにも行かないので、一刀も後を追う。

「あなた、今ちよつといいかしら?」

「はい?・・・ええつと、ごめん、みんな。ボク、抜けるね」

華琳と一刀に気づいたのか、少年はこちらに振り向き、二人が誰なのかを確認すると少年たちに別れを告げた。

「おう!またな、亞茶!」

「うん、また・・・それで、何か御用でしょうか」

再び二人に視線を戻した少年は、人懐っこい笑顔を浮かべ、首を傾げる。

「あなた、名前は?」

「亞茶です。」

「そう。亞茶、あなた、私の下で働く気はない?」

「曹操様の下で、ですか?」

「ええ。あなたの身のこなしは回りの子供より・・・いいえ、こちらの兵士よりも洗練されていた。あなたなら、すぐに一角の将になれるわ」

「うーん、褒められて悪い気はしません・・・申し訳ありません。お断りさせていただきます」

悩んだ表情を見せた少年・・・亞茶が、申し訳なさそうにそう言った。

「・・・そう。理由を聞いても？」

「はい。ボクには、すでに使えている主がいますので。」

「その主の名前は？」

華琳が亞茶にそう聞くと、彼はぶつぶつと何かを呟いた後に

「すみません、明かすことはできません」

そう断言した。

表情は笑顔であったが、その身に纏う空気はただの少年のものではなかった。

一刀はその重圧に冷や汗を流す。この子、本当に子供か、と心の中で戦慄していると、華琳が笑みを浮かべながら口を開く。

霸王と称された彼女は、このぐらいの威圧なら跳ね除ける胆力を持っているのだ。

「へえ、本当に面白そうね、あなた。まあいいわ。いずれあなたの

主も突き止めてあげる」

「ええ、楽しみにしています」

亞茶がそういうと、ふっと重圧が消える。

それでは、と別れを告げると、彼は人ごみの中へと走っていった。

「それでは、頑張ってください、お兄さん」

「えっ？」

最後に、意味深な一言を残して。

「・・・確かに、凄い子だったなあ」

「ええ。・・・ふふ、絶対に突き止めてやるんだから」

「か、華琳・・・？」

静かに燃える華琳を何とかなだめていた一刀には、去り際の一言のことなど、すでに頭にはなかった。

・・・

天下三分によつて一時の平和が訪れたといつても、犯罪がなくなつたわけではない。

酒に酔つた荒くれ者たちが暴れたり、店主を脅して金を強請り取る強盗がいたりする。

そんな中、街に出た武将たちはちよくちよくそんな犯罪者たちを懲らしめたりしているのだが、一向に数は減らない。

今日も、ある一つの飯店の前で、騒ぎが起きていた。

「おらおらあ！この娘がどうなってもいいのかあ！」

「くっ……卑怯な！」

男が少女を人質に、金を要求しているのだ。

刃物をちらつかせ、少女の首筋に当てる男。

そんな状態では、駆けつけた警備隊も、たまたま近くにいた雪連と連華も、手を出せずにいた。

「……隙がないわね。ああいうのは、どこかに付け入る隙があるものだけだ。」

「お姉さま……」

「待つよ。焦ると判断を誤るわ」

「その通りですね、お姉さん方。」

「だれっ!?!」

背後から聞こえる声に振り返ると、そこには金髪の少年が笑顔で立っていた。

「こんにちわ！ボクの名前は亞茶、といます」

「そ、そう。私は孫策。……あなた、今は離れてたほうがいいわよ。ここは危ないから」

雪連がそう言って注意するも、少年は聞いていないかのように一歩前が出る。

「ごらっ、お前……」

「ああん？なんだ、てめえは。」

連華が止めようと手を伸ばすが、後少しのところでは届かなかった。少年は男の前に出ると、二倍はあるであろう男を見上げながら、怖気づいた様子もなく口を開いた。

「こんにちわ、おじさん。……その娘、ボクの友達なんですよ。離してもらえませんか？」

「はっ。離せるものか。ガキ、てめえはすっこんでろ。」

少年の言葉は、にべもなく切って捨てられた。それでも、少年は表情を変えない。

「……そうですか。確か、あなたの要求はお金、でしたよね？」

「ああ、そうだ。金さえ持ってくれば、ちゃあんと後で嬢ちゃんは返してやるよ」

そう言った男の顔を見て、雪連は男にそんな気はないのだということを読み取った。

最後まであの少女を人質に、どこかへ逃げた後に処理するつもりなのだろう。

ここから出すわけには行かない。いっそ、打って出るか。

そんな考えが頭をよぎり始めたそのとき、少年……亜茶が、懐か



ら袋を取り出した。

その中から一つ、金を取り出す。

「この袋には、すべてお金が入っています。これならば、しばらくは暮らしていけるでしょう」

「おお！お前、いいとこの坊ちゃんだったのか？・・・まあいい。それさえくれれば、お友達は離してやる」

「ええ、差し上げます・・・よっ！」

亞茶は袋の口を紐で縛ると、上へと放り投げた。突然の出来事に、全員の視線が袋へと注がれる。

・・・そう、人質を取っていた男でさえも、数瞬、袋へ視線を向けた。

「ふっ！」

その数瞬で十分だった。

小柄な体躯を弾丸のように加速させた亞茶は、男の手から刃物を奪い、少女を男から引き離す。

「なっ、しま」

「遅いですよ、おじさん！」

刃物を地面に捨てた亞茶は、たん、と地面を蹴って跳び上がる。そのまま男の顔の前まで跳んだ亞茶は、回し蹴りを男に決めた。振りぬかれた足は男の顎に当たり、脳を揺らす。

大男、と称されても問題ない巨体が、後ろ向きに倒れる。

「・・・んー、やっぱりリーチは前のほうがいいですね。わざわざ飛び上がらずとも、拳で狙えますし」

どこから取り出した縄で男を縛りながら、思案顔で何かを呟く亞茶。

男を縛り終えた後、助け出した少女のもとへと向かい、優しく声を掛ける。

「大丈夫だったかな。怪我とかしてないといいんだけど」

「あ、ありがとね、亞茶くん。」

涙目ではあるが、もう恐怖は感じていないらしい。泣き笑いのような表情で、少女は答えた。

「なら良かった。・・・お兄さん方、何してるんですか。ほら、早くおじさんを連行しないと。」

「へ？あ、ああつ。よし、連行するぞ！」

「は、はっ!」

ようやく正気に戻った警備兵が、縛られた男を連行していく。

「・・・あなた、凄いのね」

「いえいえ、友達が危険だったので」

「えへへ、ありがとね、亞茶くんっ」

腕に抱きついてきている少女の頭を撫でながら、雪連の言葉に答える亞茶。

「ふふ、えらいわね。．．．ねえあなた、呉に来ない？」

「ええっと、それは．．．」

「もちろん、私のところで将として働かない？ってこと。」

「ちょ、ちょっと姉さま！？いきなりなにを．．．」

「申し訳ありません。お断りします」

「そ？．．．まあいいわ。別に今は魏や蜀と戦ってるわけでもないし。」

意外とあっさり引いた雪連。

その落差に連華が違和感を抱いていると、雪連はしれっと爆弾を落とした。

「それに、シャオと連華の夫には、ギルがいるしねえ」

「姉さまっ！」

顔を真っ赤にして雪連に詰め寄る連華。

二人が騒いでいる間に、少年は人ごみにまぎれていく。

「さーで、後会ってないのは．．．っ」と

・・・

朱里と雛里は、詠、ねね、と共にギルを探していた。今日が休みなのは知っていたが、温泉についての質問がいくつあったためだ。

時間もあまりとらせないつもりだったし、すぐに解決するかと思ったのだが・・・。

「うーん、いませんねえ、ギルさん」

「・・・あいつ、どこに行ったのかしら」

城内をくまなく探した四人は、一同にうーん、と悩んでいた。

部屋にはいない、兵士たちにも見かけたら探していたと伝えてほしいと言っているが、いまだに誰も会っていないと聞く。

「・・・後は、政務室くらいですね。今日はお休みだから、いないと思っていましたか」

「桃香あたりに頼まれれば、あやつも断らないでしょうからな」

「あわわ・・・羨ましいなあ」

「？雛里ちゃん？」

雛里はぼそり、と呟いたつもりだったのだが、朱里にはしっかりと聞こえていたらしい。

朱里は雛里に顔を向けてどうしたの、とでも言いたげに名前を呼んだ。

「へっ？あつ、な、なんでもないので」

「そ、そう？ならいいんだけど」

慌てる雛里に、なんでもないと本人が言っているなら、あまりしつこくするべきじゃないと判断して切り上げる。

そして、思考はすぐにギルの行方へと移っていく。

「あれだけの存在感を放つ方ですから、これだけ回っていないのであれば、街のほうに行っているのかもしれないですね」

「そうですねー……。取りあえず、政務室を確認してから、なのです」

「そうね。……まったくもう。」

政務室の前へとたどり着く四人。

ノックをすると、中からはどうぞー、と声が聞こえてくる。

「失礼します。あの、ギルさん……は……？」

「どうしたのよ、朱里」

「……あの、誰ですか？」

そうやって朱里は目線をまっすぐに向けたまま質問する。

詠たちも後から部屋の中に入ってきて、そこにいる人物を確認する。いつもいる桃香や愛紗ではなく、そこには……

「こんにちは」

笑顔で手を振っている、金髪の少年がいた。そんな異常な状況に、四人は驚いた。

見たこともない少年が、兵士たちの警備の目をくぐり、城内を巡回して警戒しているアサシンすら抜けて、政務室で座っている。その状態が異常といわずして何と云うのか。

「まさか、侵入者っ!?!」

「あ、大丈夫ですよ。危害を加える気はありませんから」

「・・・信用できると思ってるの?」

「まあ、されるとは思ってますませんが、危害を加える気ならもう四人とも生きてませんよ?」

そう言うのにこりと笑う少年。だが、その目は笑っていないかった。

「確かに、ここまで誰にも見つからずにやってきた時点で相当な実力者でしょうね。・・・私たちでは、太刀打ちできないくらいに」

「ま、そりゃそうね。・・・で、何が狙いなわけ?」

「んー・・・取りあえず皆さんに会って話せただけで目的は達しているんですよえ。・・・と、言うわけで」

そう言って少年は窓を開け放ち

「それではみなさん、お元気です」

「なっ」

「飛び降りたっ!?!」

慌てて四人が窓に駆け寄り、下を確認するが、すでに少年の姿はどこにもなかった。

「・・・な、なんだったんでしょっか・・・?」

「とにかく、早急に他の将たちにも伝えねばなりませんぞー!」

「はい。あれほどまでの実力者がいるのなら、英霊の皆さんの力も借りないといけないかもしれませんね」

「恋みたいな化け物・・・とは思いたくないけど」

四人は急いで桃香たちを探すことにした。

あの少年が何を考えているのかは分からないが、何か対策を取らねばならないだろう。

・・・

「ん?お前、どこから来たんだ?」

「はい?・・・これはこれは。お姉さん、こんにちわ」

「ん、ああ、こんにちわ。・・・それで、お前は誰だ?見たことのない顔だが・・・」

春蘭は目の前に立つ少年を見つめながら、首を傾げる。

「ふうむ・・・誰かの子供か？迷子なら、私が案内してやるが」

「あはは、大丈夫ですよ、お姉さん。お城の中は熟知してるので、完璧です」

「そ、そうか。完璧か」

「ええ。・・・あ、そうだ」

そう言っつて、少年は饅頭を一つ、春蘭へ渡す。

「これ、さっきいただいたものなんですけど、ボク一人じゃ食べ切れなくて。お手伝いしてもらっていいですか？」

「む、むう。それなら、いただきます」

「いただいてください」

「はむっ。・・・おお、旨いな！」

「それは良かった。・・・それでは、ボクはこれで」

「ああ！饅頭、ありがとなー！」

「いえいえ」

そう言っつて去っていった少年を見送り、春蘭はいいやつだったなあ、と呟きながらその場を後にした。



・・・

城内は、騒然としていた。

正体不明の少年が侵入していることを知らされた武将たちは、全員でその少年を追っていた。

城内は武将たちが、街には兵士たちが動員されており、かなりの大事になっていることが見て取れる。

「あちゃー、やりすぎましたかね。今度の大人のボクは不思議なことにはいい人っぽいので自重してるつもりだったんですけど」

少年は、やっぱり世界が特殊だからですかねー、とやりすぎたか、と言っている割には反省の色のない言葉を吐いていた。

今彼がいるのは、中庭の東屋である。

そこで優雅にカップを傾ける。中には何故か紅茶が入っている。

「んー、後会ってないのは・・・マスターは最後にするとして」

「へえ、誰かに会うのが目的かしら？」

「そうなんです・・・よ・・・？」

紅茶と考え事に集中しすぎたらしく、いつの間にか少年の周りを武将たちが囲んでいた。

「あちゃー、久しぶりすぎて気抜いてましたかね」

「・・・侵入者の癖に、優雅に茶を飲んでいるとはね。少し驚きだけれど。・・・たいした根性だと褒めるべきかしら」

「まあ、このくらいでしたら物の数にもなりませんので、別にいいかなー、とか思ってたなり」

その言葉に、何人かの武将の堪忍袋の緒が切れた。

「きさま！先ほどの饅頭はおとりだったのか！」

「あはは、あれは本当に単純におすそ分けですよ。美味しかったでしょう？」

「うむ、旨かった！」

「・・・春蘭、あなた、正体も知らぬ人間から物を貰っていたの？」

「華琳様・・・す、すみません」

ああ、またか、とため息が漏れる。

「まあいいわ。取りあえず、この三国の将を物の数にもならぬ、といったこと、後悔させてあげましょうか」

「ふふ、久しぶりにわくわくしてきたわ！」

「子供とはいえ実力者・・・容赦はせぬぞ！」

華琳、雪連、愛紗の三人がそう言ったと同時に、春蘭たちが少年に向かつて駆ける。

将たちに囲まれ、威圧感をぶつけられても涼しい顔をしていた少年に、すでに容赦する気はないらしい。

朱里たちの言葉もあり、英霊の一人を出し抜くほどの実力者だと思

われているのもあるのだろう。

「……あちゃー、これはほんとに、大人のボクに悪いことしたなあ……」

がたん、と椅子から飛び降り、包囲網を跳んで脱出する。

ふわりと着地した少年は、武将たちの方へと振り向く。

その顔には、呆れのような感情が浮かんでいた。

「でも、気づかないあなたたちも悪いですよ。今度の大人のボクはボクに性格近いと思うんだけどな」

どうあっても気づかれないってなんか呪いっぽくないですか？ボク、幸運高いんだけどなー、と呟きながら、少年は懐に手を持っていく。

「何を言っている!」

「……しかし、あの身のこなし……恋並かも知れぬな」

「あはは!男でまだあんなのがいたのね!楽しみだわ……!」

「……勝手にヒートアップしてるとこ悪いんですけど、そろそろ終わらせようと思います。」

「何を……!」

不敵な笑みを浮かべて立ち尽くす少年に様々な武器が迫る。

刃や矢が迫る中、少年はただ口角を上げて笑う。

「それじゃ、返しますね、大人のボク」

迫る凶刃や矢は、空中に浮かぶ剣や槍や盾に防がれた。

「・・・なんだこりゃ。おいおい、子ギルが何かやらかしたか？」

その中央で、元の姿に戻ったギルガメッシュが、エアを構えて愛紗の青龍偃月刀を防いでいた。

全員もれなく驚愕の表情を浮かべている。

「あーっと、子ギルが何かしたのなら謝るから、みんな、武器を収めてくれないかなあ・・・」

「え、え・・・」

「ぎ、ギル殿？」

「こ、子供がギルでギルが子供で・・・？」

・・・

かくかくしかじかと事情を説明される。

・・・なるほど、原作子ギルになったらしいな。

しっかし、まさか正体を明かさずに動いていたとは・・・俺の偽名の亞茶を使ってたし・・・。

ふう、使ってみて分かったが、あれで若返っている間は意識がなくなるみたいだ。

「なるほどね、若返りの妙薬とは、ほんとに何でもあるのね、その宝物庫」

「ああ……。俺もびつくりしてるところだ」

あんなに不味かったのもびつくりだよなあ……。

「も、申し訳ありませんギル殿！あれだけ似通っていたのに、ギル殿だと気づかなかつたとは……。不覚です……。！」

「ああ、多分それは仕方ないよ。宝具か何かでごまかしてたんだろ。そういうのいくつかあるし」

しょんぼりとしている愛紗をそう言って励ます。

「にしても面白いわねえ……。あ、そうだ、それ、祭とかに飲ませたらどうなるかしらね？」

「ほほう？策殿、儂がなんですと？」

「とか、ってどういう意味かしらね、雪連ちゃん？」

「そうじゃのう。とか、の中に誰が入っておるのか、聞いてみたいのうっ。」

「あ、あははー……。じゃねっ！」

祭、紫苑、桔梗に詰め寄られて、冷や汗を流しながら逃げる雪連。  
……。あーあ、余計な事言うから。

「はわわ……。ごめんなさいギルさん。……。私たちが、早とちりしたばかりに」

「いって。不用意にあんなの飲んだ俺にも責任はあるし」

しゃがんで朱里と視線の高さをあわせつつ、親指で涙をふき取る。  
離里からも同じように謝られたので、頭をくしゃくしゃと撫でて励  
ます。

「気にしてないって。な？」

「あわわ・・・はい・・・」

「・・・ふん。」

「あー、詠・・・怒ってる？」

「怒ってないわよ！」

あ、怒ってるな、これ。

ねねも同じような状況だし・・・。

「詠、ごめんな。今度埋め合わせするから」

「べ、別にそんなのいらないわよっ」

「ねねもすまないな。」

「・・・まあ、わざとではないようですから、別に許してやっても  
いいのです」

「本当かつ！？ありがとな」

「わわっ、ば、バカッ！降ろすのですー！」

嬉しさのあまり思わずねねを抱き上げてしまった。

降ろすのです、とか言ってる割には嬉しそうなので、しばらくやっ  
てあげよう。

「……もう、ばか」

後で、詠にはきちんと謝っておかないとなあ……。

……

「……って事があつたんだよ」

「そんなことが……子供姿のギルさん……ちょっと見てみたか  
つたです」

「……もう一度あの薬は飲みたくないなあ」

「ふふ。残念です。」

騒ぎのせいで集まった将に謝り、街で子ギルを搜索していた兵にも  
謝った後ふらふらと城内を歩いていると、月を見つけた。

声をかけると、今から休憩なので一緒にお茶をどうですか、と誘わ  
れ、月と詠の部屋でこうしてお茶をご馳走になっている。

そして、月に今までの顛末を聞かせると、先ほどのような反応が返  
ってきた、と言っわけである。

「あ、もう一杯どうですか？」

「うん、貰つよ」

とぼとぼと湯飲みにお茶が注がれる。

ふう、ようやく一息つけた気分だ・・・。

・・・ちなみに、その夜はふてくされた詠が納得するまで相手させられました。

翌朝、腰が痛いと言目になっている詠を見て失笑してしまったのは、仕方のないことだと思つ。

・・・



## 第十二話 大人から子供に（後書き）

と言っわけで、子ギル登場です。

彼の自由奔放さが書けていればいいのですが・・・。

誤字脱字のご報告、感想お待ちしております。

### 第十三話 二人も子供に（前書き）

今回の話にも、感想でいただいた案を元にした話があります。  
案を下さった方、ありがとうございます。

それでは、どうぞ

### 第十三話 二人も子供に

あの騒動の翌日、俺はちよつとした用事で呉の屋敷へときていた。

「えーっと、亞莎はどこにいるかな」

呉の軍師であれば誰でもいいのだが、冥琳は雪連とどこかへ言ったらしく、不在だった。

ならば、と穩を探すと、本を読んでいたらしく、目が合った瞬間に襲われかけたので逃げてきた。

あれはしばらく近づいてはいけない。

と言うわけで、消去法で残り一人の軍師、亞莎を探しているのだが・・・見つからん。

「あれ？ギルさんじゃないですか。どうしたんですか？」

「あ、明命。亞莎、知らないか？この書類、渡したいんだけど」

朱里から預けられたこの書類には、人口の推移が書いてある。

本当は朱里が自分で渡しにいく予定だったのだが、用事ができて行けなくなった。

それでどうしようかと困っているところに俺が通りかかり、やることもなく暇だったので、代わりにいくことになったのだ。

この後魏の軍師にも渡しに行かなくてはならないので、あまり時間も掛けられないのだが・・・。

「亞莎ですか？んー・・・。あつ！もしかしたら・・・」

何かに気づいたかのように周りをきょろきょろと見回す明命。

「っ！」

「そこっ！」

誰かの息を呑むような声に反応した明命は、軽い足取りで声の方向へと走っていく。

・・・どうしたんだろうか。もしや、侵入者とか？

「あーうー・・・はーなーしーてー・・・」

「やっぱり隠れてたのね」

「お、亞莎」

廊下の曲がり角から再び現れた明命は、亞莎を引きずってきた。

「ギルさん、亞莎です！どうぞっ」

「ふあっ・・・ギル様・・・！」

ようやく顔を上げた亞莎。

「よかった。ようやく見つかったな。この書類なんだけど・・・」

「あ、あの、ご、ごめんなさーい！」

「受け取ってほし・・・って、逃げられた・・・？」

俺が近づいたとたん、亞莎は凄いスピードで走り去ってしまった。

「・・・うむ、俺、嫌われてるのか・・・？」

「あ、いえ！多分、その逆だと思います！」

「逆・・・？好かれてると思えない反応だったんだが」

明命の顔を見る限り嘘ではないようだが・・・。

「・・・仕方がない。天の鎖！」  
エルキドゥ

背後から伸びる鎖が、亞莎を絡め取る。

もちろん痛くしないように調整はしている。

「よつと。捕まえた」

引き寄せた亞莎をキャッチすると、驚きすぎてフリーズしてしまっているらしい。

取りあえずおろしてあげないと。

「ううう・・・」

「大丈夫か、亞莎。できる限り優しくしたつもりだが・・・怪我でも」

「い、いえっ！全然大丈夫ですっ。」

「そ、そうか。」

亞莎の勢いに少し驚いたが、とりあえずは用件を済ませないと。

宝物庫から書類を取り出し、説明するべく口を開く。

「これ、朱里からのお届け物で、人口の推移表だって。新しい政策も書いてあって、一応機密扱いみたいだから直接渡さない駄目らしくて」

「あ、は、はい・・・」

そう言っつて書類を受け取る亞莎。

・・・だけど、何故か頑なにこちらを見ない。

「なあ、俺っつて何かしたかな」

「い、いえ！ギル様が悪いわけではないのです！・・・そ、その、ギル様がとても輝いて見えたので・・・」

・・・これは予想外だ。

あの金色の鎧を着けているときに聞けば納得できるが、この普段着のときに言われるとは。

「か、輝いてる？俺が？」

「は、はい。この近さですと、ギル様の眩しさに耐えられなくて・・・！」

先ほども思わず逃げてしまったのです、と顔をそらしたまま答えてくれた。

・・・なるほどねえ。

「ふふ、ギルさん、嫌われてるわけじゃないって、信じてくれまし

た？」

背後から明命に声をかけられた。

「……振り返らずとも分かる。この声色は、きっと笑っているのだろっ。」

「ああ、これであろうやく納得いったよ。……だけど、輝いてるって言われたのはびっくりしたなあ」

「あつっ……すみません……」

「謝ることはないよ。……まあ、追々慣れてもらっつかないかなあ」

くしゃりと亞莎の頭を撫でる。

先ほどの騒ぎで帽子を落としてしまったようで、こうして直接頭を撫でてあげられたのだ。

「まあ、嫌われてないってわかってよかったよ」

「そ、そんなはずありません！ギル様は天よりいらっしやっった偉大なる英雄様！嫌いになるなんて、ありえないです！」

「……そこまで言われると、ちょっと恥ずかしいが……。ま、それを聞けただけでよかったよ。」

そっぴいなながら、亞莎の帽子を拾って被せてやる。

「明命、ありがとな。」

「ひゃいつ!?わ、私は何もしてないですよっ!?!」

「ほら、亞莎を連れてきてくれただろ?」

お礼は建前で、明命の黒髪さらさらストレートヘアを撫でただけなんだけど。

さてと、次は魏の屋敷だ。・・・気が重い。

・・・

明命と亞莎に別れを告げ、俺は呉の屋敷を後にした。  
次は魏の屋敷・・・なんだけど・・・。

「おはようございますッス、兄貴!」

「ん、ああ、おはよう」

魏の屋敷の周りを巡回していた兵士に挨拶を返す。  
む、彼は以前の龍討伐で一緒だった兵士じゃないか。  
この特徴的な語尾と呼び方はおそらくそうだろう。

「なあ、今日は屋敷に程?と郭嘉はいるか?」

「ええつと、郭嘉様は先ほど出かけられたッス!程?様は・・・ちよっとわかんないッスね。あ、荀?様ならいるッスよ。」

「・・・そうか」

できればそっちに会わずに済ませたかったのだが・・・。



「分かった。桂花・・・苟？は、どこにいる？」

「多分書庫ツスね。」

「ん、分かった。頑張れよ」

「兄貴こそ、頑張ってくださいッス！」

「ああ、頑張るよ・・・」

取りあえず、書庫への道を歩きつつ、風を探すか。  
最後まで希望は捨てちゃ駄目だもんな！

「・・・神はいないのか！」

書庫にたどり着くまで、風どころか誰にも会わなかった。  
なんだこれ。俺魏の人たちに嫌われてるのかな。

・・・取りあえず、こんなところで足踏みしているのも時間の無駄  
だろう。

もう心を決めていくしかない。

「お邪魔しまーす」

「・・・げ」

扉を開け、書庫に足を踏み入れると、すぐに目的の人物はいた。  
こちらを見た瞬間にいやそうな顔をされた。・・・んな顔されても  
・・・。

「桂花、お前に渡すもの」

「喋りかけないでくれる？アンタみたいなのに話しかけられたら、それだけで妊娠するわ」

「があるんだけど・・・」

・・・くう、どれだけ男嫌いなんだ、こいつ。

「・・・妊娠しねえよ。なんだ、まだ赤壁のこと根に持ってるのか」

「くっ・・・！思い出させないでよ。あああ、寒気がする・・・何なのよ！」

「すつげえ理不尽・・・」

俺は多分怒っても良いと思う。

だけどなあ。こういう娘は意地っ張りだし、嫌ってる対象に何か言われても改めることはないだろう。

「・・・まあいいや。取りあえず、この書類を受け取ってくれ」

「いやよ。あんたが触ったものなんか触れないわ」

そう言ってそっぽを向いた桂花。

・・・ぷつん、と何かが切れた音がした。

「・・・天の鎖！」  
エルキドゥ

「きゃあっ!?!?」

四方から伸びた鎖が、桂花をぐるぐる巻きにする。

「ふ、ふふふふふ．．．もう我慢の限界だ。」

「な、なによ！何するのよ！こんなことして、許されると思ってるの！？」

「許されようと許されまいと知ったことか！ゲートオブパビロン王の財宝！開け宝物庫  
！」

空中に歪みができる。

いつも出てくるのは無数の武器だが、今回は．．．。

「筆．．．？」

桂花が首を傾げる。

俺はそんな桂花を気にすることなく筆を近づけていく。

「ま．．．まさかアンタ．．．！」

「それ、こちよこちよ．．．」

「あ、あははっ！なにす．．．あははははははは！」

無数の筆が桂花の肌をくすぐる。

くすぐられている桂花を見上げながら、ある程度すつきりするのを感じる。

桂花の呼吸が苦しくならぬうちにあさるす。

「く、くう．．．！」

「はっはっは！いやあ、面白かったぞ、桂花」

「笑うな！」

取りあえず溜飲は下がったので書類を渡す。

今度は桂花も罵倒してくることなく受け取ってくれたので、まあよしとしよう。

「それじゃあな、桂花」

「ふんっ。さっさと帰りなさいよ！」

「今日はこれで許したけど・・・次は・・・ふっふっふ」

「な、なによ！なんなのよっ！・・・ちよっと、中途半端なところで帰らないでよ！ちゃんと全部言ってから帰りなさいよー！」

・・・

魏と呉に書類を渡してきたと朱里に報告してから、自室へ戻る。そして、宝物庫の中から薬と名のつくものをすべて取り出す。

「・・・こんなにあつたのか」

足の置き場もないほどに敷き詰められた薬たち。

昨日の騒ぎを聞きつけたキャスターから頼まれ、若返りの霊薬があるならば疲労回復に効果のある薬もあるだろうと言われて、それっぽいのをいくつか見繕っておくことになったのだ。

何でも、研究して量産するらしい。目指せ栄養ドリンクとか言っ

いたが……。  
ついでなので、どんな薬があるかも確認しておこうと思い、  
「ついですべての薬を外に出している。」

「しかし……。これは、時間が掛かりそうだな……。」

取りあえず一番近いところにある瓶を手取る。

……。なにに？飲むと巨大化する薬？

巨人と戦うときに使用してください、とか書いてあるけど……。巨人と戦うこと、あるかなあ。

こっちは……。お、怪我の回復を促進する薬だって。

これは便利そうだな。

「……。く、これは若返りの薬か。」

いくつかの薬を確かめて宝物庫にしまっていく。

その途中で手に取ったのは昨日の騒動の原因、若返りの薬だ。後で詳しく調べるために、机の上においておく。

「さて、次は……。っと」

しばらく薬を確認していくと、どたどたと足音が聞こえる。

「ギルおにーちゃんーん！」

「ん？ああ、璃々。どうした？」

突然扉を開けて入ってきた璃々。

「あのね、あのね、一緒に遊ぼう？」

「そだな……。うん、暇だし、いいぞ」

薬を調べるのは、また後日にもできるだろうし。

「わーい！早く行こつ」

「おいおい、引っ張るなつて」

引っ張られつつ、床に宝物庫の入り口を展開し、放置していた薬をすべて宝物庫に戻した。

……。ここで、きちんと確認していれば良かったなあと後悔するのは、一時間ほど後のことである。

……

「おーい、ギルー？いるかい？」

主のいない部屋に、声が響く。

「……。あれ？いないのかな。休みつて聞いてたんだが。」

声の主であるキャスターは、首をかしげながら部屋の中へ進入する。

「お、あの瓶はもしかして、疲労回復の薬かな？」

そう言つて、机の上から瓶を三つ手に入れるキャスター。

「書置きでも残しておけばいいかな。……。さて、早速帰つて研究するか」

鼻歌でも歌いそうなほどに上機嫌で部屋を後にしたキャスター。自分の研究所兼工房に戻る道すがら、華琳と一刀に出会った。

「ん？おや、曹操と北郷じゃないか」

「あら？あなたは・・・ああ、魔術師だったかしら？」

「こんにちは、キャスターさん」

「ああ、こんにちは。・・・二人とも、顔色が悪いね」

キャスターが指摘すると、一刀がははは、と苦笑いをする。

「珍しく仕事を立て込んで。華琳と一緒に徹夜だよ」

「ほう。」

「んで、これから軍事演習を見に行くんだけど・・・ふぁーあ・・・

「疲れてるみたいだね。・・・あ」

キャスターは自分が持っている瓶のことを思い出した。

「なら、これを飲むといい」

「・・・なんだこりゃ？」

「栄養ドリンク、といえば君には分かりやすいかな」

「何でそんなものがあるんだよ」

「ふふ、ギルからの頂き物だね。宝具級の靈薬だから、効果は期待していると思うよ」

「・・・そ、そっか」

少し引き気味に、キャスターから薬を受け取る一刃。  
華琳も、躊躇しつつ受け取る。流石に疲れを感じているらしい。

「それじゃ、私はこれを研究して量産しないとイケないから、失礼するよ」

「あ、ああ！ありがとな！」

「はは、礼ならギルに言いたまえ」

白衣を翻して去っていくキャスターに手を振った後、一刃は手元の瓶に目を移す。

「ま、栄養ドリンクって言うなら飲んでおくか」

キャップをひねり、ラベルも見ずに一気に飲み干す一刃。  
それを見て華琳も一気に飲み干す。

すべて飲み干した瞬間、一刃は思わずのどを押さえて咳き込む。

「げっほ！げっほ！まっず！」

「これは・・・水が欲しいわね」



「あ、ああ。どこかに井戸は・・・って、おおおおお?」

「ちょっと一刀。何を変な声を・・・あ、あら・・・?」

・・・

「ほらほら、ギルおにーちゃん、こつちだよー!」

「ああ、ほらほら焦らない焦らない。焦って走るとまた転ぶぞー」

「だいじょう・・・わひゃっ!?!」

「おっと!・・・言わんこつちやない」

くるくると回りながら走っていた璃々が、予想通り転びそうになつたので支える。

「えへへ・・・ありがと、ギルお兄ちゃん」

俺に支えられた璃々が、はにかんで顔を赤らめる。ははは、こやつめ。いっちょまえに照れてるのか。

「危ないからこのまま抱っこしていくぞー」

「わーい!」

きゃっきゃと喜ぶ璃々を抱き上げながら、街を歩いていく。

「あつちだよー!」

「あつちに何かあるのか？」

「あのね、いつつも遊んでるおともだちがいるのー！」

「へえ」

璃々の友達か。  
ちよつと楽しみかな。

「ギルお兄ちゃんのことお話したらね、会いたいつてみんないつてたのー！」

「そつか、なんか緊張するな」

しばらく璃々の言うとおりに街を歩いていくと、子供たちの騒ぐ声が聞こえてきた。

この近くにある広場で遊んでいるんだろう。子供たちが遊べるような場所はそこしかないからな。

「こつちだよー！」

「までよー！」

「うふふ、私に追いつけるかしらっ？」

追いかけてっこをしてるのかな。

「あ、いたー！……ってあれ？なんか知らない子がいるー」

「知らない子？」

「うん。あの金髪の女の子と、黒い髪の毛の男の子」

「……んん？」

あれ、あの金髪ドリルには見覚えが……。

「さてよー、そうそうー！」

「あははっ。ほら、こつちよこつち！」

そうそう？……そ、曹操！？

「さてさてー！かずと、頑張れよー！」

「おっー！」

かず……と……？

「みんなー！いーれーてー！」

あまりの驚きに硬直していると、璃々が俺の腕から飛び出していき、その子供たちの輪の中へと走っていった。

「あ、璃々だー！」

「いいよー、一緒にあそぼー！」

「あれー？おにーちゃんは誰ー？」

慌てて璃々を追いかけると、子供たちに気づかれた。わらわらと俺の周りに集まってくる子供たちは、思い思いの言葉を俺にかけてくる。

「あのね、璃々の知り合いのお兄ちゃんなのー！」

「お兄ちゃん？」

「お兄ちゃんだー！」

「あそぼー！お兄ちゃんっ！」

「あ、ああ、そうだな。遊ぼうか」

子供たちの勢いに押されつつ答えていると、先ほど璃々が見たことないと言った二人が近づいてきた。

「・・・あなた、名前は？」

「俺はギル。よろしくな」

「私は曹操よ。よろしくね」

「俺はほんごうかずと！よろしくな、ギル！」

・・・やっぱりか。この二人、華琳と一刀だ。

何で若返っているのか・・・は、やっぱり、あの霊薬を飲んだのだろつ。

でも、どこで手に入れたのだろうか。あれはきちんと宝物庫の中に・・・あれ。

「そういえば・・・机の上におきっぱなしだったかも・・・」

「そうだよ、あの時『床の』薬は片付けたけど、『机の上の』薬は・・・やばい。片付けてない！」

「多分キャスター辺りが持つていったのを渡されたんだろう。薬を飲むときはきちんとラベルを読みなさい！」

「というか、日本語が読めない華琳はともかく、一刀は読めるだろうに。なぜ読まずに一気なんてことを・・・。」

「そ、そうか。二人とも、よろしくな」

「取りあえず、元通りに戻る薬を飲ませないとな・・・。」

「よし！じゃあ、探検に行くぞー！」

「おー！」

「探検！？」

「広場で遊ぶんじゃないのか！？」

「あのね、ギルお兄ちゃんがいるなら、ちょっととおくにあそびにいつでもいいかなって・・・だめなの？」

「そうやって上目遣いにこちらを見上げてくる璃々。目じりには涙が溜まっている。」

「・・・むむ、璃々め。こんなに小さい頃からそんなテクニックを見につけているとは・・・お兄さん将来が心配です。」

「くっ、それは反則だぞ。・・・分かったよ、璃々。ただし！きちんと俺の近くにいること！それが条件だ！」

「わーい！」

広場で遊んでいれば、薬を飲ませる機会もあつたんだが・・・。街に出れば、おそらく子供の世話で手一杯になるだろう。その状況で子供二人に薬を飲ませるのは至難の業だ。・・・取りあえず、子供を見失わないようにしないと・・・。

「はぁ・・・どうしてこうなった」

・・・

「あ、おい！そっちは危ないぞ！」

「大丈夫だよー！」

「大丈夫じゃないから注意してるんだ！」

ああ、四方八方に子供が散らばる！

「・・・何やってんだ、ギル」

「瀧！ライダー！・・・助かった」

ライダーのほうは子供に人気があるし、瀧は子供の扱いが上手い。二人に協力してもらえれば助かる。

「助かるって・・・いやな予感しかしないな」

「おい、みんな！ライダーと瀧が遊んでくれるみたいだぞー！」

「あー！雷蛇仮面だー！」

「わー、瀧のお兄ちゃんだー！」

・・・ちなみに、だが。

瀧は子供・・・それも男子に妙な人気があり、ほとんど全員に真名を預けている。

多分、このあたりの子供すべてに真名を預けてるんじゃないだろうか。

「・・・流石は特級保育士。大人気だな」

「なんだその称号！うれしくね・・・うおお、まとわりつくなっ！」

「瀧、諦める。いつもの流れだろうに」

・・・いつもの流れなんだ。

子供たち、特に男の子が瀧とライダーにまとわりついているのを見ていると、背後からぽやっとした声が聞こえた。

「あれ？お兄さん、何してるの？」

「桃香か！助かった、こっちに来てくれ！」

こちらに声をかけてきた桃香の手を引っ張って、俺のほうへ引き寄せる。

「わわわっ。な、なに、そんな急に……！私にも心の準備ががが……」

「この子達の相手をしてくれ！」

「で、でもでもお城に帰ってからなら……はえ？相手？」

「ああ。ちよっと俺一人じゃ捌ききれなくてな。頼むよ」

これで女の子も大丈夫だろう。

「お姉ちゃん、髪飾り見よー！」

「これ、綺麗だよね！」

「むー、お兄さん、帰ったら……え？あ、うん、そうだね。……  
ほわぁ……ほんとに綺麗だなぁ」

子供たちに引つ張られ、露天の髪飾りに釘付けになる桃香。……  
後でお詫びとして買っておくか。

……うん、まあ、楽しそうならいいか。

「みんな楽しそうだね、ギルお兄ちゃん！」

「ん、ああ」

俺の元に残っているのは、俺に興味を持ってくれた子供たちだけだ。  
よしよし、さつきは三十人近くいて混乱していたが、八人程度なら  
何とかなるか。



「しかし・・・周りに人が増えてきたなあ」

妙な騒ぎになっていているのを聞きつけたのだろう。周りには暇を持って余しているおばちゃんやらが興味深そうにこちらを覗いている。

「・・・よし、城に行こうか！」

この人数だ。下手に街で遊ぶよりは城でまとめて相手したほうが楽だろう。

城の兵士たちにも事情を話せば何とかなるだろう。

・・・それに、子供化した華琳たちの問題もあるしな。

「お城ー！」

「お城を探検だー！」

「お姫様もいるのー？」

桃香に女子を、ライダーと瀧には男子を半分ほど担当してもらって、城へと向かう。

・・・

「・・・なんじゃそやつらは」

「お、祭だ。・・・ゆけつ、子供たち！」

祭を発見してすぐに子供たちをけしかける。

ノリの良い子供たちは俺の声に反応して祭へと突撃していく。

「わーい！いけいけー！」

「唐突に何をつ！？こら、ギルつ、説明せい！」

「ふははー、暇だろ、祭。子供の世話ぐらいしてもばちは当たらない」

「ひまだろー！」

「ひまなんだろー！」

「ぬぬう、こら、引っ付くなっ。」

祭はまとわりつく子供たちを鬱陶しげにしながらも、あまり乱暴に扱わない。

まあ、祭は妙に面倒見がいいからな。子供たちを任せても大丈夫だろっ。

幸い中庭は広い。子供たちが走り回ろうと、ある程度は大丈夫だ。

「おーい、曹操、一刀ー！」

「呼んだかしら、ギル」

「ギル、仮面ライダーがいる！」

・・・そっか、一刀は仮面ライダーが分かるんだよな。

しかも今は子供だ。テレビで見なかつたヒーローが目の前にいるなら、はしゃぐのも仕方がないか。

「ああ、呼んだ。この薬を」

「何を騒いでいる!」

飲んでくれないか、と続けようとしたそのとき、声が響いた。  
・・・この声は・・・。

「春蘭かつ!」

「そうだ!私だ!・・・それで、なぜ城に子供がいるのだ!」

腕組みをして仁王立ちの春蘭は、隣に秋蘭を連れて階段の上から「  
ちらを見下ろしている。

まずい。このまま春蘭が暴走すると、確実に面倒くさいことに・・・  
!

「さて、春蘭!これは説明すると長く・・・」

「あら?春蘭じゃない」

「なんだきさ・・・か、華琳様っ!?!」

俺が事情を説明しようとしたとき、再び話をさえぎられた。  
・・・なんで小さくなった華琳のことを・・・って、そうか。小さい頃  
から一緒だったんだっけ、あの三人。

「華琳様が小さく・・・なるほど、先日の薬の所為か?」

春蘭の隣に立っていた秋蘭が、冷静に推理する。

「ふふ、秋蘭たちが大きくなると、こんな風になるのね。・・・面

白いわ。ちょっと、私の部下は他にもいるのよね?」

「え?え、ええ。」

「なら、その子たちを見に行きましょう。ついてきなさい、春蘭、秋蘭」

そう言って城の中へと向かう華琳。

「待てかり……」

「ギルお兄ちゃん、いっちゃだめー!」

慌てて三人を追いかけてよとしたら、璃々に止められた。

「ちょ、璃々!あの三人を止めないと……」

「だめなのー!今日は璃々と遊ぶの!」

「く……なら、一刀だけでも……っていねえ!?」

一刀だけでも元に戻せば、華琳のストッパーにできるかもしれない、と思っただけで振り返ると、そこには誰もいなかった。

近くにいた少年たちを捕まえて一刀を知らないか、と聞くと

「一刀ならあっちに行っただよー?」

少年の一人がそういいながら訓練場へ続く道を指差す。

……ああもう!一刀って意外とマイペースなんだな……。

「璃々、おんぶと肩車、どっちが良い？」

「んーとね、かたぐるま！」

「よっしやー！」

璃々がどうしても離してくれそうにないので、いつそのこと連れて行くことにする。

肩の上に璃々を乗せ、桃香と祭、そしてライダーと灌に子供たちを任せて走り出す。

・・・騒ぎだけは起こしてくれるなよ・・・！

・・・

北郷一刀は始めてみる城に興奮していた。

「おー！剣だ！」

「あん？・・・おいセイバー、子供が迷い込んでる」

「ほう。これ、少年よ。」

「ん？おおつ、兵士だ！」

呼び止められた一刀は、セイバーと銀を見て感動したような表情を見せる。

「見たところ一人のようだが・・・迷子か？」

「迷子じゃないよ！探検してるんだ！」

「探検つて・・・しゃーねー、ギルあたりに預けるか。あいつなら子供の扱い上手いだよ」

ため息をつきつつセイバーに提案する銀。

セイバーもそのほうがいいと思ったのか、首肯を返す。

「そうするか・・・少年、名を何と言うっ？」

「俺の名前はかずと！」

「かずと?・・・おいおい、セイバー、こいつ・・・天の御遣いじゃないか?」

「なるほど、若返りの薬か。昨日の騒ぎのことは聞いていたが・・・本当にあるとはな」

「ギルも多分探してるだろうし、連れてってやるっぜ」

「そうしようか。ほら、北郷。ギルのところへ連れて行ってやるっ。」

そう言つてセイバーが一刀の手を引く。

一刀は特に抵抗することなく連れられ、訓練場から出て行く。

「マスター、おぬしは他の兵士に声をかけてギルを探してもらつてくれ」

「おう。悪いけど、そいつのお守りは頼んだ！」

そう言つて銀は駆け出す。

さて、とセイバーは呟きながら、城内を歩き始める。

ある程度なら魔力をたどつていけるが、サーヴァントが七体いて、マスターもいる以上あまりあてにしないほうがいいだろう。

「キャスターならば、個別に嗅ぎ分けるくらいはできるのだから……ま、無いものねだりだな」

「おー！おっちゃん、あれ剣だよな！」

「おっちゃん……。ん、ああ、確かに剣だが……。北郷にはまだ早い」

「えー……。」

セイバーの返答に、不満そうな声を漏らす一刀。

「良いか？子供は剣を持つより親の手伝いをして……。む？」

諭そうと口を開いたセイバーだが、いつの間にか一刀の気配がしないことに気づいた。

周りを見渡すが、どこにもその姿はない。

「しまった……。！」

子供から目を離すなど、迂闊……。！と呟きながら、通路を走り始めるセイバー。

必死の形相で城の通路を走るセイバーは、他の兵士たちに何か起こったのかと思わせるのに十分であった。

・・・

「一刀っ！」

「かずとーっ！」

訓練場へとたどり着き、声をかける。

・・・が、兵士たちがこちらを見るだけで一刀の姿は見えない。

「ここじゃないのか・・・？」

「あれ？ギル様じゃないですか。どうなさったんですか？」

「お前は・・・龍討伐のとき一緒だった、蜀の」

「お久しぶりです。どうやら北郷様を探しておられるようですが・・・」

「ああ。その、ややこしいんだが、子供になった一刀を探しててな俺の言葉に少し考え込んだ蜀のは、あ、と何かを思い出したような顔をして、口を開いた。

「子供・・・ああ、それなら、さっき銀と正刃が黒髪の少年を連れてどこかへ行きましたが・・・」

いきなり有力な手がかりが見つかった。少し焦りながら蜀の問い詰める。

「どっちに向かった!？」



「どっち、といわれると分かりませんが・・・政務室と厨房のある方向へと行きました」

訓練場から出て少し行くと、分かれ道がある。

確かそのまままっすぐ行くと厨房で、右に曲がると政務室へと続く階段があるはずだ。

おそらく蜀のは分かれ道までは見ていたが、それ以降は見ていなかった、ということだろう。

「・・・俺を探してくれているなら政務室にいった可能性が高い、か」

少年一刀がお腹が減ったと言い出したら、セイバーの性格上厨房に行く可能性もある。

・・・どうする。選択を間違えればかなりの時間ロスになる。

「政務室だ！」

分かれ道を右に曲がり、階段へと走る。

確か政務室には今・・・愛紗と紫苑がいるはず。

紫苑なら子供の扱いもなれたものだろうから、足止めしてくれていることを願おう。

・・・

北郷一刀は剣につられてセイバーから離れ、再び迷子となっていた。

「あれ？おっちゃんかはぐれた。」

高い場所にあるので取れなかったが、本物の剣を見られたという満足感を覚えながら、一刀は鼻をひくひくとさせた。

「なんか良いにおいがする。」

匂いのする方へと歩くと、厨房へとたどり着く。

厨房のすぐそばには食堂があり、当番を終えた兵士たちが早めの昼食を取っていた。

「おー……うまそー」

食堂へと足を踏み入れた一刀は、すぐそばで食事をしていた兵士の近くへと歩み寄る。

「ん？……兄者、子供がいるぞ」

「なんだと？……弟者、この少年、どこかで見たことがあるな」

「むむ……いや、兄者。俺は見覚えがないな」

「そうか……ならば、多分俺の勘違いだろう。少年、腹が減ったのか？」

金色の鎧を着た兵士が、一刀に優しく声をかける。

その声に一刀が首肯すると、兄者、と呼ばれたほうが新しく定食を持ってきて一刀の目の前に置いた。

「少年よ、たくさん食べるといい。」

「おー！ありがと！いただきまーっす！」

「なんとも旨そうに食べる少年だ。」

一刀が食事を取り終わり、少し落ち着いた頃。  
弟者と呼ばれた兵士が口を開いた。

「それで・・・少年よ。少年は迷子か？」

「迷子じゃないよ。お城の中を探検してるんだ！」

「ふむ・・・なるほど、迷子だな」

「そうなのか、兄者!？」

ぼそぼそと小声で会話する二人。

「ああ。子供が一人で城の中に入れるはずがないだろう。」

「確かに・・・ならば、兵士として少年を親の元へ届けねば!」

「ああ!よし、少年よ。取りあえず城の外まで送ろう。」

「えー。まだ城の上のほうとか行ってないんだけど」

「むむ・・・ならば、城の中を案内しよう。・・・弟者、その間に他の兵たちに連絡しておいてくれ」

「うむ、了解した、兄者。・・・それでは少年、兄者の言うことを良く聞くのだぞ」

「分かった！」

元気に答えた一刀と共に立ち上がり、兄者と呼ばれた兵士は通路を歩き始める。

「さて・・・まずはいろいろと聞きながら歩いていったほうがいいだろうな」

どこかの兵士の息子、と言うこともありえるし、と続けながら歩き始めた兵士に、一刀は素直についていつている。  
食事を貰ったからか、なついたらしい。

これではぐれる事はないだろう、と安心して歩く兵士。  
その後ろでは、興味深そうに周りを見渡しながら、落ち着かない様子の子の一刀が歩いていていた。

・・・

「いねえ！」

「・・・どうしたのですか、ギル殿。」

「あ、おかーさんだー！」

「璃々？・・・ギルさん、なにやら急いでいらっしやるようですねど・・・どうなさいました？」

「いや、ここに子供が来なかったか？黒髪の男の子なんだが」

「うーん・・・ここには、私たち以外にはねねしか来ていませんが」

その子供がどうかしたのですか？と愛紗は首をかしげながら聞いてくる。

「いや、来てないならいいんだ。邪魔したな」

そう言っつて部屋を後にする。

厨房のほうだったか・・・！

・・・

部屋から飛び出していったギル。

その後ろ姿を見ていた愛紗は、ううん、と唸りながら口を開く。

「・・・ギル殿、何か焦っつていらっしやるようだったが・・・」

「そうねえ。・・・そうだ。愛紗ちゃん、ギルさんのこと、手伝つてあげたら？」

「だが、まだ仕事が・・・」

突然の紫苑の提案に、洪る様子を見せる愛紗。

あと少しとはいえ仕事が残っている以上、一人だけこの場を去るわけには行かない。

「これくらいなら、私一人でも何とかなるわ。それに、もう少しで詠ちゃんも来るし」

「し、しかし・・・」

「いいのよ。こういうときに良い印象を与えておかなきゃ、何時ま

でたつても進展しないわよ？」

「なっ・・・！そ、その、私はギル殿のことをそんな風には・・・！」

さらに続く紫苑の言葉に、愛紗は顔を赤くして反論する。

だが、紫苑は年上の余裕でそれを受け流し、柔らかい笑みを浮かべて口を開く。

「うふふ。隠さなくてもいいのに。ほら、早くおいきなさい。早くしないと、他の娘に取られちゃうかもしれないわよ？」

「っっ！す、すまん！後は任せる！」

「ええ。行つてらっしゃい」

ようやく折れた愛紗が部屋を飛び出していくのを見送った紫苑は、柔らかい笑みのまま書類を手に取る。

「それにしても、璃々はギルさんに懐いていたわねえ・・・。そろそろ、璃々もお父さんが欲しい頃かしら？」

・・・

頭上の璃々のはしゃぐ声を聞きながら、城の通路を疾走する。

兵士たちがぎよっとした顔をして道を開けてくれるのに心の中で感謝しつつ、厨房へ向かう。

「一刀！」

「かーずとーっ！」

訓練場と同じように、兵士たちの視線が俺と璃々に集中する。近くにいた兵士を捕まえ、黒髪の少年が来なかったか聞いてみると、なんと袁紹の所の兵士が連れて行ったという。タイミングの悪い……！

「ありがとう！璃々、掴まってるよ……！」

「はーいっ！」

璃々の足をしっかりと掴んで、廊下を走る。

「へう……！？ぎ、ギルさん……！？」

「おっとと……！月か」

曲がり角へ差し掛かったとき、月とぶつかりかけた。ぺたん、と尻餅をついた月に手を差し出し、立たせる。

「どうなさったんですか？お急ぎのようでしたが……」

「えーつとだな……すまん、後で絶対に話すから！」

「えっ！？あ、ぎ、ギルさんっ！？」

「じゃーねー！月おねーちゃん！」

「え……えええ〜？」

背後で月の戸惑う声が聞こえたが、今は気にしないことにする。  
すまん、月。後でちゃんと説明するから……！

……

「……な、なんだっただんでしょう……?」

ギルが通り過ぎた後。

月は後で話してくれると言っていたし、今は仕事に集中しなければ、と自分を納得させ、再び通路を歩き始める。

璃々ちゃんを肩車して、あれだけ急いでいたのだから、また何か厄介ごとに巻き込まれてるのかなあ、と心配しながら歩いていると、前方から人影が迫ってくるのに気づいた。

「あれ?愛紗さん」

「む?ああ、月か。……その、ギル殿を見なかったか?」

愛紗は月を見て立ち止まると、少し気まずそうにギルの行方を尋ねた。

「ギルさんですか?それなら、この道をまっすぐ走っていかれましたが……」

「そ、そうか!ありがとう!」

「いえ。……あの、どうかしたんですか?」

「あ……。その、だな」



再び走り出そうとした愛紗が、顔を曇らせながら動きを止める。  
何か言いにくい事があるような表情をしているのを見て、月は何か事情があるのだろうとあたりをつける。

「いえ、やっぱりいいです。……大体、分かりましたから」

「そ、そうか? ……すまないな、月。」

それでは、失礼する、と月に告げて、再び走り始める愛紗。

「……急いでたみたいだし、多分ああいう訓練なんだろうなあ。  
足止めしちゃって、悪いことしたかも」

自分は訓練に参加しないから分らないけど、城内を逃げる犯人を  
追いかける訓練のような物かな、と自分の中で結論付ける。  
そして、走り去る愛紗の背中を見ながら、月は一人気合を入れなお  
していた。

「それにしても……」

一方、走る愛紗は、先ほどの月の発言を聞いて感心していた。

「私の顔を見ただけで、私がギル殿をお慕いしていることがわかる  
とは……流石は、ギル殿の主にして恋人だな」

自分で放った言葉に自分で照れながら、よし、と気合を入れなおす  
愛紗。

「今日、ギル殿に想いを伝えよう……!」

些細なすれ違いから盛大な勘違いをしつつ、愛紗は城内を疾走する。

・  
・  
・

### 第十三話 二人も子供に（後書き）

子供になった一刀と華琳、そしてその二人が起こす騒動・・・を、  
書いていけば良いなあ・・・。

それにしても、なんだか最近月の出番が少ない気がします。

話には出てこないだけで、ちよくちよく主人公の部屋に詠と一緒に  
突撃しているのですが・・・。

そう言った部分もきちんと書けるよう、精進していきたく思います。

誤字脱字のご報告、ご感想お待ちしております。

## 第十四話 騒動の後に（前書き）

今回の話は急ぎ足の超展開になってしまっています。

それでは、どごご

## 第十四話 騒動の後に

「おー！」

「どうだ、少年。城壁から見る街は素晴らしいだろう」

「うんっ。凄い高い！」

兄者と呼ばれる兵士に連れられ、一刀は城壁に来ていた。

一刀が城壁からの景色に感動していると、弟者と呼ばれた兵士がやってきた。

「弟者！どうだ、兵士たちから情報は得られたか？」

「すまない、兄者。どうも兵士たちの子供ではないようだ。情報が全然集まらん」

「ならば……やはり、街まで連れて行ったほうがいいのか」

「そうするべ……」

「あら？あなたたち、何をしてるんですの？」

そうするべき、と続けようとしたそのとき、その背後から甲高い声が聞こえてくる。

「……兄者、凄くいやな予感がするのだが」

「ああ、弟者。ろくなことにならない予感がひしひしと……」

「おー！すっげー！金髪ドリル！」

「んん？・・・子供じゃありませんの。あなたたちの子供でしょ？」

「あ、もしかしたらこの子、さっき兵士さんに聞いた迷子じゃないですか？」

甲高い声の主・・・麗羽が一刀を見つけると、興味深そうにじろじろと眺め始める。

そして、その背後に侍る斗詩が少年を見て思い出したようにそう呟いた。

「迷子？・・・そうですね、暇ですし、私が親探しを手伝ってあげても良くてよー！」

「・・・どうするんだ、兄者。袁紹様がかかわるとろくなことにならない気が・・・」

「少年には悪いが、ここは離脱したほうがよさそうだ。」

そう言ってこそこそと離れていく兵士。

それに気づくことなく、麗羽は少年を質問攻めに行っていた。

「それで？あなたの名前を教えなさい」

「俺？俺はかずとー！よろしくな、ドリルおばさんー！」

「おぼっ・・・！く、く、子供の言うことですよ・・・！」

「ははは！麗羽様、言われちゃいましたねえ」

「お黙り猪々子さん！・・・取りあえず、兵士の子供ではないようですし、街まで連れて行けば何とかなるでしょう。」

「あれ、兵士さんたちはどこに・・・あ！待ってくださいよ、麗羽様ー！」

「ほらほらー！早く来ないと置いてくぜ、斗詩ー！」

「あーん、もう、置いてかないでよー」

半分泣きそうになりながら小走りに二人に追いつこうとする斗詩の頭からは、兵士のことなどすっぱ抜けていた。

・・・

「く・・・！常に一手遅れてるな・・・」

「いって、ってなーに？」

「えーっと、先を越されるってこと」

「ほほーっ」

頭上で得心している璃々をあやししながら、俺は城壁の上で考え込んでいた。

先ほど城壁の見張りをしている兵士から聞いた話では、一刀は袁紹のところの兵士から、麗羽たち袁紹軍の三人に連れて行かれたらしい。

あの三人・・・特に、麗羽が絡んだ場合はやばい。多分兵士二人は逃げ出したのだろう。正しい判断だ。後で拳骨してやるう。

「幸いここは見晴らしがいい。あの派手な金髪ドリルなら千里眼で・・・！」

目に魔力を集中させると、遠くの町並みの細部まで見ることができるようになる。

城壁の上を歩きながら町を見渡していると、大通りの飯店近くに輝く金髪が見えた。

「あそこか！」

きやつきやとはしゃぐ璃々を落とさないようにしながら、街へと飛び出した。

・・・

「まてえええええええ！」

「なっ!?!」

城門から街に出ようとした瞬間、横合いから叫び声と共に斬撃が襲ってきた。

慌てて肩に乗る璃々を抱えるようにして反対側に飛び込む。

「くっ・・・春蘭!?!なんだ、いきなり！」

「はっはー!とぼけても無駄だ!今日は何でも、見つけた英霊と戦って良い日と聞くじゃないか!ならば、いまだ決着のついていない





「が……ふっ……！」

「……まさか」

左手を突き出した格好で少し固まる。

春蘭は拳が当たる直前、身体を後ろに引いて威力を弱めた……と言うか、ほとんど受け流した。

少し呼吸を乱したが、それ以上のダメージはないだろう。

おいおい、恋はともかく、春蘭も英霊に食いつく化け物か。

エルキドゥ天の鎖は……速度的に無理だろうな。

「なかなかやるではないか！楽しいぞ、ギル！」

再び上段から振り下ろされる七星餓狼をエアで受け止める。

回転する刀身が七星餓狼とぶつかり合って火花を散らす。

後で怒られるのを覚悟で七星餓狼を折ろうと力を籠めると、右下から膝蹴りが跳んできた。

「ちっ……！」

ダメージはないが、衝撃がわき腹に走り、エアに籠めた力が霧散する。

つばぜり合いの状態から脱した春蘭は、返す刀で俺の左わき腹に向けて切り上げる。

「せやあああああ！」

「はあっ！」

左手を刀身に叩きつけて軌道をずらす。

切り上げた体勢で隙だらけの春蘭に当て身をしようとして手刀を振るう。

「甘いつ！」

「ぐっ……!？」

だが、春蘭からの頭突きを食らい、手刀の狙いは狂い、春蘭の右肩に当たる。

一瞬の空白の後、二人とも手元に引き戻した剣を振るう。

甲高い音を立ててお互いの武器がぶつかり合う。

春蘭の野生的勘がここまでのものとは思っていなかったな……！  
お互いに一歩ずつ離れた後、春蘭がこちらに突っ込んでくる。

「はあああああああああああ！」

それを受け止めようとエアを構えたそのとき……俺の目の前に、  
黒い影が割り込んできた。

その黒い影は春蘭の七星餓狼を受け止め、弾いた。

「貴様……！」

「愛紗……？」

「はい、ギル殿。助太刀に参りました。」

「助かる。……どうも何か勘違いされているようだな」

「ええ、最初は割り込むつもりなどなかったのですが、どうも様子が違うようでしたので」

青龍偃月刀を構えた愛紗が、こちらに背を向けたままそう説明してくれた。

礼を言つてこの場から離脱しようとしたとき、今度は城門のほうから小さい影が突撃してくる。

「にやにやーっ！お兄ちゃん発見なのだー！覚悟するのだー！」

「鈴々っ！？……まさか、鈴々もあの間違つた噂を聞いて……！？」

一瞬考え込んだ間に、鈴々の丈八蛇矛が振り下ろされていた。

「く……！開け！」

宝物庫を開き、宝具の頭だけを出して鈴々の攻撃を防ぐ。くそ、これは不味いぞ……！

「あーっ、見つけたよ、お姉さまっ！」

「ホントかつ！？ギル、行くぞおっ！」

「翠っ！？蒲公英も！」

不味い！これは昨日と同じことになる流れか……！  
しかも、最悪な方向に強力になつてるし！

「エルキドウ天の鎖！」

蒲公英の背後に宝物庫の入り口を展開して、鎖で絡め取る。

「ふわっ！？ちょ、ずるくない！？」

「ずるくない！後で何かおごるからそこで黙ってる！」

「・・・なら、いいかな。ごめんねー、お姉さまー」

「ちっ、蒲公英が脱落か。・・・鈴々、本気で行くぞ」

「おうなのだ！お兄ちゃんはとっても強くなったから、本気で行くのだ！」

宝物庫から原罪を取り出して備える。

「ギル殿！・・・こら、鈴々！翠！ギル殿に迷惑を・・・つく！」

こちらに声をかけようとした愛紗だが、襲い来る春蘭の攻撃を受けてそれど頃ではなくなってしまったようだ。

「余所見をするなど、余裕だな、愛紗あ！」

「く、はああああ！」

・・・愛紗は春蘭の相手でいっぱいはいっぱいのようだし、この二人は俺一人で何とかしないといけない、か。

二人を迎撃しようと剣を構えた瞬間、風を切る音が聞こえた。

「これは・・・恋か！」

必中無弓の矢が飛んでくるのを察知して、その場から離れる。

着弾した矢は光の粒子となって消え、恋の手元へ戻っていく。

「……鈴々、翠。……ギルは、恋が倒す。引っ込んでて」

「にゃにゃ！鈴々が先に見つけたのだ！」

「後から来たんだから、偉そうにするなよ！」

「……なら、三人でやる。文句ない？」

「にゃにゃっ。それならいいのだ！」

「よっしゃ！行くぜ、鈴々、恋！」

「……行く。」

どんどん状況が悪くなっていく……！  
恋が参加したのは辛いな。宝具を持つ恋は、唯一俺に攻撃を通すことが出来るし……。

「……おおおおおお」

いざ、と武器を構えて間合いを計っている最中。  
遠くから、雄たけびのような声が聞こえてきた。

「おおおおおおおおおお」

だんだんと近くなるその雄たけびは、あの壁の向こうから聞こえる  
ような気が……。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
お！！」

「突撃！突撃！．．．あーっ、やっぱり、ギルだー！何してるの？  
シャオも混ぜてー！」

「シャオ！？それに．．．バーサーカー！」

「おおおおおおおおおおおおお！」

「やつちやえバーサーカー！ギルと遊ぶのを邪魔する悪い子に、お  
仕置きよっ！」

シャオが命令すると、バーサーカーは鈴々たち三人に突っ込んで行  
った。

．．．殺さないよな？取りあえずシャオには手加減するように注意  
して、今度こそ街へと向かう。

他のサーヴァントたちに迷惑が掛かってなきやいいんだけど．．．。

．．．

街で一刀を探し回る。

璃々はさっきのごたごたで華琳に預けたので、行動に制限がなくな  
った。

華琳はともかく、秋蘭なら子供二人を守るくらい簡単だろう。

「おーっほっほー！」

「おーっほっほー！」

城壁の上から麗羽を見つけたあたりを歩いていると、高笑いが聞こえてくる。

・・・妙に棒読みな笑い声も聞こえてくるが、それはスルーする。

「見つけた。・・・って、何やってんだ、あれ・・・」

高笑いする麗羽と一刀。そのそばには、大笑いしている猪々子とおろろしてる斗詩がいた。

・・・あ、斗詩が俺に気づいた。凄く逃げたいが、涙目でこちらに走り寄ってくる斗詩を置いていくわけにも行くまい。

「ギルさあ〜ん！助けてください！もう無理です！麗羽様に子供を与えてはいけなかつたんです！」

「落ち着け、斗詩。何があつたんだ？」

「それは・・・」

かくかくしかじか、と説明された内容を要約すると、子供を見つけた麗羽が親を見つけてやると兵士から引き継ぐ。

そして、街へ出てしばらくすると、何をトチ狂ったのか袁家の作法を教えて差し上げますわ！と一刀に高笑いを教え始める。

妙に乗り気の一刀と、ヒートアップする麗羽。そばで大笑いする猪々子。集まる野次馬。

そんな中で止めようと頑張っていた斗詩だったが、もうどうにもとまらない三人におろろするしかない状況だった。

そして、俺を見つけて今に至る、と。

「・・・お疲れ、斗詩」



「うう、そう言ってくれるのはギルさんくらいです……」  
「っていうか、麗羽って意外と子供好きなんだな……」  
「やっぱり精神年齢が近いからだろうか。」

「取りあえず、一刀を回収しないとな」

「へっ？一刀って……天の御使いのですか！？あの子が!？」

「ああ……その、俺の持ってた薬を間違っただらしくてな。  
ああなっちゃったんだ」

「うわぁ……お疲れ様です。」

「ありがとう。さて、一刀を回収するかな」

その後、麗羽を正気に戻し、一刀を城へと連れ戻した。  
麗羽は最後までぶつぶつ言っていたが、根気良く説得すると「まあ、  
ここはギルさんの顔を立ててあげますわ!」と引き下がってくれた。  
凄く申し訳なさそうにしていた斗詩の顔が印象的だった。……今  
度、斗詩には何か疲れの取れるものを送っておこう。

「ほら、一刀。これを飲んでくれ」

「何これ？すげえ緑色だけど。メロンソーダ？」

「ああ。ほら、歩き回って喉が渴いただろ？」

「うんっ。ありがとう、ギル!」

そう言っつてぐびぐびと薬に口をつける一刀。  
味は魔術でごまかしているので、最後まで飲んでくれるだろう。

「ぷはーっ！これ、あんまり味が・・・ん、あれ、あれれれれれ・・・？」

光に包まれた一刀が、一瞬で元の姿に戻る。

「あ、あれ？・・・俺、何でこんなところに・・・？」

「ようやく一人か・・・」

それから、一刀に事情を説明しつつ華琳の元へ急ぐ。

いまだに剣戟の音と雄たけびが聞こえるので、多分まだあそこにいるんだろう。

・・・

「秋蘭、薬を！」

「む？ギル。・・・それに、北郷も」

「あつ、ギルお兄ちゃん！もー！どこ行ってたのー！？」

「すまん、璃々。・・・さて、これを飲んでくれるか？」

そう言っつて俺は華琳に薬を差し出す。

華琳は訝しげにその薬瓶を見つめ、口を開く。

「そんな怪しげなもの飲めないわ。」

そつぱを向いてしまった華琳にどうしようかという思いを籠めて一  
刀を見る。

「一刀はゆっくりを首を横に振った。・・・どうしようもない、って  
か。」

「あらあら、なんだか大騒ぎね」

「紫苑。仕事は大丈夫なのか？」

打つ手無しか、と思ったそのとき、紫苑が背後から声をかけてきた。

「ええ、すべて終わらせて屋敷へと向かおうとしたらこの大騒ぎで  
すもの。気になっちゃって」

「・・・そうだ」

紫苑といえは子供の扱いはなれたものだろう。

璃々っていう娘もいるんだしな。

なら、子供と化した華琳に薬を飲ませるための知恵を貸してくれる  
かもしれない。

「紫苑、頼みがあるんだけど・・・」

「そのお薬を、華琳ちゃんに飲ませたいのかしら？」

俺が口を開くと、紫苑は小声でそう囁いた。

今の状況を見て判断したのだろう。流石は紫苑、鋭いな。

「ああ、頼めるか？」

「ええ、こういうのは慣れてるから。それ、貸してもらえるかしら」

そう言って手を差し出した紫苑に、瓶を渡す。  
受け取った紫苑はにこりと笑うと、華琳に近づいていく。

「・・・大丈夫なのだろうな、ギル」

「大丈夫だって。紫苑は優しいからな。きっと上手く飲ませてあげられるさ」

心配そうな秋蘭をなだめながら、俺たち三人は紫苑と華琳に注目する。

「はい、このお薬を飲みましょうねー」

「ふん、だからそんな怪しい薬は・・・って、ちよっ、何を、もがっ！」

優しいのは笑顔だけだった。

紫苑はそっぽを向く華琳を押さえつけ、口を強制的に開けさせ、瓶をねじ込んだ。

そのまま瓶を傾けて中身を流し込み、有無を言わせぬプレッシャーを掛けて薬を飲み込ませる。

・・・こんなに怖い紫苑は、年齢のことを聞いたとき以来だ・・・。

「・・・うわぁ」

「紫苑は・・・なんだったかな、ギル」

「ね、根は優しいんだぜ？」

「……ふっ」

何かを諦めたような笑みを浮かべた秋蘭が、華琳の元へと向かう。それと入れ違いになるように空の瓶を持った紫苑がこちらへと近づいてくる。

「一刀がひいつ、と短い悲鳴をあげた気がするが、無視することに。」

「はい、ギルさん。きちんと全部飲ませましたよ」

先ほどと変わらぬ優しい笑みを浮かべながら、俺に空の瓶を手渡してくる紫苑。

それを宝物庫にしまいながら、ははは、と乾いた笑いを返す。

「た、助かったよ、紫苑。」

「いえ、ギルさんのお役に立てたのなら、嬉しいわ」

「でも、その……ちょっと強制的過ぎなかったか？」

「ふふ、何のことかしら？」

あ、やべ、これ以上突っ込んだら俺も不味いことになるな。

「……いや、なんでもない。今度何かお礼させてくれ。」

「分かりました。楽しみにしていますね。」

それでは、と去っていった紫苑を見送り、華琳に視線を戻す。

「けほつ、けほつ。・・・何かしら、口に妙な苦味が残っているわね・・・」

「華琳さま、水です」

「ありがとう、秋蘭。・・・んく、んく」

水を飲んだ華琳は、きよろきよろと周りを見渡す。

疲れた様子を見せる俺に、体育座りになってぶつぶつと何かを呟く一刃。

そして少し離れたところでは武将とサーヴァントが入り混じって大混戦となっている。

「・・・私が気を失っていた間に、何が起こったの・・・？」

首を傾げる華琳を見て、俺は苦笑を返すしかなかった。

・・・

あの「見つけたサーヴァントと戦っても良い」という噂が流れたのは、走り回っていた俺たちが原因だったらしい。

城内を必死の形相で全力疾走するセイバー、そして愛紗に追いかけられる俺。

それらを見ていた兵士が、ああやって英霊に追いついて戦う訓練なんだ、と推測で話をしていたところ、子供化した華琳たちがそれを偶然聞いた。

そして、英霊に興味を持った華琳が春蘭にサーヴァント討伐を命令し、それを言いふらしながら走った春蘭によって鈴々たちにそのこ

とが知れ渡った、と言うことらしい。

「……はあ」

秋蘭から聞いた話を頭の中で反芻していると、キャスターの部屋に到着した。

取りあえず、疲労回復の薬と若返りの薬を交換し、若返りの薬は宝物庫へ。

これらの薬は何故が使ったそばから宝物庫の中で復活するので、捨てようが何しようが無駄なのだ。

……あ、そういえば桃香に買った髪飾り、渡すの忘れてた。

「いや、明日にしよう。今日はもう……いろんな意味で無理だ」

数日分の騒動を濃縮したような数時間のせいで、疲れがやばい。

「こんなときこそ、疲労回復の妙薬か。……く」

薬を飲み干した瞬間、身体が軽くなったような感覚がする。

「あー、これはいいな」

若干の感動を覚えつつ自室に戻る。

……ん？部屋の前に人影が……。

「あ、お、おかえりなさいませ……！」

「……あれ？愛紗？……どうしたんだ？」

「え、ええと、その……ですね……」

愛紗に声をかけてみると、いつもの愛紗とは違い、なにやらもじもじとしている。

「……あれ、結構前にもこんな空気が……ま、まさかな。」

「……取りあえず、俺に用なんだろ？立ち話もなんだし、部屋に入るつよ」

「あ……は、はいっ」

妙に気合の入った返事を返す愛紗の声。

さらに疑惑が確信に変わっていくのを感じながら、部屋に愛紗を招く。

「好きなところに座っていいよ。今お茶入れるから」

「ギル殿っ、お、お構いなく……!」

部屋においてある椅子に座った愛紗が、慌てた様子でそう言った。

「俺もお茶飲みたいから気にするなよ。一人分も二人分も一緒さ」

「すみません……。ありがとうございます」

苦笑しながらそう返して、顔を赤くして俯きっぱなしの愛紗の前にお茶を置く。

自分の分も卓において、愛紗の対面に座る。

「それで、俺に用事みたいだけど……何か、言いづらいことか？」

「い、言いづらいことではないのですが……その、心の準備が必



要なこととして・・・」

・・・俺も鈍くはないつもりなのでこの先の流れが大体わかったかといって、もし外れていたらただのうぬぼれの強い奴になってしまつので愛紗の口から言葉が出てくるのを待つ。

「私は・・・その、ギル殿のことを・・・お、お慕いしております・・・!」

「・・・そっか」

予想通り、と言つてしまつては失礼か。

ある程度考えていたことだったので、驚きは少なかった。

・・・まあ、俺が愛紗に好かれているなんて信じられない、と言つる思いはあるが。

「・・・嬉しいよ、ありがとう。」

「っ、あ、ありがとうなんて、そんな・・・」

「いつもの凜としてる愛紗もいいけど、そうやって慌てるのも可愛いよ」

「か、可愛いなどと・・・からかわないでくださいっ」

「はは、ごめんごめん。」

そう言つて淹れたお茶を一口。

目の前の愛紗は、ちらり、ちらりとこちらを見ている。

「……あ、そうだ。愛紗、ちょっとおいで」

「え？……は、はい」

緊張した面持ちでこちらに近寄ってくる愛紗。

手と足が同時に出てしまっているうえに、顔が凄く強張っている。

「屈んでくれるか、愛紗」

「そ、そそそんないきなり口でなんてそんな私にはまだ……」

混乱しながらも姿勢を低くしてくれた愛紗に手を伸ばす。

愛紗は少し身体を震わせたが、俺が頭を触ると少しづつ落ち着いた。

「あ、あの……ギル殿……？」

「ん、いやー、愛紗って美髪公って呼ばれるぐらい髪が綺麗だろ？

・前々からちよつと触ってみたかったんだよなー」

ポニーテールの部分や、前髪を思う存分弄り回す。

愛紗が俺に好意を持っていてくれるとわかったからこそできる芸当だ。

「あ……そ、そういうことだったのですか……私はてつきり……あ」

口を滑らせた、と表情に思いっきり出している愛紗に笑いかけながら、俺は口を開く。

「……てつきり、何だって？」

「い、いえいえいえいえ！何でもありません！」

愛紗は慌てて首を振りながら答えるが、かなり手遅れだ。もう一度愛紗の頭に手を乗せ、だんだんと下に下ろしていく。

「・・・愛紗、目閉じて」

愛紗の頬に手を添えながらそう言うと、愛紗はそつと目を閉じた。座っている俺と姿勢を低くして立っている愛紗の顔は同じ高さだ。少し顔を前に出すだけで、俺の唇が愛紗の唇に触れた。

「ん、ふ・・・」

しばらく柔らかさを堪能した後、一旦唇を離す。その後、ほうけている愛紗を抱えて寝台に寝かせると、愛紗はようやく正気に戻った。

「ギル殿・・・私はこんなことをするのは初めてですので・・・や、優しくお願いします・・・」

「もちろん。・・・それじゃ、力抜いて」

ゆっくりと口付けながら、俺は愛紗に覆いかぶさる。

・・・

翌朝、腕にくっついていて愛紗を見ながら思う。

・・・この布団を押し上げている二つの凶器の威力は、すさまじかった。

まさか押しつぶされて窒息しかけることになるとは……。

「……ポニーテールもいいけど、ストレートも良いなあ」

流石に寝るときも髪を縛っているのはどうか、と言うことで寝る直前に髪留めを解いたのだが、流石は美髪公と言ったところか。窓から入ってくる月の光で、きらきらと輝いているように見えた。

「さて、と。そろそろ時間かな。……おい、愛紗、起きろー」

「う、ん……ん？……ぎ、ギル殿っ……！」

寝台から降りてズボンを穿いたあたりで愛紗の身体を揺すって起す。

最初は寝ぼけ眼だった愛紗も、俺を認識した瞬間に覚醒した。身体を起こしながら布団を身体に巻きつけているところを見るに、恥ずかしいのだろう。

「そんなに慌てなくとも。昨日全部見た仲じゃないか」

「そ、それとこれとは話が別ですっ!」

「そういうもんか。……ほら、服。下着は……諦めてくれ」

「え？……こ、これは……」

愛紗がいつも身に着けている服を渡す。

下着は……まあ、いろいろな物で濡れていて、穿ける状態じゃないだろうな。

「どうする？愛紗さえいいなら、愛紗の部屋から着替えくらい持ってくるけど・・・」

「っ！自分でいきます！」

・・・わーお、ノーパンで走ってたよ、愛紗。

流石は関羽だなあ。大胆と言つか恥ずかしがると後先考えないといつか・・・。

「取りあえず、俺も着替えて仕事に行かないとな」

・・・その前に、シャワーでも浴びるかな。

余談ではあるが、愛紗は奇跡的に誰にも見つからずに部屋までたどり着いたらしい。

顔を真っ赤にして「私はなんてはしたくないことを・・・！」と後悔する愛紗はおもしろ・・・可愛かったと言っておく。

・・・

「・・・なんだか、久しぶりに政務をした気がする」

「いきなりどうしたの、お兄さん？」

書類に筆を走らせつつ呟くと、対面に座る桃香が首を傾げる。

「何故かは分からないんだけどな。とにかく、こうして政務をするのが久しぶりに感じる、って話」

「でも、ちょっと前も朱里ちゃんたちとやってたよね？」

「そうなんだよ。．．．あ、そっか、桃香と政務をするのが久しぶりだから、そう感じたのかも」

「わ、私っ？」

「ああ。．．．うん、きつとそっだ。あー、すつきりした」

なんだかこう、胸の辺りにあったもやもやが消えた気がする。

改めて思えば、桃香と一緒に政務なんて本当に久しぶりだ。

そんなことを考えながら手を動かしていると、すぐに書類は片付けられた。

いやー、政務能力上がってるね。

「ん、ふー．．．！終わったあー！」

「お疲れ、桃香。．．．あ、そういえば、桃香に渡すものがあつたんだよ」

「ふえ？なんだろ、新しいお仕事だつたらいやだよ？」

「はは、心配しなくても、仕事じゃないよ。．．．ほら、これ」

宝物庫から取り出した包みを桃香の前に置く。

首をかしげて頭の上に疑問符を浮かべている桃香に説明するべく、包みを解きながら口を開く。

「ほら、昨日露天の前で女の子たちと一緒に盛り上がったじゃないか。その時の髪留め、買っておいただよ」

あの騒ぎの最中に物を買うのは至難の業だったが、何とかやりきつ

た。  
自分で自分に良くやったと言ってやりたいほどの手際だったといっ  
ておこづ。

「えっ！？こ、これ、買って来てたの！？」

髪飾りと俺の顔を交互に見ながら驚きの声を漏らす桃香。  
それから、そっと髪留めを手に取り、ほわぁ、という声を出しながら  
それを眺める。

「良かったら、受け取ってくれるか、桃香」

「で、でも、今日は何か特別な日とかじゃないよ・・・？」

「そんなに難しく考えるなよ。桃香が気に入ってたみたいだから、  
買ってあげたいって思ったただだよ。」

「・・・うう、もう、そういうの、駄目なんだよ？」

そう言っておずおずと髪留めを手にして、自身の髪を留める桃香。  
バレッタのような髪留めは、桃香の後ろ髪を柔らかくまとめた。

「うん、いいね。似合ってるよ、桃香」

「そ、そうかな。・・・えへへ、ありがとう」

照れながら礼を言ってくる桃香を撫でて、立ち上がる。

「よし、それのお披露目も含めて、街に昼飯を食べに行こうか！」

「うんっ！行こう、お兄さん！」

「急に元気になったな。そんなに腹減ってたのか？」

「ふふっ、違うもーん」

上機嫌に腕を絡めてくる桃香に若干の疑問を抱きながら、街へと繰り出す。

腕を組んだまま歩く桃香は鼻歌なんか歌いながら屋台を眺めている。昼間だからか、屋台や飯店からいつもより強く匂いが流れてくる。このあたりは比較的ラーメンの屋台が多く、それぞれの店がしのぎを削っている。

それだけにラーメンのレベルは高く、昼時となればどの屋台にも行列ができる。

「ふわぁ・・・みんな、いっぱい並んでるね、お兄さん」

「ああ、この辺で食べるのはちょっと難しいかもな」

並んでいる間に昼休みが終わってしまいそうだ。

・・・仕方がない。少し歩くが、もう二つほど通りを越えたところにある飯店に行こう。

あそこなら、店も広いし客の回転もまずまずだ。それほど並ばずに食べられるだろう。

そのことを桃香に伝えると、明るい返事と共に首肯を返してくれた。

「そういえば、昨日はありがとな、桃香」

「へ？な、なにかしたっけ、私」



「ほら、子供の世話、手伝ってくれたら」

あの時はライダーと瀧、そして桃香と祭にほとんどの子供を預けて城へと向かってしまった。

事件が一通り終わった後子供たちの様子を確認しに行くと、つかれきった様子の瀧とその隣に立つライダーから、子供たちは無事家に帰った、と報告された。

ライダーと瀧にはその場で礼を言って置いたが、祭と桃香はその場にいなかった。今こうして礼を伝えているわけだ。

・・・祭には、後でお礼と共に酒でもプレゼントしよう。

「あ、そのこと。・・・良いよ、お礼なんて。私もみんなと遊べて楽しかったから」

「それでも、お礼は言わせてくれよ。あの時は本当に助かった」

「・・・ふふ、どーいたしましてっ」

「・・・お、あそこだあそこ」

桃香と話をしながらしばらく歩くと、その飯店に着いた。予想通り広い店内にはいくつか空きがあるようだ。

「おつきいねえ〜!」

「だろ。多分、この街で一番大きいと思う」

大きな口を開けて驚く桃香を軽く引つ張りながら店に足を踏み入れる。

ちょうど二人がけの席が空いていたのでそこに座り、採譜を机の上

に広げる。これで二人一緒に見れるだろう。

「んー、今日はラーメンの気分だなあ、やっぱ」

さつきまで屋台のラーメンのにおいを嗅いでいたので、気分は完璧にラーメンだ。

「桃香は決まったか？」

採譜から顔を上げて桃香を見てみると、桃香も顔を上げていて、俺とばっちり目が合う。

「えへへー、私もラーメンかなー」

「ん、了解。・・・すいませーん！」

店員を呼び、注文を伝える。

ラーメン二人分ならばすぐに来るだろう。

「にしても、最近は桃香も仕事の速度があがったじゃないか。慣れてきたのか？」

「うん、そんな感じかなあ。・・・それに、今日はお兄さんもいたし、ね」

「俺が？」

聞き返すと、桃香は小さく頷いた。

「うん、お兄さんとお仕事していると、こっ、背筋がぴしっとなる、

っていうか」

「はは、変に緊張させちゃってるかな」

「うづん、そんなことないよ」

そう言つて首を振る桃香は、静かな笑みを顔に浮かべていた。俺も釣られて笑顔になる。・・・和むなあ。

「お待たせしましたーっ！」

しばらく見詰め合っていると、店員の元気な声が割り込んできた。豪快に置かれたどんぶりからは、美味しそうな良い匂いが届いてくる。

早速箸を取り、いただきます、と手を合わせてから食べ始める。ふう、ふう、と息を吹きかけてから麺を口に運ぶ桃香を微笑ましく眺めながら、ラーメンを片付けていく。

「ぷはー、ご馳走様でした」

「はふう、あ、ご馳走様でしたっ」

俺たちはほぼ同時にラーメンを食べ終わり、同じように挨拶をする。

「・・・ふふっ、美味しかったね、お兄さん」

「ああ、ここははずれがないからな」

少し休んだ後、代金を払って店から出る。

桃香は相変わらず俺の腕に抱きついたままで、周りからの視線を集

めている。

「次はどこに行こうか、桃香」

「んー・・・お昼休みはまだまだあるし・・・。そうだ！お兄さん、私の部屋に来ない？」

「桃香の部屋に？」

「うんつ。あのね、華琳さんから、珍しいお茶を貰ったんだ。それ、一緒に飲みたいな、って」

「へえ、そうなんだ。・・・じゃあ、お邪魔しようかな」

「行こうつ、お兄さん！」

そう言っつて俺の腕を引っ張り走り出す桃香。

強引だなあ、と苦笑しつつ桃香にあわせて走る。

・・・

「座って待ってて、お兄さん。今お茶を入れてくるからね」

桃香は部屋に入るなりそう言っつて奥へと消えていった。

取りあえず椅子に座って一息つく。

奥からはかちやかちやと食器の音が聞こえてくる。

・・・しばらく待って、やることもないから桃香を手伝おうかと立ち上がりかけたとき、盆を持った桃香が戻ってきた。

「お待たせ、お兄さん。・・・どうぞ。美味しいかどうかはちよっ

と自信ないけど」

「ありがとう、いただくよ。・・・うん、大丈夫。美味しいよ、桃香」

これは良いな。一口飲んだだけで、かなり良い茶だというのが分かる。

「ふふ、良かった」

安心したようにため息をついた桃香も、湯飲みに口をつける。

「・・・ほんとだ。美味しいね」

ふう、と息をつきながら湯飲みを卓に置いた桃香。  
茶を飲みながらまったりとしていると、そだ、と桃香が口を開いた。

「今日、お仕事終わったら暇？」

「ん、特に予定は・・・あー、どうだろ」

今日は月か詠が来るかもしれないな。

「後で月たちに聞かないと分からないかなあ」

「・・・あの、ね。今日の夜は、空けておいて欲しいの」

「何か用事か？」

「うん。ちょっと、大事なお話」

そう言ってから、桃香は急に立ち上がる。

「そろそろいこつか、お兄さん」

「ああ、もうそんな時間か」

「・・・お仕事の後、お願いね？」

「分かった。開けておこす」

早めに終わらせて、月たちに言うておくか。

・・・

月と詠、さらに孔雀にも今日は用事があるといっておき、部屋で桃香を待つ。

政務中に、日が沈んだらお邪魔するね、と言われたのでこうして待っているのだが・・・。

「・・・暇だな」

一人、何もせずに人を待つのがこれほど暇だとは。寝台の上に背中から倒れこみ、天井を仰ぎ見る。

「・・・あー、桃香・・・早く、こないかなあ・・・」

だんだんと、意識が・・・遠く・・・。

「・・・お、お兄さん？・・・ね、寝てる？」

耳に響く声と、寝台から伝わる振動で、目が覚める。  
いまだに覚醒しきっていない頭では、何が起こったのか理解できていない。

かろつじて感じるのは、ぎ、と言う寝台が軋む感覚と、顔に掛かる何かさらさらとしたもの。

「ん……ちゅ……」

そして、口に何かぬるぬるとしたものがくっついたような感触がして、意識が急に覚醒してゆく。  
な、なんだ……!?

「う……ん……おうっ!?!」

「ひゃんっ!」

慌てて上半身を起こすと、頭にごっ、と衝撃が走る。  
何か、硬いものに頭をぶつけたようだ……!

「いたた……って、桃香?」

「はづう……痛いよお、お兄さん」

「わ、悪い。寝てたか……!」

「うづん、いいの。遅刻しちゃったのは私だから」

お互いに頭を抑えながら謝りあう。

……そうか、桃香の頭にぶつけたのか。

桃香はしばらく頭を抑えてしゃがんでいたが、ようやく痛みが引いたのか涙目になりながら立ち上がる。

「うう、いきなり出鼻をくじかれちゃったね」

「すまん。……で、話があるんだっけ？」

「あ……うん。そうなの」

「ほん、と桃香はわざとらしく咳払いする。

「あ、あのね？……愛紗ちゃんと、した、の？」

「ぶっ！」

「わわっ!?!」

真剣な顔でいきなり直球な質問が来たので、思わず吹き出してしまった。

桃香はそんな俺の様子に一瞬びっくりしたようだが、すぐに真面目な表情に戻った。

「そ、それで……どうなの？」

寝台に座る俺に、桃香が詰め寄ってくる。

思わず後ろに仰け反ってしまう。……凄い気迫だな。

「ああ……その、したよ」

「……そう、なんだ」



しゅん、とした表情をした桃香だが、次の瞬間、すぐに何かを決意した表情に変わる。

「お兄さんっ」

「ん、なん・・・むっっ!?!」

勢い良く飛び込んできた桃香の唇が、俺の唇に触れる。

しかし、勢いが良すぎたのか前歯同士もぶつかってしまっ。

「いつっう!」

「あたた・・・」

俺を押し倒したまま、桃香は口を押さえる。

かくいう俺も口を押さえる。・・・く、至近距離からの突撃がこれほどまでに痛いとは・・・。

「ご、ごめんね、お兄さんっ。怪我とかしてない!?!」

「大丈夫だ、桃香。・・・そっちこそ、唇切つてないか?」

どれどれ、と桃香の唇を見る。

・・・良かった、切れてはいないようだ。

「え、えへへ・・・。失敗しちゃった」

「失敗しちゃったって・・・やっぱり、あれは」

「……う、うん」

桃香は頷くと、次はゆっくりと顔を近づけてくる。

……おー、まっげ長いなあ、なんて場違いなことを思っていると、唇に柔らかい感触。

「ふうっ……お兄さあん……」

甘い声を上げながら、桃香が口付けてくる。

ある程度すると満足したのか、桃香は一旦口を離す。

「……お兄さん、好きだよ」

「桃香……」

「ご、ごめんね、答えも聞かないで、こんな事……。でも、もう抑えられなくて……!」

「ちよ、桃香、おちっ……むぐうっ」

……この後、桃香の呼吸が苦しくなるまで口付けされた。

「……ぶはあっ!」

「ぶは!」

呼吸を整えていると、桃香が口を開く。

「……お兄さん……」

「そんなに切なそうな声を上げるなよ。・・・よつと」

「ひゃんっ」

桃香の身体に手を回し、身体の位置を入れ替える。

下に桃香を組し抱く格好となると、桃香を撫でながら口を開く。

「桃香の気持ちはわかった。・・・良いんだな？」

「ここまでして、駄目なんて言わないよ・・・」

「・・・ん、分かった」

もう一度口付けてから、桃香の服に手を掛ける。

・  
・  
・

#### 第十四話 騒動の後に（後書き）

・・・一つの話の中で二人の攻略を同時に・・・。

なんだか一人一人の話が適当になってしまっていないか不安になりますね。

申し訳ありません。これからも精進していききたいと思います。

そして、次の更新では感想でのご指摘のあった主人公のステータスを投稿したいと思っております。

誤字脱字のご報告、ご感想お待ちしております。

番外話 サークヴァントステータス アーチャー（前書き）

少し時間が掛かってしまいましたが、主人公のステータスです。

ライダーと同じかそれ以上のスキルの多さになってしまいましたが、ご都合主義なんてこんなものか、と思っていただければ幸いです。

それではごっご。

## 番外話 サークヴァントステータス アーチャー

クラス：アーチャー

真名：ギル（ギルガメッシュ） 性別：男性 属性：混沌・善

クラススキル

対魔力：E

魔術に対する守り。無効化はできず、ダメージ数値を多少削減する。元々低い対魔力が泥によって受肉したことによって更に低くなっているが、宝物庫にある金色の鎧でカバーできている。

単独行動：A+

マスター不在でも行動できる能力。ある程度なら魔力の供給無しに戦闘行動を行える。

固有スキル

黄金律：A+

身体の黄金比ではなく、人生において金銭がどれほどついて回るかの宿命。

大富豪でもやっていける金ぴかぶり。一生金には困らない。

カリスマ：A++

大軍団を指揮、統率する才能。ここまで来ると人望ではなく魔力、呪いの類である。

この世界での経験がカリスマのランクを一つ押し上げた。

このランクだと、敵の兵であろうとランク判定しだいで指示に従わ

せることができるようになる。

神性：A+

最大の神霊適正を持つギルガメッシュの能力を持ち、さらに本人が神に会っている為ランクは元通りのランクに。  
少しだけではあるが、女神とのつながりを持つ。

魔力放出：E+

武器、ないし自身の肉体に魔力を帯びさせ、瞬間的に放出することによって能力を向上させる。

このランクだと、あつたところで身体能力の強化、身体の表面に軽い衝撃波を発生させることしかできない。

この世界での経験と、努力によって身に着けたスキル。

軍略：C

一対一の戦闘ではなく、多人数を動員した戦場における戦術的直観力。

自らの対軍宝具の行使や、相手の対軍宝具に対処する場合に有利な補正が与えられる。

この世界で、諸葛孔明を初めとした軍師たちと共にいたことによつて身に着いたスキル。

千里眼：D

視力の良さ。遠方の標的の捕捉距離の向上。

元々女神のサービスとして最初から追加されていたのだが、本人がステータスのみを見ていたことと、英霊は目が良いんだな、と言う思い込みによつて最近まで気づかれなかった。

能力値

筋力：B + 魔力：B 耐久：B 幸運：A + + 敏捷：C + 宝具：E X

## 宝具

『ゲイトオブパピロン 王の財宝』

ランク：E \ A + 種別：対人宝具 レンジ： 最大捕捉：1人

黄金の都へ繋がる鍵剣。元々は剣として存在していたものだが、神の計らいによつて能力をインストールする鍵として体内に取り込まれた。

空間を繋げ、宝物庫の中にある道具を自由に取り出せるようになる。能力をインストールされただけの彼には財がないのだが、神のサービスによつてギルガメッシュ本人と同じ財+ が入れている。

『エヌマ・エリシュ 天地乖離す開闢の星』

ランク：E X 種別：対界宝具 レンジ：1 \ 99 最大捕捉：1000人

乖離剣・エアによる空間切断。

圧縮され鬩ぎ合う風圧の断層は、擬似的な時空断層となつて敵対するすべてを粉碎する。

対粛清A Cか、同レベルのダメージによる相殺でなければ防げない攻撃数値。

STR x 20ダメージだが、ランダムでM G Iの数値もSTRに+される。最大ダメージ4000。

が、宝物庫にある宝具のバックアップによつては更にダメージが跳ね上がる。



かのアーサー王のエクスカリバーと同等か、それ以上の出力を持つ  
『世界を切り裂いた』剣である。

番外話 サークヴァントステータス アーチャー（後書き）

真名は主人公がギルと長く呼ばれ続けた所為でそっちが真名として定着したため、と言うことになっています。

誤字脱字のご報告、感想お待ちしております。

第十五話 メイド達と本屋に（前書き）

クリスマススイブですね。

私はこれを書く以外に予定もなく、妙にノリながら書き上げました。  
イブの夜の暇つぶしに役立てば幸いです。

それではどうぞ。

## 第十五話 メイド達と本屋に

・・・良い天気だなあ。

「何現実逃避してるのよ」

「・・・いいじゃないか、それくらい。よし、詠、街に行こう」

「ふふふ、ギルさん、まだお話は終わってないですよ？街に行くのは、それからしてもらっていいですか？」

「ハハハ、モチロンドスヨユエサン」

「・・・ここまで来ると、なんだか哀れね」

愛紗と桃香ともによもによした後のこと。

二人との関係を報告しておかないとな、と月たちを探していると、月、詠、孔雀の三人に捕獲された。

・・・まさか、賢者の石を縄に溶かして編みこんだ捕獲ネットなんてものを持ち出してくると思わなかったので、とてつもなく焦った。

そして、月が令呪をチラつかせながら凄く良い笑顔で「正座してください」と言ってきたので、速攻で正座。

久々の黒月到来にガクガクブルブルしていると、月を中心としたお説教を食らった。

要約すると、思いに応えるのはいいけど、私たちのことをないがしろにしないでくださいね、と言った内容だった。

・・・ああ、そっか。桃香と話をするときには月たちとの予定断つちやっただけだなあ・・・。

もちろんそれは謝ったのだが、いまだ何かにお怒りっぽい月さんは俺の精神をがりがり削っていく。いつもなら可愛い笑顔だなあ、と思う顔も、背後に立ち上る黒いナニカの所為で般若の顔にしか見えない。

「……まあ、これから気をつけていただければ良いですし、もうこのお話は終わりにしましょうか」

月がそう言つと、背後にあった黒いナニカはすつと消えた。

「……あれは、黒い聖杯の中にいたとき並の圧迫感だった。できればもう味わいたくないです……」

「……ありがとう、月。さて、じゃあ今日はみんなへのお詫びも兼ねて、月たちの手伝いをするかな」

立ち上がり、足をさすりながら三人に言った。

月は先ほどまでの雰囲気なんてなかったかのように目をきらきらとさせながら

「ほんとですかっ!?!?」

と言ってきた。

今にも飛び跳ねそうなくらいの喜びようである。

こんなに喜んで貰えるなら、仕事の手伝いくらい軽いものである。

「ああ。寂しい思いさせちゃったようだしな。詠、孔雀、いいだろ?」

「べ、別に。アンタがどうしても手伝いたって言うなら、その、手伝わせてあげてもいいわよ?」

「是非。ギルと一緒に時間が増えるのは嬉しいからね」

「良かった。それじゃあ行こうか。」

「はいっ」

「ちょっと、待ちなさいよ!」

「ほらほら、詠、置いていくよー?」

「ちょっと、孔雀ー!?!」

今日も侍女組は元気みたいだ。良かったよかった。

・・・あれ、誰か忘れているような気が・・・。

・・・

「ぼっーん」

洗濯をしに水場までやってくると、響が一人で体育座りをしていた。ご丁寧にも口で擬音までつけている。

「・・・っわー」

「ちょっと、アンタどうにかしなさいよ」

「俺任せかよ・・・」

「むむう、ボクもギルがいったほうがいいと思うけど・・・」

「へう、響ちゃん泣きそうです」

ああもう、行けばいいんだろう行けば！

一人で暗いオーラを背負っている響の元へと駆け寄り、声をかける。

「きよ、響、おはよう」

「んー？・・・あー、ギルさんだー。えへへー、おはよー」

こちらを見上げる響の顔には、弱ったような笑みが浮かんでいた。

「どうしたんだ、響。そんな暗い顔して」

「んーとね、なんていうのかなー・・・。ほら、私ってアサシンのマスターじゃない？」

「そうだな」

「やっぱりサーヴァントとマスターって似通うのかさー、私の影だんだん薄くなっていつて言うか、むしろ私に気配遮断常にかかっているじゃないかっていうか・・・」

「・・・そ、そんなことないんじゃないか？」

不味いぞ、これは。

予想以上に響が落ち込んでいる・・・！

「今日も月とか詠とか孔雀とかギルさんと一緒に遊んで楽しそうだったしー・・・」

・・・あ、違う。

落ち込んでるんじゃないや。拗ねてるよ、この娘。

「・・・あれは遊んでたんじゃないんだが・・・」

「ぶーぶー。楽しそうだったじゃん。主に月ちゃんが」

「あー、うん、そこは間違ってたいな」

あの時の月はとても楽しそうだった。

令呪をチラつかせているときの笑顔とかもう・・・！

「ぼっーん」

「ずーん」

「・・・ちよっと、ギルも一緒に拗ね始めたんだけど」

「大の大人が膝を抱えているのを見るのは・・・何と云うか・・・」

「へう、二人とも、何で私を見るんですか？」

壁のシミを数えていると、背後で三人が何か話しているのが聞こえる。

だが、そんなことより俺は壁のシミを数えながら地面に「の」の字を書くのに忙しい。

「遊びに着たわよー！見なさい、これ！弟に作らせたんだけど、どうよー！」



「ふえ？・・・あ、卑弥呼さん」

「何、その格好」

「いいでしょー。わらわの弟が一晩で作ってくれたわ」

「へえ、なかなかにあってるじゃないか、侍女服」

背後で卑弥呼たちがはしゃいでいるのが聞こえるが、俺は壁のシミを以下略。

取りあえず、話の流れからして卑弥呼が弟にメイド服を作らせたらしい。

「・・・で、ギルは何であんなになってんの？」

「それはそのー・・・かなり複雑ないきさつがあるようでないよう  
な・・・」

「どっちなのよ。・・・取りあえず、説明してみ？」

「月が黒くなった」

「ああ、なるほど」

「納得するんですかっ！？」

珍しく月が大声で突っ込みを入れている。

「しょーがないわねー。わらわが二人とも連れ戻してやるわよ」

後ろにいる卑弥呼がだんだん近づいてきているのを感じる。

「ちょっと、ギル。わらわ、こんなに可愛い服着てきたんだけど？」

「あー、うん、似合ってるー」

「似合ってるよー、卑弥呼ちゃん」

俺が気の抜けた返事をする、響も同様の答えを返す。

視線は二人とも壁に固定である。

「うっわ、何こいつら。合わせ鏡していいの？」

「ほんとに似合ってるよー。卑弥呼可愛いよ卑弥呼」

「な、なによ。そんな棒読みの台詞じゃ嬉しくないんだからっ」

どもりながら後ずさる卑弥呼。

嬉しくないと言いつつ嬉しそうである。褒められなれていないのか。

「可愛いよー。卑弥呼ちゃんすっごく似合ってるよー」

「ちょっと、響まで・・・やめてよ、わらわ、照れちゃうじゃない」

「照れる卑弥呼も可愛いよー」

「えへへえ、ホント？」

そこまで言つと、卑弥呼はてれっ、とはにかみながらもじもじし始

めた。

時折もうつ、とか言いながら俺の肩をどついてくるのはスルーすること。

「・・・だめだね、卑弥呼、籠絡されちゃったよ」

「あいつに任せたのが間違いだったわ」

・・・

あれからしばらく。

詠に無理やり引っ張られて立ち直らされた俺も加わって、ようやく響も復活させることができた。

いつもの四人に俺と卑弥呼を足した妙な一団となった俺たちは、変に張り切っている卑弥呼のおかげでかなりスムーズに仕事を進めることができた。

そのため、かなり時間が空いたので、みんなで街に繰り出したのだが・・・。

街の視線を独り占めしてしまっている。・・・いや、まあ理由は分かるんだけど。

「えへへ、ギルさんと街に来たのは・・・へう、あの時以来ですね」

「!？ちよつとギル!？そんなこと聞いてないわよっ!」

「お、ギルギル、あっちに良い感じに怪しい店があるよ。行って見ない?」

「ちよつと男女。ギルを引っ張っていくんじゃないわよ。わらわと一緒に服を見に行くんだから」

「あ、あははー・・・何この状況。・・・むむう、この流れ、乗るしかないねっ」

「うおっ、響、そこは流れじゃなくて俺の背中だっ」

背中に飛び乗ってきた響を支えながら、こっそりとため息をつく。前回街に来たときのことを思い出しているのか照れている月とそれを問いただしている詠は俺の半歩前を歩いている。

両隣には孔雀と卑弥呼が陣取っており、二人とも左右それぞれの方  
向へ服の裾を引っ張る。

そして、極めつけは背中に乗る響である。

そりゃ、街の皆さんも気になりますよねえ。

「・・・あー、ほら、取りあえずどこかで落ち着こうぜ。そこでこれからどこ行こうか決めようじゃないか」

まさかここまでカオスになるとは思わなかった。

・・・ちよつとだけ、以前の子供たちの騒動を思い出したのは内緒である。

・・・

昼時だったので、軽食を取れる店へと立ち寄った俺たちは、食後の茶を楽しみながらこれからについて話し合っていた。

やはりと言うかなんというか、みんなそれぞれ行きたい場所は違うようだ。

孔雀は先ほど言っていた良い感じに怪しい店、卑弥呼は服屋、詠は眼鏡を見たいらしい。

月はギルさんとならどこでも楽しいです、と嬉しいことを言ってく

れた。

そして、響の行きたいところは……。

「はあ？本屋あ？」

きよとんとした顔でそう口にした詠は、月にこら、とたしなめられていた。

……しかし、意外だな。響が本を読んでいるところなんて見たことないから、本屋に行きたいなんて言い出すとは……。

「えへへ、やっぱり意外かな」

「……だね。詠とか……後、朱里とか雛里なら分かるけどさ」

「でも、みんなで本屋さんに行くのも楽しいかもしれないね」

照れたように頭を掻く響に孔雀と月がそれぞれ返す。  
ま、今日のお出かけは最近構って上げられない響のためのようなもんだし、響の行きたいところに付き合ってみようか。

「よし、じゃあ本屋にしようか。みんなも良いか？」

「はいっ」

「んー、いいわよ。ボクも新刊は気になるし」

「わらわも構わないわ」

「ああ、大丈夫だよ」

他の四人も首を縦に振ってくれたので、次の行き先は本屋に決まった。

「……にしても、響も本を読むんだなあ。意外と読書家だったりしてな。」

……

「ぞろぞろと本屋へとやってきた俺たちは、見たい本が別々なため、一旦ばらばらになることにした。」

「俺と月は特に見たいものもないので、いろいろと冷やかしながらみんなの様子を見て回ることに。」

「かなり大きい書店なので、みんなすぐに見えなくなっちゃった。」

「……月、なんか見たい本とかあるか？」

「んーと……あ、お料理の本が見てみたいですっ」

「月はぽん、と手を叩きながら言った。」

「料理の本って……レシピ本みたいなものか。」

「そういうの売ってるんだなあ、と呟くと、それを聞いた月が」

「大戦も終わって、平和になりましたから。こういう本を書いたり見たりする余裕ができた、と言うことではないでしょうか」

「……なるほど、そういうされるとそうかもな」

「戦争が続いていた頃は、料理本を書く余裕も見る余裕もなかっただろう。」

「今なら、山賊やいまだにいる黄巾党の残党との小競り合いはあるものの、大きな戦は無いと言っても良い。」

「良く見たら、裁縫の指南書とかもあるんだな」

『これであなただも大丈夫！初めてでも作れる12着！』と言う本を手に取る。

・・・なぜ12着。一ヶ月に1着か？

「その人の本は、初心者に優しく書いてあると評判なんですよ。私も、最初はお世話になりました」

そついいながら、いくつかの本を手に取る月。

「結構出てるんだな、その本の続編」

「はい。そのお裁縫の本と書いてる人は一緒なんですけど、こつちは基礎を身につけた後に役立つ本ですね」

凄いな、このシリーズ書いてる人。

「・・・ほら、それ持つよ」

本も重なれば意外と重いのである。月の細腕では長時間持つのは辛いだろう。

「あ・・・すみません、お願いします」

「いって事よ。・・・さて、それじゃあみんなの様子を見て回るか」

「はいっ」

空いた手で月と手を繋ぎながら、俺たちは四人を探しに歩き出した。

・・・

「・・・むう」

その頃。詠はとある本の前で唸っていた。

本の題名は『これであなたも大丈夫！彼を夢中にさせる24の奥義！』である。

・・・もちろん、書いているのは先ほどの裁縫や料理の本を書いた者と同一人物だ。

「どっしりようかしら・・・」

ちらりと目に入って気になったから目を通してみるだけのつもりだったのだが、案外中身が気になってしまったようだ。

立ち読みで済ませようという考えは流石に無い。そこかしこにいる店員にいやな目で見られるだけだし、数少ない本を一人で独占し続けるのも常識的にいけない。

・・・購入するための金はもちろん足りている。だが、買った後、孔雀や卑弥呼あたりに見つかつたら・・・

「いや、むしろ・・・ギルに見られたほうが不味いわね」

そのことを想像しているのか、一人で百面相している詠の周りには、いつの間にか人がいなくなっている。

この状況を見られても不味いことになるという考えは浮かばないらしい。一人で存分に悶えている。



「あれ？詠、何やってるんだ？」

「えっ？・・・あ、ち、違うのよ！別にアンタに見られたことを考えてたんじゃなくて・・・！」

背後から聞こえてきたギルの声に、詠はとっさに本を背中に隠してしまった。

頭の中ではこの場を切り抜けてどうやってこの本を買うかについて思考し始めていた。

ここまで来てしまった以上、この本を買ってしまつらしい。

「？・・・変な詠だな。なんか良い本は見つかったか？」

「み、みみみ見つからないわねっ」

「そっか。・・・他の三人はどこにいるかな」

そう言い放った詠の目はかなり泳いでいた。

ギルは他の三人を探しているためか、あたりを見回しているおかげでそれには気づかなかつたようだが、月は親友のおかしな様子をばつちりと見ていた。

「・・・そういえば詠ちゃん、新刊が気になるって言ってなかつた？あつちの棚にいろいろあつたけど、見てこなくていいの？」

「えっ？・・・あ、ああつ、そうね！ボク、ちょっと新刊見てくるっ！」

「ん、分かった。俺たちあつちのほうつろつろしてるから、選び終わったらおいで」

「分かったわっ！」

そう言つて半ば逃げるように駆け出していく詠。  
感謝を伝えるために月の方を見ると……。

「……」

ぱくぱくと口だけを動かして何か伝えようとしているようだ。  
ええと、と月の口の動きから何を言おうとしているのか推理する詠。

「……帰ったら詳しく、ね」

笑顔の月に手を振つてありがとつと伝え、会計を済ませるために歩調を速めた。

……

「……ふむ」

詠が本の会計を済ませている頃。

孔雀は一冊の本の前で考え込んでいた。

「この作者の本はずれがないからなあ。……でも、お金がなあ」

宝石魔術つてお金掛かるんだよねえ、とため息をつきながら財布を閉じる。

今日は諦めよう。そう決心してその場から離れる。

「……ふう、なんだか物悲しいから、ギルに突撃してくるかな」

あたりを見回しながら、本人が聞いたら逃げる準備を始めそうな一言を呟く。

次の瞬間、タイミングよくギルが孔雀の前へと現れた。

「お、孔雀発見」

「せいっ！」

「なんでっ!？」

ギルの声が聞こえてからの孔雀の動きは早かった。

魔力で無駄に強化した脚力で加速し、常人の反応速度を超えた勢いで腹部へ突撃。

隣にいる月に瞬きすらさせないまさに効率的で効果的な魔術運用の例だといえるだろう。

「何の意図があつてこんなことを・・・」

「あ、うん。なんとなく」

ぐう、とぶつかられた場所をさすりながら聞くギルに、孔雀はしれつと答える。

ギルは何かを言おうとしたが、結局小さく息を吐くだけに留まった。

「・・・もういいや。とりあえず、本を落とさなかったことを褒めてくれ」

「凄いや!流石ギル!」

「凄いですギルさん！」

「息ぴつたりだな、二人とも。・・・で、孔雀は何か良さそうなのあったか？」

「ん？・・・今日のところはないかな。ボクはもう大丈夫だから、他の三人を探しにいこうよ」

そう言つて歩き出す孔雀を追いかけるように二人も歩き始めた。

・・・

「構わないわ、と言つたものの・・・。わらわは読むより書く方が好きなのよねえ」

一人呟きながら店内を歩く卑弥呼は、適当な本を手に取つたりして冷やかしていた。

筆やらの筆記用具を見に行こうとも思つたが、少し前に買い換えたばかりだと思ひ直し、とりあえずぶらぶらと店内を歩いている。

「・・・にしても人が多いわねえ。全員わらわにひれ伏さないかしら」

そうしたらもつと通りやすいんだけど、とため息をつく。

「・・・何を馬鹿なことを言つてるのよ」

「は？・・・って、なんだ、ゴールドぐるぐるドリルじゃない」

「あんだねえ・・・。人の名前くらい覚えなさい。華琳よ」

こめかみをひくひくと引きつらせながら答える華琳。  
あーそうそう、とぞんざいに返した卑弥呼は、華琳の周りを見て口を開く。

「で、今日はどうしたのよ？右目も左目も猫耳も連れてないじゃない」

「・・・春蘭は訓練で、秋蘭はそれに付き合ってるわ。桂花は朱里たちと軍師の集まりがあるとかで朝早くからいないわね」

「ふーん。あ、あれは？御使い」

「春蘭に連れてかれたわ。・・・まあ、死にはしないと思うけど」

遠くを見ながらそう言った華琳に、卑弥呼は目をそらしながらそんな事言っても説得力ないわよ、と心の中だけで呟いた。

ま、それはどうでもいいんだけどと自分の中で結論を出しながら、卑弥呼は口を開く。

「あー、あれはしぶといからねえ。で、アンタは暇になってこんなところまで？」

「ええ。午前中はやることがないの。それで、ここにはまだ来たことなかったし、ちょっと寄ってみたのよ」

「そ。ま、いいわ。それじゃね」

「ちょっと待ちなさい」

「あによ」

立ち去りかけたところに声をかけられたからか、少しだけ機嫌悪そうに言葉を返す卑弥呼。

そんな卑弥呼の様子に気づいていないのか気づいて無視をしているのか、華琳は普段と同じように言葉を続ける。

「あなたは・・・その、一人？」

「違うけど？」

「・・・そう。ならいいわ。引き止めて悪かったわね」

「変なの・・・ん？・・・はーん」

再び立ち去ろうと踵を返しかけた卑弥呼だが、何かに気づいたのか華琳のほうへ顔だけを向けた。

華琳はうるたえた様子をしつつも、怯まずに言葉を返す。

「な、なによ」

「寂しいのね？アンタ、友達いなさそうだしなあ」

「ぐっ・・・！」

「いいわよお？別に、一緒に回ってあげても」

「いいわよ別に！・・・やめなさいその気味の悪い笑顔！」

にたにた、と言う表現がぴったりの笑顔を浮かべる卑弥呼は、華琳

の肩に腕を回す。

どうみても酔っ払いが絡んでいるようにしか見えない。

「……おいおい卑弥呼。街の人に絡むなよ……って、華琳？」

「ギル、いいところに来たわね。この素面の振りした酔っ払い連れてってくれないかしら」

「ちょっと聞きなさいよギル。この子、友達がむぐうっ」

「少し黙ってなさい。ほら、ギル。あなたの連れでしょう？さっさと連れて行ってくれないかしら」

ギルは怪訝な顔をしつつも卑弥呼を受け取る。

「それじゃ、私はそろそろ城に戻るから」

「おう。気をつけるよ」

分かってるわよ、と背中越しに言い残して、華琳は去っていった。

「……と言うか、卑弥呼って華琳と仲良かったんだな」

「ん、まあね。ちょっと前にひょんなことから仲良くなったのよ」

「ふうん。……あ、卑弥呼は何か良い本あったか？」

「んーん。というか、わらわ読むより書く方が好きなのよ」

「え？そうなのか？」

「うん。なんせ、書いてるときのわらわは弟ですら近寄らなくなるくらいだから」

「・・・それは凄いな」

なんだか変な顔をしたギルがそう返すが、卑弥呼はそうかしら？と何でそんな顔をするのか分かっていない様子だ。

「まあいいや。それじゃ、響を探しに行こうか」

「そうね。そろそろ良い時間でしょうし」

途中で会計を終えて追いついた詠も加え、周りの視線を集めながら五人は響を探して歩き始めた。

・・・

「ふんふふーん」

鼻歌を歌いながら店の中をあてもなく歩く響。

本屋に行きたいと言ったのは何か欲しい本があるから、と言うわけではなく、ただ昔本屋で働いていた頃がふと懐かしくなったので立ち寄ってみたいと思ったただけだった。

「・・・ま、あの頃いた本屋とは大きさも何もかも違うけどねえ」

誰に言うでもなく呟くと、再び鼻歌を歌いながら店内を歩く。

歩いているだけでも楽しいらしく、響の表情はずっと笑顔である。



「おっと、そろそろギルさんと合流しないと」

そうは言ってみたものの、どこにギルがいるのかは分からない。とりあえず入り口まで戻ってみよう、とあまり悩まずに決めると、進路を変える。

少し進むと、視界の端になにやら妙なものが見えた。

「ありゃ、どうしたのかな？」

「ふえ……」

しゃがみこんで泣いているらしい少女に近づき、優しく声をかける。少女は涙目のまま響を見上げ、えぐ、えぐとしゃくりあげる。

「迷子かな。……誰と一緒に来てたの？」

「おかーさん」

「そっかー」

少女をあやししながら、念話でアサシンへ話しかける。

内容は霊体化してこちらまで来て欲しい、というものだ。

「もうちょっとだけ待っててね、すぐに見つけてあげるから」

実体化し、気配遮断をしながら本棚の上に潜むアサシンに、子供を捜しているそぶりを見せる母親を探して欲しいと追加で願う。すぐに動き始めたアサシンに、頼んだよ、と心の中で呟いて少女と視線を合わせるためにしゃがむ。

「お母さんが見つかるまで、お姉ちゃんと一緒にいようね」

「……うん」

どこから来たのか、お母さんはどんな人か、と話を繋いでいると、アサシンからそれらしき人物を発見した、と報告が来た。

視覚を共有して確認してみると、今しがた女の子から聞いた特徴と一致する。

「……あれ？」

ふと、声が漏れた。

母親だけに注目していたから一瞬分からなかったが、周りにはギルたちもいた。

おそらく子供を捜す母親と出会ったギルたちが一緒に探していたんだろう。

偶然に少しくすりと笑いながらも、よっし、と言って立ち上がる。

「お母さん見つけたよ。いこっか！」

「ほんと？」

「ほんと！こっちだよ！」

女の子とはぐれないように手を繋ぎながら、アサシンの反応を目指して歩き始める。

向こうもこちらに向かっていたからか、すぐに母親とギルたちを見つけた。

「おかーさん！」

「うわっと、走ったら危ないよー……って、聞いてないよねえ」  
女の子は母親に駆け寄り、抱きついた。

隣にいたギルたちもほっとした顔をした後、こちらに気づいたようだ。

「おい、とギルが手を振っているのを見て、響も駆け寄って抱きつく。

「おっと。おいおい、響もかよ」

「えへへー、いいでしょ。ご褒美だよご褒美」

ちらりと少女のほうを見てみると、少女もこちらを見ていたらしく、ぱっちり目が合った。

一瞬の間のもと、どちらからともなくすすくと笑いが漏れる。

「本当に、ありがとうございました」

「いえいえ、私は偶然その子を見つけただけだし……」

本屋から出た一行は、先ほどの親子にお礼を言われているところだった。

響は気恥ずかしそうに手を振っているが、顔には笑顔が浮かんでいる。

それでは、と立ち去る母娘に手を振った後、響はギルの手に自分の手を絡めた。

「ん？……どうした、響。寂しくなったか？」

「・・・んー、ま、そんなとこ」

よーっし！それじゃ帰ろうか！と元気な声を出した響は、ギルの手を引きながら半ば走るように城へと向かった。

・・・

「ふう、やっと終わった」

「お疲れ様です、ギルさん」

「ありがと。さて、風呂に入って寝るかなあ」

仕事が終わわり、すっかり日も暮れて真っ暗な中通路を歩きながら独り言のように呟く。

隣を歩く月は、その言葉を聞いて息を呑んだ後

「お、お背中を流しましょうかっ!？」

なんて言い放った。

あー、それもいいかもしれないなー、と考えながら月の頭を撫でつつ歩いていると、俺の部屋の前に人影が。

あれ？詠かな。

・・・でも、詠はまだ仕事のはずだし・・・。

「あれ、誰かいますね」

隣を歩く月も気づいたらしく、前を向いたままそう言った。

月の声で向こうも気づいたらしい。こちらへ歩いてくるのは・・・

「あれ、響か」

「えへへ、お仕事お疲れ様、ギルさん、月」

「ああ、お疲れ。俺の部屋の前にいたみたいだが・・・俺に用か？」

「うん。・・・あの、月。ギルさんを少し借りたいんだけど・・・」

いつもの元気な様子は鳴りを潜め、伏し目がちに月に声をかける響は、なにやら緊張しているようだった。

・・・まさか、と言う思いが一瞬よぎるが、予想と違う可能性の事を考えてそのことをしまっておいた。

「・・・ええ、分かりました。ギルさん、今日はお先に休ませていただきますね」

響の言葉に首肯しながら、月は俺にそう伝えてきた。

「ん、分かった。すまん、月」

「いえ。・・・響ちゃんのお話、ちゃんと聞いてあげてくださいね？」

「ああ。それじゃあ、お休み、月」

「はい。おやすみなさい」

俺たち二人に挨拶をして、月は自分の部屋へと戻っていった。できれば送っていきたかったが、流石に響を置いてそんなことはできない。

「立ち話もなんだし、入りなよ」

扉を開けて響にそう促すと、ゆっくりと頷いた響が部屋の中へと入っていく。

その後ろに続いて部屋に入り、扉を閉めて部屋に灯りを灯す。寝台に腰掛けると、響が隣に腰を下ろした。

「あ、なんか飲むか？」

「ううん、いい」

「そうか・・・」

なんだかしおらしい響と言うのは調子が狂うな・・・。  
しばらく響の言葉を待っていると、響は静かに口を開いた。

「あ、あの・・・今日は、私のわがままに付き合ってくれてありがとう」

「ん？・・・ああ、あれくらいわがままには入らないよ」

「えへへ、そう言っていたけると助かります」

少しだけおちやらけた様子で返してきた響は、人差し指で頬を掻きながら続けた。

「やっぱりギルさんは優しいねえ」

そう言ってそっと身を寄せてくる響。

・・・やっぱり、と推測が確信に変わっていくのを感じる。

「・・・あの、ギルさんは気づいてるかもしれないけど、私、ギルさんの事が好きです」

ああ、と変な納得の声 leaked。

だが、響はそんな風に考える余裕すら与えてくれないらしい。すぐに身体を乗り出し、俺に迫りながら口を開く。

「えと、お返事いただけますかっ！」

こちらに身体を乗り出してきた響に押され、後ろに倒れそうになる。

「おい、響お前答え聞く気ないだろ！」

押し倒されかけつつも響に返すと、響は笑顔で

「もう我慢できないのっ！返事をどうぞっ！」

「うおっ」

「きゃっ」

ついに押し倒された俺は、寝台に倒れこんだ。

響は俺の上に四つんばいになるようにのしかかってきており、逃がす気はないと態度で示しているようだ。

「・・・響、お前の気持ち、受け取らせてもらっ」

「あ・・・」

少し強引だったが、響の元気なところは好きだし、こうして好意を  
まっすぐに表してくれるのも嬉しかった。

安心させるように、片手で頬を撫でてやると、顔を真っ赤にした響は

「は、初めてだから優しくね！？絶対だよ！？」

なんて、まくし立ててきた。

「ああ、分かってるって」

苦笑しながら、響に口づける。

四つんばいの体勢のままの響の服を脱がせるために、口付けしながら服のボタンに手をかける。

・  
・  
・



## 第十五話 メイド達と本屋に（後書き）

・・・侍女組コンプリートですね。

うらやま・・・けしからん。そのポジション代われ主人公。

おそらく明日もう一話ほど更新できるかと思えます。

誤字脱字のご報告、ご感想お待ちしております。

第十六話 部隊と副長と訓練に（前書き）

もう今年も終わりますね・・・。

来年も頑張って作品を書いていきたいと思っていますので、今しばらく拙作にお付き合いくだされれば幸いです。

それでは、どうぞ。

## 第十六話 部隊と副長と訓練に

「うう、おかーさん、男の人はみんな狼って本当だったんだね・・・」

「ちょっと待て。肩を震わせながらそんなことを言ったら勘違いされるだろうが」

えぐえぐ、と嘘泣きをする響に軽い突込みを入れる。

響は叩かれた頭をさすりながら布団から起き上がり、はにかむ。

「えへへ、じょーだんじょーだん。・・・まあ、狼って所は本当だけどー」

「あー、それについては言い訳しない。・・・ほら、さっさと着替える」

「はい！」

夜が明け、起きる時間となったのでもぞもぞと布団から這い出た響に服を渡す。

昨日のうちに濡らした布で身体を拭いてはいるものの、できるなら風呂に入ったほうがいいだろう。

「時間に余裕があるなら、風呂に行っておけよ？」

「お風呂でもう一回戦？」

「・・・勘弁してくれ」

真顔でそんなことを言ってくる響に、肩を落として答える。  
昨日の晩も、疲れを知らないという言葉がぴったりな響によって、  
全く疲れが取れないまま朝を迎えてしまったのだ。  
・・・睡眠時間が二時間取れていればいいほうだろう・・・。  
というか、同じくほとんど寝ていない響がこんなに元気なのはなん  
でなんだろうか。

「そっかー。じゃあ、お風呂でするのはまたの機会だねー。・・・  
よっと。お風呂いつてきまーす」

いつの間にか用意していた風呂道具一式を持って、響は部屋を飛び  
出していた。

「それじゃあまた後でー！」

「おう。転ぶなよー」

「はーいつー！」

最後まで元気に答えて去っていった響を見送った俺は、一旦部屋に  
戻る。

今日は兵士たちの訓練が入っていたはずだ。

いろいろと用意してから行かなくてはならないだろう。

・・・

「・・・」

「ごめん、俺腹の調子が・・・」

「だいじょうぶ」

「何がっ!？」

訓練場に到着した俺を迎えたのは、ゴッドフォース軍神五兵を持った恋だった。とりあえず逃げようとしたのだが、すぐにつかまってしまった。なんてこった。

「今日は・・・ゴッドフォース軍神五兵の新しい力を試す」

「・・・新しい力？」

「そう。今まで二つの形しか使えなかったけど、もう三つ使えるようになった」

・・・あー、ゴッドフォース軍神五兵にはそういえば五つの形態があるんだよな、そういえば。矛と砲しか最初は使えなかったみたいだけど、新しく使えるようになったのか。

「だから試したかったけど、ギルじゃないと受け止めきれないから」

「んー、そういうことなら仕方がないか」

そうやって俺はエアを取り出す。どんな形態が飛び出すかわからないので、鎧も装着しておく。

「よし、これでいいな」

あの呂布が軍神五兵ゴッドフォースを使ってくるというのだから、これくらいの用心は必要だろう。

「……それじゃ、行く」

そう言って軍神五兵ゴッドフォースを手に恋が駆け出す。

迫る恋から気をそらさずに、思考を働かせる。

新しい三つの形態とは何か。

いつでもエアで対応できるように構えていると、恋がその名を呟いた。

「『けん、あわせあなわす一撃無追』」

長剣の形態……！

遠距離の形態ではないからエアならば対応できる、が……。

「無駄」

「むっ……!?!」

一切視線を動かさずに俺の攻撃を弾いた……?

「……なんだか分からないけど……ぎるの動きが分かる」

まさか……直感スキル!?

ちよつと待てよ反則過ぎないか……!

だが、恋の反応からしてランクはC程度。

ある程度予見できる、くらいのものだろう。

「せいっ!」

ならば、まだ何とかなる！

「……流石きる。もうほとんど読めなくなってきた」

何度か打ち合った後、距離を取った恋は、ふとそんなことを言ってきた。

そのままぐるりと剣を回すと、再び形態変化の言葉を紡ぐ。

「『これ、ふわぁあたわす二刀神速』」

長剣が縦に別れ、双剣となる。

次は双剣の形態か。手数を増やして、追い込みに来るか……？

「はっ……！」

恋は先ほどと同じように踏み込み、距離を詰めてくる。それに反応しようとした瞬間。

「なっ！？」

「遅い……！」

すでに、目の前に恋が迫っていた。

慌ててエアを振るうも、弾けるのは一つの刀のみ。もう一つはかわすしかない。

「……いきなり速くなった……？」

これまでの経験から、ゴッドフォース軍神五兵は一つの形態につき、いくつか有利

な効果が付与されると考えていいだろう。  
急に速度が上がった、と言うことは・・・敏捷のステータスに補正が掛かったのか。

おそらく、ランクにして一つほど。

「・・・考える暇は・・・ない・・・！」

「くっ！」

迫る二刀に、必死にエアをあわせていく。

途中エアだけでは対応できないときは、鎧の防御力を信じて刀の腹に手刀を入れているが、この猛攻ではそう長くは持たないだろう。

一気に勝負をつける必要がある。

最後の一形態が何か分からないのに勝負をかけるのは不安だが、このままでは最後の形態を見る前に終わってしまう。

思い切りエアを振って恋を引き離し、バックステップで距離を取る。

「エア、目覚める・・・！」

魔力を流し込み、エアの刀身を回転させる。

「一気に勝負をかける！」

地面を蹴り、一足で彼我の距離をつめる。

二刀の速度にかなわないのなら、一撃の重さで勝負するしかない。

片手で振るう刀では、この一撃を防いで反撃することは不可能だろう。

そのまま押し込められれば、おそらく勝てる・・・が、やはり不安は最後の一形態だ。

近距離形態ばかりだから、もしかしたら遠距離のものが出てくるか



もしれない。

・・・今それを考えていても仕方がないか。

「はあああああああああああ！」

「っ・・・！」

恋は二刀をあわせ、防ぐことを選んだようだ。

「ふっ！」

「はっ・・・！」

エアと二刀がぶつかる瞬間。

恋の口が、何かを呟いて・・・。

「な・・・」

「これが、最後の形態」

そう言つて、恋は振り下ろした体勢のままの俺に、一撃を放つ。

隙だらけの胴体に突き刺さったその一撃は、呆けていた俺の意識を目覚めさせるには十分だった。

一旦距離を取つて最後の形態の全貌を確認する。

「『たて、くぼけとなかれ金剛盾腕』」

「『盾』の形態・・・」

手甲と盾が一体化したようなその形態は、魔力を通したエアですら

防ぐ防御力を持っているようだ。

おそらく、Bランクまでの対人宝具ならば問題なく防ぐだろう。更にあれは盾としてだけではなく、攻撃の際にも役立つ。

何もつけていない拳よりも、手甲で保護された拳のほうが威力は高い。

「・・・ふう、なるほどな」

そこまで思考した俺は、構えをとく。

恋も軍神ゴッドフオース五兵を矛の形態に戻し、同じように構えをといた。

「ありがとう、ぎる」

「なに、構わないよ。俺もいい訓練になった」

だいじょうぶ？と言いながら、恋は俺の腹を撫でる。

自分で殴ったとはいえ、優しい恋は気にしたのだろう。可愛いやつめ。

「ああ、このくらい大丈夫だよ」

そう返しながら恋の頭を撫でる。

心配そうに俺の腹を撫でる恋と、そんな恋の頭を撫でる俺と言う奇妙な組み合わせが出来上がり、周りの兵士も何事かとこちらをちらちら見ている。

「・・・さて、そろそろ俺は行くよ」

居心地が悪くなった俺は、そう言って離れようとする。が。

「……だめ。お腹手当てしないと」

「と、言われても」

今まで撫でていた腹の部分の服を掴んで、逃がさない、と目で語る恋。

……多分、折れないだろうなあ。

「分かったよ。医務室に道具があるだろうから、行こうか」

「ん」

短く答え、こくりと頷いた恋が服を離して隣に並び、俺の腕に抱きつくように自分の腕を絡めてきた。

「そんなことしなくても逃げないって」

「……いちおう」

「そっか」

妙に弾んだ声で答える恋に、それ以上追求もできず、医務室までの道を歩き始めた。

……

「行くのです、ギルガメ号！」

「お、おう？」

俺の肩に乗るねねが前方を指差しながら奇妙な名称を俺につけて命令を下す。

とりあえず返事しつつも、どこに行けばいいんだろう、と頭の中は疑問符でいっぱいになっていた。

「……とりあえず、訓練場まで戻る」

手当てを終えて医務室から出た後、俺の服の裾を握って隣を歩いていく恋が、ぼそりと呟いた。

「ん、そうするか」

他にも将はいるとはいえ、恋も訓練の担当武将だ。

戻って兵士たちに訓練をつけなくてはいけないのだろう。

「いつ乗っても高いですなー」

「だろう？……どうだ、楽しいか、ねね」

ゆさゆさ、とわざと揺らしてみると、いつものような小難しい声ではなく、はしゃぐ子供のような声できゃっきゃと喜んだ。

何だろう、いつもの態度がちよっとそっけないからか、なんだか楽しくなってきたぞ……？

「……ねね、楽しそう」

ぼそり、と恋が呟く。

はしゃいでいるねねには聞こえなかったようだ。

「みただいな」

「すきなひとと、一緒にいるから」

「はは、恋のこと大好きだもんな、ねねは」

俺がそう言つと、恋は首を振つた。

・・・？

「・・・んー、ちょっと違う」

「え？」

どういうことだ、と聞こうとしたが

「ついた」

「あ、ああ。そうだな」

訓練場に戻ってきてしまったため、会話が打ち切られてしまった。まあいいか、と自分の中で結論を出し、ねねを降ろす。

「むう。もう終わりなのですか」

名残惜しそうにこちらを見上げるねね。

また今度な、と頭を撫でてやると、しばらくくすぐったそうに撫でられた後

「っ！も、もういいのですっ！やめろですっ」

と、顔を真っ赤にしたねねに手を払われてしまった。

ううむ、ねねのデレタイムは終わりか。残念。

「さて、訓練に入るか」

そう言っつて俺の隊へと向かう。

大戦が終わっつてから街の警備くらいでしか動いていないが、俺の遊撃隊は一応残っている。

その訓練があつたのだが、恋との仕合でのごたごたでしばらく放置してしまつていたので。

「あ、隊長」

「よう。遅れて済まんな」

「いえいえ、全然構いませんよ。と言っつか何で戻つてきたんですか？」

「・・・よし、副長は俺と手合わせな。隊員たちはいつもどおりに訓練を始めてくれ」

「隊長、私も隊員たちと同じ訓練がいいです」

「遠慮するなよ。ほら、今日こそはいろいろと叩き込まないといけないからな」

主に俺に対する敬意とか。

「えー」

「えーじゃない」

「あれ？お兄様じゃん。どしたの？」

嫌がる副長をたしなめていると、蒲公英がやってきた。手には影閃を持っているので、おそらく身体を動かしたにでも来たんだろう。

それを見た副長の目がきらりと光り、次の瞬間副長は蒲公英に泣きついていた。

「うわーん！馬岱さまー！隊長が嫌がる私に無理やり襲い掛かってこようとするんですー！」

「え？・・・ええー？お兄様、そんな趣味が・・・？」

「ないぞ。と言うか副長の言ってることは半分嘘だ」

「そなの？」

首を傾げる蒲公英に、そうだ、と頷きを返す。

ふうん、と興味なさげに頷いた蒲公英に、副長が畳み掛ける。

「この人、隊長権限で私にあんなことやこんなことを・・・！」

「やってないぞ」

「あー、うん。大体分かってきたよ、この副長さんのこと」

気の抜けたように返事を返す蒲公英。

副長は小さく舌打ちをすると、蒲公英からすつと離れた。

「・・・もう、隊長ってば全然焦らないんですね」

「ごういう事態には慣れてるからな。・・・そうだ。蒲公英、これから時間あるか？」

「へ？私？・・・あるけど」

きよとんとした顔で首を縦に振りつつそう言った蒲公英に、俺は話を切り出した。

「なら、副長に稽古つけてやってくれないか？」

えっ、と言う驚きの声が蒲公英と副長の両方から聞こえてくる。

「ほら、流石に俺と副長が戦うと実力に開きがありすぎるからさ」  
副長の実力は武将でたとえるなら・・・んー、真正面から明命とぶつかってギリギリ負ける、位だと思う。

流石に愛紗や春蘭といった人外クラスとは打ち合えないみたいだ。

「確かに、隊長よりは馬岱さまのほうがお優しいですよね」

「あれ、前言撤回したくなってきた。副長、やっぱり俺と二人でやるのか」

「も、もちろん隊長もお優しいですよ。なに言ってるんですか、いやですね、もう」

一瞬焦ったような表情をした副長が、取り繕うようにそう言った。  
・・・聞かなかったことにして、蒲公英と副長の手合わせを見学す



ることに。

蒲公英は影閃を構え、副長はそれなりに装飾された剣と盾を構える。ちなみに、副長の剣と盾はあの抜くと七年の時が経ったりするあのマスターなソードに瓜二つで、盾は某王国の盾と瓜二つだ。

ええ、俺の趣味全開です。

以前遊撃隊を任されたとき、副長の武器は俺が用意しようと思ったわけですよ。

その時はまだ副長とは会ったことがなくて、どんなものを用意するかは決まっていなかった。

初めて副長と会ったとき、武器はどんなのがいい？と聞いたら。

「そうですね・・・特にこだわりはないですが、今まで剣を使ってきましたし、できれば剣がいいです」

と言うことだったので、初めはエクスカリバーもどきを作ろうとしていた。

だが、こういうのを作ろうと思うんだけど、と副長に相談すると

「すみません・・・私、こんなに大きい剣に慣れていないので、ちょっと難しいと思います」

と言われてしまったので、設計図を変更。

更に副長から片手で扱えるような盾も欲しいと言われた。

・・・このあたりで副長の遠慮が若干なくなってきた気には気づかず、そういうもんか、と盾も製作することに。

そのとき、剣と盾、で思いついたのは緑の勇者だった。

おお、そういうえば彼は片手で剣と盾を操っていたなあ、と言うところまで考え付いたら、後は勢いだった。

宝物庫の中からできるだけ軽い材料を集め、孔雀とキャスターの魔術加工と華琳に教えてもらった鍛冶屋の親方の技術によって、副長

でも片手で扱える剣と盾が出来上がった。

出来上がった後、あれ、やりすぎた？と言う疑問が頭をよぎったが、いやいや、自分の右腕になってもらう人だし、これくらいはしないと無理やり自分を納得させた。

そして、いざ副長に剣と盾をプレゼントすると

「・・・こんなに素晴らしいもの、いただけませんよ」

と言われたので、いろいろと説得して、受け取って貰うことができた。

そのとき、剣と盾を胸に抱いて

「ありがとうございます。大切にに使わせていただきますね」

「ああ、そうしてもらえると、頑張って作った甲斐があるというものだ」

と、安堵の笑みを浮かべながら伝えると、副長は

「・・・きゅん」

と、頬を染めつつ奇妙な擬音語を呟く珍しい副長を見られたのも今は昔。

今は無表情で俺へ口撃（誤字にあらず）を仕掛けて来るような部下になってしまったが、まあ、桂花に比べたら可愛いものだ。

・・・あれ、部下としてそれはどうなんだろう。まあいい。

とにかく、そんな過去を経て、伝説の退魔の剣もどきと王国の盾は副長の手にあるのだ。

切れ味は普通の剣よりも遥かに上だし、盾は簡単な魔術ならば防ぎ

きるほどの防御力を有している。  
さらに背中には剣を収め、盾を装着できるようにした鞆を背負っている。

「……行きますよ、馬岱さま」

「うん、どこからでもどうぞ」

いつもの蒲公英は鳴りを潜め、真剣な表情で副長を見つめている。副長もいつもの無表情に近い顔に見えるが、良く見ると目が若干釣りあがっている。  
二人とも、お互いの一挙手一投足に注意して神経を尖らせているようだ。

「行きますっ！」

「こいつ！」

剣と盾を手に、副長が駆け出す。

左手に持った剣を蒲公英目掛けて振り下ろす。

蒲公英はそれを危なげなく受け流すと、気合の声と共に槍を突き出す。

「ふっ……！」

盾を構えてそれを防ぐと、副長は剣をふるって牽制し、バックステップで距離を取る。

おお、副長の戦いはしばらく見たことなかったけど、腕が上がってるじゃないか。

「やるね、副長さん」

「まあ、いつも隊長に苛められているので、このくらいは」

「なるほどね。流石はお兄様の隊の副隊長」

「褒められても手加減はできませんよ？未熟者ですので」

「期待はしてない……よっ！」

「ですよ……ねっ！」

一言二言言葉を交わすと、二人は地面を蹴り、お互いの距離をつめる。

槍と剣が交差する。

副長は盾で槍を防ぎ、蒲公英の顔ギリギリに刃をつきたてていた。

蒲公英は一瞬驚いた顔をしたものの、すぐに「と笑う。」

「強いなあ、副長さん」

「いえ、まぐれですよ」

武器を背中に仕舞った副長が、苦笑しながら言う。

謙遜しなくていいよー、と笑う蒲公英。釣られて副長も笑顔になっていた。

それにしても、強くなってたんだなあ、副長。

「ふう……隊長、今日は疲れたので休んでていいですか」

汗を拭いながら、こちらに歩いてくる副長は、そんなことを言い出

した。

・・・まあ、かなり疲れてるみたいだし、今日くらいはいいかな。

「ああ、副長は隊員たちの訓練を見ててくれ」

「了解です」

そう言ってテクテクと隊員たちが訓練を続けている場所へと歩いていく副長。

どうやら隊員たちは蒲公英と副長の戦いを見ていたらしく、慌てて訓練を再開している。

「ほらほら、私たちを見ている暇があるなら少しでも強くなってくださいよ」

ぱんぱん、と手を叩いて兵士たちを注意すると、副長は隊員たちに指導し始める。

「さて、俺も訓練を見ないとな。ありがとな、蒲公英」

「あはは、いーよいーよ。私も勉強になったし。それじゃね、お兄様ーっ！」

そう言って駆け出す蒲公英。

その後姿に手を振り、見えなくなったところで俺も兵士たちの元へ。しばらく副長と一緒に隊員たちの訓練を見て、解散となった。

・・・

とある案件のため、三国の王と将たちが一つの部屋に集まっていた。

そのすべての王と将たちの視線は、前に立つ俺に向けられていた。

「ええと、みんなに資料行き渡ってるか？」

足りない、と言う言葉が聞こえないので、そのまま続けることに。

「書いてあるとおり、巨大リゾート施設を作ろうと思う！」

「一刀がある日俺に相談してきた、「リゾート施設の建設」だが、とりあえずの草案ができたとのことでこうして会議にかけることに。まあ、温泉がありそうなところを近くに発見したので、そこを中心にスパリゾート施設を建造しようと思っっている。目指せわくわくざぶーん。」

「リゾート施設と言うのは、民たちに娯楽を提供する施設・・・と言うことでいいのよね？」

「ああ。温泉を作ったときの技術を使えば作成はそう難しくないと思う。大戦が終わった今、民たちにもこういった娯楽が必要だ」

「天下一品武闘会やライブなんかもあるが、こんな風に常時楽しめる娯楽もいるだろう。」

「ふうん・・・なるほど、建築に掛かる費用なんかもちやんと準備してあるのね」

手元の資料を見た雪連がそう言いながら笑う。

「うむ、俺の黄金律やらで資金に不安はないし、宝物庫にある材料も使うので建築資材にも困ることはない。」

後は動力だが、それはキャスター組と甲賀の協力によって宝具で代

替することが可能だ。

どこにも隙のない完璧な計画だと自負している。

「そうね・・・それで、この基礎工事の欄に書いてある作業員が二人しかいないのはどういうこと？」

「っていうか、ギルの兄さんは分かるけど、何でウチまで作業員に入ってるん!？」

「ほら、ドリルって二人しかいないじゃん」

華琳と真桜の質問に、俺の隣に立つ一刀が答える。

ドリル?と首を傾げる二人に、ほら、と指を立てて説明を始める。

「地面を掘る道具だよ。真桜の武器は前ライブ会場を作るときに地面が掘れるって分かったから整地に使いたいんだ」

「俺のエアは温泉を掘り当てるのに使う。・・・まあ、本当はそういう専用の機械があればいいんだが・・・」

弱めとはいえ大地に真名解放なんて不安でしかないが、まあ大丈夫だろう。

・・・

「と、言うわけで!このあたりを整地しよう」

「ちょっとまちい!こんな広さを掘らせるつもりかい!」

「当たり前だろう。ほら、基礎工事は大切なんだ。しまっっていこー」

「！」

真桜の抗議を流し、事前に決めておいた場所へ移動する。エアを突き立て真名解放すると、一瞬で温泉が噴き出す。

「おー、出た出たー」

「ちょ、熱っ、ギルの兄さん、熱いつて！」

諦めて地面を掘っていた真桜が、降り注ぐ温泉から逃げ惑う。

「はっはっは！大丈夫大丈夫！火傷しない温度に調整してるから」

「それでも熱いもんは熱いんや！」

安全圏へと逃げた真桜が、螺旋槍を振り回しながら抗議してくる。俺は魔力解放で薄い膜を作って防いでいるので、こうして笑っていられるわけなのだ。

「よし、ランサー！やっちゃってくれ！」

「はっ！総員、作業を開始せよ！」

「応！」

前回と同じように、数百人規模で増幅したランサーが温泉の周りに土台を作成していく。

真桜一人では流石に間に合わないの俺も一緒になって基礎工事をしていき、その後からランサーたちが大雑把に土台を作っていく。そして、雇った作業員たちが細かい調整を行っていく。



うむ、今のところ順調で完璧である。

この様子なら、一月もあれば完成するだろうか。

・・・いや、このペースなら半月で完成するだろう。

・・・

と、言うわけで約半月。

完成間近のわくわくざぶーんにやってまいりました。

「うわあ、すごいな。注文どおりだ」

流石に現代風の建築物にはできないので、城と同じような外観にしてある。

扉を開け中に入ると、巨大レジヤー施設わくわくざぶーんの全貌が見えてくる。

まずは受付とその先にある男女別の更衣室。料金を払った後、更衣室で水着に着替えてもらう。

一応貸し出しもしているので、水着を持っていなくても遊ぶことができるようになってる。

「おお、広いな」

更衣室に入ってみると、かなり広い空間が広がっている。

・・・誰もいないとはいえ女子更衣室へは入れないので、そこは後で真桜にでも確認してもらおうことにしよう。

で、水着に着替えた後はプールやらウォータースライダーやらが目の前に広がる。

湧き出した温泉を適温にして循環させているので、常に温水プールである。

これから秋になっていくので、温水でなければ辛いだろう。

「うんうん、きちんとウォータースライダーも機能してるな」

これなら明日にでも開けそうだ。

よし、後でみんなにためしに遊んでもらうとしよう。

・・・

「うわー・・・！」

「すごいなあ、これは」

わくわくざぶーんに足を踏み入れたみんなから、感嘆の声が漏れる。とりあえず、水着姿の月たちを見ただけでだいぶ満足している。そういえば、孔雀や響の水着姿は初めて見るな。

「おおー、これがぶーる、ってやつだね、ギルさん！」

いち早く着替えて出てきた響が、準備運動もそこにプールへと飛び込んでいく。

おー、はしゃいでるなー。

「鈴々も行くのだー！」

「おい鈴々！準備運動・・・って、聞いてねえな」

響と同じくプールに飛び込んだ鈴々は、響となにやら戯れているようだ。

・・・まあいいか。いざとなったら引き上げてやれば良い。

「お、ギル。ギルは泳がないのか？」

更衣室から、水着に着替えた一刀が出てきた。

一刀の言葉に、どうしようかな、と答える。

一応水着は持ってきているが・・・そうだな、俺も少し遊んでみるかな。

そうと決めれば話は早い。早速宝物庫にある水着に換装しよう。

「・・・それって、鎧だけじゃなかったんだな」

俺の早着替えを見た一刀が、何かを諦めたような顔でそんなことを言ってくる。

その気持ち、分かるぞ。ちょっと光ったら着替えが完了してるとか、どこの魔法少女だよって感じだよな。

「あ、ギルさん。水着ってことは・・・一緒に遊べますね！」

着替えを終えて出てきた月は、輝かんばかりの笑顔でこちらに駆け寄ってきた。

詠と孔雀も一緒に出てきたようだ。

しばらくすると全員着替えを終えて更衣室から出てきたので、みんなには適当に遊んでもらって、後で報告書をあげてもらうことになっている。

「さて、早速泳いでみるか」

準備運動をして、早速プールの中へ。

おお、温かいな。これなら冬でも遊べるな。

「ほら、月もおいで」

「へう・・・あ、温かいですね」

ちやぽん、とプールに入ってきた月が眩きをもらす。

「よいしょつと。おお、ほんとだ。温かいねえ」

続いて入ってきた孔雀も、同じように眩く。

「っていつか、宝具ってこんなことに使っているのかしら・・・」

最後に入ってきた詠が、全く・・・と言いながら入ってくる。  
いいじゃないか。戦いに使うだけじゃ寂しいだろう。

「・・・まあ、あんたがいいなら良いんだけど」

つつ、と恥ずかしそうに顔を背ける詠。

そんな詠の頭を撫でてから、ウォーターライダーへと向かう。

「わひゃー!」

叫び声の後に、どぼーん、と言う着水の音。

声からして、どうやら明命が遊んでいるようだ。

「ぶはっ!・・・あ、ギル様!」

「よお、明命。楽しんでるようだな」

「はいっ。とっても楽しいです!」

もう一度乗ってきますね！と言ってウォータースライダーの階段を上り始める明命。

「俺も滑ってみるかな」

「あ・・・わ、私も一緒に・・・いいですか？」

「もちろん。一緒に滑ろうか」

月の手を引きながら階段を上る。

わひゃー！ともう一度聞こえてきたので、明命がまた滑ったのだろう。

階段を上りきった俺はウォータースライダーに腰掛ける。

「月、こっちおいで」

「へう、し、失礼します」

俺の足の上に座った月の腰に手を回し、座ったままの姿勢で前に進む。

完全に水の上へと進むと、ウォータースライダーの上を勢い良く滑っていく。

「おおー！」

「わ、きゃーっ！？」

龍を模したウォータースライダーを縦横無尽に滑っていく。

二人で滑っているからか、速度はなかなかのものだ。

その速度を保ったまま、プールへと突っ込む。

「ぷはっ」

「ぷはぁっ!」

「あははは! いやあ、久しぶりだったけど楽しいねえ」

「はぶ。楽しいですね!」

水の中から顔を出した俺たちは、お互いに笑いあう。

いやあ、なかなかのものだった。

そんなことを思いつていると、くいつ、と手を引かれる。

「ん? 詠?」

「ぼ、ボクも・・・」

ボクも、つて。

・・・ああ、なるほど。

「分かった。一緒に乗ろうか」

「っ、そ、そうね。アンタと一緒に乗りたいっていうなら、別にいいけど」

「ああ、詠と一緒に乗りたいんだ。いいか?」

「い、良いわよ。ほらっ、さっさと行くわよっ」

悪い、ちょっと詠ともう一回乗ってくる、と月に伝える。

先ほどと同じように階段を上り、足の上に詠を乗せる。

「ふやっ!? へんなどこ触らないでよっ!」

「変なところって・・・ただ手を回しただけだろ」

「うづうづるさいわねっ。も、もうちょっと・・・その・・・」

「大丈夫大丈夫。ほら行くぞー」

「ちよっ、大丈夫じゃな・・・っきゃー!?!」

「あっはっはー!」

俺の笑い声と詠の絶叫がウォーターライダー内に木霊する。  
腰にまわした俺の手に、詠の手が重ねられる。  
そして、プールに着水。

「ふうっ」

「ぶはっ」

水面に顔を出し、大丈夫だったかー、と声をかける。

「あ、う・・・うん」

そう答えた詠は、プールに顔半分まで沈め、ぶくぶくと気泡を発生させ続ける。

恥ずかしがってるのか、と思いながら詠を引き上げる。

ばたばたと暴れるものの、しばらくするとおとなしくなる。

「お、おかえりギル」

「ただいま。いやー、これは良いな。楽しいよ」

プールサイドで座っている孔雀に迎えられ、硬直している詠をベンチに座らせる。

「じゃ、次はボクだね」

そう言っただけに抱きついてくる孔雀。

・・・なんだか凄く自然な流れでもう一度乗ることになっているが、まあいいや。

「ん、良いぞ。行くつか」

同じように足の上に孔雀を乗せ、滑り出す。

「おーっ、ははっ、早いなあ！」

いつものクールさはなりを潜め、腕を振り回しそうなほどに喜ぶ孔雀。

なんだかとても新鮮である。

「わーっ！」

ざぱーん、と着水するときまで孔雀のハイテンションは続いていた。

「あははっ！いやー、楽しいねえ、ギル！」



「そこまで喜んでもらえるなら、作った甲斐があったよ」

楽しそうな表情のまま、孔雀はベンチへと戻る。

詠の様子を心配したのか、月もベンチに座っていた。

「あ、お帰りなさい、ギルさん」

「ただいま。いやー、楽しいな」

「そうですね。これなら皆さんにも良い娯楽になると思います」

はうはうと顔を真っ赤にしながらベンチに寝転ぶ詠を撫でながら、月は微笑む。

「……と言っか、詠の症状がさつきより悪化してる気がするけど……  
大丈夫か？」

「あ……詠ちゃんは大丈夫ですよ。ちょっとギルさん分を撮取しすぎただけですから」

「……なんだその謎成分。」

まあ、詠の親友である月が大丈夫と言っているのなら大丈夫なのだろう。

「なあ、ギル」

一息ついていて、一刀が話しかけてくる。

「ん？どうした一刀」

「あ……ちょっと俺、席をはずすからさ。なんかあったらフォ

ローよろしくな」

「ああ、そういうことか。構わないぞ。行って来い」

「刀にそう返すと、刀はそそくさと更衣室へと去っていった。……っていうか、あれ？あっちって……。」

「まあいい。深くは考えるまい」

こうして、リゾート施設、わくわくなぶーんでの一日は過ぎ去った。

……

ある日。

月は、一人で歩いているギルを見つけた。

「あ……ギルさん」

「急ぎの仕事もないし、少しだけお話をしようかな、とギルに近づいていくと……。」

「ギルおにーちゃんー!」

「あ……」

背中に璃々が飛び乗ったのを見て、足が止まる。

「お、璃々か。どうした?」

「あのね、おかーさんがお仕事だから、ギルおにーちゃんとおそろぼーとおもって！」

「そっかそっか。よし、俺も暇だから、遊ぼうか」

「わーい！」

そこまで聞いて、月は踵を返す。

璃々ちゃんとギルさんの邪魔をしちゃいけないよね、と独り言を呟きながら、仕事へと戻る。

また夜には会えるし、と自分に言い聞かせながら通路を歩く。

・・・

時は進んで昏。

「はふ。休憩ですね」

昼食をとり厨房へと向かう。

厨房へと近づいていくと、誰かの声が聞こえてきた。

「おにーさま、もう少しでできますからね！」

「ああ、悪いな、わざわざ作ってもらっちゃって」

「い、いえ！おにーさまになら、いくらでも作っちゃいますよー！」

「そっか。ありがとな、流々」

「流ター！にーちゃんのだけじゃなくて、ボクのもねー！」

「分かってるよ、大丈夫だって」

話し声からして、ギルさんと流々ちゃんたちがいるみたいだな、と月あたりをつける。

厨房を覗いてみると、想像通り三人がいた。

ギルと季衣は席についており、流々が調理している。

どうしようかな、と悩んでいると、ギルが月を見つける。

「お、月。昼飯か？」

「あ、はい」

「そっか。流々、一人増えても大丈夫か？」

「はい！元々多めに作ってますし、大丈夫ですよ！」

「よし、ほら、月。こっちおいで」

「えと、失礼します」

ちよこん、とギルの隣に腰掛ける月。

「そっか。ええにーちゃん、前に言ってたわくわくざぶーんってどうなったの？」

「ん？ああ、もう一般解放されてるはずだぞ。利用料の調整もついただろうしな」

そんな他愛ない話をしながら、四人は楽しく昼食をとった。

・・・

「よいしょ、っと。じゃあ詠ちゃん、ギルさんたちにお茶を届けに行こうか」

「そうね。そろそろあいつらも休憩の時間だろうし」

午後の政務が始まってから数時間。

いつもどおりならそろそろ休憩の時間だと言うことで、二人はお茶を淹れて持っていくことに。

「失礼します」

「はい、どうぞー！」

桃香の声を聞いてから、扉を開ける。

中には、桃香とギル、そしてなぜか鈴々がいた。

「そろそろ休憩かなと思って、お茶を持ってきました」

「わ、もうそんな時間？お兄さん、休憩にしちゃおっか」

「そうだな。鈴々、少し休もう」

「分かったのだー・・・」

ぐったりとした鈴々がお茶の入った湯飲みを掴む。

「ちょっと、何で鈴々がここにいるの？一番政務室に似合わない将

じゃないの」

「ああ、ほら、わくわくざぶーんの報告書、鈴々がそんなもの書いたことないって言うからさ。仕事の合間に教えながら一緒に書いてたんだ」

「最初は鈴々ちゃんは除外してあげても良いんじゃないかなあって思ってたんだけど、お兄さんが「将来のためにも、こういうことは教えておいたほうがいい」って言ってね」

それもそうだなあ、って思ったから、一緒にやってるの、と桃香に言われ、詠はふうん、と納得の声を漏らした。

「うう、お兄ちゃん、頭が割れそうなのだ〜・・・」

「そうやってお茶を飲む元気があるうちは大丈夫。これからは武だけじゃ駄目な時代になってくるからな。こうして頭も鍛えないと」

「お兄ちゃんはいじめっこなのだぁ・・・」

「いじめじゃないぜ。愛の鞭って言うんだ」

いじめなのだ、いじめじゃないって、と何度か言い合う二人。

そんな二人を微笑ましく思いながら見ている月と、桃香となにやら話している詠。

しばらくして、休憩の時間も終わり月と詠は飲み終わった後の湯飲みを片付けに戻っていった。

「ほら、そろそろ終わるから、頑張っていこー」

「りょーかい、お兄さん！」

「ううゝ・・・りょーかいなのだー」

・・・

「あー、今日も働いたなー」

腕をぐるぐると回しながら自室への道歩く。

今日は月が来るといつていたから、多分もう部屋で待っていることだろう。

部屋へ近づくに連れて、月の魔力を感じる。

やはり、すでに部屋で待っているらしい。

「すまん、待たせたな、月」

そついいながら扉を開けると

「お、おかえりなさい、お兄ちゃんっ！」

「おおっ!?!」

あまりのインパクトに、思考がフリーズする。

なんだなんだ。何が起きた。

月が俺を呼ぶときは「ギルさん」だったはずだ。何故いきなり「お兄ちゃん」に!?!

疑問をそのままぶつけてみると、何でも璃々や蒲公英たちに「兄」系統の呼び方をされているのを見て、ちよつと自分も呼んでみたくなつたんだそうだ。

な、なるほど。そついわれてみれば、確かに俺を兄と呼んでくれる

娘は多い気がする。

「おいやでしたらすぐにやめますけど・・・」

「・・・いや、今日くらいはその呼び方で」

本能が理性をちょびつとだけ上回ったらしい。

「今日だけ」と条件をつける当たり、少しでも理性も生き残っていたようだけど。

「へう。分かりました、お兄ちゃん」

「ぐっ・・・！これほどまでに強力とは・・・！」

とりあえず、お持ち帰りだ！

「ひゃっ、お、お兄ちゃんっ・・・！？」

翌日、腰ががたがたになった月に説教されるまで、「お兄ちゃん」呼びは続きましたとき。

・・・



## 第十六話 部隊と副長と訓練に（後書き）

以前からちらちら出ていた副長が本格的に出演です。

副長と言つ立場と武装以外何も決めていませんが、おそらくこれからもちよこちよこ出てくると思います。

そして、ゴッドフォース軍神五兵の残り三形態を作成しました。

メッセージで案を下さつたゴジロウ様、ありがとうございます。

誤字脱字のご報告、感想お待ちしております。

第十七話 みんなで健康診断に（前書き）

あけましておめでとうございます。

今年も頑張って作品を書いていこうと思っておりますので、よろしく  
お願いします。

それでは、どうぞ

## 第十七話 みんなで健康診断に

「・・・健康診断？」

中庭にいつの間にか立っていた高札。

内容は、健康診断の実施についてのものらしかった。

「お兄ちゃん、けんこーしんだんってなんなのだ？」

「ん？・・・そうだなあ、病気にないかとか、どれくらい身長があるのか、とか調べるんだよ」

「鈴々は病気にしないのだ！」

「自分では分からない病気とかもあるからな。そういうのも纏めて見るんだろう」

「その通り」

鈴々に説明していると、背後から声が。

「華佗。それにキヤスターも」

背後に立っていたのは、華佗とキヤスター。

そつえば、キヤスターには医術の心得もあるんだっけ。

「医者か一人じゃ大変だろうと思ってね。微力ながら手伝うことにしたのさ」

なるほど、と頷く。

「実施は一週間後位を予定してるから、立て札を読んでいない将たちにも教えておいてくれないか」

「了解。・・・そういえば、何でいきなり健康診断なんかを？」

「ああ、ギルは知らないんだっけ？わくわくざぶーんの建設中、天の御使いが風邪をひいてね」

なんと。

あの頃は建設の指揮に忙しかったから分からなかった。

そうか、しばらく見てないなと思ったけど、風邪引いてたのか。

「それで、他の将にも何か病気の兆候なんかがないかと実施することにしたのさ」

「なるほど、得心いった。・・・そういえば、サーヴァントは受けなくていいんだよな？会場案内の手伝いとかでしょうか？」

俺は受肉しているが、それでも普通の人間とは違う。

健康診断のときは人手も足りなくなりそうだし、と思ってそう言ってみると、キャスターから驚きの返答が。

「何を言っているんだ、ギル。もちろんサーヴァントもやるよ？」

「霊体だぞ！？」

おっと。思わず突っ込みを入れてしまった。

だが、サーヴァントはみんな霊体である。健康診断とか・・・いる

のか？

「まあ、人間と同じ健康診断ではなく、マスターからの魔力はちゃんと供給されて循環してるか、とか魔術的なものになるんだけど」

「・・・ああ、そういうことか」

それならばサーヴァントにも健康診断があるというのも頷ける。

魔力供給が上手くいかなければサーヴァントは消えてしまうからな。

「でもまあ、サーヴァントは七人しかいないんだし、すぐに終わるだろうから、手伝ってくれるのは嬉しいけどね」

「ん、了解した」

ふうむ、健康診断か。

・・・

と言っわけで作ってきました三国合同記録会。

体重を量るの反対、やら胸囲を測るの反対、なんて反発もあったものの、何とかみんなを納得させ、開催することができた。

「いやあん、ご主人様と目が合っちゃったわん。卑弥呼、どうしましょ」

「うぬぬ、このようにビシッと目が合ってもうては妊娠してしまっやもしれんぞー！」

・・・あれらは一刀に任せよう。

決して係わり合いになりたくないとかそういうことではないので。  
あしからず。

あ、いや、やっぱ係わり合いになりたくねえや。

「……ギルの兄さん、あの面子が暴れだしたら、鎮圧手伝ってな。  
……?」

そう言った真桜の視線の先には

「……体重」

「……おっぱい」

血走った目をした将がいた。

……いや、誰とはいわないけど。

「……ああ、尽力しよう」

「ほんまか！これで少し気が楽になるわあ！」

「ありがとなのー！」

真桜と沙和はそのまま軽い足取りで風の元へと駆けて行った。

……いつでも宝物庫を開けるようにしないとなあ。

「あ、ギルさん」

「月。それに詠たちも」

ぞろぞろとやってきたのは侍女組 + 卑弥呼、そして恋だ。

「……っていうか、卑弥呼はいつまでメイド服でいるつもりなんだろうか。」

「あれ、卑弥呼も来てるのか」

「ええ。偽者が健康診断やるのにわらわもやらないわけには行かないでしょ?」

卑弥呼はやる気満々のようだ。

「……まあ、別に良いか。」

「ちらり、と手元にある割り振り表を見る。」

「ええと、月たちは……呉と一緒に回ってもらうことになってるのか。」

「月たちは呉と一緒にらしい」

「……偽者はどこと一緒にまわるわけ?」

「蜀だな。麗羽たちと白連もこっちだ」

「ならわらわもそっちに行くわ。偽者との決着は直接つけなくちゃならないのよ」

「……あー、うん、まあいいや」

「ここでごねられても困るしな。」

「じゃあ、俺もちよつど蜀のところまで手伝いだから、一緒に行くか。……悪いけど、月たちは沙和に着いていってくれ」

「はい。それでは、また後で」

そう言っただけで去っていく四人を見送った後、卑弥呼と共に槍投げの会場へ。

・・・

「お、一刀じゃないか。一刀も蜀と一緒に健康診断か？」

「ああ、ギル。いや、俺は見回りだよ。・・・それにしても、みんな凄いな。見てくれよ、この記録」

そう言っただけで手渡されたのは、記録表。

それを見てみると・・・おお、凄いなこれ。

「ほとんど百メートル越えじゃないか」

凄いなあ。・・・うわ、愛紗とか一番飛ばしてるじゃないか

「あ、ギル殿っ!」

「凄くないか愛紗。一番だぞ」

「あ、ありがとうございますっ」

こちらに駆け寄ってきた愛紗をねぎらうと、てれりと俯いてしまった。

「さて、次はっ・・・え？」



名簿にあったのは、貂蟬と卑弥呼の文字。

・・・まさか。

「うーん、ちよつと軽いわねえん」

・・・まさかの人外じゃないか！

っていうか、貂蟬、卑弥呼、卑弥呼（女）って、事故の予感しかない！

「ぬっふうふうふううん！」

掛け声と共に、圧倒的な気が爆発する。

貂蟬は身体の中を暴れまわる気を収束し、最大の瞬発力を発揮させる。

天まで届けとかご主人様のお尻まで届けとか不穏な言葉が聞こえるが、そこはスルーさせていただく。

「ドウルアアアアアアツ！」

ドガン、とおよそ槍投げの際に発するようなものではない音を立てながら、貂蟬は腕を振りぬく。

何かが破裂するような音と共に、槍を中心とした衝撃波が発生する。

・・・あれを人は、ソニックブームと言う。

「まさか、だな・・・」

卑弥呼と貂蟬以外の将が呆然と空へ消えていった槍を見つめる中、貂蟬がサムズアップした。

さ、流石人外。

「貂蟬。・・・甘い、甘いのう」

「もうちょっとズンズン来る感じならもっと良いんだけどねん」

・・・なんて会話を交わし、次は卑弥呼の番だ。

「ぬうんっ!」

地面がめくり上がるんじゃないかと言っほどの気の放出。

どうみても貂蟬以上の強さの上、淀みの少ない気のようにだ。

「ぬっふうううう・・・!」

槍を構え、目を閉じる卑弥呼。

周囲の将たちも、しんと静まり返る。

「見えたぞ、汗の一滴!」

かっと目を見開き、踏み込む。

「でええええええええええええええええいっ!」

その瞬間、爆発が起こった。

「槍投げで、爆発だっ!?!」

その疑問はごもつともだ、星。

いや、俺も信じたくないが・・・うーん。

空の彼方へと光って消えた槍は・・・って、なんか爆発してる・・・?

「おいおい、何打ち落としたんだよ」

千里眼を発動してみるが、爆煙が晴れた頃には何もなくなっていた。  
・・・なんだったんだらうか。

「・・・よし、わらわの番ね。・・・ちょっと格闘娘。これって自分の持てる力をすべて出し切って槍を遠くへ届かせればいいのよね？」

「格闘娘って私ですか・・・？・・・ええ、そうですけど・・・」

「そう。・・・なら、わらわの勝ちね偽者！」

「ほう？」

卑弥呼（女）の言葉に、興味深そうな表情を浮かべる卑弥呼。  
槍を持った卑弥呼（女）は、懐から鏡を取り出す。

「行くわよ、合わせ鏡！」

その言葉と共に、合わせ鏡になった二枚一対の鏡が四組、斜め上を向いて直線上に並んだ。

合わせ鏡が砲台を形成しているようだ。その鏡は回転しながら魔力を充填し始める。

つて、まさか合わせ鏡で槍を加速させて・・・

「行きなさい、わらわの超魔力砲！」

うわぁ、そのまさかだ！

つていうか、この人何の躊躇いも無く名前パクツた！  
俺がそんな風にも心の中で突っ込みを入れている間に槍は砲台を通り  
魔力によって加速させられていく。

「ぬう！？」

「あらあん」

音を置き去りにした槍は卑弥呼の槍と同じように空の彼方にある「  
何か」を撃墜した。

「どうよ！わらわのほうがかっ飛んだわよ！」

「……健康診断だつていうの、忘れてるだろ」

「ふむ、なかなかの力……流石はワシと同じ名を持つだけはある  
わ！ふはははははは！」

「……もついやだ。」

……

「……ぶう。なんでわらわが拳骨貰わなきゃならないわけ？」

「危ない事したから。あれだけの魔力使ったら大変なことになるっ  
て分かってただろ？」

「まあ、平行世界からも魔力引つ張ってきたからね」

ふぶん、と無い胸を反らしながら卑弥呼は得意げに言った。

・・・卑弥呼に対する対抗心さえなければ元気はつらつなだけの魔法使いなのに・・・。

あれ、それでも駄目な気がしてきた。不思議だなあ。

「・・・まあ、ギルがそこまでいうならちよつとは自重してあげる」

「ありがとうございます。・・・さて、魏のテスト会場はここか」

「頭の悪い奴らは大変ねえ。こんなのに苦労するなんて」

「あら、ならあなたも受けてみなさいよ」

卑弥呼の言葉に答えるように声をかけてきたのは、華琳だった。そばにはいつもどおり春蘭と秋蘭が侍っている。

「受けても良いけど・・・一位は貰っちゃうわよ？」

「ふうん？それはいい事を聞いたわ。あなたは・・・蜀と一緒に回っていたはずね。次は蜀が筆記試験のはずだから、そのときを楽しみにしているわ」

ばちばちとお互いに火花を散らす二人。

「・・・なあ秋蘭？」

「なんだ、ギル」

「何で華琳と卑弥呼って仲良いんだ？」

俺の言葉に、秋蘭は少しだけ考え込んで

「多分、華琳様ご自身と近い感覚を持っているから、だと思つがな」  
・・・そういうもんか。

「そういつものだと思つぞ」

そっかそっか、と納得していると、春蘭が話しかけてくる。

「それに、華琳様と卑弥呼さんは立場も似通つてらっしゃるといふ点もあると思いますよ」

・・・その言葉を聞いた瞬間、血の気が引いた。

いや、比喩とかではなく確実に俺の顔色は真っ青になっていることだろう。

「・・・しゅ、しゅしゅしゅ秋蘭？」

「・・・言いたい事は分かるぞギル」

「何が起こつたんだよ？」

秋蘭に顔を寄せ、耳打ちする。

ふう、とため息をついた秋蘭は、ぼそりと

「ここ数日の勉強漬けが祟つたらしい」

うわぁ・・・人格が変わるほどだったのか。

「というか、理性的な春蘭とか鬼に金棒みたいなものじゃないか」

そう考えないとやっていけない気がする。

「お、終わりましたあ……」

秋蘭とぼそぼそと話していると、流々が部屋から出てきた。へとへとになっているようだ。

「お疲れ、流々。どうだった？」

「あ、にーさま。……えと、問題は大体わかったんですけど、問題文が読めなくて……」

「まあ、それならこれからの努力しだいで何とでもなるな。秋蘭や……今の春蘭に教えてもらうと良い」

「え？秋蘭様はともかく……春蘭様は……」

「私でよければ、喜んでお力になりますよ、流々さん」

「っ!?!?」

流々は、ぞぞぞ、と鳥肌の立つ腕で自分を抱きながら、驚愕の表情でこちらを見ってくる。

ああ、うん。その反応が多分正しいんだと思う。

そして試験終了の銅鑼が鳴り、残っていた人たちも出てくる。

「ううー……頭痛い……」

「季衣か。お疲れ様」

「あ、にーちゃん。にーちゃんも試験受けに来たの？」

「俺は案内役の手伝いだよ。大変だったみたいだな」

「大変だったよう・・・にーちゃんも受ければ良いのに」

「俺はもう良いかなあ、そういうの」

曖昧に返しながら言葉を濁していると、桂花も出てきた。

「・・・」

「桂花、大丈夫か？」

「だいぶ顔色が悪いが・・・」

「お疲れ様です、桂花さん」

「ひっ！？あ、あんた・・・」

そう言っただけこちらを見る桂花。

「・・・俺の宝物庫にもいろいろな霊薬があるが、これを治すのは・・・どうだろうか？」

「うわーん、華琳様ー！」

いつもどおり桂花が華琳に抱きつくのを尻目に、理性的な春蘭に視線を移す。



・・・この状態の春蘭はあと何時間持つのかなあ・・・。

・・・

と言うわけで、呉のみんなが身体測定をしている部屋の近くまできました。

ここは流石に中の様子を覗くわけにも行かないので、月あたりが出てきたら感想を聞いてみるかな。

「あれ、ギル―！」

「ん、おおっ！？・・・って、シャオか」

声に反応するより速く、シャオがこちらにタツクルしていた。

「あのね、あのね、シャオの身長とおっぱい、ちゃんと大きくなってたんだよー！」

「おお、やったな。やっぱり孫家の姫だな」

「えへへえ。・・・でもまあ、お姉さまたちもきちんと成長してただけだね・・・」

しゅん、と落ち込むシャオ。

これはいけない。何とかフォローしてあげなくては。

「そんなに気にしなくて良いだろ。シャオも成長期なんだからさ。きつとすぐに追いつくさ」

「そ、そうだよね、うん！」

そう思えば、身体測定も悪くないわね、とご機嫌なシャオ。  
そうだ、と何かを思いついたらしい。輝かんばかりの笑顔で

「ギルにだけ、こっそり触らせてあげようか？」

「おおう!？」

「あのね、シャオ・・・ギルにだったら、いいよ・・・？」

上目遣いにこちらを見上げるシャオ。

おおお、不味いぞ、この破壊力は不味い・・・!

「ほら、ギルう・・・」

そう言ってシャオは理性と戦う俺の手を取って自身の胸へと・・・

「って、危ねえ!」

運ばれる前に、背後からの一閃をギリギリで避ける。

「ちっ、惜しい」

「惜しいって言った!? 思春さん、惜しいといいましたか!？」

「やかましい。全く、油断も隙もない」

そう言って思春は獲物を仕舞う。

・・・あぶねえ。ほんとにデンジャーだよこの人。  
迷わず首を刈りにきたからな・・・。

「小連さまも小連さまです。もう少し場所と時間をお考えください」  
「ぶう。……今日のところは引き下がって上げる」

渋々といった様子で、シャオは俺から離れた。

「あら？ぎ、ギル……？」

思春の後に部屋から出てきた連華は、こちらを見て頬を赤く染めた。  
よお、と手を上げると、小走りにこちらへ近づいてきた。

「ど、どうしたの？こんなところで……」

「いろんなところを見て回って手伝ったりしてるんだ」

「そうなの？大変ね。お疲れ様」

「いやいやそつちこそ。これから槍投げとか筆記試験もあるんだし」

「う……そういえばそうだったわね……」

これから待っているであろう筆記試験のことを思い出したのか、連華は少し落ち込んだようだ。

……まあ、こればかりは頑張ってくれとしか言えない。

「……槍投げでやらかしそうなのがないって言うのは良いよな」

「え？何か言った？」

連華の怪訝そうな声にいや、なんでもないと返す。

さて、ここで手伝えることもないだろうし、月もしばらく出てこな  
さそうだから他のところ手伝ってこようかな。

・・・

春蘭が槍投げで槍と共に知性も放り投げたり一刀が魏の身体測定を  
見に行つて桂花に気絶させられたりといったハプニングがあったも  
の、ある程度平穩に健康診断は終わつていった。

そして朱里と雛里が結果をまとめて発表するので、みんながそれを見  
に来た。

「みなさーん、結果はつぴゅ・・・発表です！」

「よつと。こんな感じかな」

朱里たちの代わりに立て札を立てる。

俺はお手伝いなので、こうして朱里たちには不向きな力仕事を担当  
している。

「あわ・・・ギルさん、お手伝いありがとうございます・・・」

「いやいや、これくらいはしないよ」

発表されるのは筆記試験の結果と槍投げの記録だったはずだ。

春蘭に筆記試験で負けた桂花がショックを受けたり一刀が身体測定  
の結果を知りたがつて春蘭にしばかれたりといういろいろあったが割愛  
する。

「・・・そういえば鈴々。散々季衣と身長で争ってたけど、どっち

が上だったんだ?」

「あれは引き分けだったのだ!」

「引き分け・・・同じ身長だったのか」

「でも、明日になったらボクのほうがおっきくなってるもんねー!」

「そんなことないのだ!」

また言い合いになりそうな二人をたしなめると、桃香が朱里たちに質問した。

「そういえば・・・身体検査の記録はどこに保存するの?」

「はい。最初は厳重に封印して誰にも分からないところに保管しておこうと思っていたのですが・・・」

「ですが?」

「それでも万が一、と言うのがありますので、もっと確実に厳重なところに保管することにしました」

え、どこどこ?と桃香が聞く。

普通はどこにあるかなんていわないだろうが、保管場所はおそらく誰にも手出しできない場所だ。

言っても構わないだろう。

「はい、ギルさんの宝物庫の中へ仕舞わせていただきました」

「ギルの宝物庫・・・なるほど、あそこなら本人以外は手出しできんな」

朱里から事前に頼まれていたのもあり、資料の入った箱ごと宝物庫へと保管した。

経年劣化もせず、誰にも見られない最高の保管場所だと思う。

「お、お兄さん、絶対に見ちゃ駄目だよ!？」

「分かってる分かってる。そんな信用を無くすような真似しないって」

「それに、もし見ようとすれば・・・令呪がありますし」

にっこり笑った月が「ですよね、ギルさん」と笑いかけてくる。

本当に令呪を使うとは思えないが、乙女の秘密をわざわざ暴こうとは思わない。

こうして、波乱の健康診断は終わったのだった。

・・・

「健康診断二日目、サーヴァント一斉検査を始めようと思います。はい拍手」

「わーばちばち」

「・・・響、無理に乗ることはないのよ?」

「えー、ほら、だって・・・キャスターかわいいそうじゃん」

唇を尖らせた響がそういうが、キャスターは別に反応があるうがな  
かるうがどっちでも大丈夫そうだけだな。

「ええと、それじゃあ詳しい検査内容を発表させてもらおうよ。まず  
サーヴァントたちがきちんと身体を動かせるか体力測定。そして、  
霊核やらを検査する身体検査って所かな」

孔雀が手元の資料を見ながらそう言った。

まあ、それくらいが妥当だよな。

「と言うわけで、まずは体力測定だね。槍投げから行くよー」

「あ、そこは同じなんだ」

「うん。槍をきちんと投げられるってことは魔力がちゃんと行き届  
いていて身体を動かすのに不自由してないってことだから」

ほうほう。

「はい、と言うわけでこの槍をぶん投げてください」

「ならば、まずは私から行く」

そう言ってセイバーが槍を持つ。

槍を持った腕を引き、十分に力を溜めた後、思い切り振りかぶる。  
セイバーの腕から離れた槍は、空気を切り裂いて彼方へと飛んでい  
く。

おー、飛ぶ飛ぶ。流石は英霊だよな。

「お、飛ばしたじゃねーかセイバー」

心なしか銀も嬉しそうな顔をしている。  
やっぱり自分の相棒がいい結果を残すと嬉しいものなんだろう。

「ならば、次は俺が行こう」

そう言っつて槍を掴んだのはライダー。  
しかもすでに変身済みである。

「オオオオオツ！」

まるで槍投げの選手かのように綺麗なフォームから投げられた槍は、  
セイバーの槍を少し超えたところに刺さった。  
おお、接戦だなあ。

「ふむ……こんなものか」

「じゃー次はバーサーカーの番ね！握りつぶさないように投げるの  
よー！」

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！」

シヤオから槍を受け取ったバーサーカーは、投げ方なんて気にせず  
にただただ力づくで槍を投げる。  
セイバーとライダーの投げた槍を軽々と飛び越し、肉眼では見づら  
くなるまで飛んでいった。

「……さっすがバーサーカー！力だけはあるね！」



だけはって……。  
それは褒め言葉なのか？

「ランサー、行け」

「はっ！」

いつもと同じ緑色の軍服を着たランサーが槍を構える。  
きびきびとした動きから放たれた槍は……

「む、惜しいな」

セイバーの槍よりも後ろに落ちた槍を見て、甲賀が呟く。  
やはりステータスの差なのか、わずかに届かなかったようだ。

「ようつし、じゃあハサン、行ってみようか！」

響の言葉に頷きながら、アサシンが右腕で槍を持つ。  
……あれって投げられるのか？なんて思ってしまう。

「……」

助走をつけて投げられた槍は、右腕のリーチの為かかなり飛距離を  
伸ばした。

おお、ライダーとほぼ同じところだ。

「おー、ハサンって意外とやるじゃん！」

ね、ね、凄いよねハサン！と俺に絡んでくる響。

そうだな、と言って頭を撫でておく。こうすれば静かにするだろう。

「さて、そろそろ私もやっておこうかな」

「お、がんばれー」

孔雀の気の抜けるような声援を受けながら、槍を構えるキャスター。その結果は……まあ、あえて触れるまい。最後は……俺か。

「ギルさん、頑張ってくださいね」

そう言つて槍を手渡してくれた月に、もちろん、と頷く。

身体に魔力を循環させ、宝物庫からのバックアップも十分。

槍を投げる一瞬だけ、ステータスが若干上昇するようにしておいて、全身を使つて槍を投げる。

槍は空気を切り裂いて飛んでいき……

「お、バーサーカーと並んだな」

見事、バーサーカーの投げた槍の近くに突き刺さった。

「凄いですギルさんっ！」

今にも飛び跳ねそうなくらいに喜んでいる月を抱きとめる。

うんうん、無邪気にはしゃぐ女の子は可愛いものだ。

槍投げの結果は、同率一位で俺とバーサーカー、そして三位ライダー、四位セイバー、五位アサシン、六位ランサー、七位キャスターとなった。

「次は身体検査だね。じゃあ、マスターとサーヴァントのパスを調

べていくよー」

そう言つて、キャスターは一組一組診察していく。  
俺も月と一緒に診察されたが、特に異常はないとの事。  
以前は不安定だった魔力の供給も、最近はかなり安定しているよう  
だ。

「ま、問題はないよ」

「そうですか・・・良かった」

診断結果を聞いた月がほつと胸をなでおろした。

まあ、月はこういうのに責任を感じるほうだろうしな。

診察が終わつた後、みんなの結果を聞いてみる。

一番心配だったのはバーサーカーのマスターであるシャオだったが、  
弁慶はまだ魔力消費の低いほうらしく、魔力切れで自滅はほぼあり  
えない、との事。

他のサーヴァントたちも特に異常はなく、身体検査は終わった。

・・・

「ちょっと月」

洗濯物を干している最中のこと。

月は背後から聞こえた声に振り向いた。

「はい？・・・卑弥呼さん、どうかしましたか？」

「アンタにいいものあげるわ。ちょっとこっち来なさい」

「え？で、でもまだ仕事が・・・」

「良いから」

「だ、だれか・・・」

あーれー、と卑弥呼に引つ張られていく月は、とりあえず考えることをやめた。

・・・

「ギル、どうよこれ」

「ん？なにがどうした・・・って、月？」

「へう・・・ど、どうですか、ギルさん」

いきなり部屋に入ってきた卑弥呼と月へと顔を向けると、そこには驚きの光景が広がっていた。

なんと、月が着物を着ていたのだ。

おそらく一緒にいる卑弥呼が用意したものだろう。

「全く。平行世界移動しまくっちゃったわよ。ほら、月はナイチチだからさ、着物とか似合うのよねえ」

わらわのセンスは完璧なのよ、という卑弥呼の背後で月が「ナイチチ・・・ナイチチって・・・」とへこんでいる。

いや、ほら、大丈夫！胸の大きさイコール魅力じゃないから！  
っていうか、卑弥呼も人のことは言えない気が・・・

「あん？ちょっとギル。何わらわの胸を見て・・・」

そこまで言うと、卑弥呼はぱっと胸に手を当てて隠した。

「そんな、わらわがあまりにも魅力的だからってこんな真昼間からなんて・・・」

「何を勘違いしてるのか知らないけど、多分それ間違ってるぞ」

頬に手を当ててぶんぶん頭を横に振る卑弥呼にそう言ってみるが、まるで聞いちゃいない。

着物姿で落ち込む月と、メイド服姿で恥ずかしがってる卑弥呼が俺の部屋の中にカオスな空間を作り出している。

・・・どうすりゃいいんだろう、これ。

とりあえず、月から復活させることにしよう。

「月、そんなに落ち込むなって」

「ギルさん・・・」

「胸の事は気にしなくて大丈夫。それよりも、着物着た月をもっと見たいな」

「へう。ちょ、ちょっと恥ずかしいですけど・・・分かりました」

そう言って、月は両手を広げてくるくるとその場で回った。

月の持つ雰囲気と着物はかなりマッチしている。

「ど、どついでしょうか？」

「ああ、かなり似合ってる。完璧だ」

「へう・・・ありがとうございます。とっても嬉しいです・・・！」  
すっかり立ち直った月は、鼻歌を歌いながら鏡に映った着物姿の自分を見ている。

どうやら着物を気に入ったようだ。祭りのときとかに着て貰いたいな、これは。

「えへへえ、もう、ギルう、そんなところまで・・・」

・・・次はこつちか。

寝台の上でくねくねと身体をよじる魔法少女を何とかしないとな。

「おい、卑弥呼。戻ってこーい」

期待は一切していないが、とりあえず声をかけてみる。

卑弥呼ははまだ妄想の世界から帰ってこない。

次の手段は・・・揺すってみるか。

「おい、卑弥呼ー！」

「はうつ！？・・・な、何よギル。・・・ってあれ？わらわなんで寝台なんか・・・」

ああ、記憶ないんだ・・・。

「まあいいわ。結構満足したし。ほら月、帰るわよー」

寝台から起き上がった卑弥呼は、服についたしわをぱっぱと払うよ

うに直すと、月に声をかける。

「あ、はい。・・・それでは、また後で、ギルさん」

「ああ、二人とも、またな」

「ええ、またね」

最終的に上機嫌になって帰っていった二人を見送る。

・・・着物、似合ってたなあ・・・。

・・・

「どろどろ」

馬に乗せた鞍にまたがりながら、手綱を引く。

この鞍は宝物庫にあった特別製で、馬を上手に乗りこなせるようになる加護がつく様になっている。

鎧もきちんとあるので、乗馬初心者である俺でもこうして一人前に乗りこなせるのだ。

「お、ギル。今日は乗馬か？」

「セイバーか。そっちこそ、馬に跨ってどうしたんだ？」

「いやなに、この馬は私の宝具と言うか英霊化した愛馬でな、しばらく走らせてやらなかったから、久しぶりに走らせようかと思って」

セイバーの愛馬といえば・・・的盧か。

ふとセイバーのほうを見ると、セイバーは的盧の首を撫でていた。

的盧も嬉しそうに嘶いている。

「・・・そうだ、ギル。競争しないか？」

「俺とセイバーで？」

「ああ」

「騎乗スキルのあるお前に勝てるわけないだろう。俺、初心者だぜ？」

「はっはっは、見たところ、その鞍や手綱、普通の品ではないだろう？」

笑いながらそう聞いてきたセイバーに、まあそうだけど、と返す。

「ならば良いではないか。それに、馬上での動きに慣れるのは大切だぞ？」

「・・・はあ、分かったよ。で、どこでやるんだ？」

「もちろん、競馬場だ。着いて来い」

ぱっからぱっからと先に進んだセイバーに、ため息をつきつついつて行く。

ちよっと馬の練習をしたいだけだったんだが・・・まあいいか。

・・・

「ここを・・・そうだな、先に一周した方が勝ち。それで良いか？」



「ん、大丈夫だ」

「よし・・・ならば、この石が地面に落ちたら開始だ」

そう言っただけでセイバーは拾った石を上には振り投げる。

その石が落ちるまでの一瞬、俺とセイバーは神経を集中させていく。

「・・・せいっ！」

「・・・はあっ！」

石が地面についた瞬間、俺たちは同時にスタートを切った。

宝物庫の中身をフルに使った俺の馬と、英霊化したセイバーの愛馬。その二頭は勢い良く駆ける。

・・・ちっ、流石にセイバーのほうが速いか！

「だが、勝負といわれた以上・・・努力はしないと」

魔力放出。

ランクは低いけど、馬を強化することはできる。

鞍と手綱を媒介に、俺の駆る馬の筋力を強化し、速度を上げる。

「くっ、そんな手が・・・！」

「はっ、勝たせてもらっぞ！」

速度が上がっても、鞍によって付加された騎乗スキルによってよどみなく馬を操ることができる。

カーブの際に少しだけ膨らんだセイバーの隙を突き、内側からセイ

バーを抜く。

「なんと、油断したかつ」

後ろからセイバーの悔しそうな声が聞こえるが、今はコースの内側を守っていけば良いだろう。

「く、ギルよギル！私の運命を妨げるか！」

しかし、最後の直線のと看事足動いた。

セイバーがいきなり叫んで馬に鞭打つと、的盧は突然飛び上がり俺の頭上を越えていく。

呆然とする俺の前を悠々と走って一着でゴールするセイバー！。

「あ、ありが！？それはアリか、セイバー！」

「当たり前だ。私は私の持つすべてを出し切って戦ったのだからな」

「・・・そうか、そういうことならこっちにも考えがある」

もう一戦だ、と言う俺の言葉に笑顔でおう、良いだろうと答えたセイバー。

・・・見てろよ。

・・・

「よし、それじゃルール確認だ。直接相手を傷つけない宝具の使用は可能。良いな？」

「おう。それで良いだろう。・・・くっくっく、次も勝って見せよ

う、ギル」

「はっ、今のうちに言ってる。・・・セイバー、開始の合図を」

俺がそういうと、セイバーは手に持った石を再び上に放り投げる。石が地面についた瞬間・・・俺は宝物庫を解放する。

「風よ！俺の背を押し出せ！」

風を放出する宝具によって風を生み出させ、それを宝物庫から放つことでスタートダッシュのブースト代わりにする。急加速によって一瞬馬が慌てるが、上手く手綱を操って落ち着かせる。

いい加速だ。これでだいぶセイバーとの差がついただろう。

「くっ、味なまねを・・・頼む、我が兄弟よ！」

「おっよ！」

「了解だ！」

セイバーの掛け声に応じるようにコース前方に現れたのは、関羽と張飛。

彼らは圧倒的な攻撃力を持ってして地面を粉碎し、悪路を作り出した。

「コースを破壊するなんてなんとまあ力ずくな・・・！」

「はっはっは！何とでもいえ！」

一瞬戸惑った隙をつかれ、セイバーに抜かれる。そのままの盧に鞭打ち、悪路を飛び越えると、カーブに差し掛かった。

・・・さて、俺はどうするかな。

この悪路、もし馬の足でもはまってしまえばその時点で負ける。かといって、こいつにはこんな重装備でここを飛び越えられるはずもなし・・・。

「仕方がない、先に謝っておく。ごめん<sup>エルキドゥ</sup>天の鎖！」

背後の宝物庫から鎖が延び、一本の道を作る。

「これならば、騎乗スキルで何とでもなる！」

同じようにカーブに差し掛かり、セイバーに追いつくと、先ほどのを見ていたのか、呆れながら

「あんなどこぞの鉄球使いと同じようなこと、良くやる」

なんて言ってきた。

直線に入り、俺とセイバーが並ぶ。

「兄弟使って地面破壊するような奴に言われたくはないね」

あれ、後で戻しておけよ、と付け加えておく。

「分かっている。最後の直線だ！駆ける、的盧！」

「よし、最後だ、頑張ってくれ！」

差はほぼない。

ここでどれだけ相手を離せるかにかかっている……！  
そして、一着でゴールしたのは……

……

「つぶはー！」

競馬が終わった後。

俺とセイバーは酒屋でお互いをねぎらっていた。

先ほどの順位は……同着。

地面を破壊した後手持無沙汰になっていた関羽と張飛が見て同着だ  
といていたので間違いはないのだろう。

その後ライダーも参加してきてレースが大荒れになったりもしたが、  
何とかこうして場を収めることもできた。

「いやはや、それにしてもギルの宝物庫には何でもあるな！」

「だな。大体のものは入ってると思うぜ」

馬を上手に乗りこなせる道具でてこい、と念じたところあの鞍が出  
てきたしな。

ほんとに何でも入ってるのかもしれない。

「それにしても、やっぱり英霊化しただけあつて的盧は凄かったな  
あ」

まさか飛び越して抜いてくるとは思いも寄らなかった。

「はっはっは！そうだろうそうだろう！」

酔ってるのか、上機嫌なセイバーとの酒盛りは、日が暮れるまで続いた。

・・・その後、セイバーともども愛紗に説教を食らったのは言うまでもない。

・  
・  
・

## 第十七話 みんなで健康診断に（後書き）

サーヴァントの健康診断なんて無茶なものを書いてしまいました。が、解釈には多分に独自のものが含まれています。ご了承ください。

月に着物は前々から似合うと思ってまして、着せてみた話を書いてみたいと思っていたので、今回やっちゃいました。おそらくまた登場すると思います。

競馬の話も、かなりご都合主義です。宝物庫に鞍があるかは分かりませんが、ギルガメツシユ本人も「自身ですら蔵の中身は把握しきれていない」といつていますので、おそらくあるんじゃないでしょうか、なんていい訳を試してみたり。

誤字脱字のご報告、ご感想お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8345w/>

---

真・恋姫†無双 ご都合主義で萌将伝！

2012年1月7日23時55分発行